

---

# TOLOVEりんぐ

ぽつさき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TOLOVEりんぐ

### 【Zマーク】

Z3531P

### 【作者名】

ぱつわき

### 【あらすじ】

リトさんがハーレム作るならオリ主だつて作る。  
オリ主頑張れ小説。

### 読み方はとらべりんぐ（無理がある）

この小説は原作をほぼそのまま再現し、その中にオリ主を放り込んだ感じです。

しかし視点はオリ主なのでメイン場面の裏側が舞台になつたりしま

४०

## 舞い降りた少女

「ようやく見つけましたよ」

「まさかこんな”辺境”までお逃げになられるとはねエ……」

深夜、その権力を象徴するように聳え立つビルの山。その中のひとつ、強風吹き荒れる屋上にスーツを着込みサングラスをかけた妖しげな男が2人

「しかし…鬼ごっこもここまでです」

「さア！我々と一緒に来ていただきましょうか」

「…………」

男2人に追い込まれるようにビルの端には少女が1人口をきつく縛り俯いている。

「オオオオオオ……と音を立てて再度風が吹く。

それに撫でられ、少女の桃色の髪が闇に映えるように揺れていた。

・・・・・。

・・・・・。

昼休み。

それは学校生活における折り返し地点、そして大事なお昼ご飯の時間である。

母上が作ってくれたお弁当を友達と談笑しながら食べたり、人ごみの中を搔き分けてお目当てのパンを買って食べたり、オレは一人でも生きていけるぜーと屋上で黄昏てみたり。

十人十色の過ごし方があるも、オレは友人と購買でパンを買った後、とことこと教室へ向かつて歩いていた。

「お前ホント焼きそばパン好きだよな」

「炭水化物&炭水化物なんて素敵じゃんか」

「そんなカロリーの塊みたいなのがよく2個も3個も行けるなあ」

「その分運動してるからいいんだよつ」

歩きながら猿山が話しかけてくる。

彼は猿山ケンイチ。入学してすぐに何となく仲良くなつて2年に進級してもクラスが変わらなかつたので何となくいつも一緒に居る。名は体を表すとはよく言ったもので顔も行動も猿じみている。万年彼女募集中である。

しばし談笑しつつ歩いていると廊下の曲がり角で覗きをしている不審者が目に入った。

「よオリトーー今日も昼真っからストーカーかあ！？」

猿山に放しかけられたリトはビクッと肩を弾ませる。

「誰がストーカーだクルアー！！」

「お、違つつての？」

この顔を赤くして声を荒げているのが結城梨斗。

猿山と同じく同じクラスになつたときから一緒に遊ぶに行つたり泊まつたりと一応オレは親友だと思つてゐる。勉強はちよつとお粗末ながらも運動はかなりすゝい。中学の頃はサッカー部だつたらし。

そんな好青年なリトにも弱点があつた。

「こつもじめりあじがれの春菜ちゃんを見てたんだろ？」「…………」

猿山に図星を指され動きを止めるリト。

そつここのコト、ドガ付くほどどの奥手なのだ。

エロ本なんてとてもじゃないけど見れないし、ドラマのハリウッドで赤面しちゃうようなヤツである

「う・・・うつせーな、今田まだ見てたわけじゃねーよ。タイミングを伺つてたんだ」

「タイミング？」

「ああ、決心したんだオレ。今日春菜ちゃんと告白する……」

そつ言い放つたリトの面持ちは極めて真剣なものだったが、グラビア本の水着で氣絶しちゃうような純情君であるリトに告白なんてできるはずがない。

それを誰より知っているオレと猿山は肩をすくめて苦笑するしかなかつた。

・・・・・。

・・・・・。

「肉まん買つためにコンビニはしご」とか我ながら枯れてるな…」

時刻は夜。ほとんどの家庭が夕食を終えて一服しているそんな時に、オレは何故か無性に食べたくなつたので肉まんを買いに行つていた。もちろん夕食はちゃんと食べてある。が、しかしジャンクフードが突然食べたくなるあの衝動に打ち勝つほどオレの意思は強く無かつた。

コンビにからの帰り道を歩きながら肉まんの包装紙を取つてはいるし、

「ゴズンッ！！」

と、えらく大きな音が静観な住宅街に響きわたつた。

「おっ！何か事件か！？」こりや見に行くしかねーぜ、肉まんくつてる場合じゃねえ！

と普段ならやじうま根性丸出しで観衆の一人として参加するが、今回は嫌な予感がそれに勝つっていた。

「なんだこの見に行くと確実に損をしてしまう感覚は・・・虫の報せ？」

落ち着くために外気に晒され冷め始めていた肉まんを一口頬張る。

柔らかな生地と肉のなんとも言えない安っぽい味が口の中で広がった。

「うめー。やっぱコハビヒタリこれだよな…」

その安っぽい味は口の中にじぶとく残り、一口目、二口目を誘つている。それに抗うすべを人類はまだ持たない。

さつきの変な感覚など口ロツと忘れて満面の笑みで肉まんにパクつきながらオレは家路を急いだ。

巨大な扇風機のような風の音と、機械が爆発するような音がどこか遠くで鳴っていたような気もするが、オレにとっては2個目の肉まんの包装紙を綺麗に取ることのほうがよっぽど重要だった。

・・・・・。

7

「ひこーっす」

「おお猿山、おはよ」

そして次の日。

通学路を一人たらたら歩いていると猿山に声をかけられた。基本的にはいつも一人登校だが、時々猿山やリトと一緒になる」とある。今日はその時々だつたらしい。

「セウ吉ええばリトの山田つじだつたか知つてる?」

「あつ、何だリトの野郎有里には連絡してなかつたのか」

「何だ何だ、オレだけハブですか。いじめですか」

「何言つてんだお前は人間だろ」

「そのハブじゃねえよバカ猿…」

「まつ案の定といつかなんと言つか純情ボーアなリト様は言わざもがなつて感じだつたらしいぜ」

「解かりきつてたこととはいえ悲しくなるな」

「あいつに彼女なんてオレが認めないけどな、って話をすれば何とやら、あれリトじゃねーか？おーいリツ」

「ちょっと待てモンキー＝テ山…」

「いきなりなんだよミスター・リリイ」

「お前次その名前で呼んだら動物園に搬送してやるからな」

「先にモンキーつったのはそっちだろ…」

「確かに『めんなさい』。それより見ろよ、リトの前にいるのってサイレンジじゃねえ？」

「西連寺な。それだとすつしいやかましい人みたいになるだろ」

「『まけえ』たあいいんだよー。それより何か告白しそうな雰囲気見えないか？」

オレと猿山の前方10mあたりではリトと西連寺が向かい合って立つている。

リトは真っ赤な顔をしてオ・・・オレ・・・オレ・・・と緊張がもうに声に出していた。

そんな様子をオレ達は遠巻きに眺めていると、空から降りてくる人影が目に入った。

それと同時に、

「オレ…初めて見た時からキミの事が…好きでした…！」

言つたーーー！

「告つたーーー！」

オレと猿山大興奮。

「だからその…付き合つてください…！」

行つたーー！

「……」

純情ボーイ一世一代の大告白。ベタレで奥手な少年が少ない勇気をかき集め、心を込めて言い放つたその言葉は、

「へえ～そつちもそーゆーつもりだつたんだ。ちょーどよかつたつ

中学の頃からの思い人ではなく、突如空から舞い降りた桃色の髪を持ち、へんてこりんな格好をした少女へと向けられていた。

「じゃ結婚しようコトツーーー！」

「はあ……？？な……なんでお前が……つて」

「結婚ん……？？」

「結婚ん……？？」

リトと猿山が同時に声を荒げた。展開に取り残され氣味のオレと西連寺はポカーンとした顔をしている。

「うひいつかあいつ……」

リトはばかり気を取られていたがよくよく見てみればあの女……。  
とこりかあの派手な髪の毛を見た時点で気付くべきだったろう……。  
と自分の觀察力の無さに辟易しながらも、  
これからの中学校生活が楽しくなるかもしけないなあ、と癖になつ  
つある苦笑をせざるをえなかつた。

## 愛の大脱出

授業中。

この道40年のベテラン教師がつむぎだす教科書にそつたうららかな子守唄は、容易くオレの脳をノンレム睡眠へといざなっていく。ついていた頬杖は頭の重みでぐらぐらと揺れている。  
ああダメだ…腕を枕にして寝ないとあぶな…い…。

と半分眠りかけたオレに、

「ちがああああうーーー！」

親友の叫び声が襲い掛かった。

意識が一瞬で覚醒したと同時にバランスを失ったオレの頬杖スタイルはもうくも崩れ去り、オレはガツンッと音を立て頭をしこたま机にぶつけたのだった。

・・・・・。

「いつから授業中に奇声あげるキャラになったんだよ、リトさんよう」

「有里が机に頭ぶつける音も中々うるさかつたけどな

「……」

「オレはあれだよ…机に頭をぶつけるのが趣味なんだよ」

「授業中にうたた寝するのが趣味でいいじゃねえか。なんでもわざわざ誤魔化そうとするんだよ。しかもそれただのバカだろ」

「…………」

休み時間。オレと猿山は授業中に奇声を上げる友人の精神状態が心配だったので、その前後の椅子を貸してもらつて談笑している。が当のリトさんがこちらの話を無視しながら何やら小声でぶつぶつと何かしゃべつている。もうこれホントに駄目なんじゃないかしら。

「春菜ー更衣室行こー！」

教室のどこかで女子のそんな声があがる。

ガタツ！

それに呼応するようにリトが椅子から立ち上がった。

「…………な……何考えてんだオレはアアーーー！」

「有里さんや、この女子の更衣室行こうの言葉に反応し立ち上がつてもだえている人をどう思いますかい」

「純情とむつりスケベは紙一重なんだなと思います」

「「ホントに駄目かもしれないな……」」

もじこの親友が暴走してしまった時は、オレ達で引導を渡してあげよう。

それが友人としてできる友情の示し方だと思つ。

・・・・・。

・・・・・。

### 昼休み

猿山とのパシリジャンケンに勝つたオレは椅子にあぐらをかきながら暇を持て余していた。

「…あれ？」

そこへリトの困ったような声が聞こえてくる。

「つかしーな…弁当がねえ。春菜ちゃんが戻つてくる前に腹」しちゃえしどこにうと思つたのに」

「どうかしたの？」

「いや…弁当がねえんだ。確かに朝バツクに入れたはずなんだけど

…」

「お前美柑が毎朝早起きして作ってくれてる弁当だろ、もっと大事にしろよ」

「してるよーちゃんと大事に入れておいたんだけどな…あつ…」

「朝の騒動の時か…」

「そーだ…それ以外考えられねー、あの後あいつをふりほどいて逃

げる時にバッグから……」

「そんな」ともあひつかとオレが拾つておこしてやつたぜ」

「ホントかー。さすが有里だよなつ。やる時はやつ野つてこつか。」

「…………」ぬんなでこ嘘です。」

「ふつじゅくわいこひやうひー。」

「ホントすみませんちゅつとしたジョークだったんですね」「ぬんなさい」

「ああ……有里のせいで余計にお腹が減つてきた…………」

リトがズルズルと教室の床に四つんばいになつてうなだれる。  
ちょっとした遊び心がこんなにも人を傷つけてしまうなんて……  
反省。

「つ、ト、シ……ビーやう事だよおこー！スッゲーかわいー女の「がおめーの」と探ししてんだー！」

そこく、ガラツと勢いよく扉を開けて猿山が入ってきた。  
何やら興奮してこる様子。猿つぱい。

「オレを探してる女の子……もしかして西連」

「「やれはねーよ。」」

「わかつてゐよ……」

「可愛い女の子つてのが気になるな。よじコト、行こうぜー。」

「やうだな、行こう

「ああ後そうだ…。オラア…。」

「痛え！何すんだ有里つ！」

「うむせえクソ猿。お前焼そばパン買って来いっつたるーが！」

「てめーのパンよりかわい「ちゃんのほうが大事だつてーのー」

「いいから行くぞ2人とも。猿山が案内してくれないとわからないだろ」

リトに諭されたオレ達はしづしづ納得しつつ教室を後にした。

「フウー。」

一緒に階段を下りていたリトがそう叫びながら駆け下りていく。  
その前には軽薄そうな男2人に話しかけられている昨日の少女の姿  
があった、

「お前何でこんなとこにーもつイタズラはやめて帰れって言つただ  
る」

「あ、リトー見つけたつ」

「フウ」と呼ばれた少女もリトの姿を呼びかける。

間違いない、こいつララだ。

「はいコーン持ってきてあげたよー」

そういうて差し出したラリの手にはよく見慣れた美柑お手製の弁当があった。

「お・・・・おこり、誰だよあの『一・二』関係だー?」

この間いやうでゐた群集（ほとんじ夥）を代表して猿山がリトに聞く。

闇かれたたりには多分六七の正体をとひ説明していしか解からぬのかしどもどろになつてゐる。

「私? 私はリトのお嫁さんでーすつ」

そんなリトの腕にララが抱きつきながら爆弾発言を放り込む。

「な、なんだつてーーー!?」

これにはさすがのオレもびっくり。リードを手が早すぎるんだじゃないですか・・・。

そしてその人の結婚するってどんなことだぞ……。

「だーつ何言つてんだお前つ！」

「コア……お嬢…春菜ちゃんといつものがりながら…」

案の定お猿さんがすごいダメージを受けています。童貞同盟の危機！

そしてショックのあまり男の秘密も何気なくしゃべりやがった・・・が、群衆たちもショックが大きかったのだろう気付いていない。

「違う…違うって…お前ふざけるのもこい加減にしろよ…」

そしてリトも気付いていない。

「リト…私の事好きだつて言つたクセに、あれはウソだつたの?」

『やじつを捕まえろ 一つ……』

「リト！てめー許せねー！よくもオレより先にそんなカワライイ娘と…！」

さつきの一言が寂しい男たちのプライドを刺激した。

群衆は暴徒と化し、一様に2人を追いかけ始める。リトとララもすかさず手を繋ぎながら駆け出した。

「付き合つてらんないよ……」

校内にも関らず大声をあげて走り回る彼らを後ろから眺めながら、オレは購買へ向かう。

購買についてやつとオレは猿山に財布を預けていたことを思い出し、空腹が限界を迎えるになりもつて早退しちゃおうかな・・なんて考えていると、

「これ、貰つてください」

と見知らぬ（多分同学年）の大きい丸眼鏡をかけた娘が菓子パンを2つくれた。

人同士の触れ合い氷河期と呼ばれているこんな時代にも、優しさや

義理任侠はあつたのか…としみじみ思いながら苦手なクリームパンをありがたく頬張ったのだった。

## 銀河からの使者

昼休みが終わって帰ってきたリトの頬には真っ赤な紅葉が咲いていました。

声をかけようとしたりだれる背中が痛々しかったのでそつとしておいた。

原因を探ろうと教室を見渡してみると不機嫌そうな、それでいて複雑そうな西連寺が目にに入る。

トライブル体质のリトがまたなんかやらかしたのか……。

2人の間に気まずい空気が流れているのを気まずく観察する」とこしか、今のオレにはやれることがなかった。

・・・・・。

・・・。

その日の夜。

そろそろ落ち着いてる頃だらうじ、ララとの関係も知りたかったのでオレは結城家を訪れていた。

ピンポーンと聞きなれたチャイムの音が鳴る。

「はいはーい、ってなんだ有里さんじゃん」

「じたばんは美柑、リトイる?」

「せつままでずっと落ち込んでたけどララさん連れて外出で行つた

よ。何があったの？」

この子は結城美柑、リトの妹で小学6年生。とてもしつかりして家事全般をこなしている。

「まあ色々ね。『』にも女の子が来たろ」

「来たよ、『』をさつて言つてた。あれ誰？」

「それはリトと本人から聞いたほうが早いよ。多分そちらへんにいるだろ？からちょっと探して来るわ」

美柑に見送られて結城宅を後にする。

どこへ行こうと少し考えてみる。よし、人の少ない川原から行つてみよう。込み入った話をするなら川原が鉄板だもんな。

・・・・・。

・・・。

ふらふら歩いているとすぐに川原についた。  
そこからまた歩いていると話し声が聞こえてくる。

「よ、リト」

「ん・・・? 有里か、なんだってこんな所に」

「『』の人だーれ？」

話し声の主が探し人だったので、2人の会話がひと段落するのをま

つて話しかけた。

「オレは有里つて言うんだ。リトの友達で同じクラスだよ」

「へーそつなんだっ、私はララだよ。よろしくねー！」

「ララ様つーー！」

場がほんのりほのぼのムードに包まれ始めていると後ろから叫ぶようになララを呼ぶ声が上がる。

「ザステインーー！」

「うわ！また変なのが来たー！」

後ろにいたのは一昔前のファンタジーゲームに出てくる鎧（かつこ悪い）を纏っている男。

確かに変だけど本人に聞こえるように言いつのまじうだらつ。。。

「フフ…全く苦労しましたよ、警官に捕まるわ犬に追いかけられるわ道に迷うわ…これだから発展途上惑星は…しかし…！それもここまで！さあ私と共にデビルーク星へ帰りましょーララ様！」

すごいかつこ付けてるけど足に犬が噛み付いてるよ……痛くないのかな。

「べつだ！私帰らないもんね、帰れない理由ができたんだからーー！」

「…………帰れない理由とは？」

「私ここにいるコトの事好きになつたのー！」

(嘘つけーーー)

「だからリトと結婚して地球で暮らすーーー」

多分ただの家出だる。それも口からでもかせで結婚つて……そしてそんな子供だましの嘘で騙せるわけ…

「なるほど、そういう事ですか・・・」

(バカだ つーーー)

「部下からの報告で気になつてはいたのです。ララ様を助けようとした地球人がいる……と」

「わかつたら帰つてパパに伝えて！私はもう帰らないしお見合いもする気もないって！」

お見合いが嫌で家出したつてことか。それでわざわざ地球までお転婆だなあ。

「いいえ、そうはいきません。このザスティン、デビルーク王の命によりララ様を連れ戻しに来た身……得体の知れぬ地球人とララ様の結婚を簡単に認めて帰つては王にあわせる顔がない」

「じゃあどーすればいいの？」

「おちがりください、ララ様」

「そここにゅうくつと剣を引き抜く。

「私が見極めましょ、その者がララ様にふさわしいか否か。」

「どーしてそーなるんだよー！ー？？」

思わず突っ込んでしまった。

「む…そいつは…？」

「！」の人は有里！リトの友達だよー！」

「有里・・・まさか風撫でのココ！ー？？」

「風撫で？」

「『存じないのですか！？ララ様の父上であるデビルーク王と一緒に戦つてこの宇宙で唯一生き残った人物、それこそが風撫でのコリなのです！』

「聞いたことあるー遠い星にぶつ殺したいやつが居るー！」

「何言つてるんですか…僕がそんな人な訳ないじゃないです…僕は彩南高校に通う雪ヶ丘百合というしがない高校生です。」

「じらじらしい態度！間違いなく風撫ですー貴様もここ討たせてもらおつ、いざ勝負ッ！ー！」

「ちよ、待て待て待て、何でそーなるんだよー！」

「ふつざけんなバカ野郎！」

ザステインが剣を振るいながらリトの方へと駆け出す。リトは川原に置いてあつた車に隠れようとするが、

スパンッ！

と鋭い音と共に車は一瞬のうちに切り刻まれてしまった。ザステインがリトへと走り出すのを見て、すぐさまオレも駆け出した。

車が切られた時は肝を冷やしたがリトも何とか避けられたらしく。

その隙をついて近づくオレを振り返つぞまに剣を横薙ぎにして迎撃しようとする。

が、剣は紙一重でかわされ、懷への侵入を許してしまつ。オレはザステインの腕を持つと一本背負いでその体を投げ飛ばした。

「むうー！？」

しかしそこは親衛隊長、空中で体勢を立て直し後ずさりしながらも足から着地した。

「リトー！逃げるべー！」

「逃げるひでじーくー！？」

「あいつのいない所へだよー！」

ザステインとの距離を離したオレ達は2人して住宅地へと走り出し

た。

オレモリトもそれなりの速さで走れる、がザスティンもあんな鎧を来ながらも撒けない程度の速さで追いかけてくる。

「ぬつーーー。」

途中で出会いがしらの車に轢かれそうになつたザスティンが空中へと高くジャンプした。

何やら言つてゐるが遠すぎて聞こえない。

「おい！そつちは危ねーつ！」

高く飛び上がつたザスティンの着地地点を察知してリトが大声を上げた。

彼は丁度線路の真上あたりにいる。

「危ないだと？フツ調子に乗るなよ。一度も同じ手段が、」

ドゴッ！

（電車キターーーー）

（轢かれたーーー）

ギャグ漫画のような絶妙なタイミングで電車に跳ね飛ばされるザスティン。

弾かれる様に体が転がつていき民家の塀に当たつて地面へと落ちた。

「だ…大丈夫か？」

自分を切ろうとしていた人物でも、目の前で電車に轢かれれば心配

にもなる。リトが倒れているザスティンへ声をかける。

「ぐおおおおおー！」

「うわー！」

リトが肩に手を置こうとした時、倒れていたザスティンが剣を振り上げながら弾かれるように飛び上がった。

その反動でリトが近くのパミ箱へと吹き飛ばされる。

「リトーおい大丈夫か！？」

すぐ「リトへと駆け寄る。

「痛てて…」

倒れているリトの体を支えながら起こすと、吹き飛ばされた時に擦り剥いたのか膝から血が流れていった。

鮮やかな赤色が視界に広がり、頭の中が真っ白になる。

一瞬で血が沸騰した感覚。それと同時に氷水のように冷たい水が体を駆け巡った。

何かが、小さく音を立てて、切れた

赤い血誰の誰がリトが血赤い傷血誰が敵が赤赤血熱熱　す　す

有里の瞳が輝きを失い、暗く・・ただ暗く染まつていった。ゴミ捨て場に落ちていた鉄パイプを右手でゆっくりと拾う。カラカラと乾いた音を立て鉄パイプを引きずりながらゆっくりとザスティンへと足を進める。

「ひー？」

試しているつもりだつた。実際斬るつもりは無く、これが脅しとなつてララ様のことを諦めてくれたら…。だがたつた今、立場が逆転した。間違いなく自分は今狩られる立場にいる。

目の前の少年からあふれ出る殺氣は尋常ではない。当てられて咄嗟に構えた自慢の愛剣も心もとないハリボテと錯覚するほどだ。

「お前…オレの親友に手を出したな…」

重く、冷たい言葉が小さく響いた。ゆっくり、ゆっくりと一步ずつ足を進める有里。そして彼が一步進むことにザステインは一步後ずさむ。しかし彼は理解していた。こんな距離などあつてないようなものだ。少年が飛び掛ってきたら自分はやられてしまうだろう。その場を恐怖と殺意が支配した時、

「リトー！有里！ザステイン！」

空からララが降りてきた。

「おい！有里！有里！びつしたんだよーー？」

「……え？」

「ララとリトの声を聞いてオレは意識を取り戻す。

2～3度辺りを見回した後、頭を強く振りまだ倒れているリトへと駆け寄った。

「リト、大丈夫か。」

「怪我はべつに何とも無いけど・・むしろ有里のほうが大丈夫か？」

「ああ…えっと…かつこ悪いとこ見せちゃったな、大丈夫だよ。」

落ち着いてみてみればリトの怪我も膝を少し擦り剥いだけだった。確かに血は出ているがたいしたことは無い絆創膏を貼つておけば1週間ほどで傷も無くなる程度だろう。

オレはリトの手を引いて立たせてあげる。

後ろではララとザスティンが言い合いでいた。

「確かに怪我をさせたのは私が悪いと思いますが星々の頂点に立つにはあのぐらいの苦難！」  
「だからって私の結婚相手を勝手に決めないでよー！」  
「ララ様の事を考えてのことなのですよー！？」  
「パパは私より後継者のほうが大切なんだよーーー」「いー加減にしろっ！！！」

2人の言い争いを断ち切るようにリトが叫ぶ

「デビルーク星の後継者とか…お見合いとか…ビーでもいいんだよ、んな事…」

「コト…」

「普通の生活をせりよーもつゝれ以上好きでもねーヤツと結婚とか  
…だから…もう帰つてくれー自由にさせりよーーー！」

この数口間で溜まりに溜まつてこたであるひつ懲罰を睛らすかのよつ  
に思つてこる」とをばけまけにけるコト。アコトに思つてこむ。

「コト…」

そんなコトを潤んだ瞳で見つめぬコト。  
コト…わつかの言葉は叶はずのことを思つていつるみたこじやないか

…。

「うれしー…私の事好きじゃないって言つながら…ホントはそこま  
で私の気持ち理解してくれてたんだ…」

ほらみる…。

「コトの言つ通り私は・・自分の好きなよつて自由に生きたい。ま  
だまだやつたい事たくさんあるし…結婚相手だつて自分で決めたい  
…やう思つてた」

「…いや別に…」

そこであたふたしたらダメだろ。

「私ホントはコトと結婚するつもつてこつのは連れ戻されないと  
めの口実のつもつだつたの」

(やつぱつ…)

(みんなわかつてゐよ…)

(口実だつたとは…)

「でも… やつとわかつた。私、リトとなら本当に結婚してもいいと思つ。うつと、結婚したい！」

「ちよ… 違つ… 違つって…！ なああんたも何とか言つてくれよ…」

まさか「んな」とになるなんて思つても見なかつたのだからコトはパニッシュ状態だ。

「… 負けたよ、地球人」

この親衛隊長おつむがあれすぎるだら…  
何かよく解からないことをあれこれと喋つている。リトがもうお前  
しか居ない！助けて…といった縋るよつな目で…ながら見てくるが  
正直もうビリしそうもない。

「今に抱きつかれて顔を真っ赤にしているリトを見ていたら何やら馬鹿馬鹿しくなってきたので、オレは2人をほつといて結城宅へと戻ることにした。

銀河からの使者”後日談”

「フリーリザステインが用事ある、といつてどこかへ飛んでいつてしまつたので、リトと2人で結城宅へと歩く。歩きなれた住宅地に重々しい空気が漂う。

「なあ……」

「ん?」

その重たい空気のせいか、神妙な面持ちでリトが声をかけてきた。なん? だなんてちょっとクールに返事してみたけど内心は、キタツ……と焦りまくりだ。

「さっきの話だけど……有里って、その……宇宙人なのか?」

あ、そっち? とオレはホッと胸を撫で下ろす。よかつた! あのキレちゃった時の事を聞かれると思つてた……。

「もし有里が宇宙人だつたとしても……オレ、それでも親友だと思つてるからさ……だから、隠し事とかはしないで……欲しい」

すごい俯きながらボソボソと喋つている。

あの場は何となく誤魔化しただけで別にそんな重要なことじやなかつたんだけど……。

「そりだよ……でも隠してたわけじゃない」

「え……?」

「たとえばリトが誰かに自己紹介するとき、「僕は地球人ですって言わないだろ。んでオレからすればリトだって宇宙人な訳だ。宇宙人同士なんだから別に言わないのはおかしくないだろー。」

「ん…ああ、うん。え…?そっかかるほど。」

「それよりすっかり遅くなっちゃったからな、『ンビニ』がどつかで美柑に甘いものでも買ってつてやるひつぜ」

「それよりすっかり遅くなっちゃったからな、『ンビニ』がどつかで美柑に甘いものでも買ってつてやるひつぜ」

「有里つて美柑に甘いよな」

「んなこた無いよ。むしろいつつも世話してもらつてるリトが言い出すべきことだろ?」

「「…確かに…」

と言つてはみたが、思い返してみるとリトの家に遊びに行くときは出来るだけ美柑のためにお菓子や飲み物を買っていつている気がする。

別に気に入れようとかそんなつもりは無かったが、無意識でやつていたことを意識させられると何やら不思議な気持ちになる。

「ただいまー」

「オレもただいまー」

「おかげり、」」飯できてるよ。有里さんも食べてく?「

「食べる食べる。むしろ今日泊まっちゃう」

リトの家から我が家まではそれほど遠くは無い。でも今田は色々あつたので買えるのが面倒になってしまった。

そして何より、最近リトの家に遊びに来ていなかつたのだ。ひどい時には週4ぐらいのペースで遊びに来ていたが、今は週1~2に落ち着いている。あまり入り浸つていると同居人が腰を曲げてしまつのだ。

「おっ 今日泊まつてくのか、久しぶりだな」

「やうこつと思つて布団もリトの部屋に準備しておいたよ

既に泊まつた回数は20以上になるので、結城家の対応もずいぶん手馴れしている。

リトのタンスの隅っこにはオレの着替えの服なんかも常備されて突然的に泊まることになつても快適愉快になつてゐるのだ。

「お姉さまに連絡とかなきゃ……テルテル……あいもしもしー、今日リトんち泊まるからー。ちげつーそうだよ朝帰りだよ……変な意味じやねーよ……切るぞー」

「いい加減その同居人のお姉さんのこと教えろよなー。」

「親戚のお姉さんだけ?」

ここから少し遠くにある我が家ではお姉さん・お姉さまと呼ばないと変な液体の入った注射をしようとしてくる同居人がいる。同居人とこうかオレが居候として住ませてもらっているんだけど…。一応家賃やその他諸々を納めているので同居人とこうひとで会つている…と思ひ。

そしてこのお姉さま、遊びに行く時や泊まる時などに連絡をいれないとえらい怒るのだ。詳しいお話はまた後田。

「んーその内ね。それより飯にしようぜー! 飯ー!」

「ちよっと待つて、すぐ支度するから」

「それじゃオレら荷物置いて手洗つてこようぜえ!」

「オレは心も体も綺麗だから必要ないんだぜ」

「いいから行くぞ、有里」

「へい合点親分」

リトは私服だったがオレは制服のままつひとつていたので楽な服装に着替えるためタンスを開く。

そこから適当に長袖と短パンを引っ張りだし脱いだ服を雑に畳みつつもそれに着替える。

「お前そのズボン、オレのじゃねえか…」

「何だよーケチケチすんなよーいっぽいあるんだからいいだろー」

自分の服を持つてきてしまふが、その日の気分によってリトの服を着たりしている。

身長も体格も大体一緒なので着回してもぴったりなのだ。そんなオレの勝手をはじめは文句を言つていたリトも今では呆れて放置気味だった。

洗面所からリビングへ行くと既に食卓には夕食が並べられていた。

「うひーうまー！」

「あ、有里オレの箸も取つて」

「自分で取れよー」

「いいから早く座りなよ」

今日はからあげや、コロッケなど何とも家庭的な献立になつていて。鶏肉を切つて片栗粉をつけて揚げただけのものがこんなに美味しいなんて、シンプルなものほど美味しいといつことなのだろうか。

「「「いただきまーす」」」

皆で声を合わせていただきます。

オレもリトも先ほど走り回りかなりお腹が減つっていたので、恐ろしいスピードで食べ進む。

積まれていたからあげやコロッケ達が見る間に消えていった。無くなりかけると美柑が追加してくれた。あらかじめ用意しておくにしたつて準備がよすぎると思う。本当にできた子だ。

結局2杯もご飯をおかわりしてしまった。

食後のお茶を3人で飲みながら一服。

「ふう、それじゃ風呂入ろうかな」

「お、一緒にに入る？」

「有里と入ると長くなるからやだね、先入つてくれる

「はや風呂が許されるのはカラスだけなんだぞ。いつてらりしゃ  
ーい」

まずかけ湯をしてから体を洗う。そしてまず入浴。充分温まった所で一旦出て頭を洗う。そして入浴。充分温まった所で一旦出て顔を洗う。そしてまた入浴。充分温まった所でまだまだ粘る。そして脱水症状起こすかも、という辺りでやつと出るのだ。

時々立ち上がった瞬間にすごい立ちくらみを起こす。しかしその後に飲む冷たい飲み物が格別にうまいのだ。この一杯のために生きてるね。

「私、部屋に行つてるから」

オレとリトがやり取りをしている間に洗い物をすませていた美柑が手を拭きながら言う。

その声に若干力が無かつたのと、いつもはスタスタ階段を登つていく足取りが嫌に重たい氣がして、椅子にボケーッと座つてお茶を啜つていたオレには何故か、気になつたのだった。

・・・・。

【美柑】

自分の部屋に戻りベットに顔から倒れこんだ。やわらかい枕の感触が優しく包み込んでくれる。

それを手元へ持ってきて両腕で抱きしめた。それに顔をうずめながら考える。

リトに話された、「ララさんといつ綺麗な人がこれからこの家で一緒に住むらしい。その場は思わず「いいんじゃない?」なんて強がってはみたが、本当は複雑な気持ちだった。

父も母もめったに家に帰つてこない、リトと2人ボッチの家。頼りないリトに変わって私がしつかりしなきやと頑張ってきた。  
それがいきなり他の人が来て、その上結婚だなんて言い出して。妹の私に一言あつてもいいはずなのに…。

こいつやって悩み事や落ち込んだときはいつも布団で横になつて枕を抱きしめる。

友達と喧嘩したときや、勉強がうまくいかないとき、家事に疲れてしまつたとき、私はいつもこいつしていた。そして決まつて、

「みかーん、□□ア入れすぎちゃつたんだけど飲まない?」

この人がやつてくるんだ。

何をどうしたら□□アを入れすぎて2杯もいれてしまうんだか、素直に持つてくればいいのに。

「飲む」

なんでもうつむいて口に答えてしまつた、素直じゃないのはどうかだ  
るづ。

「そかそか、そりやよかつた」

つて二口一口しながらカップを渡していく。

受け取ると暖かくて甘い匂いががホワッと香った。それを両手で持つてチビチビと飲む。

横目でチラ見してみると、有里さんは椅子に座つてボーッとしながら自分の分のココアを飲んでいた。

いつもそうだ、お菓子を持つてきたり、飲み物だつたり、本だつたり、ぬいぐるみだつたり。

でも決まってこの人は何も話さない。慰めたり、励ましたりそういうことは絶対しない。ただ私が落ち着くまで目の届く範囲でボーッとしている。

私の知っている中で一番変な人。そして一番頼りになれる人。

「じゃ、風呂はいって寝るわー。おやすみー」

私が飲んでたココアが無くなると同時に、有里さんがそう言って私のカツプも持つて部屋から出て行つた。  
本当に何をしに来たんだろうこの人は・・・。帰り際扉の隙間から手を振る有里さんに苦笑いしながら手を振る。

1階に降りていく足音を聞きながらまた布団に倒れる。気付いたらもう悩みなんて無くなっていた。

「なあリトー！風呂入るうぜー！」

「もう入ったよ！知ってるだろー！」

「バカだなあ・・・んなこたあ知ってるよ、お前が風呂に入ったこととオレと今から風呂に入ることと、何の関係があるんだ！..」

「つるせえ！一人で入れバカッ！..」

「もういいよ！美柑と入るから！」

「ふざけたこと言つてんな！いいから入れ！」

1階からそんなやり取りが聞こえてくる。名前が出てきたときはちよつとビックリした。一緒にお風呂か・・ちょっととやだな、うん、やだ。

あの人があるといつも騒がしくなる。でも何を考えてるかわからんないし、すごく変な人。

変な人。

・・・・・。

・・・・・。

翌朝、リトの部屋で一緒に寝た後（変な意味では無い）7時ちょっとすぎに美柑に起こされた。

何やらララが全裸でリトの布団に忍び込んでたらしげ、オレは寝起きが悪いのであまり関与しなかった。  
美柑に一声かけてから結城家を後にした。

・・・・・。

そこは閑静な住宅街、に似つかわしくないまるでお化け屋敷のような家。というよりかは城に近いかもしれない。

朝だというのにその家だけは薄暗く感じた。敷地にはとても地球のものとは思えないような植物が跋扈している。屋根の上にはカラスが止まりおどりおどりしさを高めている。

しかしそれも見慣れた光景なので特に気にすることは無く門を開け

玄関へと歩いていく。

西洋風の大きな扉の鍵をあけそれを開けると、

「随分遅いんじゃないかしりり?」

黒いそしてHロロイド着に白衣を着た黒髪の女性が立っていた。とうか待ち伏せしていた。

「朝帰るついで言つたじやん。」

「じりせまた結城君とこちやこちやしてきたんでしょ、う~」

「何をじりじたらリストとこちやこちやするんだよ~」

「まさか結城君の妹…と?」

「小学生とこちやこちやなんかできるかー!」のHロロ医者!~

彼女はオレが居候させて貰っている家の家主である御門涼子。彩南高校の校医をしてると共に宇宙人専門の医者でもあり、色々あつて居候させてもらつていた。とこうかさせられた。

「取りあえず着替えるから、話はそれからね…」

御門に絡まれるのは慣れっこなので適当に流しながら歩き出す。

すると足元でプショッという音がした。

それと同時に急激な睡魔に襲われる。

「あ、校長先生ですか? 私今日は少し用事がありますので学校は休みますね、代理のものを手配いたしますので、それでは」

という御門の声が聞こえてきた。

薄れる意識、霞む視界。重たくなる瞼を必死にこじあけてオレが最後に見たものは満面の笑みの御門だった。

もう何度目か解からない御門の睡眠薬攻撃から目を覚ましてみると、そこは自室のベットの上だつた。

むぐ、と体を起こし自分の状態を確認する。Tシャツに短パンと多分御門が着せたのだろうものに着替えさせられている。

体は特に異常はなかつた…と思う。さすがにあれをそれされただいへん薬を使われていたとはいひたつて起きるだろ？。うん、きっと大丈夫。

「いぬし…」

布団の上に脱ぎ捨てられた白衣を見た時点で、というか起きた時点でも気付いていたが横には、幸せそうに眠る御門がいた。この漫畫のよつな、ゲームのよつなシチュエーションも慣れっこなので、特に動搖することも無く布団からでる。手早く制服に着替えて部屋から出た。

台所へ行つてパンを2枚と目玉焼き、適当に野菜を使ってサラダをこしらえた辺りで御門が下着姿のまま降りてきた。  
御門が洗面台へ行つている間に自分の分を平らげ”先に行く”と書きを置いて家を出る。実は起きた時間が遅かったので遅刻ギリギリなのだ。

閉めた玄関の向こうから名前を呼ぶ声が聞こえてるが、男は振り返らない！と知らない振りをした。

・・・・・。

チャイムが鳴り終わるか終わらないかのギリギリに教室へ入り込んだ。

「リトおはよ」

「んー…おはよ」

朝の挨拶を交わしたリトは頬を染めてニヤニヤしていた。

夢心地のような様子だったが一応挨拶は返してくれたのでいぶかしみながらも席に座る。

すぐに担任が教室に入ってきた。

「えー突然ですが、転校生を紹介します」

初老の担任がしがれた、それでいて奥行きのある声でそう告げる。こんな季節はそれに転校生なんて珍しいと教室がざわざわしだす。しかしオレは嫌な予感がいっぱいだ。

「入りなさい君」

「ハーアー！」

教師がそう呼ぶと少女の花のような可愛らしい声が聞こえてくる。教室の血氣盛んな男性諸君はお祭り騒ぎのように湧き上がっているがオレは既に確信しているし、横を見るとリトもあれ?といった顔をしている。

ガラガラと教室の扉を開けそこから入ってきたのは

「やつほーリトーー私もガツコ来ひやつたよーつー！」

「フ…ララ…？」

リトがその少女に気付いて大声を上げた。

ざわついていた男性諸君の目が半分ララ、半分リトに注がれる。前者はララの容姿に見惚れているもの、後者はその「ララ」が何故リトの名前を呼んだかを怪しんでいるもの。

どちらであれ青春においていかれまいと余裕をなくしている男子に変わりは無かつた。

・・・・・。

昼休み

「何のつもりだよララーーいきなり転校してくるなんてー！」

ここ最近すっかり大声キャラが定着しつつあるリトが、いきなり転校してきた宇宙人に質問というには大きすぎる声をあげる。  
しかし当の本人がキヨトンとした顔をしており、まるで何故そんなに怒っているのか解からない、といった感じだ。

オレは特にやることもなかつたのでリトに付いてきて後ろでそれを見守つている。

「おかげでオレたちウワサの的じゃねーかーおまけにオレン家にいる事バラしちまつてー！」

ただでさえ転校生という生き物は質問攻めに合つものなのに、それが美少女ならば倍増しだ。

主に女子生徒が休み時間の度にララの席の周りに人の壁を作り質問攻めをし、男子がそれを遠巻きに「え？ オレ興味ねーから」と無関心を装いながら耳をダンボにしてそれを一字一句もらさず聞く。ララも人当たりが良いほうなので楽しそうに質問に答えていた、が楽しすぎていらぬことも喋ってしまったのだ。

そしてそれを聞いていた男たちがリトを質問攻めにする。時折「たすけて・・」と言いたいような視線を向けられるが、オレは気付かない振りを通し続けた。その視線を相殺するかのような猿山の視線も向けられていたからだつた。

「えーだつて…」

リトに言い寄られたララが答える

「いつもリトのそばにいたかつたんだもん」

と頬を染めそれに手を当てながらララが言つ。

「い…一応遠い親戚だつて言いワケはしといたけどよ…」

その可愛らしいララの姿にリトはすっかり溜飲をさげられている。確かに可愛かつたが、そこで折れてどうするリト…。

しかし戸籍もない宇宙人がどうやって転入できただろうと思ったらうの工口校長が一つ返事で許可したらしい。あの工口親父め…。

「でも心配しないでー宇宙人って事はヒヨシにしてあるから」

「そんなん当たり前だ！ ただでさえお前注目されてんのに宇宙人なんて知れたら大騒ぎに…」

『そんな単純な問題ではない！ララ様はデビルーク星のプリンセス！それが公になれば命を狙われる可能性もあるのです！』

耐え切れなかつたのかララの髪留めのペケが横槍をいれる。  
このペケというのは普段は髪留めだが自律して動くことも出来るし  
ララの服を作つたりもしている。付き人のような性格をしている子  
だ。あとさつきからじつちを睨んでいる。

『リト殿が本当に頼りになる男なら心配する必要はないのですが、  
この学校には風撫でのコリも通つていることですから危険はないで  
しょう。むしろその男自体が危険な気がしますがね～』

「何かトゲのある言い方だな」

「風撫でつて言つた、オレから名乗つた名前じゃないんだよ。あと  
オレが嫌いなのは父親であつて娘にやなんもしないよ」

髪留めと口論する男子2人。実に情けない。

「大丈夫だよペケー！リトはこざつて時頼りになるし、コリは優しい  
から！」

「いや…そんなアテにされても…」

「いや…そんな優しいなんて言われても…照れるわ。」

そのいざつて時がきつとすぐ来るんだろうなあ…。

・・・・・。

・・・。

## 放課後

「あ、そだ西連寺くん。キリ学級委員だよね? ライブで学校の部活の案内を頼みたいんだが…いい?」

担任教師が席を立とつとしていた西連寺を呼びとめのリラの学校案内を命じていた。

オレはそれを見ながらリトと一緒に帰ろうと誘おうとするが、すでにリトは教室にいない。

「おい猿、リトは?」

「西連寺をストーカーしにいったよ。」

「またか、あのバカは…んじゃま一人で帰るとするかね。またなー」

「おうよ、またなつ。」

お猿さんと挨拶を交わし教室を後にした。

・・・。

・・・。

## その日の食卓

御門と今日のメニューであるとんかつ定食を2人で食べている。食事の時はテレビをつけないので、部屋には食器の音と御門が流している何やらよくわからないやたらムードィーな曲だけだった。そんな静寂を破るように御門が口を開く。

「うちの探索機が反応したのだけれど、この町に宇宙人が来ているわ」

「ララのことか？その付き人の人たちも来てるよ」

「私も校医なのよ？そんなこと解かってるわ。それとは別に2人乗りの宇宙船が昨日来た形跡がある。」

この家には古臭い洋風の外観に似合わず高度なセキュリティシステムや探査機などがある。

オレも御門も宇宙ではそれなりに（不本意ながら）有名なので、安全面には気を使っているのだ。

「それはつまり…」

「ええ、あの王女様を狙つてきた輩といった所でしょうね」

ララの親父であるデビルーケは銀河の頂点に立つ男だ。当然ララを嫁にすればその地位につくことができる。

野望を持つもの、ララを気に入つたもの、デビルーケが気に入らないもの、様々なものがララを狙つている。もしララの身に何かあつた場合、あのバカ野郎ならこの星を潰すくらいの事やつてしまいそうだ。

現に以前あいつと口論になつた時、うつかり星ひとつを潰してしまふほどのケンカになつてしまつた。

「それでオレに元どおりじりつて…」

「「」の星が気に入つて居るのなら、やる」とは一つでしょう？」

「はいはい、注意しますよ」

この宇宙船に乗っていたやつがララを狙う者ならば気をつけなくてはならない。

いくらザスティン達がいようと宇宙人には擬態型や寄生型、人型など一目見ただけでは地球人と区別が出来ないやつらも多い。

そこまで知つていて、注意しなくてはということも解かつていてどうしてあんなつてしまつたのか。認識力も注意力も足りないオレには解からなかつた。

そして翌日

「おーい有里てめーもっと動けよー」

「お前が動けよ」

インドア系男子のテンションを根こそぎ奪っていく授業、体育である。

その中でも「お前らなんでそんなに頑張っちゃうの?」と一部の人間に言いたくなるような授業内容、サッカーである。

ゴール近くでダラダラしていたオレに猿山が声をかける。うちのチームはリトが頑張っているのでDF達は暇なのだ。

だったら上がれよ!といった気もするがそんな根性があるなら始めからリトの横で走っているだろつ。

なぜそこまで頑なにこの場所にいようとする理由とは、

「いやしかし我が学校の女子達の発育はたまりませんな有里さん」

「全くですな猿さん」

このバカ2人は女子の100m走の見学をしていたのだ。

揺れる胸、健康的な瑞々しい太もも、滴る汗、乱れる吐息、まあとり不健全に健全ということです。

「ち、それにしてもむかつくなー」

「ん? 何が?」

「あの体育教師だよー、へつそチヤホヤされやがって…」

猿山が悪態をついている男、佐清体育教師である。

体育教師でありテニスの顧問。甘いマスクと性格で夢見がちな少女たちの人気をうりめり持つていて、男子生徒たちの上のたんこぶ的 existed。

体育館の男子トイレの壁には

「佐清 ね

「佐清あやまれ」

「佐清になら抱かれてもいい」

などの落書きが成されているのは男子の間では有名である。

「確かにお前は色々負けてるもんな

「んだよ自分はちょっとここにシラしてるからって余裕かよ

猿山だつて普通にっこ容姿をしてくる。が、言動や行動が少し欲望に忠実すぎるのと女つ氣を遠ざけてしまつていて。

「ほこほこ悪ついやいましたね、ほれ授業終わるぞ」

このままこの話を続けると猿山の愚痴に延々付かせてしまうので適当にあじらこつて集合場所へと急いだ。

・・・・・。

・・・・・。

そして昼休み

「リト、飯食おひ。」

今田は朝コンビニによつてお高い飯を貰つてあつたのでお猿さんをパシらせる必要は無い。

美柑特製弁当からおかずを少々頂きつつ平和な昼食を楽しもうと思つたが教室内にリトの姿は見当たらぬ。

どこが行つたのかな?と猿山に聞いひと思つたが

「あんな冷たいヤツ放つといてオレ達と弁当食おーよ、ねー。」

モテない仲間の連中とララを囲んで話しかけていた。ララは普段リトにひつひつしてベタベタしているので男子連中は話しかけるタイミングが無かつたんだろう。ここぞとばかりにアプローチを仕掛けている。ララはその勢いに押され気味だった。

多分西連寺もいないからリトは西連寺のところへ行つたのかな。オレとしてはララを見ておけば良いので自分の椅子に座つて、男達の情けない様を眺めていた。

・・・・・。

「むーリードビ」に行つたのかな~コリ知らない?」

「昼休み始まつてすぐジジが行つたらしいけどねー」

リトを探しに行くーと言に出したララに屋上を案内していた。

屋上についですぐララはひょいひょいと貯水タンクへ登り辺りを見回してゐる。

オレは風に煽られてめぐれるスカートの中身を見ながらカレーパンを食べる。別におかずとかそういう意味じゃなくて。この子鶯そうとしないから。見えやがってるの。オレは悪くないー。

「とにかくリトを探さなきや」

ペケと何やら話していたララがそのままで携帯のよつなものを取り出しへボペボと操作しだした。

そしてブンッというUFチックな音と共に可愛によつなそつでないよつな犬の機械がその携帯から出てきた。

何でもくんくんトレース君、とこうララの発明品りっこ。さつき道すがら聞いた話だが、ララは発明が好きらしく何でもかんでも自分で作つてしまふらしい。ペケが小さい声で失敗が多いと付け足してたけど。。。

「ねえユリ、何かリトの匂いがするもの持つてない?」

「ここの中シャツコトのやつだけそれでいい?」

オレは上着を脱いでネクタイを取りシャツのボタンを外す。シャツの中には黒地に英語の書かれたTシャツがあつた。

これはリトのタンスから以前勝手に押借したものである。

「ここのよーはー、ここのおいの人を探すんだよ

ララが犬を両手で持つてシャツを嗅がせる。犬がクンクンと鼻を鳴らして、

『イリーチダスーー。』

と声をあげて走り出した。

「喋れるのかよーー。」

「当たり前でしょー。ほら行くよー。ココー。ペケー。」

パンも食べ終つ『ミルク』をポケットにねじ込む。やる』とも無くなつたので、楽しそうに走り出すララの後ろを付いていくことにした。しばらくして犬の動きが活発になり曲がり角を曲がる。そしてある部屋の前で止まった。

「イリーリーにコトがいるのねーー。コトーーッー。」

その扉をララが勢いよく開けたが、

「キヤーーー何こいつーー。?」

ヒクトのものは思えない女子生徒の悲鳴が聞こえてきた。そう、更衣室だったのだ。

この機械犬はオスだつたらしく、探索そつちのけで女子に飛びつきたかつただけらしい。といふかなんだこのお約束の展開は・・・。

探索は難航し始めた時、廊下の向こうから見覚えのある白衣の女性がこちらに歩いてくる。

「ララさん、結城君なら使われなくなつた部室に向かうのを見たわ。  
場所は体育館の裏よ。」

「体育館？ ありがとう！ 行つてくるね。」

白衣の女性、御門にそう言われたララはエロ犬を抱きかかえてすゞ  
い速さで走り去つていく。

あつという間にその場にはオレと御門だけが残された。

「宇宙人か？」

「ええ、擬態タイプね。佐清先生に化けていたらしいわ」

「じゃあそんな強いわけじゃないんだな」

「そうね、結城君とプリンセスなら大丈夫でしょう」

擬態タイプの宇宙人は例外もいるが大抵は非力なことが多い。擬態  
能力は、強そうな生き物を模して威嚇したり天敵に成りすましてや  
り過ごすためのものだからだ。

なので運動が得意なリトならそつそつケガをしたりはしないだろう  
。 。 。

ここで考える。何故ララ本人ではなく西連寺を狙つたのか。これは  
リトをララの婚約者から外すための脅し材料だろう。

ならば何故リトにとつて西連寺が弱点となることを知つていたのか  
。 。 。

「御門」

「何かしら？」

「早退届けとリト達を頼む」

嫌な予感が頭をよぎる。そ�だ、今日は美柑の学校は創立記念日で休みだ。

御門の返事を聞く間もなくオレは学校を飛び出した。

・・・・・。

【宇宙人】

私は透明系宇宙人。主に潜伏と諜報を得意とし今までに地球人を調査中だ。

いや本当はもう仕事は終わっている。現に今仲間が地球人をそらつて作戦を遂行しているはずだ。

つまり今オレが地球人の家を覗いているもとい調査しているのは訓練だ、そう訓練なのだ。

ふふふ、おっ！この子タンスを漁つているぞ。もしかしたら着替えののか？これは好都合、この宇宙製のバレにくいカメラを使って証拠として残さなくては！

へつへつへ・またコレクションが増え

「くたばれエロ野郎があああああああああつーー！」

「あばぼおうー！」

•  
•  
•  
•  
•

学校から猛ダッシュしてリトの家に向かっていた。

浮かんでいた。

大日本傳 一 日本の歴史 一 一 江戸の歴史

2階の窓に張り付いていた薄透明の不織布は向けてその勢いのまま飛び蹴りをかました。

「くたばれ工口野郎がああああああああつーーー！」

「あせゐる」

薄透明の宇宙人が叫び声を上げて吹き飛ぶ。  
きりもみ回転をしながら地面に落ちて、2～3回痙攣をした後動かなくなつた。

それを確認もせずにオレは蹴り破るように結城家玄関へ飛び込む。ドタバタと音を立てて美柑の部屋へ行くがそこに美柑の姿は無い。冷たい汗が背筋を流れるのを感じるが、隣のリトの部屋へ急ぐ。ガチャとドアを開けるとそこにはリトのタンスに入っているオレを服を持ちながら固まっている美柑がいた。

「無事か！怪我とかないか！？なんかされてないか！？」

「へ？ 有里ちゃんなんで？」

すぐさま近寄つて確認しても特に異常は見当たらなかつた。美柑は

そのままの姿勢のまま呆然としている。

「いや、ちょっとあつてな。洗濯中だったのか？さすがしつかりしてるな！じゃオレ学校帰らなきやだから！じゃ！」

徐々に顔を赤くし始めた美柑の無事も確認できだし害敵も排除できたので学校へ戻らなくては。

結城から出した後起きようとしていた宇宙人のみぞおちに拳を振り下ろしました意識を刈り取る。そして首根っこを持ち少し上空で浮遊している宇宙船のぽっかり開いている搭乗口へぶん投げた。ガツンゴツンという骨が何かにぶつかる音が鳴っていたが変態野郎には軽いお仕置きにすぎないだろ？。

リト達の様子も気になるので、来た時よりはゆっくりなペースで走つて帰ることにした。

・・・・・。

・・・・・。

学校へ戻り御門に聞いたところ、リトが男らしい所を見せて無事納まつたらしい。攫われた西蓮寺も氣を失つていただけで特にケガも無かつたので今は御門のテリトリーである保健室で眠つている。  
一応これで地球の危機は回避されたということになった。リトもララと結婚するということがどれだけ大変で面倒かわかつたはずだ。とはいえ優しいリトはララを追い出すなんて真似はできないだろ？。  
なし崩し的にこの騒がしい日常は続していくことになりそうだ。

オレの目の前で真っ赤な顔をしながら呆けているこの純情ボーイはそんなことわかっちゃいないんだろうな…。

ちなみに宇宙人達はララに頼んでどこかへ送つてもらつた。  
誘拐・ダメ・絶対。  
盗撮・

## 買い物パニック

一騒動が終わったその週の日曜日。

窓から差し込む日光がとても暖かく、いくらでも寝ていられそうなそんな快適な環境。

自然の流れに任せたままに毎まで寝ていようとしていたオレを、携帯が奏でる初期設定の何とも無機質な音がそれを阻害する。潜り込んでいた布団から手だけをだし引つ手繰る様に携帯を引き寄せる。

おぼろげな手つきで通話ボタンを押すとそこからは聞きなれた親友の声が聞こえてきた。

内容をかいしまんと言えば毎過ぎに駅前集合らしい。

適当に相槌をうちながら聞いていたが辛うじて記憶できていた。

「あいよおーい…」

「一度寝るなよー昼に駅前だからなー」

気の抜けた返事を返すオレにアドリトが語氣を強くして確認する。言い終わるや否や電話は切られてしまった。

携帯を枕元に放り投げて、鉛を全身に付けられているのではと思つくらい重たい体を起き上げる。

短パンが半分ずり落ちてパンツが丸見えになつてしまつているが、幸い今日は襲つてくる危ない医者が他の星へ薬草を探しに行つないのでその心配はない。

洗面台で顔を洗い、いぐらかしゃつきつした所で時計を確認してみ

ると既に11時を回ってしまっている。

一人分のご飯を作るのは少々めんどくさかったが、朝・昼はなるべくたくさん食べておきたい性分。

パンを2枚オーブンに放り込んでフライパンに油をはる。卵を一つ落としてその横でベーコンも焼く。

ばらつと塩コショウをかけて雑に味付け。できたらそれを皿にあけてパンも違う皿へ。そしてご飯をよそう。

よくリトや美柑に気持ち悪いといわれるが、オレは主食を2つや3つ取る。ご飯とパン、麺どこの飯など色々な組み合わせで。時には3つ全部とか。

米もパンも麺もどれも好きなオレが編み出した食事法なのだ。ただカロリーがえげつないことになるのでオススメできない。

朝兼昼ごはんであるそれを軽々平らげ、適当な服を着込み携帯と財布をポケットにねじ込む。

再度時計を見ると12時20分。ちょっと昼食に時間を使いすぎたかも・・・。

少し焦りながら玄関を出る。重々しい音を立てて玄関の扉が勝手にしまった。

この扉は鍵穴がない。何でも高度なセキュリティーによつて設定された人でないと開けられないらしい。詳しい説明を御門がしていたがこれっぽっちも覚えていなかつた。

駅前行きのバスに乗つて30分。携帯の時計は1時を過ぎたことを表していた。

大丈夫、リトは電話で毎過ぎつて言つてたから大丈夫。  
むしろ駅前といったつて目立つ目印のようなものはない。そしてさすが日曜日、老若男女あらゆる人であふれ返つていた。

ここから探すのは大変だな…と電話をかけようとした時人々の視線が同じ方向に向かっていたことに気づく。

それを辿るように歩いていくと案の定3人の姿があった。

「よつーごめんちょっと遅れた」

「私達もついたとき着いたとこだよ」

「よつ有里ー悪いねいきなり呼んじゃつて…」

小走りで近寄っていくとリトと美柑もこちらに気付き近づいてくる。ララはさつきから手をバタバタさせながらキヨキヨロとあちらこちらを眺めてははしゃいでいた。

ただでさえ田立つ行動なのにその格好がなんとデビルーグのドレスのままで。

「あいつすげー田立つてるぞ」

ララを指差しながら言う。

そこで2人もやっと現状に気付いたらしく。

「ララー！ちょっと来いっー！」

リトがつかつかとララに近づいていてその腕を持って引っ張つていぐ。

オレと美柑が一度顔を見合させてからその後を着いて行った。

・・・・・。

・・・。

「ウロウロする前にそのカツコ何とかなんねーのか?·やつぱつ田立  
ちすきだ」

「え ドレスモードだめ?」

場所は変わつてここには路地裏。すぐ田の前を大勢の人が通り過ぎて  
いくがこぢらへは誰も見向きもしない。

「まあ今日はララさんの地球見物が目的なワケだし…何事もなく街  
を見て回りたいならもつとフツーの服のほうがいいかもね」

「え? 今日つづいてララの地球見学が目的だったの?」

「有里さん知らなかつたの? ララさんに街を案内するんだよ」

知らなかつた…・そういうえば今日の目的を聞いてなかつたからね。  
美柑と話しているうちにリトとララがファッショニショーンシヨーを開催し  
ていた。スーシやバニーちゃんや着ぐるみなど道行く人の服をスキ  
ヤンしていた。何でもペケには人の服をスキヤンすることとその服  
装を再現できる機能があるらしい。便利。

いくつかの小ボケを挟んでやっとまともな女の子の格好になる。

「あ、それカワイイ」

「ん、ホントだ可愛い可愛い」

「そ…つ、それならOKかな…。」

オレと美柑が素直に、リトが照れくさそうに言つ。確かに普通の女の子の格好をしたララは可愛かつた。どこの雑誌のモデルと言われてもたやすく信じられるだろう。むしろそんなモデルの子より可愛いかもしね。見たことないけど。

大手を振って歩けるようになったら、さあ、せつきの仕返しと言わんばかりにリトの腕を取り引きするよつに駆け出した。

• • • • •

それから、服を見に行つたり小物を見たりアクセサリーを眺めたり一緒にタイ焼きを食べたり。

うの行きたい所へ行き  
スレ運のスケスケのお店を紹介したいし

と一つ一つ指差してオレ達に聞く。

説明すると「うとベケでーほー、ヘー」と声を揃えていた

一通り見たいものを見たので4人でぶらぶらと目的もなく歩く。

「わつーーーーーすゞく賑やかーーーーー！」

しばし歩いたところでララがゲームセンターを見つけ入っていった。

「このメカはなあに？」

「お金をいれてクレーンでぬいぐるみを取るんだよ」

「へー。」

クレーンゲームに興味をもつたらしく、ディスプレイに張り付いて中のぬいぐるみを眺めている。

「わー、あれかわいい！」

「うーん、でも結構大きいから取るのは難しそうだよね」

美柑の後ろから覗き込んでみるとさぞのぬいぐるみのクレーンゲームらしい。確かに理不尽なまでに力のないアームに対して少々大きすぎる気がする。

その時、後ろから声がした。

「・・・ったく、しょうがねーなあ」

リトが前に進み出ながら財布から一枚の硬貨を出す。500円玉ではない。100円玉だ。

そうーそれはー1発で取れるといつ自信の表れだ。

コインを入れボタンを押す。その動作は流れるよつて一点の淀みもない。たつたそれだけで熟達したものを感じた。

予定調和のようにうわざのぬいぐるみの真上まで来たアームははんなりとその首へと噛み付く。

のつそりと空中へ連れ去られたうわざは成すすべもなく射出口へ落ちていった。

つまりリトは簡単にぬいぐるみを取って見せた。それだけのことだつた。

「おー！コトヤマ」 いー！」

「やつこ、細かいこと云々に得意だよねえ……」

美柑の言葉が聞こえていないのか胸をそつて血運げなリト。嫌味だつてことに気づいていない。

「ありがとーリーーこれ私の宝物にするねつー」

そしてリカの素直なお礼に満更でもなさそうでもあった。

・・・・・。

ゲームセンターでひとしきり遊び、また3人でふらふらと歩く。

「美柑なんだそれ？」

「ん、さつき服買つたらもうつたんだ」

「その服を買わされたのはオレだけだ。2人でレジに並ぶたら2枚貰つたんだ。」

「最近この辺にできた水族館の割引券だつて」

「スイズクカン？」

「魚とか海の生物がたくさんいるところだよ」

「へつ楽しもー！」

「ハラさん後で行つてみようか」

そんな話をしていたとき、リトが異変に気付く。

「おいー！ララーー？」

「「服が消えてくーーー？」

「どゆ事ー？」

ハラの着ていた服が溶けるようにして消えかけてしまっていた。

『も…申し訳あつませんララ様。』

「ペケーー？」

『どうやらHネルギー切れのようです…先程の連続フォームチェンジが思つたより負担になつたようだ…』

「な、何だつてー？」

「Hネルギーが切れるとどうなるの？」

『コスチューム形態が維持できなくなります…おそらくあと3分程で…』

「「「あと3分で全裸ーーー！」」

「あはは、困ったねー…」

と大して困った様子もなく頭をかくフラ。パサッと音を立てて何かが落ちる。

「あ、パンパゲーーー…」

地面に落ちた衣類を見て思わず口にしそうになつたのを、美柑のすね蹴りが阻止した。

「やつてる場合じゃね だるーーとりあえずどこへ隠れないとーー！」

昼のときのようにまたリトがララの手を引いて走り出す。その間にも服はどんどん消えていき、もはや下着の上にまづきれを羽織つているだけになっている。止めるわけにも行かないのでオレは自分のジャケットを広げララの体を隠す。

「もつひとつまでもこの辺の店に入るしかなによ

「おー、コトーネの店だ、急げ！」

転がり込むように店内へと入る。

「ヒーリー、ランジェリーショップじゃねーかー！」

「いいから入れリト！美柑は下着ー。ララは試着室ー。」

「試着室つてなに？」

もつまどなど服がなくなっているリリの體中を押して試着室へ押し入れる。

「ハリヤンヒレ！」

そこへ美柑が下着をたくさん持ってきて試着室へ放り込む。

「これで下着は何とかなったね…」

「次は服か・・美柑行くぞ！」

「うん、リトはここで待つててね」

「え？ … つかよ・・あの…」

「ワンジヒリーショップに入つてからひいたえてるリトをその場に放置して、オレと美柑は先程服を買ったお店へと走つていった。

・・・・・。

・・・。

「早く買つて帰らないと・・リトが恥ずかしうぎて死んじゃうよ」

「これを機に免疫を着ければいいんだよリトは。私は上の服みてくるから、有里さん下ね」

「おつー・まかせろー！」

5分ほど走って先程の店に着いた。すぐに元手に別れ服を探す。自分で急がなきゃなんて言いながらあれにじょつかこれにじょつかと悩む。

「ララは可愛いから何着ても似合つだらうけど…こいつもスカートばつかだからな…。色はどうじょう、大人しい色も似合つそうだけどなあ…。

なんて独り言を女性向けの洋服屋で言つてるので、女性店員が怪しんでいるが割りと真剣に悩んでるので気付けない。

「こつまで選んでるの、もう私決まつちやつたんだけビ

いつの間にか横にいた美柑に小突かれた。その手に黒っぽい服を持つている。

「いやちよつと悩んじやつて…黒い服か…やっぱつこのパンツかな

「え ララさんにはスカートの方が似合つよ。」

「いやこやあの腰の高さを活かすならパンツだらう。」

「それは解るけどこの色は無しよ。有里さんつて微妙にセンス悪いよね

「何だと。んじゃこの色はどうだー。」

「ん…まあそれならアリかも…」

「だろ、といひでこの代金つとオレ持つ?」

「なに、有里ちゃんは女子にお金を出させるの？」

「そんなつもりは無いけどまあ…出費がかさむ」

女の子の服の高価さにうんざりしながら美柑から服を受け取つてレジへ持つていく。

来たのは2回目だと呟つのにもう一枚水族館のチケットを貰つてしまつた。断らうとはしたが、折角なので受け取つておいた。

・・・・・

・・・・・

少々時間がかかつてしまつたがまたランジュリーショップへと戻つてくる。

驚いたことにそこには西連寺もいたらしく、リトが真っ赤な顔で思考停止していた。

「フラさん」れに着替えて

美柑が試着室のカーテンを少しだけ開けて服を入れた。とつあえずララのことは美柑に任せてオレ達3人は店の外へ出る。

「…」

「…（拳動不審）」

外に出てみたものの空気が重たい。どちらも何を言つていいのか解らないといった様子だ。

そりやそうだ。リトからすれば女子と下着売り場に入ったことを

好きな子に見られてしまったんだ。『まあこいつの上ないだろ？』

「西連寺… でいこよね？」

「あ、うん。私も雪ヶ丘君でいいかな」

リト経由で西連寺のことは知っていたがお互に話すのはこれが初めてである。

「西連寺はこれから暇？」

使い物にならないリトに変わつてこの場をとりもつ。

「うん… 予定は無いけど」

「じゃあさ、さつき水族館の券を貰つて人数分あるんだけど、よかつたら一緒に行かない？」

「水族館つて… 最近新しくできた…」

「着替えたよーつー」

「はい、有里さん」れ財布

そこへオレと美柑が選んだ服を上手に着こなしたララがくるくる回りながら登場した。  
つていうか、

「なんで美柑がオレの財布持つてるんだよー。」

「だつてララさんの下着代を払わなきやでしょ？」

そつと渡された財布の中を確認すると諭吉様がいなくなっている。

女の子の下着つてこんなに高いのか・・・男なんて3枚980円とかで十分なの。」

「有りありがとねー。必ず後で返すから!」

「いやいこよ、地球へ来たお祝いだと思つて受け取つといで。そういう、今から水族館行くよ

2人にこれから目的地を伝える。ちなみに電池切れのペケは眠ることで回復するらしい。

美柑にぬいぐるみのよう抱かれてやすやすと眠っていた。

「スイゾクカン! 行きたい行きたい!」

「もひあの券使つちゃうんだね

思つたとおり行きたがつていたララは嬉しそうだ。美柑も無表情に見えるがあれは結構楽しみにしている顔だ。

「まあまあ話は歩きながらとこいつじで。行くぞコト

思考停止したまま固まつて完全に空氣と化していたリトに声をかける。

こつして一行は次の目的地、水族館へと移動を開始した。

・・・・・。

•  
•  
•  
○

## 買い物パニック（後書き）

1軍で5年間頑張つてくれていたパソコンが「臨終なさつた・・・。書き溜めしたデータも全て消え、古いノートパソコンで書き直し。一度書いたものを覚えておくほどの記憶力があつたならこんなに更新は開いたりはしないはず。

これで1巻の内容が終わりました。

この作品は原作でリトさんが攻略していないキャラを主人公が攻略していく感じになつております。

早くお嬢と眼鏡とポーテを出したい・・・。

## 水族館パーク

「へ、結構でつかいんだな」

20分程歩いたところで一行は彩南水族館へ到着する。まだできたばかりなのでお客様の数はかなり目に付く。それも7割方がカップルらしく後は家族連れや、オレは純粹に魚が好きなんだ！とカメラを持った一人ぼっちの男性客なんかもいる。

道中女子3人が仲良くおしゃべりするのをオレとリトは後ろから眺めていた。

せっかく会えたんだから話しかけろよ。とリトに声をかけても聞こえていないのかぶつぶつ言いながら何か考えている。終始そんな様子だったリトを放つておいて受付のお姉さんに券を3枚見せ入場した。

「わあ　きれ　い！」

「すっげー魚がいっぱいいるぞー！すっげー！」

「当たり前だろ、水族館なんだから」

「おいー！リトー！魚がいっぱいいるぞー！？」

「聞こえてたから。2回言わなくていいから」

「あーー！あっちに緑色の魚がいるー！」

「なんだとー？立ち止まつてゐる場合じやねーぜー！」

さつきまで涼しい顔をして冷静な振りをしていたが、実はオレも水族館が初めてだったのですごく楽しみにしてました。

普段食用の魚しか見たことが無いのでこんなに沢山の生きている魚に囲まれたら興奮してしまう。

後ろで美柑達に笑われていた気もあるが楽しくてそれどころじゃない。

ララと一緒に水槽に張り付いて魚を眺める。青や緑など多種多様な魚やえび・かに、それらが綺麗に演出された水の中を自由に泳ぎまわっている。

まるで自分が海の中に来てしまったかのような錯覚に陥ってしまう。ただでさえ少ない語彙が「おーすっげーーー」とせりに減つてしまっている。感動のあまりそれくらいの言葉しか出でこないので。

「たいへん!しじみがいなーよーーー！」

「おいー!白熊がいないとばいづこいつことだー！」

「んなもん水族館にいるかーー動物園に行けーーー！」

宇宙人2人がはしゃいでしまっているせいですっかりリトも調子を取り戻している。

「むーん?あつひも面白やーーー！」

「ペンギンだとーー魚類にうつりを抜かしてる場合じゃねえーーー！」

ララが指差した方向を見るとなんとペンギンコーナーがあるではないか。

鳥なのに海を泳ぐ。しかも空を飛べない。なのに可愛い。摩訶不思議生命体ペンギン。そそる。

他のお客さんがいるというのに宇宙人2人は走るようにしてペンギンコーナーへと突入していった。

ララとまた2人してペンギンに感動しているとき、ふと我に返る。

はしゃぎすぎて3人を置いてしまった…。

振り返つてみると呆れ顔の美柑がペケを抱きながら立つている。

「あれ？ あとの2人は？」

「向こうで別行動してるよ」

「そうか、気づかなかつた…。美柑も気を利かせたんだな」

「…有里さんも結構にぶいよね」

「なんだと！？ 自分では鋭いつもりでいたよ…」

「そ いうところが鈍いつことだよ」

美柑にため息をつかれてしまった。人の感情の機微にはそれなりに敏感なつもりでいたのに・・恥ずかしい。

「ほらララさん1人になると迷子になっちゃうよ。行こ」

自分が鈍感かもしれないという現実に徐々にショックが大きくなつていく。

へこみかけているオレの手を取つて若干嬉しそうな美柑がララの元

へと引つ張つていった。

・・・・・。

「ね　ね　有里、なんかペンギンちゃん達元気ないのかなあ？」

「やうだなあ・・・日本の氣候は合わないのかな」

それからまた3人でペンギンを眺めていたところ、ララがそんなことを言い出す。

確かにペンギン達はぐでーっとしてだるそうだ。

「よ　し、じゃあこれあげてみよー!バーサーカーDX!」

閃いたララが携帯から錠剤のようなものをこくつか取り出す。

「バーサーカー?よし、それで元気になるなら上げまじょー!

「いや、やめたまつがいいんじゃ……」

美柑が静止の声をかけるが水族館に来てテンションが振り切っているオレ達の耳には届かない。

「元気にナ　レ　」

「豊かにな　れ　」

2人がかりでペンギン達に怪しい薬を上げる。

ペンギン達も好奇心からか近づいてきてるけど、またひとつ口に運んでいった。

• • • •

•  
•  
•  
○

「ペンギンが逃げたぞー！」

「おい！そつちにいっただぞ！捕まえろーー！」

— わ  
！みんな元気になつたねつ！』

「有里さん笑ってたる場合じゃないよ！大変なことはなってるよ！」

「いやあ冷静になつてみると『らいじ』としかやつたね。」つや笑う  
しかないわ」

さつきまでぐつたりしていたペンギン達が嘘のよう立派になってしまつてゐる。

檻なんて樂々越えて水族館中を我が物顔で闊歩している。それだけに飽き足らず他のお密さんに体当たりをかましていた。さすがバー サーカー。

「いいから全部集めて来てよね。さつきから館長っぽい人が睨んでるよ」

「あの血管浮き出てる人やつぱり館長か…」

なぜバレたのかは解らないが先程から水槽の陰に隠れて額に青筋を浮かべたおじさんがこちらを睨んでいる。

歯軋りがこちらまで聞こえてくるかのような形相だ。

「おこつー。これお前らの仕業かー？」

ペンギン集めに行こうとしたときおれまた怒りの形相のコトと困り顔の西連寺がこちらに向かってくる。

「やつです・・」あんなさい。今からペンギン集めるからー。

「美柑がついていながらなんで」「んなことになつてんだよー。」

「」となでつかい子供を小学生に押し付けられてもどうもなによ

美柑にでつかい子供なんて言われてしまつ。なんだか今日の美柑は手厳しい気がするよ。

それから皆で手分けしてペンギンを集めた。

無事全部集め柵の中へ入れることができた。が、いつの間にか後ろにきていた館長さんがポンとオレの肩に手を置く。

それで全てを察したオレは皆にここで解散の旨を告げた後、ただ押し黙つて館長室へと連行されていった。

・・・・。

・・・・。

ちなみに館長からは怒られるどころか感謝されてしまった。

何でもペンギンが暴れたことはひとつイベントとして説明したい。それが功を奏したのかお客様さんが倍増したらしい。  
災い転じて福と成すというか結果オーライといふか。。。そんなこんなでララの地球見物は無事終わったのだった。

## わくわく臨界点

季節は初夏。

夜は涼しく、日中は暖かくて大変過ごし易い。また夏は人々の気分を解放的にしてくれる。イベントだって沢山ある。

川、山、海水浴、花火、お祭り、上げ始めればキリが無い。そしてイベントは学校でも行われたりもする。

そう、臨海学校だ。

海に行くだけでも楽しみなのに、学年全員で遊びに行くんだなんて…前日からワクワクが止まらない。

1週間前から準備を開始して、これで7回目の確認作業を行つていい。初めての旅行だけに忘れ物が合つてはならない。その点に関してはぬかりのないようにする。

「着替え良し、筆記用具良し、洗面具良し、遊び道具良し、その他もうもう良し」

着替えとタオルは多めに持ち、万が一に備える。携帯の充電器などは忘れてしまつと以外と困るから注意が必要だ。デジカメも充電満タンだ。写真は思い出の付箋。例えしありに娯楽品禁止と書かれていようが関係無い。というかそんなの律儀に守るやつなんかほとんどないからね。

「準備するのそれで何回目?」

「初めての旅行なんだから忘れ物とかしないよつにしないとだろ。」

もたれかかんな

ベットの上に荷物を広げていたオレの後ろから御門<sup>ごもん</sup>がもたれかかってずっと髪の毛をいじつてくる。暇になつたのか話しかけてきた。

「でも臨海学校無くなるかもしれないわよ

「は？」

意地悪そうな表情をしてあつさつ爆弾発言を放つ。

「だつて台風来てるじゃない

「たい…ふう…言われてみれば外がつるやつが…」

「気付かないなんてどれだけ楽しみにしてたのよ、庭の木がへし折れるくらいしなつてるのよ?」

意識してみれば、窓ガラスは弾丸のような雨粒が当たつてバシバシ音を立てている。

豪風が壁にあたつてゴウゴウと鳴き、確かに窓から覗いて見える庭の木が引っに抜けんばかりに風に流されていた。

「気付かなかつた…そつか、台風があ…くそぅ、いきてえな…」

気候が相手ならば諦めるしかない。台風を消す方法は無くはないが、地球では自然の力には逆らわず生きていく。

宇宙人として、来た星のやり方にならうのはマナーみたいなものでいわゆる郷に入つては郷に従えということだ。

「なんでもうれしそうなんだよ？」

オレがすっかり肩を落として落ち込んではいると背中に乗っていた御門がニヤニヤしながら頬をつついてくる。

「だつて私は臨海学校に着いて行けないもの、学校に残る学年もいるんだから。有里はここにいればいいのよ。」

自分は海に行けないので僻んでいたらしい。

そして何かスイッチが入ったのか、もたれかかっていた御門がずるずると膝のほうへやつてきてオレの腰に横抱きになった。

普段治療や診断をしているときは凜々しいのに、夜部屋に来るとやたらといちゃいちゃしたがるのだ。

抱き付かれるのは恥ずかしいのだが、大人でいつもはしっかりしている御門に甘えられるとなんだか満更でも無くなってしまう。これがギャップ萌えってやつか。

「一緒に何か映画でも見ましょ。ちゅうど昨日借りてきたの

「お前が見るのスプラッタばっかじゃねえか、アクション物がいいよ

「パニック物もあるけど

「結局バタバタ人が死ぬ話じゃねえか！」

異性と一緒に映画を見るなんてそれだけで小一時間小躍りするようなイベント。

しかしその映画の中で人が画面を真つ赤に染めながら絶命するたびに横でクスッと笑われたら100年の恋だって冷める。というか夢に出てる。

「オレは今日早めに寝なきゃいけないの。そして台風は明日の朝にはいなくなるの。香氣に映画なんか見てられるか」

手早く広げた荷物を旅行カバンに綺麗に詰めていく。崩れないように、取りやすいように。

ジーとチャックをしめ、準備は完璧！と後ろの音に振り返ってみるとテレビ画面に映画のロゴが流れていた。

いつの間に持ってきたのか赤ワインを枕元に置いてしたり顔で御門がこちらを見ている。

「有里が文句ばっかり言つからラブロマンス物にしたわよ

「スプラッタだから嫌だつて言つてんじゃねえよ、今から寝るから言つてんだよつてからプロマンス映画の冒頭が悲鳴で始まるわけねえだろこのバカ！！」

テレビ画面は真っ黒になつたり真つ赤になつたり直視できない。時折聞こえてくる悲鳴を助けを呼ぶ声が嫌でもオレの想像力を書き立ててしまつ。

「映画は静かに見るものよ。そんなに言つなら先に寝ればいいじゃない」

「スプラッタ映画を子守唄に就寝とか正気の沙汰じやねえよ！いいから出でけよ！」

そんなオレの言い分もすでに見入ってしまっている御門には聞こえるわけも無く、こで騒ぎすぎると変な色の液体を注射されることになる。それにオレは居候の身、部屋と寝具があるだけマシじゃないか……。

自分で無理やり折り合ひをつけて、枕と掛け布団を奪われたベッドに横になる。テレビに背を向けて手で耳を押さえる。

「フフッ人の首がそんな簡単にちぎれるはずないじゃない…ねえ有里？」

と定期的に話しかけてくる御門を全力で無視しながら夜は更けていつた。

・・・・・。

・・・・・。

ペペペペペペ

ジリリリシリ

時刻は午前6時。枕元に置かれた携帯と田舎まし時計が鳴り響き時間が来たことを伝える。

「うう…3時間しか寝れなかつた…」

結局あれから映画を2本見ていたので眠ることができなかつた。

2時30分頃に眠くなつたのか御門が映画を消してオレに抱きついて寝息を立て始める。しかしオレは頭の中を見ていた映画の悲鳴やBGMがリピートされて寝付けない。

30分ほどしてやつと眠りにつくも見たのは悪夢。当然疲れなんか

取れない。

横には少しワインの匂いが香る御門の姿。自分は保健室で暇なとき  
に仮眠が取れるからって人を夜更かしに付き合わせやがって…

いつものように気だるい体に力を入れてだらだらと起き上がりベッ  
トから出る。

布団が乱れて御門の下着が見えてしまってしまった。だがこれも毎  
日のことなので

「うひひょー！ うひペーぱんちゅだぜー！ 着めてやりゅーー！」

とか言つたりしない。見えてしまったパンツはただの布なのだ。

ズボンの裾を引きずるように歩いてといってカーテンを開ける。

「すげえ… 本当晴れたよ。目が潰れる…」

寝不足で開ききつていらない目で外を見ると昨日の豪雨・豪風が嘘の  
ように晴れ渡っていた、雲ひとつない晴天だ。

朝の清々しい朝日が目に痛い。眼球の裏側がじくじくする。

痛む目を擦りながら洗面台へ行きやっと目が覚めた。

御門の分の朝食を作りラップをかけておく。

荷物を取りに部屋に戻るとまだ御門は寝息を立てている。起こさな  
いように静かに荷物を背負いゆっくり扉を閉めた。

今日はリト・ララと待ち合わせて一緒に学校まで行くことになつて  
いる。少し早いが待つけないので家を出た。

さあ待ちに待つ臨海学校の始まりだ。

午前7時20分

普段なら朝練のある生徒くらいしか歩いていないはずの校庭は、やたら賑わいをみせている。

友達と楽しそうに話しているもの。自分の持ってきたものを自慢するもの。到着してからの予定を立てるもの。その様子は様々だが、一貫しているのは皆その日に期待と高揚を秘めているということだ。

そんな楽しげな集団の中でただ一人、死にそうな男がいる。

「お前、大丈夫か？」

「なんか有里、田の下黒くなってるね」

リト・ララに心配されながら、立っていることもままならずこの場で唯一、カバンを枕にして寝転んでいる男、何を隠そう雪ヶ丘有里その人だった。

目が覚めて、臨海学校への楽しみさから振り絞った元気も、リト達と合流し重たい荷物を背負いながら学校にたどり着いたところで底を着いた。

「やばい、寝そべ。もづね、地獄」

すでに言語バランスが崩壊している。じきに思考回路もショートするだろう。

先程点呼を取ったときが限界だった。それからすぐにバスに乗り込みば多少眠気も覚めただろうが、今は学校行事でよくある「これ今

何の時間？」現象である。

ギリギリの状況で保っていた糸が容易くぶつちぎれた。じつ起きているか、がどう寝るかといつ思考に変わったときがその時だ。

簡潔に言えば「脱落」というものの言葉につきる。

「バス乗るー有里。…おこつ起きたりしておこつー。」

「「」のバカフランマジ寝する『奴』だ…」

「有里も昨日楽しみで寝られなかつたのかなー？」

友人達の聞きた声がもはや子守唄にしか聞こえず、抗うこともしないまま意識を意識を沈めていった…

・・・・・。

「・・・・・はつ…ビー！」「…？」

背中の痛さに飛び起きてみるとそこは見知らぬ場所、もとて見知らぬ車内。

なにこれ誘拐？と見渡して見れば窓から覗く青い海。反対側の窓からは何とも堂々とした旅館の姿があった。

足元に置いてあつた自分の荷物を担ぎ上げバスから飛び降りる。

「すつげえ！着いた！！海だ 旅館だ ！」

「やつと起きたのか

「おーいトーー海だぞ！旅館だぞ！臨海だぞ！」

「寝起きのくせにうるさいんだよーー。わざわざこの辺の監視をやつたし、今女将さんの説明の時間だからー！」

跳ね上がったテンションのまま喋ってしまったが確かに今は女将さんの説明時間らしい。

100名弱の生徒達がずらっと並んで艶やかに着物を着こなす妙齢の女性の話を聞いている。

そんな中大声をだしたオレがなぜ教師達にお叱りをつけないのか。理由は至極簡単、他の生徒達も自由におしゃべりしていたからだ。前列の生徒達は（主に男子）女将さんの話をキチンと聞いている、というよりはただ見とれているだけのような気もするが何であれ静かだ。ただ後方の生徒達は女将の姿が見えないこともあって注意力三万、もとい散漫だ。

教師達は全員男性なので女将に夢中になっている。知り合いらしい校長が踏まれている内に女将による説明が終わったらしく生徒達は担任の教師に連れられてぞろぞろと部屋へ向かつ。

オレ達の部屋は臥待の部屋、という名前らしい。臥待ちとは月の形の名前で、まあ三日月とか満月の仲間だと思つてほしい。

「つほー、いい部屋だな」

「ほんとだな。海が見えるのか

部屋は4人部屋で、この部屋はオレ・リト・猿山・生徒A・の4人だ。

荷物を置いて部屋に備え付けてある浴衣に着替える。ああ旅館に来たんだなあと実感が強まつてくる。

「よし、早速風呂いくか」

まつたうとした空気が流れたところを猿山が提案する。

旅館に到着したのがすでにもう夕方。今日は夕食と夜に肝試し大会がある以外は部屋でゆっくり自由時間ということになっている。入浴時間はある程度決められているが2時間の間に入ればいいと幾分自由。

「おう！行く！行く！脱水症状起こしてやる意気込みよー！」

海も去ることながらこの温泉というのも楽しみの一つ。泳げるほど広い風呂に入れるなんて貴族気分だ。

一瞬で入浴の準備を済ませスリッパを履く。準備万端にして振り返つてみるとリトや猿山達が何かことこと話しているのが見えた。

「おい何してんだよ。風呂行くんだろー早く行こうぜー

オレとしては一刻も早く一刻も長く浸かっていたいので3人を急かす。

「おうよー今行くぜ、ほらリト覚悟を決めろ

「いやオレはそんな…おこー引つ張るなって」

嫌がるリトを猿山たちがぐいぐいと引きずるようにして連れてくる。

リトが嫌がっているのが気にかかつたが今は風呂に入ることより大事なことなんて無い。

オレは3人を引き連れるよつとしてお風呂場へと急いだ。

・・・・・。

素晴らしい。

微妙に鼻をつく硫黄の香りが湯気を伴つて水面から揚がる。少し熱めのお湯がじんわりと肌を通して骨身にまで伝わっていく感覺。ふうーと何度も解らない息を吐く。体が温泉に溶けてしまつてゐるのではないかと思う。実際そうなつたつてかまわないとさえ考えてしまつ。よし、ここに住もう。

「死んだつていよいよ… 幸せ死するよ」

我ながら気持ち悪い声を出したと思う。しかし地球の奇跡、温泉に骨抜きにされてしまった者ならばそれも仕方ない。

現にオレの周りの生徒達も「うひー」「ふひやー」「くはー」と熱いため息を零していた。

「なあなあ有里、一緒に女湯覗きに行かねえか?」

そんな素晴らしい極楽を、猿山の下卑た提案が横槍をいれる。

すでに興奮しているのかこの猿、顔を赤くして鼻息が荒い。その後ろには同じく興奮状態のオスが何人か。

さらにその後ろで意外にもリトが気まずそうにしている。

純情BOYも好きな娘の生まれたままの姿の誘惑に負けたといふことか。情けない。というかリトが覗きなんてしたら鼻血で出血死するんじゃないだろうか。

「この温泉よりも優先されるものなんてないわ、お前らで行つてきなさい」

旅館お決まりの行為をしようとしている奴らを適当にあしらひ。猿山はオレが乗ると思っていたのか意外そうにしていた。

「それじゃあいくか！」

と猿山の号令でぞろぞろとオス達が歩いてく。その後姿をできるだけ視界に入れないようにしながら、オレはまたため息をひとつついた。

・・・・・。

結局入浴時間、ギリギリまで入つてしまつた。時間にして1時間50分ほどらしい。

あらかじめ給水ようの水をペットボトルで用意してあつたので脱水症状は起こさなかつた。

「あうあ」

「入りすぎなんだよ。大丈夫か？」

起こしたなかつた、とは言え2時間も入つていればのぼせるに決まつ

てる。

風呂を出た後がつづり立ちくらみを起こすも壁に手を付いて耐えた。そのままずるずると着衣所へ行き次のクラスの男子達に着替えを手伝つてもらひ、浴場から部屋までをこれまた壁に手を付いてずるずると歩きたどり着いたところで倒れたのだった。

今は布団の上に横になつて浴衣を腰まではだけさせリトヒヅチわで扇いでもらつてゐる。

猿山はその光景を「売れる！売れる！」と騒ぎながら写真を撮つている。あとでぶん殴つてやる。

ちなみに覗きの件は先に校長が覗いていたらしく、その校長がボコボコにされるのを聞いて諦めたらしい。  
確かに漫かつてゐ時にそんな声が聞こえたような氣もある。むづづちの校長やめさせりやえよ。

結局夕食の時間まで布団の上でくたばつてゐることになった。後悔は無いが反省はする。リトには迷惑をかけてしまつた。

「いーよ別に。」なんてオレのお礼を聞きながらあつけらかんとしている。じつこうせりげない優しさがリトのいい所だ。

そして豪華な懷石料理をたらふく頂いたオレ達は、毎年恒例らしい肝試しへと挑むことになる。

もう一回風呂入っちゃダメかなあ…

壯誠し。試されるのは愚氣か贋物か（前書き）

今年中にあと一回は更新しようと3時間で書を上げてしまった。  
普段もやうですが文が荒々しいかもです。

肝試し。試されるのは男氣か臓物か

「セヒ……では今から肝試しのペアをくじ引きで決めまーす！」

田もすつかり沈みきつた夜。

森に囲まれた旅館はより一層暗闇に沈んでいた。その旅館前に集めた生徒達の前であざだらけの校長が声を張り上げる。

この臨海学校中になんらかの出合いを一と躍起になつている連中は総じて田がぎらついている。猿山なんかその最たるものだ。そしてリトも、西連寺との肝試しを期待してかそわそわしている。かくいうオレはお化けなんて信じていないし、ましてや旅館の人気が怖がらせるんだろうと解り切っているのでそうそろ楽しもうとこう気分に切り替えられない。といつか風呂入りたい。

めんどくさいやつにしてこると、せりつへ男子達に押されるよう立てくじ引きの列に並ばされた。

幾らかして自分の番になり、仕方なく用意された箱からくじを引く。

「7番か……」

「あ、雪ヶ丘君7番なんだ。よろしくね

びひやうオレのペアに選ばれたのは同じクラスの女生徒トらしぃ。

「よろしく

紙を見せ合い挨拶を交わす。

リトのペアはやつぱりと言いつかうと云つたりになり、猿山のペア

が西連寺だつたらしい。リトは西連寺となれなくて、猿山は西連寺はリトの思い人といふことで眼中にないのでこれまた残念そう。紙を取り替えればいいのに、律儀な奴等だ。

・・・・・

オレと女生徒Tの順番は随分後ろの方だつたので、リト達や猿山達が先に行つた後やつと出発となつた。

ルールとして2人でひとつ提灯を持ち、その明かりを頼りに500m先の神社へたどり着けばいいらしい。  
しかしオレは1人で歩いていた。

「ごめんね雪ヶ丘君、私彼氏と約束してるからここでバイバイね」

「そつか、いってらっしゃい」

始まつてすぐ女生徒Tが提灯を持つてどこかへ行つてしまつたのだ。  
今頃どこかで彼氏といぢやこらしているんだろう。

派出所の解らない喪失感と、圧倒的な敗北感に打ちのめされながら、せつかくだしゴール付近だけ眺めてから帰ろうと1人とぼとぼ歩くことになつた。

「迷つた…」

そして迷う。なぜ一本道で迷うのかと罵詈雑言を投げかける人がいるなら「じゃあ明かり無しで森の中歩いてみろよ」と言ってやりたい。だがここで女生徒Tに文句を言うのはお門違い。明かりが一つしかないなら女子に渡すのが男つてもんだろう。

そこに關しては納得しているが、いつも容易く迷子に陥る自分のつかつさに、そして現状の情けなさに自己嫌惡が絶えなかつた。

遠くでは男女の悲鳴が響いている。向こうでは盛り上がりしているんだどうな…。

「はあ、帰るわ」

この落ち込みを癒せるのは風呂しかない。もつ帰つて風呂入つて寝よう、それが一番だ。

踵を返し、見覚えのある道を勘を頼りに歩き始めたとき、ガサガサツと左の方で音がした。

幽靈！？なんて思わない、きっと猫か狸か熊か何かだ。

野生生物を見てみたい！と突発的衝動に駆られたので音の方へと近寄る。きっと荒んだ心が癒しを求めたのかもしない。5分程歩いたところにそれはいた。

「ひつ！だ…だれ！？」

「やつやだよお里紗あ！」

「……なんだ糲岡と沢田か。」

居たのは猫でも狸でも熊でもなくまして幽靈であるはずもなく、抱き合つて震えているクラスメイトの糲岡里紗と沢田未央の姿だった。

「その声・・・雪ヶ岡・・・？」

糲岡が持つていた提灯を震えた手でこちらにかざす。久しぶりに提

灯の淡い光がオレの顔を照らした。

「オレが言うのもなんだけど、なんで2人してこんなところにいるんだ？」

2人のすぐ前にしゃがみ話しかける。

「2人で待ち合わせして……違う道から行こうって、そしたら迷っちゃつて……」

糀岡が自分を落ち着けるように小さな声でそう説明してくれる。ちょっととした冒険心のつもりだったんだろうが、迷つてしまい焦つてさらに森の奥へ奥へ進んでしまったのだろう。

「そりゃ怖かつたろうに……立てるか？」

先程まで「うるさいほど聞こえていた悲鳴もすっかり聞こえなくなっている。もう肝試しも終わりかけているんだろう。

早く戻らないといらぬ心配と嫌疑をかけられてしまう。

糀岡も早く帰りたいらしくまだ肩に怯えが見えるもののスッと立ち上がつた。

「んつ……あれ……？ 里紗あ立てないよお」

「未央つ？ 大丈夫！？」

ここで問題が発生してしまう。沢田がどうやら腰が抜けてしまつて立てないらしい。

緊張が解けたのと、肉体的に疲れていたものもあるのだろう。必死で足に力を入れようとしているが糀岡の手を借りても立てそうに無い。

「よし、嫌かもしれないけど仕方ない、おんぶしてくか。乗れ沢田」

年頃の女の子からすれば汗臭い男と密着するなんて避けたい行為だらうが、初夏とは言え夜の空気は体に障る。ここは我慢してもらわなくては。

「えっと……ん…わかった。」

と思つたが意外と抵抗を見せずしゃがみこんで背を向けたオレに沢田が乗つかつてきた。

少々びっくりしたがここでオレが恥ずかしがつたら沢田にも恥をかかせる」とになつてしまつ。

「よし、沢岡は歩けるか? 行くぞ」

そう言つてオレは沢田を背負いながら右手を沢岡に差し出す。  
無いとは思うがこの暗い森の中ではぐれてしまつてはそりに事が大きくなつてしまつ。

そのため手をつけないでおこうと思ふ差し出した手を、沢岡は取らうとせすただじつと見つめっこる。

そりやそりや、人当たりの良い沢岡とはいえ年頃の女の子。最近リトが西連寺と仲良くなつてそのツテでちょくちょく話すようになつたとは言えオレと沢岡は知り合い程度の関係だ。嫌がるのも無理はない。

差し出した手をさびしく思いながら引っ込めようとすると、小指をつかまれた。

沢岡がオレと手を合わせなによつてしてオレの小指だけをつかんで

いたのだ。

普段さばさばしたり大人ぶるうとしている畠岡の、ふと見せた少女の姿がオレの心を揺さぶった。

頼られている。

それを背中と小指が実感させてくれる。『ハドカツ』よく行かなきや男じやない。

「じゃじゃつじや…しきしき…イクぞ」

その思いとは裏腹に、声は裏返り噛み噛みになってしまった。  
ただでさえ恥ずかしかったのに、さつきまで怯えていた2人にクスッと笑われてしまい余計に恥ずかしくなってしまった。

穴があつたら入りたい。風呂があつたら入りたいよ。

結局旅館へは、研ぎ澄まされたオレの感覚もとい勘でなんとかだり着くことができた。その頃には沢田も立てるようになり無事部屋へと戻つていった。

「ありがと、それじゃまた明日つココつひ

「今日はありがとね、また明日海でね、ココつひ

そななお礼を言いながら手を振り去つていく沢田と畠岡を見送りながら、いつの間にかつけられた自分のあだ名に苦笑していた。

ପରିମାଣିତ କାମକାଳୀଙ୍କିରଣରେ

## 渚の愛のものがたり

今日は待ちに待つた臨海学校のメインイベント海水浴！プールなどで泳いだことはあるが、海は見るのも初めてだ。磯の香りと寄せては返す小波の音に終始興奮しつぱなし。

教師の有り難い海での注意事項が終わるや否やオレはいの一一番に海へと飛び込んだ。

あまりにも豪快に飛び込んだので口に鼻に海水が流れ込んできて盛大にむせてしまう。

止まらない咳と涙に苦しむオレを、糀岡と沢田が指を刺して笑っていた。

「人が苦しむ様を笑うとはなにごとか

！」

「キヤ

！？」

そんな2人を海から這い出て追い掛け回す。思い返せば中々こいつは

ずかしい行為だがそれが許されてしまつのが臨海マジック。

砂浜を走るというのは結構疲れるもので、なんちゃって海岸の逃避行も5分で幕を閉じた。

「もう…ダメ…走れないよ！」

「はあ…はあ…やっぱ、限界…」

「いやあ…あつは、途中で楽しくなつちやつて。『めん

ただでさえ暑いのに走り回つて汗だくなつた沢田と糀岡がもつれ

るようにして砂浜に倒れこむ。

それを見てオレはひとつ走りして海岸の隅に置いておいた自分の力バンを取つてくる。そこから運動部御用達の清涼飲料水を2本取り出し2人に渡した。

疲れていた二人はそれをぐびぐびと飲み干す。とても良い飲みっぷりだった。よほどのどが渴いていたのだろう。

「もう、まだ日焼け止めも塗つてないのに汗かくちやつたじやない」

元気になつた畠岡が「ちらをジトーシと睨みながらそいつ」。

「だからめんつて、お詫びに向でもするからや」

と言つたとたんに畠岡が「ヤーヤ」といじわるな笑顔になる。それをみて、常識の範疇で、と付け加えなかつたことを後悔した。臓器売つて来いとか言われたらどうしよう。

「それじゃあ…日焼け止めを塗つて貰おうかな?」

どこからか日焼け止めクリームを取り出してオレに差し出してくる。てつくりスペゲッティを鼻で食べろ!とか言われると思っていたので拍子抜け。といつかむしろこれは「豪華なんじゃないだろうか

。」「よしよし、オレが全身に塗りたくつてやる」

「へ?…あ、ちょっと!？」

「ちょっとからかうつもりで言つたのだろう、まさかオレが乗つて来

るとは思わなかつたらしく固まつていゐ畠岡の手から日焼け止めクリームを奪い呆気にとられている隙に背中へ馬乗りになる。

「へつへつへ…これで逃げられないぞ…大人しく日焼け止められろ！」

「いやあのっちよつ…[冗談つ…]ひゅ…やめつ」

ただでさえ疲れて動けないのに馬乗りにされてしまつては抵抗の仕様が無い。

自分にこんなにもうツ氣があつたのかと内心驚く。べずぐつたいのか、笑い声をあげて体をよじる畠岡を見ているとだんだん楽しくなつてきました。

「いじかあ…いじがええのんかあ…！」

「ちよつ…ほんと…息できなつ…」

調子に乗りすぎたのか日焼け止めクリームでベビーベビになつた畠岡がぐつたりと砂浜に倒れる。

しかし海のもたらすハイテンションが留まる所を知らない。

「次は沢田だあああああ…！」

「あやあああああ…」

ハイハイで逃げよつとする沢田も同じよつて馬乗りで拘束し、同じように日焼け止めを塗りたくる。

やつぱりぐずぐつといらしく、沢田も畠岡のよつて若干扇情的にも聞こえるよつな叫び声をあげている。

いつして降つてわいたご褒美プレイは、リトのとび蹴りでオレが吹き飛ばされるまで続けられていた。

・・・・・。

「水着泥棒？」

「なんか他のクラスのやつも被害に合つてゐるらしいぜ」

時刻はすぎて昼休み。

オレは休憩所で罰として四つん這いになつていて。背中には執行者である糀岡と沢田が座つている。時折思い出したかのようにわき腹をつねられるので常に反省を促されている。

そしてなにやら、水着泥棒が出たらしい。そこで中でキヤーキヤー騒がしかつたし、オレは2人がかりで砂浜に埋められていたので気付かなかつた・・・スイカ割りとは遊びにあらず。それは砂浜の处罚の一つなり。眼前を通る木の棒の脅威たるや凄まじいものが合つた。

「なるほど……おい、猿山。盗んだ水着を出すんだ、今なら許されるぞ」

「オレじゃねーよー男子の水着も盗まれてんだぞ!？」

「え…お前そんな趣味が…」めん、近寄らないでくれる?。

「つかげーよ！…野郎の水着を盗むくらいなら命を絶つわ…」

なんとなく疑つてしまつたが、確かに猿山といつ男は性欲の権化だが犯罪行為はしない…・・・はず、多分。

「女の子の水着を無理やり奪うなんてサイテーね！」

「きつとモテない男の犯行だよ！」

「あの…叩かないでくれませんかね…？」

同じ女子として腹が立つたのか、オレの背中に乗つている畠岡と沢田もハツ当たりとばかりにバシバシ頭やら背中を叩いてくる。

女子高生に叩かれると言えばある一定の人種にはご馳走なのかもしれないが、生憎自分のラッキーに気付いてしまつたオレには屈辱しかない。というか人がこんなにいる中で一人だけ四つん這いとか恥ずかしすぎる。

話に参加して注目を浴びるのも嫌なので、存在感を消し椅子に成りきつた。

ララが率先した形で午後は犯人探しをすることに決まった。いい加減許してくれないものか。

・・・・・。

「オレ泳ぎたいのに～…」

「いいからほらっ！不審者がいないか探す！」

「じゃないとゆりっちが犯人つてことしちゃうだもー。」

犯人を探すふりをしながら遠泳かまそそうと思つていたところをやはり畠岡・沢田が現れて犯人探しに連れ出された。

しかし無理やり協力させたくせにこの2人はまともに探そつとしない。さつきから海をバックにオレに写真を撮らせたり3人で撮つたりどう考へても遊んでいるだけだ。

「よし、[写真も沢山撮つたし一回みんなのとこ戻るっか!】

「うん、もじるー もじるー」

写真が目的つて言つちゃつたし。しかし負い目があるので逆らえない。下手したら水着泥棒のホモ野郎にされかねない。

先程の休憩所の前まで戻るとすでに他の女子達も集まつていた。様子から察するにまだ犯人は見つかっていないのだろう。イライラが遠くから見ても伝わってきた。

次はあつちを探そう、こつち行つて見ようと話しえつ女子達の輪に入れず少し離れて海岸をぐるりと眺める。  
すると少し遠くの岩場でふらふら歩く小太りの男性の姿が、とこりか校長を発見した。

「なあなあ、あそこには不審者がいるぞ」

「え?あれ...校長?」

「そつかーこんなことするの校長しかいないよね!」

女子達に校長の存在を教えてあげるとみんなして走り出してしまった。

「ふりがもう校長が犯人だと決め付けてしまっている。そりや校内一の変質者だけど頭から決め付けるのはどうかと……。」

そう思いながらも気になつたので走る女子達のあとを付いていった。

・・・・・。

「最低っ！－！」のH口教師！』

「女の敵！社会不適合者－！」

「ちよつ……誤解……おぶつ－！」

たどり着いた場所は次の処刑地でした。ぐるりと檻のようになんだ少女達の足の間から蹴られながらも嬉しそうな校長の顔をチラリと見えた。

徐々にエスカレートしていく女子生徒たちの罵詈雑言と暴力。そして微かに聞こえてくる校長の笑い声にえもいえぬ恐怖を覚え、オレは静かにこの場を立ち去るのだった・・・。

・・・・・。

・・・・・。

「あ～あ。明日で臨海学校も終わりかア～なんか思い返すと校長にふりまわされてばっかだったな～」

「ほんと、ほんと」

田はすっかり落ち夕食も済ませ、部屋にて猿山達と談笑中。

臨海学校も最終日といふことで、疲れたからだをねぎらいながら思  
い出話に花をさかせようとした。

「まだやれる事はあるぜーー今から女子の部屋へ遊びこいくのだー！」

そんな殊勝なすじ方は猿山のプランには無かつたらしく、教師陣  
から何度も念を押された異性の部屋への侵入を試みようとしたのだ。

「…は？」

「一人で行つて来いよ、上口猿

「うひせーー善は急げだー行ぐぞリトーバカ有里ー！」

「あ、おい待てよー本気かー！」

「首引っ張るな、このホモ猿ーちょっと…行きたくなーー

布団の上で「口」口して「オレ」と「コト」を有無を言わせず引つ張り、  
ララや粉岡達の部屋を田指すのだった。

・・・・・。

「いいだ、ララちゃん起きてるかなー…」

いつの間にか連れてこられたのはさくらの間。いつ調べ上げたのか

ララ・西連寺・粉岡・沢田の部屋だ。

はじめは難色を示していたリトだが猿山の口車にまんまと乗せられてここまで来てしまっている。オレはと言うと猿山と生徒Aの2人がかりで連行されて来た。

隙をみて帰るかと何気なく廊下の先に意識を向けると、重みのある足音に気付いた。

「おい！誰か来るぞ！…多分指導部の鳴石だー！」

「げつ…やばいじゃねーか！」

「……よしつーにはオレに任せんー。」

一計を思いついたオレは猿山と生徒Aの背中を押して逃げるよう促す。

慌てて逃げ出した2人に突き飛ばされてリトが部屋の方へよろけるがフォローしている暇もない。

オレはすぐさま廊下の角へ小走りで近づき若干浴衣を乱す。

「あつ…先生。」

「ん？お前雪ヶ岡か…には女子部屋だぞ？いつたいなにを！」

「あの…オレ、お風呂入りそびれちゃって…先生達の入る時間に一緒に入らせてもられないかなって…探してて…その。」

大変不本意ながら、大変不名誉ながら、オレの顔はあつち系の男性の好物なタイプらしい。

そして大変不幸なことにこの指導部の鳴石という教師は、

「おう… そりゃ、ちよつと俺達の入浴時間だったんだ。背中でも流してもらおうかな、はははっは！」

「でもあひの氣がある」云々。

廊下の端でこちらを窺っていた猿山達にガツツポーズを送り、腰の寒さを感じながらオレはお風呂場へと鳴岩と共に歩き出すのだった。

こうしてオレの機転により猿山、生徒Aは無事逃げ延びる」ことがで  
きたのだった。

西連寺の部屋に入つてしまつたりトだが、何があつたかを聞くと顔を真つ赤にして「何にも・・・無かつた。」と言い張るのでそれ以上の追求はしなかつた。

ちなみに風呂へと連れられていつたオレはと云うと……。

「おつと先生グラスが乾いてますよ？」

「あつはつはすまんな雪ヶ岡！」

「いえいえそんなそんな、差清先生もどうですか一杯？」

「お二、うちのお酌もしててくれよ。」

「はいはいちょっと待つてくださいねー！」

気付いたら露天風呂で開催された男性教師の飲み会に参加してしまつていた。

もちろん自分は1滴も飲んでいない。宇宙的には飲んでも構わないが、地球では高校生ということになっている。郷に入つては郷に

従わなくては。

そしてもちろんあつち系の人に入れをそれされたりなんてことも無かつた。というかさせなかつた。悪酔いダメ、ゼッタイ。

何にせよ最後にまたお風呂に入れて大満足だった。

## 嵐を呼ぶ転校生

光陰矢の如し。楽しかった日々は田まぐれじこ速れで過ぎていってしまう。

それは夏休みであつても例外ではなく、40日といつ破格の期間を得てしても一瞬の夢幻のよひに青春の一ページとして終わってしまった。

始業式の終わった後の教室では、夏休みの出来事を歓談し合ひ生徒達で賑わっていた。

「学校へ来ると夏休みも終わつたんだな～って実感するよな。」

「すぐ終わつちゃつたねつ、夏休み」

「毎日見てた制服もいつして夏休み挟んでみると新鮮な気がするよな」

オレ達も例に漏れず、久しぶりに来た学校を味わっていた。  
歓談するとはいっても夏休み中は毎日のように一緒に遊んでいたので今さらするような思い出話もない。

「……」

「ど かした? リト」

「えつ! ?いや、あの…」

ボーッとしていたリトカラカラが気付いて声を掛けると、途端にリト

が焦りだす。

臨海学校以来時々こんな風にララの方を見ながらボーッとする」とが多い。旅館で何かあつたらしが……。

「はいみんな席についてえ」

担任の教師が来るどぞわつていた生徒達が蜘蛛の子を散らしたよう席に着いた。

「え 2学期になつていきなりですが、転校生を紹介します」

いきなりのイベントに教室がにわかにわつく。

「レン・ヒルシ・ジュニア君です。みんな仲良しくするよ」

「キャーー美形ーー!」

「カツコいいーー!」

転校生の姿を見た女子達が黄色い声を上げた。その影では男子たちの舌打ちのオンパレードがあつたり。

しかし美形の転校生はそんなことなど見向きもせず一直線に教壇からララの所まで歩いてきて、

「やつと見つけたよリカちゃん…ボクの花嫁…」

とリカの手を握りながら歯の浮くような爆弾発言をさりと投げかける。

「ああ… 一回でわかったよ。やはり人ごみにまぎれてもキミの輝き

は隠し切れない。幼少の「」の王宮の庭で遊ぶキミは本当に美しかった。キミの笑顔はボクの心を太陽のように照らしたものさ……そして今！月日を重ねたキミはいつそう美しくなつてまばゆいばかりの輝きを放つている。

まさに女神！……

先程のざわつきとはまた違つた感じで教室が騒がしくなる。色々な話が飛び交つてゐるが、クラスメイト全員が（この転校生ちよつと変わつてるかも……）と思い始めていた。

「やしてこの感動の再会！こんな辺境まで出向いたかいがあつたよ、わあリラちゃん！ともに喜びを分かち合おう！」

「えと…あなた誰？」

興奮気味の転校生が再会の喜びを情熱的にリラに伝えるが、くしくもぱりたり斬られてしまつ。

「あ…まあここで、こんな事じやボクはへこたれないよ。なぜなら…男だからねつ！…！」

（この転校生変だ…）

クラスメイト全員の、転校生への印象が合致した瞬間だった。

「それよつたらリラちゃん聞いたよ、なんでも悪い男に騙されたりしないじゃないか。そう！キミの事だよ！結城リト！！！」

「指差すな、オレじやねーよ」

その変わった転校生にいきなり指を刺され思わずむつとしてしまいながら答える。

まだ会つたばかりだが、この男からは不幸臭とリトとはまた違つたへタレ臭がブンブンしてくる。関わると碌な事にならなそうだ。

「失敬、じゃあキリだ！」

とオレの言葉を聞いていたのかいないのか次はリトを指差し声を張り上げてくる。

「あの転校生ビバ思ひっ！」

「ちよつと変わってるけど顔は中々イケてるかも」

「カツコいいねー、またクラスにイケメンが増えたねー」

転校生が写真を取り出してリラとの自慢話のようなものをし始めたので、オレは近くにいた糀岡と沢田に話しかけた。  
2人はこの変な転校生に結構好印象を持つているらしい。顔がよければ何でもいいのかつ。

「ゆりっちも十分イケメンだよ。」

「モーモー、負けてないよ！」

「あからざまな慰めはむしろ傷つくなからやめて……」

「キリの結婚相手として真にふさわしこのが誰なのかといつ事をね……」

そつこじしている内に転校生の熱演が終わつたらしい。それを見計らつて担任教師が授業を開始させた。

突風のように現れた転校生レンの登場によって、新学期の学校生活はまた騒がしくなつていくのだろう。  
とはいえ被害をこうむるのはリトのよつな気がするので、オレとしてはホッと一安心だつた。

・・・・・。

・・・・・。

「ではこの問題がわかる人」

「ハイツ！－結城くんより先に答えます！－答えは $X = 2 + 3 = 5$ ！」

「せ…正解です。」

「おお～…」

「……」

「なんだこれ」

・・・・・。

・・・・・。

パンツ！

「うおおおおおおおおおおおお...」

「結城リント早く100ミ完走 ツーリー。」

「.....」

「大事なのはタイムじゃないのか?」

・・・・・。

「助けてくれよ~...」

授業中だけではなく昼食の時間までも一方的に勝負を挑まれて心身ともにさぞさぞ気味のリトが猫なで声を出してオレの机にもたれかかった。

「オレに言つくなよな。よくは知らないけどリラと結婚するために競つてるんだが。ちょうど良かったじゃねえか、レンは昔馴染みらしいしお前も居候がいなくなつてまた平穏な生活が戻つてくるぞ」

「やつや...やつだけじゃあ」

「今ならまだ来てそう田も長くなこじ、ひよつと説得すればララも納得してくれるだろ?それでララと別れられるんだぞ」

「ララと...別れる...」

「…………」

何となくここ最近リトの様子がおかしかった理由がわかつてきた。同居人の宇宙人というだけだったララを、女の子として見る様になつてきただろう。

破天荒な所が目立つているがララだってちゃんと女の子らしいこところもあるしなんと言つたつて美人だ。

そして中学の頃からずっと好きだった西連寺。その思いに若干の迷いが出てきたという所かな？

俯いて何か考え始めてしまつたりトを見て、少々突付きすぎた感が否めないがこれも親友を理解するためだ。そして理解したからには協力してあげなくては。

と言つては見たものの、具体的に何をしたらよいか思いつかず時間は刻々と進み気付けば放課後を過ぎてしまつていた。

・・・・・

・・・

夜。すでに夕食時をすぎ、各々の家庭では食後のまつたりとした時間を使しんでいる頃。

オレはカラスの鳴き声がこだまする城のような家ではなく結城家の居間で寝転がっていた。

「リトー、雑誌借りるぞー」

「…………」

ちやつかり夕食を頂き我が物顔でカーペットの上に寝そべつて置いてあつた雑誌を読んでいる。

夕食を食べている時から何度話しかけても無反応が生返事しかしないリトは、今もソファに座りボーッとテレビを眺めている。ララと美柑はさつき2人でお風呂に入りに行つた。キヤイキヤイと楽しそうな声が聞こえてくる。

「なあこの服なんかリトに似合ひそうじゃないか？」

「んー…そうだな」

「チユニックが似合つわけないだろ」

読んでる雑誌はその辺に置いてあつた美柑のファッション雑誌なので勿論男の服なんか載つとはいない。  
余りにも暇だし相手にもされないのでもう一つそ1人でゲームでもしてようかと考えていると

「あーせつぱりしたつー」

風呂から出でてきたララがタオルを巻いただけの姿で居間に入つてきた。

地球上に来た当初から風呂上りはいつもタオル一枚で家の中をうわうわしょこうとする。デビルーク星にいた頃は風呂から出た後、体を拭くのも服を着せるのも全て従者がやつていたらしい。そのせいか羞恥心といつものが少々足りていない。

「んー? リトなにしてんの?」

「テレビ見てんだよ。……バ！？バスタオルのままつりつくなつていつも言つてるだろ……！」

「えーついいじゃない暑いんだしー」

「ア、そーゆー問題じや……」

いつものようにバスタオル一枚で居間に入つてきたララにリトがひとつ間をおいて驚く。オレの時には碌な返事もしなかつたくせにえらい反応の違いだ。

とはいえたの前にタオルに包まれたわわな禁断の果実があれば驚くのが当たり前だろう。純情BOYのリトなら尚更だ。

「どうかしたの？」

「な……何でもねーーちょっと散歩してくるー。」

狼狽したリトが慌てて玄関から飛び出していく。少ししたら帰つてくるだろ。歩きながら一人で考えるのもいいもんだ。

「思春期だねえ、リト……」

「美柑も風呂から出たんだ。……なんでオレの上に乗る？」

うつぶせになつていたオレの上に風呂上りのアイスを美味しそうに舐めている美柑が馬乗りのように乗つかつてきた。

「それ私の雑誌じやん、なんで読んでるの？」

「だつてコトは無反応だしテレビは面白くないし暇だし……って痛い

痛い。なぜお腹をつねる

「リリさん裸に見とれてたでしょ」

「雑誌読んでたって言つてんだろ！それにオレは下着に興味はあってもタオルには無い」

「…有里さんつてケツコ一最低だよね」

「否定はしない。つていうか首に水があたるんだけど美柑髪乾かしてないだろ」

「話えたね。アイス食べてから乾かそつかなつて」

「髪の毛痛むぞー、どれオレが乾かしてやる！」

「…やりたければやれば？」

美柑は”してほしいけど自分からやつてといつのは恥ずかしい”ことには「やれば？」とか「どうせ自由に」なんて言つ傾向があると勝手に思つてゐる。

この何の根拠もない推察も、風呂上りの蒸氣した頬をさらによし赤く染めながらそっぽを向きアイスを加える美柑を見て、あながち間違つてもいいと思うんだ。

実際オレのあぐらの上にちょこんと座つてドライヤーを当てられながら髪を梳かれている美柑は大層心地が良さそうだった。

そして終わったあの「他の女の子にはいいつづり」としないほうが多いよ、気持ち悪がられるから

とこの捨て台詞がなんとも可憐りしかった。

## 変な先輩、天条院参上

それから転校生レンとリトの間で軽いいざいがあった。何でもあの後公園で西連寺とレンが一緒にいるところを見てしまったらしい。

その公園というのが問題でこの辺りでは有名なテニススポットなのだ。夜中なんか男一人で行こうものなら肩身が狭すぎて近寄れない。そんな場所に2人でいたのだからリトの怒りたるや凄まじいものだろ？

実際次の日に糀岡と沢田の提案で何か対決をしたらしい。詳しい内容はリトに聞いても教えてくれなかつたが沢田が言つには引き分けだつたらしい。そして糀岡が言つにはヘタレらしい。つていうかそんな面白いことするならオレにも教えてくれたらよかつたのに。

・・・・・。

・・・。

「机つてここでいいんだつけ？」

「そりそり、タテ3つで椅子6つね」

「ノリ無くなっちゃつたー誰か貸してー！」

「くはははー愚かなー我のものを貸してやるー！」

「ああ…あなた様のノリを頂けるなんて…光榮です」

「ノリは無いけどノリはいってか。遊んでないで働けよ」

普段なら教師の放つ美しく洗練された数式に睡魔を刺激されている頃の教室は活気に賑わっていた。

そう、学校生活の主要イベントの一つである学園祭である。

ひょんなことから実行委員にされてしまったオレは、あれヤレそれドコこれナーニ状態だった。オレを委員に連れ込んだ張本人である猿山は、陣頭指揮なんて言いながら机に立つて色々叫んでいる。

「ゆりうちじの衣装どうすんの？」

「たたんだあうちのダンボールに入れといて」

「りょうかーい」

教室にはネコやウサギなど様々な動物を模した服があちこちに置かれている。

なぜこのような学校に似つかわしくない物があるのか、それは少し時間をさかのぼつたあるHRの時間のこと。

・・・・・

・・・

夏休み明けの氣だるい空氣もそこそこに薄れてきて、また学校生活に慣れてきた頃。

「以前みんなに提出してもらつた案、見せてもらつたがお化け屋敷やわた飴屋などなんともありきたりでつまらないものだつた！」

猿山が教卓を叩きながら大声を張り上げていた。なぜ猿山が仕切っているかと言えば、それは彼が文化祭実行委員に自ら立候補したからだ。そして今、彼主導で我がクラスが文化祭で何をするかの話し合いをしているところわけである。

「そこで考えた結果……我がクラスは”アニマル喫茶”で行こうと思つ……」

「アニマル喫茶あー？ 何それコスプレ喫茶みたいなもん？」

「えーやだー」

「はやんねーよそんなもん！」

自分で1人1つ案を出せと言つておいてそれ全部を無視し自分の案で押し通そうとする猿山に教室中から不平不満が飛び交つた。

「いや！ 絶対に流行る！ 時代はアニマル！ 弱肉強食だ！ とにかく物は試しだ女子は全員別室に用意した服に着替えてくれ……」

そんなクラスメート達のブーイングを吹き飛ばす勢いで猿山がわめき散らす。それに押されるようにして女子達が渋々教室を出て行った。

残された男子たちは偉そつかつ満足げに教卓に座る猿山を睨んでいる。とてもじゃないが”動物の服をきた女子が見たい”と案を出したなんてこと言わない方がよさそうだ。ましてその服を猿山に頼まれて用意したなんて女子達にも言えやしないよ。

・・・・・。

『おおおおおおおおおおお』

数十分ほどして女子達が戻ってきた。

「スゲー！いいじゃねえか猿山つ！」

「だろ！なんせ敏腕プロデューサーがいたからなー。これこそオレの求めたパラダイス！」

「サイコーつー」「びゅりほーー」「わんだほーー」

難癖をつけていた男子たちも普段制服姿か体操服姿しか見たことの無いクラスメートのコスプレに拍手喝さいだ。  
みんなして褒めるので女子達も満更でもなさそうだ。

「ハ、これは……」

「どうよコト。女が苦手なお前から見てや」

「確かにこれなら流行りそうだけど……ってなんで有里が自慢げなんだ？お前もしかして……」

「おひ西連寺だぜー黒猫姿とは中々よい選択ですな。ほれリト見なしてくださいのか？」

「うー…見た、見たいけど…恥ずかしいじゃねえか。」

西連寺は用意した中でも割と大胆な部類の黒猫服を着ながら恥ずかしそうに自分の体を抱きしめて立っていた。

他の子たちも可愛らしかったがその中でも目立つて見える。恥ずかしくて見えないと声のコトの気持ちは少し解るかも知れない。

「よしー我が1Aの出し物はアニマル喫茶に決定

！」

「ハーフのクラスの出し物はアーマル喫茶に決まり、猿山の勝手な提案で実行委員にもそれてしまつたのだった。

・・・・・。

「ねえねえゆうづか。私なにをすればいいかな?」

実行委員といつひとで何かと頼つてくれるクラスメート達をせばきながら自分の仕事であるメニュー表作りをしてみると興奮そうにしていたララが話しかけていた。

「うだりうだり親友としてコトコモ西連寺と一緒にさせあげたいしつつも、そつこえぱりは機械を作るのが得意とか言つてたな、つてことは手先が器用なんだうじ・・・。

「じゅあリラはあそいド四苦八苦してのんを手伝つてもらへべり、」

「うみ

「オッケーー何ソレー?紙のワッカ作つてゐるの?」

「つたり、「やだーリトと一緒にがいこー」なんてだだをいねられると思つたがすんなりと行つてくれた。きっと文化祭つてのが初めてだから楽しくてそれどころかやないんだうな。

「つーふらふらしてんならこれやれ。」

「ん? なんだこれ?」

「机にしぐやつだよ。それを決められた大きさに切って欲しいんだけど…西連寺、リトだけじゃ心配だし手伝ってあげてくれるかな?」

「私? うん、いいよ」

( リー? 有里ナイス! )

( おうよー! なんなら保健室を取つておくれ? がんばれよー! )

すかさず机に座つて修正ペンをひたすらシャカシャカ振つていたりトを呼びつけて西連寺との作業につかせる。

オレにしか解らないようにアイコンタクトを送つてくるが、いついうお膳立てをしても結果を残せないのがリトなので大して期待はしていない。

・・・・・

「いけない、ギニールテープが切れちゃった」

「オレ買つてくるよー!」

「リトは自分の仕事があるだろ。オレ行つてくるよ」

買出しに出ようと立とうとするリトの肩を押さえて座らせた。いつも気配りができる良い奴なんだけど、お膳立てした側としては西連寺と作業していく欲しい。鞄から財布を取り出しポケットにねじ込む。オレの仕事は猿山に押し付けておいたので遅れが出ることは

ないだろ。

「じゃ、さよと行くつべるよ」

誰にでもなくハサウエイから教室を出る。すると、

「ちよっとそこのアナター2年B組天条院沙姫ーこの私があなたと  
付き合ってあげてもよろしくてよー！」

変な人とHンカウンツしてしまった。新手の勧誘だらうか。無宗教  
気取つてゐにちらとしては勘弁してほしー。

夏休みが終わつても休み氣分でいるといつなりやんぢりつか、何  
であれ関わり合いにならない方がよさやつだ。

金髪ロールの見るからにお嬢様な不審者をひと出来るだけ田を合わ  
せない様にしながら、最寄のコンビニへ急ぐのだった。

・・・・。

・・・。

「なんだつたんだあの変な人は…涼しくなつてきたからなあ…そういう人が増えてくる時期なんだろうな。」

最寄のコンビニでロールテープやマジックペンなど他にも必要に  
なりそうなものを買ひこむ。

領収書を切つておけば学校のほうで落としてくれるので値段を気に  
せず適当に放り込んだ。今日の夜食なんて買つてもばれないかな?  
なんて思つてしまつけどそのせいでこれ全部自腹になつてしまつと  
田も並んでられないのでやめておく。

買い物を終え「コンビニから出でみると、

「いやーん、スカートが袖にからまつたれなーいん」

先ほどの金髪ロールの不審者がコンビニの前でパンツを丸出しにしてくねくねしていた。

袖がどうこう言つていたが完璧に自分の手で持つてスカートをめくつていて、その下にある高価そうな白いパンツが丸見えになつているが、見えてしまつたパンツに興味は無い。それにここで凝視してしまつては変態と思われてしまつ。

「自分、急いでますんで！」

またしても田を合わせない様にしてその場から離れたのだった。

・・・・・。

「おかえり。遅かったな」

「いや・・・ちょっと変な人に会つちゃつてね」

買つてきた物を教卓の上に置いて近くの椅子を引っ張つてきて座る。オレの仕事を代わりにやつているはずの猿山は、白い紙へのへのもへじを大量に書いて遊んでいた。こいつは実行委員を立候補したんじゃないんだろうか。

サボつてる人もちらほら見受けるが教室の飾りつけは順調に進み内装はほど完成となつていた。

担当していたメニュー作りも無事に終わり後は外装とチラシ作りのみとなつていて。山場を越えたので自動販売機で買ってきたコーヒーを啜りながら一息ついていると、

「た…助けて……」

勢いよくガララッと開けられた扉から女子生徒がヨロヨロと入ってきて、やがて地面に座り込んだ。

外に飾る看板やチラシを作っている人たちは気付かないが、比較的暇を持て余して人はいきなりの来訪者に目を向けている。

そんな中でオレだけはその来訪者に見覚えがあった。っていうかさつき会った変な人だ。

何とかして気付かなかつた振りを通そうとするオレの目の前まで来て金髪ロールを揺らしながら「何だか、熱っぽくて・・苦しいの。」とか何とか言つている。

誰が見てもオレに対しても言つているように見えるし、リトや猿山の視線がそろそろ痛くなってきた。

「えへっと…大丈夫ですか？」

暗闇の中で電灯のリモコンを手探りで探すように、恐る恐る近づいて話しかけてみる。

後ろで猿山の「おっ、2年の天条院センパイじゃねーか?」という声が聞こえてくるし制服を着ているから一応学校の生徒らしい。

「あなたの…あなたのせいなのよ……」

その先輩が訳のわからないことを言いながら擦り寄つてくる。どうしていいか解らずに助けを求めてリトのほうを見てみるとリト

むひからを見ていたらじく田が合図。

(変な人に絡まれた！ヘルプ！)

(「めん、ちょっとオレにはどうしようもない！」)

渾身のSOSも首を振られて断られてしまい万事休す。そういうしている内に天条院先輩に手を掴まれグイグイと引っ張られオレの手が先輩の胸元へ・・・

「沙姫様！お待ちください！」

「彼は結城リトではありません！」

またもガラツと開けられた扉から2人の女生徒が現れてオレの手を胸元へと誘おうとしていた天条院先輩を止める。

「え？でもあの写真に写っていたのはこの男よ？」

「すみません、綾が写真を間違えてしまって…」

「申し訳ありません沙姫様……」

すっかりこちらを置き去りにして3人で話し始めてしまった。時々リトの名前が出てくるからどうやらリトに用があつたが間違えてオレのほうへ来てしまったらしい。

リトには悪いがこれで変な人に絡まれなくてすむとホッと一安心。しているとどこからか視線を感じた。

そちらの方を見てみると先ほど綾と呼ばれていた女生徒がチラチラとこちらを見ていることに気付く。あの丸眼鏡と長い髪の毛……。

「あの…もしかしてこの前パンくれた人?」

「え…あ、覚えてたんですか…?」

「そりゃあもう! いつか恩返ししなきやつて思つてたから。あの時はありがと、あのクリームパンが無かつたら飢え死にしてたよ」

「その…お役に立てたなら……」

思い出すのに少し時間がかかってしまったがあの時クリームパンをくれた娘だった。

丸眼鏡の置くの優しそうな瞳が印象的などても可愛らしい娘だったがこうしてちゃんと向かい合つて話してみると尚のこと可愛らしく見える。

「え? でもお前菓子パンって苦手じやな」

「成敗! !」

後ろで話を聞いていた猿山がいらんことを言ひそうになつたので鳩尾に拳を入れて黙らせる。

幸い丸眼鏡の娘には聞かれていなかつたようドキョーンした顔でこちらを見ている。田が合つと顔を赤くして逸らそうとするそんな仕草がまた堪らない。

「綾! 今日のところは退きますわよ! 綾?」

「あ、はい解りました。失礼します」

いつの間にか来ていたララと口論していた天条院先輩が教室を出て行くと丸眼鏡の娘もペコッとひとつ頭を下げてその後についていつ

た。

去り際、ポニー・テールのキリッとした娘が值踏みするようジージーっとこちらを見てきたのが若干気になつた。

そんなこんなで、ゴタゴタした文化祭の準備たつだが、無事我がアンマル喫茶も完成し、いよいよ明日が本番だ。何も起きなければいいが……。

## 彩南祭は大災難

「ハハハ しゃこませーー。よウイジニアーマル喫茶へ！」

クラスの女子達の可愛らしい飛び込みに導かれニヤニヤ顔のオス達がこじそつてやつてきて、うちの出し物は大盛況となっていた。

教室中が男子で溢れていってもじやないが女の子のお客さんが入るそうな雰囲気ではない。元から男子向けの出し物だったがこんなに流行るとはオレも猿山も思つておらずお釣りが足らなくなつたり急遽廊下まで大蛇の列になつた亡者達に椅子を用意したりとてんてこ舞いだつた。

「もつとお湯沸かして！おい猿山、コップをつたと洗つてこいよ。西連寺とリラはこれ持つてつて」

オレは猿山が無能だと察したクラスメート達にリーダー的な立場に付かされてしまい、教室の隅に設けられた簡易厨房であれやこれやと指示を出している。

「ねーねーゆりつちこれ可愛い？」

「はーはー、可愛いからこれ持つてつてね」

時折思い出したかのように糀岡と沢田がポーズを取つて衣装を見せてくれる。ずっと同じ衣装ではお客様も女子も飽きてしまうので何着も替えの衣装を用意しておいて自由に着替えるようにしたのだ。

これが女子達に好評だつたらしく、褒美と称して新しく着替えると皆逐一見せに来てくれるのだ。そんなことより店に行つて欲しいの

に。なんちよつとつまこ」と言つてみたり。

畠岡なんてこれで4度目のお色直しで今回の衣装は犬らしく茶色のたれ耳をつけて手をグーにして腰を可愛くふりふりしている。こちらとしては次の「コーヒー」やアイスを持つて行つて欲しいのだがこれをあんまり言つと理不尽に怒られるので黙つておく。

「この衣装まだ完成じゃないの、この首輪をつけてやつと既成するんだけど…ねえゆりつちつ・け・て?」

「やつてる場合か。衣装換えしてゐる間お前の仕事全部沢田がやつてたんだぞ。これ持つて手伝つて来なさい」

「ゆりつちつてこのうの乗らないよねー。しゃーない愛しこミオのため行つてきますか」

そういうと「コーヒー」とアイスのセットが乗つたトレイを受け取つていく畠岡。

今があ昼時なのでこのピーカを過ぎたら一息つけるだひつ。

「ゆりつー、コーヒー3つにアイス2ヶーキーだつてー」

ララがまた新たなオーダーを持つてくるのを見てため息をつく。コーヒーだけ飲んでさつさと帰れよと思うが、「コーヒーは安さが売りの1杯30円だし、ケーキやアイスなどのサイドメニューで利益を出さなくてはならない。それも無駄に拘つてしまつて既製品にクリームや果物などを加えたものになつていて非常にめんどうかい。が、それが人気の要因の一つでもあるし「買つてきたもの出すのもつまらないしちょつとアレンジしたいよね。」と言つ出した張本人なので放り出すわけにもいかない。

「雪ヶ岡君、コーヒーを3つとケーキを3つ注文入ったから、お願  
いします」

西連寺が持ってきた追加のオーダーを見て、うんざりしながらも黙  
々と手を動かすのだった。

・・・・・。

「ん？ さつきからオーダーが来ないぞ？」

無くなりかけてきたお湯を給湯室から借りてきたポットも活用しじ  
ヤンジヤ力沸かしていた所、さつきまで休み無くオーダーを持つて  
きた女子達が来ないことに気付いた。そこでやっと教室を見渡して  
みると人だかりが出来ている。お客様もみんなそつちに集まってしま  
って注文もないでのそちらを見に行つてみると人だかりの真ん中  
には昨日の変質者、天条院がいた。

「何やつてんだ？」

「なんか先輩が急にやってきてララと対決することになったんだ」

そばにいたリトに現状を聞いてみる。昨日はリトが狙いで今日はラ  
ラが目的らしい。

なんでも学校一の美女を決めたいらしく転校ってきて話題も人気も  
あるララを負かし自分が一番だ！ということを証明したいらしい。  
オレは知らなかつたが天条院は変わり者で有名でいわゆる「残念な  
美少女」というらしい。

「あのバカ！なんて格好してるんだよー！」

「なんだいきなり大声出して……ってなんだあれー？服つていうかプレイだな・・・リトちよつと止めて来いよ」

当然大声を出すリトに驚き人だかりを見てみると何を血迷ったのかララが自分の局部をクリームのようなもので隠した状態で立つていた。

首にペケが付いているからペケコスチュームなんだろけど、あんな凄まじいものどこでインストールしてきたのか・・・。

促したリトが自分が壁となつてララの痴態を隠すも見せる見せると狂気の徒となつた男子たちが騒ぎ立てる。

教室中の男子がそちらへと流れしていくのを見て、

「ちよ…ちよっとそんな、お待ちになつて　…！　…？」

焦つた天条院が飾りに服を引っ掛けてしまい上半身の服がはだけてしまつた。

普通の女性なら思わずづくまるか叫び声をあげるだろうがそこはやはり変わり者、

「いやーん脱げちゃつたーーーどーしましょー。」

腕で胸を隠しただけの姿でくねくねしながら猫なで声を出している。しかしふンパクトで圧倒的にララが勝つてるので誰も見向きしてくれていない。

初めは呆れてみていたが居ても立つてもいられなくなつて、

「女の子が簡単に肌を見せんじゃないの。しかもこんな男のいると

「で……これ貸すからさつと帰れ」

自分が着ていたブレザーを天条院の肩にかけ、背中を押して教室から追いやる。

「ちょ！あなた……なんなんですかー！？」

「はいはい、あつ綾さんこの人連れてっちゃってね。よろしく

「え、あの……はい。」

廊下まで押していくと昨日名前を知った丸眼鏡の恩人綾がいたので天条院を押し付ける。

その時もう一人のポーテールの人に物凄く睨まれたが気付かない振りで通した。

結果としてそれが「すつ」く口イ喫茶店がある」と男子達の間で噂になってしまい昼を過ぎても客足が途絶えることは無かつた。

途中様子を見に来た御門に「コーヒー臭い」と言われてしまい結構へこんだ。自分だっていつも薬品臭いくせに・・・。

そんなこんなで我がクラスのアニマル喫茶は大好評のうちに幕を閉じた。

後日、最優秀賞をもらい学校生徒全員が集まる前で猿山が表彰状をもらいえらい喜んでいたが、クラスメート達から「お前なんもやつてねーじゃねーか」と総すかんをくらっていた。

## 誕生日パーティー

文化祭も終わりとくにイベントもないまま気ままな日々を過ごして  
いた。

「はあ～… 今日も沢山治療したわ」

「(ノ)苦労様」

ベットの上に胡坐をかけて座つてだらだらとテレビを見ていた所へ  
Yシャツ姿の御門が来て、そもそも前のように膝の上に頭を乗つ  
けてくる。

いつもの事なので放つておいてテレビをボーっと見ていると、無視  
された御門がぐしごしと顔を膝に擦り付けてくる。

これは構つて欲しいもしくは甘えたい時にする御門がする行動で、  
これをおぞなりにすると変な注射や変な薬や変な煙が飛んできたり  
する。

ちよつとおつかなびっくり氣味に御門の頭に手を置いてやさしく撫  
でる。どうやら正解だつたらしくタオルケットを引っ張つてそれに  
包まつてやがて小さな寝息を立て始めた。

つい先ほどまで急患の患者が来て対応していたので疲れていたんだ  
ろう。御門は学校で校医をする傍ら本業は宇宙人専門の医者なのだ。  
実はこの地球には沢山の宇宙人が住んでいる。擬態してたり寄生  
していたりとその方法は様々で一目見ただけでは宇宙人とは解らな  
い。しかし、病院などでSTスキャンや血液検査などされてしまえ  
ば一発でばれてしまう。なので怪我や病気になつた宇宙人たちはこ  
そつて御門のところへやつてくるのだ。

御門の髪をくくるくると指に絡ませ遊びながら面白いのかくだらない

のか解らないバラエティを見ていると、マナーモードの携帯がブルブルと震えだした。

御門を起こさないよう手を伸ばし携帯を開くと、液晶画面には「ララ」と表示されていた。

「もしもし?」

「もしもしーーさつき美柑から聞いたんだけど、明日リトの誕生日なの?」

「そーだよ。ザスティンとかリトの親父とかにも声掛けてパーティすることになつてんだ」

「そーだつたんだあ。じゃあ何かプレゼントしないことだよね、何をあげたらいいんだろう?」

「自分が貰つてもうれしくてかつリトが喜びそうなものがいいんじやないかな」

「リトが喜びそうなもの・・・わかつた! ありがとゆうつちーそれじゃあねー」

ブツンという音がして電話が切られる。そう、明日はリトの誕生日なのだ。当然プレゼントを一週間前に用意してあり明日は学校を休んで結城家で誕生日パーティーの準備だ。なんとも都合がいいことに美柑も創立記念日とかで休みなので2人で準備することになつている。

うなつかつたのか、んーんーむづがる御門の頭をまた撫でながら明日の誕生日パーティーを思い描いてむふふと気持ちの悪い声をもらすのであった。

・・・・・。

・・・・・。

「有里さん学校は？」

「今日はインフルエンザのことにしてた。やっぱ季節感大事にしないとね」

「もう危篤になる親戚もいないもんね」

田にちは変わつて現在10時をちょっと過ぎた頃、左頬に綺麗なもみじを咲かせたオレは、美柑と向かい合いながら紅茶をすすつていた。

なぜ少々季節外れのもみじを咲かせているかかとつと、それは1時間前…

・・・・・。

「ただいまー、勝手にお邪魔しますよつと」

勝手知つたる人の家とはまさにこのことで、9時ちょっと前に結城家に着いたオレは以前作つた合鍵で玄関を開けて入る。いつもはリトやララの声で騒がしい家の中も今はシンと静まり返つている。どうやらまだ美柑はまだ起きてきていないうらしい。

1人でボーッとしていても楽しくないので美柑を起こすため2階へと向かう。

可愛らしく『美柑』と書かれたプレートがぶら下がっている扉を何

度かノックしてみるが何の反応も返つてこない。

何気なくドアノブを回してみると鍵を掛け忘れていたのか開いてしまった。開いてしまったのなら当然入らなくてはいけないので仕方なく、嫌々ながら美柑の部屋へと侵入する。

そろそろと音を立てないようごベットへ近づいてみるとちっぽりまだ寝ていたらしく布団にくるまつて小さな寝息を立てていた。寝起き姿を見て怒られたことはあつたが寝ている姿は始めて見る。のでせつかくなので、鼻と鼻が当たるかもしれないくらい近くからじーっと眺めることにした。

いつもはこちらをジト目で見たり子悪魔的な笑顔をうかべる美柑の顔も今は穏やかな寝顔で年相応の可愛らしさがある。どんな子も寝顔は天使なんて誰かが言っていたがなるほどその通りだろう。その可愛らしさに思わずその丸みを帯びた頬を指でつついてしまう。

「んん……ん……？」

浅い眠りだったのかすぐにまぶたがピクピクと動き出しやがてうつすらと開き田の前にいるオレと田が合つた。

「あれ？ 有里さんがこる……まだ夢？」

まだ夢心地なのか寝ぼけ眼で布団から出した手でオレの指を掴む美柑。

「休みだからつて寝すぎだぞー。いつもは7時に起きてコト達の飯作ってるんだぞー？ 早く起きないと襲っちゃうぞ。」「

「「」飯……？………… ゆゆゆ有里わん……？？なんでもいい……って夢  
じゃない！？」

やつと田が覚めたのかにちらりが申し訳ないほどに狼狽し、起き上がり  
つたときに跳ね除けた布団を再度かき集め亀のように潜り込んでし  
ました。

「なんだこののー…？」

「いやだつて今日コトの誕生日の準備するつて言つてあつたじやん」

「来るのは頃からつて言つてたじやん…」

「頃も朝も変わんなこじやん」

「変わるし全然違つし… 女の子の寝顔見るなんて最低だよ…… つ！」

？

いつものジト目になつてこちらを射抜くように睨んでいた美柑が、  
ハツと何かに気付き再び布団を跳ね除けベットの横に置いてある机  
に向かい「写真立てをバタンシと倒す。

「…………」

「…………」

変な沈黙が5秒ほど流れた。

別に写真に誰が写っているかは興味は無かつたがいつも露骨に田の  
前で隠されてしまつと好奇心が刺激されてしまつ。

「ん？ 何で隠すのかな？ お兄さんをうごつかせると見たくなつてきひやたぞ？ どれどれ…」

「ちよ…… やめ… 本当にこれはダメ… ー」

体を張つて写真立てを見せまいとする美柑に、潜在されていたいじわる精神が引き出されてしまい何とか隙をついて写真立てを奪おうとした結果。

「ほんとー。これだけは…ダメ…バカツ…ーーー！」

朝っぱらから調子に乗りすぎたオレへ、スパンツ！…という小気味良い音とともにやたらスナップのきいた張り手が襲い掛かり、怒り心頭な美柑の「着替えるから出てつてよね」という有無を言わさぬ命令に反省しつつも静かに1回へ引き下がるのだった。

・・・・・。

美柑の怒りも收まりやつと落ち着いたオレ達はあらかじめ用意しておいたパーティ用の飾り付けに取り掛かった。

結城家の居間を借り切つて行われるそれは1週間前から準備を始めた。『結城リト誕生日おめでとう』とデカデカと書かれた看板や紙で作られた飾りや花などを美柑やリトの親父などと内密に用意していたのだ。

「ふう、こんなもんかな」

「思つたより早く終わつちゃつたね」

すでに仕上げてあるものを飾るだけだったので1時間もかからずにパーティの準備が終わってしまった。

再び美柑と向かい合い緑茶をすすっている。太陽はすっかり昇りきり真上から地上を照らし当てる時刻となっていた。

「飯食うか」

「それじゃあ私が作るよ」

美柑が立ち上がり台所へ向かって物の数分でパパッと作り上げてしまった。

カップラーメンを。

「パーティにお金使いすぎちゃって他に無いの」

「時々食べなくなるからこれはこれでいいんだけどね」

カップラーメンは色んな種類や味があるしそれなりに美味しいが、それが並ぶ食卓は随分寂しいものがある。

お湯入れて3分。食べ終わるのに5分の簡素な昼食が済み、また間延びした時間が過ぎていく。

・・・・・。

時刻は3時、暇を持て余した2人はトランプをしたりゲームをしたりと案外充実した時間を過ごしていた。

「そろそろケーキ取りに行くか。何の気なしに遊んじゃったけど早くしないとリトが帰つてきちゃうし」

「そうだね、いじつか」

オレは自分達で作るうぜと言つたが、結城家にはケーキが作れそうなオープンもないし美柑がオススメのケーキ屋さんがあるというのそこで予約することにした。

思い立つたら即行動、さっさと靴を履いて外へ出る。

当たる風に少し肌寒さを感じながら2人並んで商店街を目指すのだった。

・・・・・。

「ほほお……」じーが最近巷で有名なケーキ屋さんねえ

「そ、ストレイキヤツツ。うちの学校の子もみんな美味しいって言つてるんだよ」

商店街の片隅にある洋菓子店ストレイキヤツツ。小さな店舗ながら看板や店内の洋装に可愛らしさが見て取れ、置いてあるケーキの種類も多種多様。その上リーズナブル。人気が出る理由もうなづける。

美柑がオレと同一年くらいの元気そうな女の子に予約票を渡し、ホールの大きなケーキの入った箱をオレが受け取る。  
代金を払い外へ出でみると

「あら、有里ではありませんか。学校をサボつてケーキだなんてい

「い」身分ね

店の前に制服姿の天條院沙姫とそのお供である凜と綾の姿があった。

「あ、こんなにちは」

「…………」

沙姫の後ろから少々怯えながら綾が顔をだし挨拶してくれるが凜の方は終始こちらを睨んでいる。

「誰?」この人達

遅れて店から出てきた美柑が沙姫達を見てそう聞いてくる。

「」の金髪ロールが天條院で後ろの眼鏡の子が綾、んでのちよつと怖いのが凜。全員オレより一個上の先輩だよ

「へえ…………」

3人のことを紹介すると何故か美柑がケーキを持つてないほうのオレの腕にしがみついてきた。

「むつ、ちよつと有里さん?その」

「雪ヶ岡さん!その子は誰なんですか?」

「ちよ…ちよつと綾?」

沙姫が何か言おうとしたのを遮る様にして綾が大きな声で話しかけてくる。普段はいつも沙姫や凜の後ろでもじもじしていることが多いので自分から前に出るのは大変珍しい。ましてや今、オレの腕に

しがみついている美柑と睨みあつて、いるなんて言つゝとは付き合いつの長い沙姫や凜も見たことがないだろ？

「「」の子は結城美柑。リトの妹で小学生なんだ。今日はリトの誕生日だからケーキ買いに来たつてわけ」

「美柑です」

「そうですか…といひでその美柑ひやんは雪ヶ岡君と一緒にうこうつかんけ」

「ほら有里さんケーキが溶けちゃうよ。早く帰れ」

「ん？ も… もおひ。それじゃあ三人ともまた学校でな」

綾がまだ何か喋つて、いるのに、美柑が腕を引っ張つて話の途中で歩き始めてしまう。

いきなり引っ張られつんのめりながら若干むすつとしている綾と置いてけぼりの沙姫・凜に手を振りながら、誕生日パーティーのため帰路につくのだった。

・・・・・。

・・・・・。

そのあとすぐにつきつき顔のリトが帰つてきた。聞いても無いのに教えてくれたが、西連寺から誕生日プレゼントをもらつたらしい。プレゼントは可愛らしいショウロウで普段庭の手入れもやつたりするリトにはぴつたりだね？

居間に入ってきたリトをクラッカーで迎えつつ誕生日パーティーをはじめた。仕事を必死で終わらせたりトの親父とアシスタントを

やらされていいるガスティンも少し遅れて参加した。

ちなみにオレのプレゼントは動きやすいちょっと高価な靴で、美柑はリトによく似合うスポーティな帽子だった。どちらも喜んでもらえたのであげた本人としても大満足だ。

こつしてリトの誕生日は無事大成功で終わつたのだった。

ちなみにララのプレゼントはどうかの星からもつてきた動く植物だった。3階建ての家ほどもあるその巨大植物は、ララの作った認識妨害装置と共に庭に君臨することになり、くしくも西蓮寺のジョウロが早速活躍することとなつた。

## 天条院パーティ

季節はすっかり流れ、鉛色の空と肌を突き刺す空気が背筋を震わせる。

商店街の木々はすっかり緑色を脱ぎ去り、その代わりに電飾を纏わせ町並みを明るく賑わせていた。

おもぢや屋やコンビニなどは赤・緑・白に彩られケーキ屋さんはお客様さんで溢れかえっている。

そう今は冬真っ盛り。そしてクリスマスである。

恋人のいる人は甘く熱い一夜を過ごしたり、家族で美味しい料理を食べたりするだろう。

寂しい人たちで集まつてカラオケや飲み会に赴いたりするかもしれない。

かくいうオレも、クリスマス特集の『自宅でクリスマスケーキ特集』に影響されて色々なケーキを作つて御門と食べ比べをする予定だったのだが、

「なにこれ……」「うじいよ」

連れてこられた場所は、彩南学校からそれなりに遠いお城のような別荘。

生クリームをかき混ぜている時、いきなり後ろから黒ずくめの集団が現れていとも容易く拉致られてしまった。

呆気に取られ袋に詰められる寸前、変な色の薬が入つた瓶に頬擦りする御門が見えた。あいつ帰つたらお仕置きしてやる。

御門にする罷を考えながら、小さな体育館ほどの部屋を見渡してみると見慣れた面々、うちのクラスメート達が洒落た格好でグラスを持ち談笑していた。

「なんだこれ、盛大ないじめ？」

「あらいじめだなんて、折角VIP待遇でお迎えしたと言つのに残念ですか」

ここ最近よく聞く様になつた声に振り返つてみると、サンタクロースの衣装を身にまとつた沙姫が仁王立ちになつてこちらを見下ろしていた。

ミニスカート風の服なので地面に寝そべつているオレからはパンツが丸見えになつてしまつてゐる。が、こんな見せられたパンツに喜んだつて仕方ない。やはりパンチラは見るまでの過程を楽しまなくては。

「あの……じめんなさい。沙姫様がどうしても雪ヶ岡君を呼びたいって言つて……」

「だからつて拉致は……それに皆おしゃれな格好なのにオレエプロン姿だし……綾はトナカイか、それも中々可愛いね」

「えつ……そんな私なんて地味で眼鏡だし可愛いなんて……」

「そんなこと無いよ、沙姫や凛に負けず劣らず綾だつて可愛いよ。だからこの袋取つてくれない?」

「あ、うん。ちょっと待つててね。」

我ながら汚い手だとは思つたが照れ照れしながら綾が袋の紐をほどいてくれる。ずっと地面に寝転んでいたので背中やら肩やら痛くなってしまった。

「ふう…よし、ありがとう。んじゃオレ用もあるし帰らせて、

「一流のショフたちに一流の食材を使って一流の焼きそばパンを用意させてますわ」

もうおうと思つたけど出口が解らないなあ。おつとこじんなとこひんに美味しそうな焼きそばパンが！出口を探しながら食べようつと

会場の真ん中に置かれている大きなテーブルの上、山のよりに積まれている焼きそばパンに一目散に駆け寄り周りのクラスメート達を近づけさせない気迫を放ちながら次々に口に運ぶ。

「有里も来てたのか、ケーキ作るとか言つてなかつたか？」

「つまつまもぐもぐ…なんか無理矢理拉致られた。でも皆で過いすのもいいもんだな」

「お前わざわざからずつと一人で焼きそばパン食つてるけどな

「なんだ、やらんぞ」

「こりないよ・・つてこいつかもう無いじゃねえか

「追加頼もうかな・・・おつと一口ロッケパンがあるーおこりとー一口ロッケパンだぞ！」

「見えてるから。山のよひにあるから」

会場に来ていたリトが話しかけてくれたが惣菜パンに夢中でなんともおざなりな対応になってしまった。  
しかしリトもオレの惣菜狂いを知っていたのでやれやれまたか。といった様子で肩をすくめていた。

リトがやいのやいのと騒いでいるララの所へ離れていくと入れ替わりに、里紗と未央がシャンパンの入ったグラスを片手にこちらに近づいてきた。

「やつぼーゅうつば。どひの服？ 可愛い？」

「山の服春菜に選んでもらつたんだーいidis」

里沙はパンツルックのすつきりとした服装で、未央の方はふわふわひらひらした確かに西連寺がよく着ているような服装だった。

「2人とも可愛い可愛い」

「あつたつまえでしょーそれに比べてゆうつばは随分所帯じみた格好ね」

「でもこれはこれでカッコいいかも」

オレはケーキ作りの最中に連れてこられたので黒い無地のTシャツに紺のGパン。それに水色のエプロンといつ料理好きな休日のパパみたいな格好だ。

「服に関しては諦めたよ。もう腹いっぱい食つて帰つてやるんだ」

「こいつたつてよく同じものばっか食べられるわね……。」

2人と話しながらも手は休み無くコロッケパンを口に運んでく。山積みにされていたパン達は手品のように消え去つていった。

ひとしきり腹も膨れ、それじゃデザートでもと里沙・未央と一つは小さいながらも50種類ほどはあるだらうケーキ達に舌鼓をうつっていた。

会場は宴もたけなわで、料理もある程度食べ終わり和やかな空気が流れていた。

それを見計らつて紗姫たち3人が壇上へあがる。

「さて！ではそろそろ本日のメインイベント・プレゼント交換を行いたいと思います！ただし！入場の際皆さまから預かつたプレゼントはここにはありません！」

綾と同じトナカイの衣装を見にまとつた凛が壇上で宣言する。

オレ以外の人たちは参加条件として何らかのプレゼントを持つていたらしい。当然拉致られて財布すら持つていないオレはそんなもの用意しているわけも無い。

「あの… オレプレゼント持つてきてないけど…」

「名づけて！プレゼント争奪ゲーム！ルールは簡単！この屋敷のあちこちに隠されたプレゼントを探し出す事！見つけたプレゼントはその人のモノとなります。」

「いや、オレのプレゼ…。」

「さりに…その中には私からのプレゼントとして豪華リゾート三泊四日の旅をご用意しております！高級ホテルで高級料理がタダで堪能できますわよ…」

「いやだから、オレ何も用意してねーけどいいの？」

「何をおっしゃこますの？有里からは普段つけている腕時計と寝顔の生写真がある方から提供されますわ」

「はあ！？あの時計高かったんだぞ…！…っていうか寝顔って誰か欲しいがるの？…」

腕時計は夏休みの時、御門とぶらぶら買い物に言ったとき思わず衝動買いしてしまったものだ。

諭吉さんが3～4人移動しただけあって洗練された秒針が刻む時の音がそれはそれは味わいのある良い時計なのだ。

土日くらいしか使わないので引き出しにしまってあったのにビックリして持ち出してきたのか…・・・協力者がいなくては不可能だらう。

ましてオレの寝顔を撮れるようなやつはリトか御門ぐらうしか存在しない。あの野郎帰つたらじめでやる。

「最終的に見つからなかつたプレゼントは私の物になりますのであしからず。それでは最後にもう一つ…」

「フン！リゾートの旅はオレがいただく！」

説明の途中だといつのに先手必勝ようじく出口へと走り出す男子が一人。

残念イケメン弄光センパイだ。うちのクラスメートばかり目立つて

見えていたが紗姫のクラスメートもいたらしい。

「へ？ああああああああああああああああああ」

と情けない声を出しながら突如開いた床の穴へ消えていった。徐々に遠くなつていく叫び声にその場にいた全員が息を呑む。

「」のまつたて屋敷のあちこちにはトラップが仕掛けあります。プレゼント探しは慎重に行く事をおすすめしますわ

単純な屋敷探検のイベントが、一瞬で緊迫したものに早変わった。学校一の変わり者である紗姫がするイベントなんてまともなはずがないじゃないか。まともな思考をもつ生徒たちがそう考え始めた中で、

「リゾートにゆりつちの生写真か…」

「こりゃ行くつ キやないね！ 走ろ、春菜！」

「女の子のプレゼントを独り占めするチャンス！！」

里沙や未央、猿山などのお祭りイベント大好き種族が一の足を踏む者たちの前にでて落とし穴を避けつつ扉から出て行つた。

それを反せりはが夕も和也と他の人がなぜか次々と出て行くでやがて会場に残されたのはオレと紗姫達3人だけとなつてしまつた。

「あら、有里は行かないんですねの？」

「リゾートに興味ないからなあ…もう時計は誰かにくれてやるって

「Jとでいいし、自分の写真貰つてもなあ……」

「ホテルには温泉もつこてしましてよ。」

「それを早く言えよー。Jひしけやいられねえー。」

高級リゾートの温泉と聞いたたら遊んでなんていられない。ワーウー  
キヤキヤーと叫び声の聞こえる廊下へと飛び出していくのだった。

・・・・・。

・・・・・。

「意気揚々と出てきたはいいものの…あぶねつ。Jの屋敷がビのく  
らい広いのかも解らんからな…」

始めは遅れを取り戻すために走っていたが、道中の廊下や部屋では  
スライム状のものに絡められている女生徒や、縄で縛り上げられて  
いる男子生徒の姿がそこら中に転がっている。どうやら先にいった  
奴らで軒並みトラップにかかっているらしい。

おかげで殆どトラップも競争相手も無くのんびり歩きながら時折壁  
から飛んでくるとつもちや弓を避けつつ一人とぼとぼと歩いていた。

「Jの部屋行つてみるかな

まだ開けられていなむそつな部屋を見つけ、ドアノブを障らないよ  
うに足で蹴り開ける。

バガツ！と勢いよく扉が開くと同時に天井からタライが3つ4つと  
降ってくる。ドリフのような音を立て散らばるタライを見届けてか  
ら部屋に入る。

部屋は普通のゲストルームらしくベットと机、化粧棚などホテルのような洋装だった。

見渡してみると机の上とベットの上に綺麗にリボンで包装されたプレゼントを見つけた。

その一つのプレゼントに落ちていたタライを当てて床に落とす。すると天井から銃火器のようなものがヒヨ「ヒヨ」ヒヨ「ヒヨ」できてあつとう間にタライがモチだらけになってしまった。

「ダダダダダ！」と連射されたとりもどりが収まるのを待ってプレゼントを回収し、そそくさと部屋を後にするのだった。

・・・・・。

「キイーーー！」「も有里もトライアップに引っかかりませんのー？」

「ララは力づくで、雪ヶ岡は巧みに近くにあるものを使つてトライアップを無効化していくています」

「プレゼントはまほまほララさんと雪ヶ岡君に振つ分けられています。流石です」

「さすがは私の認めた男ということですね、2人はどこへ向かっているの？」

「はい、両者ともこちらへ向かってきています。5分程で到着するよつです」

「わう、では例の武器をいかがへ。私自ら出向くしかなによつね」

・・・・・。

「あつ、有里だ。」

「ん？ おお 2人は罠に引っかからなかつたのか、すごいな」

「引つかからなかつたと言つが全部ぶつ潰してつたといつか…」

「こんなに集まつたんだよー。」

「まだまだ元気そうなララが、それこそサンタが持つていやうな白い袋を振り回して大漁を教えてくれる。」

「おおーやるなあ。こいつの部屋はもつ全部潰してきたからあとはこの部屋だけかな？」

「そうだね！ よーし行くよー。」

ダンサーとオレとララで扉を開くと、

「そこまでですわー。」

銃を持つた紗姫達3人が待ち構えていた。その後ろにはリゾート券が額縁に入つて飾られている。

さしづめここが最終ステージといった所だろう。

「これ以上の勝手は許しませんわー。さあ、カラシ弾をおこうとなさい。」

紗姫の命令と共に綾と凜も一斉に銃口を向けてきて一斉に発射してきた。

「おおーー・みーー・」

「意地でも取らせないといつか、しじややる気出てきたー。」

「撃つて来たー?つておこちゅつ……」

一斉掃射で飛んでくる弾をでっかく袋を抱えてこないとこのに俊敏な身のこなしで回避するリリ。

それに負けじとオレも発射と同時に射線と垂直に駆け出す。

標的がばらけ隙ができたところを一気に突破しようとしたら、

「ああああああああーー!」

カラシ弾をもろに顔面に食ひつたりしてリトが半ば錯乱状態で綾がいるところへと走り出していく。

「えつーー?」

まさか向かつてくるなどと思つていなかつた綾と、カラシが目に入り涙、ダラダラのリトが押し倒すようにもんどうり打つて倒れこむ。勢いよく倒れたせいで綾の服がはだけてしまつていた。しかもあのトナカイの衣装の下は下着だけだつたらしく半分見えてしまついた。

「こいで…おぼつーーなんで

有里が……」

「『』めんなんかムカツにちゃつて……」

ホント何故だか解らないけどリトにイラッとしてしまって蹴り飛ばしてしまった。結構いいとこに入つたらしく吹き飛んだリトは何度かバウンドした後壁に当たつて、やがてパタリとその身を地面に横たえた。

「やばいな、リトだいじょつ…つてあぶな……」

明らかに大丈夫でなくなつたリトを診てやろうと右足を一步出したところ明確な殺意を感じ体を引く。

その一瞬後に首があつたところを真剣が空を切る。

何事かと振り返つてみればそこには血走つた目でこちらを睨む凛の姿が。

「よくも綾に辱めを…そして紗姫様をたぶらかして…貴様は『』で仕留めさせて貰う」

「は？ デリしてそつな、つておい！ それ模造刀じゃねえじゃんか！」

首、頭、心臓など一撃必殺の急所を的確に狙つて凛が真剣を振るつてくる。

トナカイ姿で刀を振るうそれはまさにシユールそのもの。というかオレもエプロン姿。はたから見ればコントだが斬られかける本人としては笑えない。

高校生としては素晴らしい剣の腕だが、そこはまだまだ女の子。性別であーだこうだと言うわけでは無いがこつちはもつと小さな女の子に命を狙われたことだつてあるんだ。剣の一本や2本どうつて

「ちよつと痛いかも」

「ちよつと痛いかも」

「んっ！？」

凛が刀を振り上げ思い切り振り下ろそうとするその懷へ潜り込み、刀を持つ手首を掴み一本投げの要領で投げる。地面に落ちる瞬間に掴んでいる腕を引っ張った。

「んっ！」

それほどの痛みは無かつただろうが凛が痛そうな声をあげる。またぶんぶんと剣を振り回されても敵ないので刀を遠くへ転がし、馬乗りになつて両手を封じた。

「へへ……離せ！」

「離したらまたケンカ売つて来るでしょう。オレ凛に怒られるようなことしてないと思つんだけどなあ……あ……」

「名前で呼ぶなっ」

「そう呼べって言つたのは紗姫なんだけビ……」

文化祭の一件以来ちよくちよく意味不明な理由で絡んでくる紗姫達。始めは貸したブレザーを返しに来た時に、

「ただ返すだけではつまらないですわ、次はそのネクタイを借りて行きましょっ」

と訳のわからない論法に圧倒されるがままにネクタイを取られ、

「あら、一人でしかも徒歩で帰っているなんてさすが庶民の方ですね。いいですわ、私がこの高級車で送つてあげましょ。」

あと5分程で家に着くといつも黒塗りのバカでかい車に有無を言わせず乗せられて、自慢話を延々聞かされ横に座っている綾に謝られてその反対に座っている凜にぎろぎろと睨まれたり、しかも着いたのは紗姫のお屋敷で結局タクシーで帰つたり、

「あら、冷やかしのつもりで学食に来てみたらあなたではありますか。そんなものが欲しいのなら私がたらふく買ってあげますわ」

と売店中のありとあらゆるパンを販占めオレの田の前に積み上げて、平らげるとはやし立て、あまり好きではない菓子パンに四苦八苦ししながら完食し腹痛で保健室で寝込むことになったり、そのさいに御門に襲われかけたり、

なるほど、学園一の変わり者と言われるだけのことはある。思考回路が常人では理解できないがひとつだけ解つたことがあった。

「もしかして友達いない…のかな」

いつも綾と凜が一緒にいるが、逆に言えばいつも綾と凜しかいない。なんて言つてるオレも四六時中リトと一緒にいるわけだが他のクラスメート達と仲が悪いわけじゃない。むしろ友達は多い方だ・・・と思つ。

同情や憐れみじゃないが、そう思つてしまつたらあの我が奴や自分

勝手が、さみしがりやの強がりに見えて、なんだかとつても愛らしい。きっと本人は自覚して無いだろうけど。

そんなこんなで振り回されるがまま仲良くなつて、「有里、あなたこれから私達のことを名前で呼びなさい。」とついこの前言われたのだ。綾と凜に関しては前々から呼んでたんだけどね。

「いい加減手を離せ」

「離したとたんに殴られるのが目に見えてるから嫌です」

「そうじゃない…貴様が引っ張るから服が脱げてるんだ」

チラッと視線を下げるといふと確かに前に着いているファスナーが開いてしまつていてそこから縄のような柔肌と白い下着が見えてしまつていて。

「『めんなさい…』

「…………」

さつさりリトに当たつておいて自分がよつほど最低だつた。謝りつつ馬乗りの状態から立ち上ると視界の端で変なものを探らえた。

「ああー覚悟しなさい！」

おそれくララが改造したであらうバズーカを持つ紗姫がこちらを、といふかオレを狙つている。

「なん…で……」

突然のことでの思考が追いつかず疑問の言葉だけが悲しく零れだしただけだった。

「おぐらいなさいー。」

ド「オツーと耳を劈く（つんざく）轟音と共に打ち出された閃光の直撃に吹き飛ばされる。

いくつも壁を突き破り屋敷の外まで吹き飛び、雪の積もる地面を何度もバウンドした後、パタリ　　とその身を地面に横たえた。

大木に積もっていた雪が降り注ぐのを成すがまま受け入れながら、これはきっとリトに当たった罰なんだと因果応報を悟った。

バズーカによつて開けられた風穴のせいで屋敷はガラガラと崩れ一瞬で瓦礫の山と化した。

みんな非難できたらしいが崩壊した屋敷をみて紗姫が愕然としていたらしい。あつめたプレゼントはララの手によつて皆に配られ、オレの腕時計も無事戻ってきた。が生写真にいたつては行方は解らない。

ともあれ紗姫主催のクリスマスパーティーは大成功?とは呼べないまでも記憶に残る良い出来事として終わりを遂げた。

・・・・・。

帰宅後

「てめえその薬で人の事売りやがつたなーー。」

「いやね、そんな証拠がどーんあるのかしら？」

「じゃあその並んでる真新しい薬はビリで手に入れたんだよ」

「ふふ、道に落ちたのよ」

「自分でちゅうと笑っちゃってんじゃねえか。つくなつこつしま  
な嘘つけよー」

「…………」

「黙るなよ……ってなんだこのけむ……」

いつの間にか部屋に充満していた煙に気付かなかつた。おもろく御  
門は自分にはワクチン的なものを打つていたのだろう。

重たくなるまぶたを必死で開けて最後に見たのは手を合わせ口の端  
から下を出し、テヘッと似合つてもいない笑顔を浮かべるマイシード  
クターの姿だつた。

## 金色の闇

久しぶりに一人で商店街を歩いてくる。

お風呂の電球が切れてしまったのでその買出しだ。とは言つてもお日当での電球はもう買つてあるので今は暇つぶしのお散歩中だ。

商店街を歩くもなくぶらぶらと歩いていふとソースの焦げる良い匂いがしてくる。釣られるように匂いの方向へと歩いていくと、小さな焼き屋さんを見つけた。

ちょうど小腹も減っていたので一袋買い、つまみながらまたぶらぶらと歩く。

食べ終わった包みを丸めてポケットに突っ込みながら、自動販売機でお茶を買っていると、

キヤーーーーーうわああああー！

と、遠くの方から悲鳴のようなものが聞こえてきた。  
耳を済ませてみると「シャッ」とコンクリートを破壊するような音も聞こえてくる。

「わの悲鳴…」リトの声に聞こえたけど、いやそれかそんな

いくらあいつがトラブル体质だからってこんな休日まではしゃいでいるはずがない。

きっと有名人か何かが来てファンが奇声を上げてるだけとかそんな感じだろ？ 聞き間違いという線もある。

一応確認のため騒ぎのあった方へ行ってみると、ガードレールは切

り裂かれアスファルトは陥没し”何者か”が暴れた跡がある。

見回してみるとその跡は点々と移動していく駅のほうへ続いているらしい。

集まり始めた野次馬達を避けつつトラブルの根源の方へと向かうことにした。

・・・・・。

「見つけた…やつぱりリトか。」

路線沿いに走っていると歩道橋の上に立っているリトを見つけた。リトの目の前には少女の姿も見て取れる。やつぱりトラブルの原因はリトらしい。あいつの女難っぷりは神社でお祓いを受けるレベルだと思つ。

歩道橋の上まではぐるっと周つて行かなければいけないのでめんどくさい。

オレはおもむろに田の前にあつたフェンスへよじ登り、大きくジャンプし歩道橋まに飛び移る。

ちゅうじつトの前に降りると、

「うわっ…びっくりした…有里か。」

「また変なことに巻き込まれやがって…・・・」つからはオレが相手・  
・だ・・・・。」「

振り返りながら少女を指差す。指を指された少女は大きな瞳を見開いて驚いている。

何のことは無い、オレはその10倍以上驚いていた。

「ヤ……！」

「あなたは……こんな星に隠れていたんですね。」

「おい…有里、知り合いなのか？」

すっかり2人の世界を作られてしまつてリトはどうしていいか解らなそうにしている。オレだつてどうしていいか解らない。親友を追いかけていた奴が自分を狙う殺し屋だったなんてそんな展開予想している訳が無い。助けに来て何だけどリトに助けて欲しいぐらいだ。

「今日」ヤミ

「マジかよ…！」

両手の指を鍵爪のようになに変化させたヤミが見開いていた目をキッと睨ませて襲い掛かってくる。

その素早さはまさに電光石火といえる速さだったが師がそう簡単に子に負けるわけには行かない。

突き出された右手の手首の辺りを叩き落とし続けて繰り出される左手をバック転で避ける。

「リト、逃げるぞー！」

「良い知り合ひじゃなさうだなー！」

距離を開けるとリトに声を掛け一緒に走り出す。当然逃がすはずもなくヤミも走つてこちらを追いかけてきた。

「おい！説明しろよ！あれ誰なんだ！？」

「話すと長い！簡単に言つとオレが育てたオレを狙う殺し屋だ！…  
伏せろー。」

走りがなら二人で屈む。ヒオレ達の上半身があつた場所を金色の大  
剣が横薙ぎに一閃する。

「なんかさつさまでより過激になつてんだけどー。？」

「どう考へてもオレのせこだよな……。手に別れるぞー！オレ左！」

「よしつ神社で命流だー。」

ちゅうじく手路を見つけたのでリストリ手に別れる。いつすれば最  
悪じからかは助かるからだ。それ

「やつらやつら側に這つてへるよな…」

ヤミなら絶対にオレを追つてくると悟つたからだ。星から星へ逃げ  
たつて追いかけてきたヤミだ、もうコトのことなんて見えてないか  
もしれない。

「ぐつぐつ… 今月定期健診してないのに…」

まだまだ走ればするが若干の息切れをし始めた。この調子で行けば  
30分持たないかもしない。

「そこです」

オレのふりつきを見逃すはずも無くヤミの髪の毛が伸びて鉄球になり猛スピードで飛んでくる。コンクリートを陥没させたのはこれだろ？。人間があたつたらどうなるだろうか。オレ人間じゃないけど。

オレは飛んでくる鉄球を地面を蹴つて大きくジャンプし回避する。目標を失った鉄球は民家の塀を貫通し粉々に碎いた。

このまま普通に逃げると被害を広げることになってしまう。とりあえず人の居ない方へと空中で体勢を変え民家の屋根に着地する。そこから忍者のように屋根から屋根を伝つてリトの行っていた神社を田指した。

・・・・・。

「なんだ、リトは……まだか。」

すっかり息も上がつてしまい軽い貧血までしてきた。しかし止まればヤミに刺されてしまう。

必死で逃げてやっと神社に着いたがリトの姿は無い。

「鬼ごっこはお終いですか。」

境内に座つて休んでいると自分の髪の毛を羽に変化させたヤミが空から舞い降りてくる。

彼女は”ランス能力”というものを持つている。体をあらゆるものに変化させることができるのだ。

腕を剣にしたり鉄球にしたり、髪を刃にすれば十重二十重の斬撃が目標を襲うことになる。羽にすれば縦横無尽に空を翔ることだってできる。

その能力ゆえに”全身兵器”とまで称されていた。そんな殺し屋が

なぜオレのことを狙つていいか、

「あなたが私を捨てたあの日、忘れたこともありません。勝手に捨てて勝手に育てて勝手に捨てたあなたのことを」

「いい訳はしない。お前を拾つたことも捨てたこともオレの気まぐれで我がままだ。恨んでくれていい、がオレだつて死にたかないぞ。当然逃げる」

「ええ、恨んでいます。ですがあなたに一つだけ感謝しています。人は孤独でいるべきだと教えてくれました」

「これは有里が悪いな」

「そうだね、有里つちが悪いよ」

「リト、それにララ…二つの間に」

氣付けばリトも神社に来ていたらしい。さらに話を聞きつけたのかララまで来ていた。

2人してヤミの話に領きながらオレが悪いオレのせいだとはやし立てている。すっかり観客気分でいるが殺されかけていたことを忘れているのだろうか。

「あなたを消すことでの私はやつと1人になれる。覚悟してください」

明確な殺意を持つてヤミがこちらに駆け出していく。

もうちょっと休憩したかったがそっぽいかないようだ。息切れは治まつたが走つて逃げる体力はもう無い。

「電球も替えてないのに死ねるか！」

刃状になつたヤミの右手が繰り出す剣撃を、避けられるものはギリギリで見切つて避ける。避けきれないものは横から叩いて弾く。

「風撫での名は伊達じやないですな、これなら」

左手も刃になり二刀流となつて襲い掛かる。それでも体すれすれを通り過ぎるだけで当たらぬ。

次第に一刀が三刀に、四が五へと増え、ついには十本の刃が剣撃の檻を作り出していた。

しかしそれでもオレには傷一つついていない。研ぎ澄まされた集中力が時間を圧縮していく。まるで世界がスローになつたようだつた。

「くつ……！」

トランプ能力に無理が来たのか攻めていたはずのヤミが後ろへ大きくジャンプして距離を開ける。

それと同時にオレも膝をついた。心臓が早鐘のように鳴り響き肩から煙が上がつてゐる。今体温を測れば60度くらいあるかもしけない。

「有里……！」

リトが倒れそうになるオレに駆け寄つてくる。すると上空のICOが現れ、

『なにやつてんだもん金色の闇、お前の相手は結城リトだろ？』

「ラゴスボ！」

間抜けな声と共に小さな宇宙人が降りてくる。

「ジャジャジャーンー！ラコスボただいま参上だもん！」

「誰だ…あれ…？」

「ララの婚約者候補の一人である子を雇つた張本人らしい。」

リトが教えてくれる。これでリトが狙われた理由にも納得がいった。

「さあララたん結婚するんだもん！」

「やだよー！ラコスボなんて！殺し屋さんにリトを狙わせるなんてサイテー！そんな人と結婚するわけないでしょー！」

「サツ、サイテー……金色の闇もなにやつてるんだもん！そんな奴を遊んでないで結城リトを消せと言つたんだもん！」

「ラコスボ、私もあなたに話しがあります。結城リトの情報が正確ではありませんでしたね。標的に関する情報は嘘偽り無くと言つた筈、まして風撫でがいるなど誤算でした……まさか私をだました訳ではありませんよね？」

「ぬうー……うるさいんだもん！依頼主はボクなんだもん！こうなつたら…出てこーーー！ガマるたん！」

2人に攻められて顔を真っ赤にしたラコスボがUFOへ手をかざしブゥウンという電子音と共にバカでかい蛙が出現させた。  
実際は宇宙生物なので蛙のような何かだ。

「わあガマるたん！お前の恐ろしさを知らせてやるもん！」

ガマるたんと呼ばれる蛙のよつな何かの口から緑色の粘液がヤミに向けて発射される。

ヤミはそれを難なく避けるが地面にあたり飛び散ったものが袖に付着した。

「…？」

すると付着した袖がジコウウウウと音をだして溶け始める。地面に着弾した粘液も同じよつに音と煙を立てて神社の地面を溶かしていった。

ヤミは驚きながらも袖を脱ぎ捨てる。

「ひやはははー！ガマるたんの粘液は何でも溶かしてしまうんだもんー！」ひなつたらララたん以外ボクが始末してあげるもん！

蛙のよつな何かが口をもじもじさせ次の粘液を溜め始める。

「まずは一番弱ってるお前からだもんー！」

そうこうでラコスボがオレを指差す。蛙のよつな何かがこちらを向くが足が動いてくれない。

「へりえー！」

蛙のようなものからわつかれ飛ばしたもののは2倍はある粘液がこちらへ飛んでくる。

貧血でくらつく頭でもうダメかなと諦めかけていた時、

「うわー。」

横からヤミに勢いよく抱きつかれ粘液を避けられた。

「ぐう……」

オレにもたれかかってこねヤミが苦しそうな声をあげる。

「ヤミ…おこどりしたー?」

足から上がる煙に気付きヤミが履いていたブーツを脱がせる。ビック  
やら避けきれずに粘液がかかつてしまつたらしく。  
ヤミの白く肌理細やかな肌が赤く染まっていた。

「なにやつてんだ!」

「あなたは…私が自分で、殴らなこと…気がすみま…せんかい…」

そつまひて苦しかつて喘ぎを押さえゐるヤミ。

オレの中で、押さえていた何かが切れた。

「てめえ…オレのヤミになじてんだー!」

がんがんと内側から叩きつけられるように頭が痛む。体中で心臓の  
鼓動を感じ、熱が血管を駆け巡る。

「あ…あいつ何かおかしいもん…ガマるたん、やるもん…」

さつきまで死にそうだったオレの突然の変化にラコスボが怯えながら蛙みたいなものに命令し粘液を連射してくる。

それをヤリに当たりそうなものは蹴りでかき消しそうでないものは避ける。

マシンガンのように放たれる粘液を少し体を逸らして避けながら蛙のよつなものへ近づいていく。

「来るな！来るなあああああ！」

蛙のようなものがズオオオと頬を皿一杯に膨らませ、今までの10倍くらいの粘液を吐き出した。

おそらく最大の攻撃なのだろうが大きいだけあって遅すぎる。

軽くジャンプして簡単に回避する。蛙のようなものがまた粘液を吐こうとするがさっきのことでどうやら打ち止めらしい。

「ひーいーいーーー！やめるもん！来るなもん！」

「消えうせひおおおーーー！」

思いつきじ振りかぶりワロスボを蛙のようなものの諸共蹴り上げる。勢いよく吹き飛んだ一つの生き物はヒートに当たっても減速することは無く、そのまま空の星になつて消えた。

それを見送ると同時に激しい頭痛と猛烈な虚脱感に襲われ、地面へ顔から倒れながら意識を失った。

・・・・・。

## 【御門】

驚いた。彼が抱きこまれたのもさうだけだと驚いたのは運んできたのが金色の闇だつたから。

すぐに彼を治療室へ運び輸血をする。そついえば今月の検診を忘れてたかもしれないわ。

彼は”沸血人”。怒つたり感情が高ぶつたりすると血液が沸騰するようになると途端に身体能力が上がる代わり、普段からこの専用に作られた血液を輸血しなければならない。しないと貧血を起こして動けなくなってしまうらしい。それが彼が私といふ理由。私の理由はちょっと違うのだけど。

「まさかあなたが彼を運んでくるなんて思つても見なかつたわ」  
ヤミ、と彼が呼ぶ少女の足を手当てしながらさう声を掛ける。

「なぜあなたは彼と一緒にいるんですか？」

「彼の体調管理のため…は建前ね。本当はね、私もあなたと一緒にある研究所に誘拐されてしまくもない研究をさせられそうになつた時に、彼が助け出してくれたの。きっと気まぐれね…でもね、彼に抱きかかえられて研究所を出た時に、惚れちゃつたのよね。この人のために生きて行こう。ってそう思つちゃつたの。ただそれだけよ」

構つてくれない腹いせに悪戯しちやつたりするけどね。でもそれは悪いのは彼であつて私じやないしコノゴニケーションの一種ね。

「やつですか…」

「じゃあ逆に、どうしてあなたはこんなに彼に執着するの？」

「私は別に執着なんてしてません。勝手に私を助けて勝手に育てて、戦うことしかしない私に食べ物の美味しさや世界の美しさ、人と会話すること人の温もり優しさや愛情を勝手に教えるだけ教えて捨てた……信じるだけ信じさせて私を捨てたんです。それが……それが許せません」

「……本当は彼に口止めされてたんだけど。宇宙統一戦争があつたことは知ってるわね。その戦争に彼も深く関わっていたの。デビルーク王とは星を一つ壊しちゃうぐらい喧嘩をしたこともあつたけど、本当は気があつてたのね。彼はデビルーク王と一緒になつて戦つたわ…。その時にデビルーク王も、彼も力の殆どを使い果たしてしまったの」

「知りませんでした…」

「宇宙はデビルーク王のもと統一されるようになつたけど、彼はそれを快く思わない人たちから狙われるようになつた。でも彼には精々自分の身とあと一人くらいしか守る力しか残つてなかつた。そして私も犯罪組織から追われる身……そう、私が一つしか無い席を奪つた。あなたを1人についたのは彼じゃない、私だつたの」

「それじゃあ私は…・・・」

「彼はすぐに迎えに行くつもりだつたわ。でもあなたが賞金稼ぎになつて追われるうちに言いづらくなつたんでしょうね。彼があなたを忘れたことなんて1日だって無かつたわ」

「私は……1人じゃなかつた……」

彼女はふらふらと歩いていつて起きる気配無くベットに横になつている彼の手を握る。

その感触を懐かしむように何度も撫でると安心したのかそのまま寝入つてしまつた。私は毛布を彼女に掛けてあげる。隣のベットに寝かせようとしたが手を離しそうには無かつた。

少々の嫉妬を感じながらも安心しきつた子供のような表情で眠る彼女の顔を見てしまつと、邪魔するのも悪く思えてしまい静かに空いた彼の部屋のベットへ潜り込むのだった。

## バレンタイン

田を覚ましてみると見慣れた天井が視界に広がっている。

蛙のようなものを蹴り飛ばしてから記憶が無いがどうやら家まで誰かが運んでくれたらしい。

右腕には輸血パックから伸びた管が血管に刺さっている。パックが空になつていてし貧血や頭痛も無くなつていた。一晩寝てしまつたようだ。

この部屋は地下にあるので窓なんかあるわけないしあつても陽の光が射し込むはずも無い。

とつあえず朝のシャワーでもと立ち上がりひつとする、左手を掴まれていたことに気付いた。

「御門か？ ヤミーだと……。」

てつきり御門かと思つてみれば手を掴んでいたのは今まで散々オレを殺そうとしてきた金色の闇。  
もしかしたらここへ運んできてくれたのもヤミーかもしれない  
でも何でだ？ 恩を売つてから殺そつてことなのか？  
全く理解できない…… そういうればリト達はどうなつただろう。本来ヤミーはリトを狙つて地球へ来た筈……  
ぽつぽつと昨日のことを思い出し始めるが、ヤミーがオレを底つて足に怪我をしたことを思い出す。

左手を枕にして眠るヤミーの脇に手を入れてベッドの上に引き上げ膝の上に乗せる。

ヤミーに覆いかぶさるよつとして手を伸ばしガーゼの貼つてある足を触る。

さすが御門、ヤミのことも治療してあつたらし。ヤミの治癒能力が高いせいもあるがガーゼを剥がしてみるとすでになんの傷もなくさわり心地の良べ白い肌だつた。

何となくそのまま足を撫で続けていると、

「…ん」

ヤミが田を覚ました。キョロキョロと猫のように辺りを見回して後ろに立てるオレと田が合つ。

「おまよひ、昨日はありがとな。」運んでくれたのはヤミか？

「え……なつ……触りなごでへだせーーー。」

「ひよひーーー。」

オレの田をじっと見ていたヤミが突然顔を真つ赤にして下にいたオレを殴り飛ばす。

壁に叩きつけられて地面に倒れる・・・間も無くいつもの拳が体に襲い掛かってくる。

「おぼほほほほほほほほほほ」

「私はあなたを許したつもりはありません。仮安く近づかないでください」

倒れることすら許されず拳の嵐に曝されてしまひが何か言つてゐるが聞こえない。

「これで…。」

腰だめに構え放たれた痛恨の一撃がわき腹に刺さった時、オレはまた意識を失った。

・・・・・。

再度起きた時、ヤミの姿は無かった。御門に聞いてみると自分の宇宙船があるそこでそこに寝泊りしているようだ。

この無駄にだだ広い家に住まわせてあげればいいのにと思ったが、それではオレの身が持たないかもしれない。

なんにせよ、オレの地球隠居生活がまた騒がしくなることは間違いなかつた。

・・・・・。

・・・・・。

・・・・・。

・・・・・。

「あ～緊張するなあ…」

「何が?」

「何がってこいつちの台詞だバカ、今日はバレンタインだぞ?・食べきれないほど貰つたらビリijoif。」

今日は2月14日。全国のもてない男子達へ国を挙げての公開処刑。そしてカップル達の祭典だ。

もてない男子に出来ることは義理チョコという救済処置に全力を尽くし精神を守ることしか出来ない。俺の横で自分を抱きしめ妄想に浸っている猿山もその一人ということだ。

「日本つてそういうイベント好きだよな」

「そーいう自分だって紙袋なんて用意しやがって、いーよなー貰える奴はさー。」

右手に持つ紙袋を見て猿山が声を荒立てる。

この紙袋は、さっき学校へ行く時に「全部持つて帰つてきなさい。

私が検査するから。」と無理矢理御門に持たされたものだ。

こんなもの持たされるほど女子達に人気があるわけじゃないし精々里沙と未央に義理チョコを貰うぐらいだらう。

一昨日チョコならホワイトビタードッちが好き?と言われてどっちも好きと答えたし…これで貰えなかつたら堪えるぜ…なんちつて。

なんてくだらないことを考へている間に学校に着いた。

ゲタ箱へ行こうとすると、

「あら、有里ではありますんか」

「ん、おはよ」

仁王立ちで腕を組んだ紗姫に話しかけられた。後ろにはいつものように綾と凜を従えている。少し違うのは綾は照れくさそうに、凜はムスッとしているところだらうか。

「けつ、見せ付けやがって。俺は先に行つてるからな

「おお、そんなに睨むなよ」

「あなた、今日はチョコを貰つたかしら？」

「いや貰つてないけど」

「わー、貰つていなーいのね。光栄に思いなさいー！あなたの最初のチョコレートはこの私が上げますわー！」

おほほほほほほと高笑いと共に綾と凜が運んできたのはウエーディングケーキでも入っているようなバカでかい箱。この中身全部チョコレートだとしたらとんでもない量だらつ・・・。食べきつたらどこかしら具合悪くなりそうだ。腰ほどどの高さのあるそれを見ながらビーフやつて食べきりつか考えてみると、

「あの……これ、私から……」

「これは私から。勘違いするな、義理だ」

綾と凜からもチョコを貰つた。綾のはピンク色にハートが散らばつた包装紙にリボンが可愛く添えられている。よく知らないけど、これぞバレンタインチョコレートを感じがした。

その点凜がくれたのはみんな大好きチルチョコ。義理以外の何物でもない、これで何を勘違いしろといつのか。

「ありがとう。貰つてみると結構恥ずかしくて嬉しいものなんだなあ。お返しは任せてくれ」

「当然ですわ！忘れたりしたら承知しませんからね。綾、凜。行き

ますわよー。」

「あの……口に呑わなかつたら処分してくれても……失礼します。」

「全て残すなよ……」

立ち去る3人の後姿を見送りながら綾と凜のチヨンを紙袋へしまつ。

「これでさつて教室まで持つていい……持つてつてもいいのか?」

紗姫のチヨンレートはとつあえず保健室へ放課後まで置いておく事にした。そこには御門の縄張りなので文句を言われる事はないだろひ。

保健室に御門がいなかつたのが少し気になつたがどうせまたどこかでサボつているんだろひ。朝はちゃんと起きて一緒に朝ごはんを食べたので出勤してるのは間違いないはず。保健室も開いてたし。

保健室を後にして教室へ向かう。

ガララツと聞きなれた扉の音を聞きつつ教室の中に入ると、そこには地獄絵図と桃源郷が同居していた。

「な、なにこれ……？」

「ああ……ん……体が熱い……」

「はあ……ひう……んつ……」

「はあはあ……オレ実はお前のこと……」

「俺も……もし男と付き合つならお前とつて……」

なんと、クラスメイト達が男子同士・女子同士で抱き合つて、とい  
うか絡み合つて発情していたのだ。

幸い服を脱いでいる輩は見当たらず精々はだけている程度だつた。  
とはいへ普段一緒に勉強しているクラスメイトの女子達の痴態は嫌  
でも興奮を誘つ。そして親しい男子達の絡み合ひに気分が悪くなる。  
これは精神衛生上非常によろしくない。

「おー、リト！なんだこれ？みんな発情期が来ちゃつたのか？」

「あ……ああ有里か……地球人に発情期なんてねーよ。みんなララの  
チヨコ食べた途端」」うなづけやつて……」

確かにララは昨日から「みんなにチヨコ配るから楽しみにしててね  
！」とクラスメイト達に公言していた。  
朝来てみんなに配つたんだらう。包み紙みたいなものがそこいら中に  
落ちている。

おそらく宇宙的な何かをチヨコに混ぜたんじゃないだろうか……  
地球にも媚薬と呼ばれるものがあるらしいがここまでおかしくはな  
らないだろう。

ん……？薬？……いやまさか……………でもあのバカのことなら……。

「キヤ　　ツー」

「西連寺……」

叫び声の上がつた方を見てみると、西連寺が発情した男子達に囲ま  
れていた。

すぐさまオレとコトは西連寺の元へ駆け出す。

「正氣に戻れ！生徒H！」

「'ひまゐるあー」

「'じゅうちー」

「結城くんー雪ヶ岡君ー」

今にもズボンを下ろそうとしている普段はとても優しくペットのインコの写真を逐一オレに見せてくれる生徒Hにとび蹴りをかます。飛ばされた生徒H君は周りの男子生徒達を巻き込んでみんなして倒れた。

その隙にリトが西連寺へ手を伸ばし教室の外へと連れ出す。

「西連寺はリトに任せればいいけど……先生が来るまでにこれを何とかしなきゃまずいな。」

教室の中は2月だといつのにむせ返るような熱氣に包まれている。クラスメイト達の真操を守るため沈静せねば。

「ゆ、雪ヶ岡つてよく見るとか…可愛い顔してるよな…………」

「はあ……はあはあ…確かにまそつたな尻だぜ……」

「ズズズボンが…邪魔だよな……」

「へへへ……」つなつたら眞面目こちま

「近寄るんじゃねええええええええ……」

さっきまで西蓮寺に迫っていた連中が今度はオレのところに向かってきやがつた。

身の危険を感じたのと、気持ち悪かったのでそいつらを全員蹴り飛ばす。ついでに万が一の間違いが起きないように教室中の男子に首当てをして意識を刈り取つた。

「これでよし、次はララか。おいらララ大丈……夫といつか見ても大丈夫？」

「有里っちー助けてーリサリサとミオミオがー……」

思わず目を背けてしまった。いや紳士としてはこれを凝視してはいけない。

なれなれば、ララは里沙と未央に絡まれてYシャツだけに、そしてそのYシャツもボタンが全て開けられた状態になつていたからだ。里沙と未央も例によつておかしくなつていて熱い吐息を口から零しながらララに擦り寄つている。

「おい離れなさい、婚前の女子がこんなはしたない」  
出来るだけ見ないようにながらララの足にしがみ付く里沙と未央をひつぺがす。

「ララ、今のうちにに行け！」

「ありがとーゅりっちーペケ！復元！」

ようよると立ち上がつたララがペケに一声掛けると一瞬にして彩南高校の制服が復元された。

「これでよしーあ、私リト探してこなきやー！」

「は？・・・おいーどこ行くんだよー。」

軽快な走りで教室から出て行くララを追いかけようとしたが足が動かない。それどころか後ろから誰かに抱きつかれ教室の床に倒れてしまう。

「なんだー!?」

「ゆうつちーやつときたあ……」

「おやいんだもーん… ゆうつちーゆうつちー

足を見てみると里沙と未央がララにしていたように絡み付いてきていた。ララにしていた時よりもねうちこべ。

「おいやめる！正氣に戻れ！……って何かズボン脱がそうとしてませんー？」

2人は熱病に犯されたような目をしながらカチャカチャとオレのベルトを触り始める。さすがにこれはまずい。2人には悪いが気を失つてもらわねばオレの貞操が！！

と手を振り上げようとするも今度は手が動かない。それもそのはず、

「雪ヶ岡君… 雪ヶ岡君…」

「すーじー……雪ヶ岡くん肌すべすべ……それに綺麗…」

いつの間にか1学期の時にシャーペンの芯を貰つて以来時々話すようになった女子生徒Yと家がパン屋を経営しておりオレが惣菜パン

を買いにいくといつもおまけしてくれる看板娘の女子生徒Eが腕に乗つかつていたのだ。

無理矢理どかそうと腕を動かしてみたが女子生徒達の力と重さは思つたより強く振りほどけない。  
「いか腕を動かすたびに、

「や……動かしちゃだめ……」

「雪ヶ岡君のえっち……」

なんて潤んだ目で言われてしまつたらオレにはもうどうすることも出来ない。

気付けばクラスの女子全員がオレの周りに囲いを作つてゐる。もはや逃げ道も無くなつた……。

ベルトが外されズボンに手が掛けられる。オレにはもう抵抗する術は残されていない。

女子達の興奮が明らかに高まつていぐ。向こうでのびてゐる男子達からすればまさに天国なんだろう。オレにとっては地獄だよ……。  
目を閉じ心中で覚悟を決める。さらばぐつぱいオレの貞操。しかし後悔などするものか・・・オレはクラスメイトの男子達の貞操を守ることができたんだ。

きっと彼らが知つたらオレをす勢いで殴りかかつて来るんだろうけど……だがそれでも、オレは仲間達を守つたんだ。

猿山……オレは先に行くよ。一緒に上ろうぜといつた大人の階段の約束、ごめんな……オレその階段もう上つたことあるんだ……お前の真面目な顔見たら言い出せなかつたんだ。ごめんな。

そしてリト……西蓮寺といまくやれよ　お前最近口のことを  
気になつてゐらじいけど、つまくやるんだぞ。お前がどっちを選  
んでも、オレは味方だぜ……。

とこりかまだズボン脱がされてないぞ……焦らしプレイか?

そこでやつとわつせまでつるをこべりこに聞こえていた嬌声が聞こ  
えなくなつていたことに気が付いた。

恐る恐る田を開けてみると、飛び込んでくるのは首まで真っ赤にし  
てこる女子達の顔。

何十といつ瞳がオレを見つめたまま固まつている。もしかして…?

スウウウウと息を吸う音がある。これから起りゆことが解るが耳  
を塞ごうにも手が動かない。そして、

『　』  
『　』

クラスメイトの女子ほと全員の叫び声が教室中に、学校中に響き渡  
つた。

そして浴びせられるビンタの嵐。避けることも逃げることも叶わず  
出来る「」とはただじつと耐える「」だけだった。

・・・・。

・・・・。

その後帰ってきたリト達によつて騒動の原因が話された。

案の定とこりべきカララが御門に貰つた薬草をつかつてチョコを作

つたのが原因だつたらしい。

発情していた時のこととを皆よく覚えていないらしく女子達全員に謝られてしまつた。いわく恥ずかしさだけが残つていて、思わず殴つてしまつたらしい。

お詫びと称してみんなからチョコを貰つた。あつという間に紙袋が一杯になつて溢れかえつてしまつたが、紙袋の中にさらにもう一枚折りたたんだ紙袋が入つていた。まるでこうなつたことを予期していたかのような用意周到さにゾッとする。結果として助かつたから何ともいえないけど・・・。

他の男子生徒達の舌打ちから逃げるようには歸路に着く。  
家についてポストを開けると美柑からのチョコが入つていた。メツセージカード付きで包装もかなり凝つた感じで非常に気合が入つている。

それを大事にしまいながら家へと入ると玄関に懐かしい黒のブーツが置いてあつた。御門の靴はヒールばかりだしオレのはスニーカー。この家のものでこんなブーツを履くものは居ない。ならば何故懐かしいのか 答えは簡単、このブーツはオレが買ってあげたものだしこのブーツに何度も蹴られたことがあるからだ。

なるべく壁を背にし奇襲を警戒しながら浴室へ入る。いつもはネクタイや制服を脱ぎながら顔からダイブするベットの上に、予想通り金色の闇ことヤミが座つて本を読んでいた。

「何してんの？」

「見て解りませんか。それなら言つても解らないでしょうね

「そつか、じやあ何でオレの部屋のベットの上でオレのまだ呼んでいないミステリー小説を読んでいらっしゃるのですか？」

「読んではいません、今読み終わりました。犯人が友人の広田だつたとは驚きです」

「何だと…料理長の横島が包丁を落としたのはひっかけだつたのか…つていうか言つなよ。もう楽しめないよ。」

「そうですか、それではこれはお詫びです。」

そう言ってヤミが紙袋を渡してくれる。受け取つてみると袋はまだ暖かく香ばしい香りがしてきた。

「それでは私はこれで」

「え？　　ああうん。それじゃまた」

目的は達したのかまだ読んでいないミステリー小説を持ったままヤミがスタスターと部屋から出て行つてしまつた。これであの小説のトリックは迷宮入り決定だ。買いなおすのも何だかバカらしいし。

「鯛焼きか……この匂い、チョコ味か。」

貰つた紙袋を開けてみると美味しそうな鯛焼きが3匹入つていた。香り立つそれはあんこの凄艶とした匂いでなくどこか苦味を帯びたカカオの匂いだった。

「あいつ、今日のこと知つてたのか」

地球に来てまだ1月も経つていないのでバレンタインのことなんて知つてゐるはずも無い。さしづめあんこと間違えて買つてしまつて

食べられないからくれたつて所だらう。

いつもの様にネクタイを緩めながら制服のボタンを外す。ベットに寝転がりながら鯛焼きをひとつ取り出して食べてみた。

あんことは違う渋めの甘みを生地が上手に包み込んでいて美味しい。チョコ「がぎつしり詰まっているのも贅沢さがあつて嬉しいポイントだ。さすが鯛焼き屋を探して歩き回っているだけあってなかなか選び抜かれた一品らしい。

しかしどうにも3つどころのはじわとかボリュームがありすぎない。甘いものは嫌いじゃないけどあくまで人並み。さすがにこれだけでは厳しいものがある。

御門が帰ってきたらお仕置きがてらコーヒーでも入れさせるか。なんて考えながら一つ目の鯛焼きをくわえ、山のように貰ってしまったチョコ「ホールトをいかよつにして食べるか。そして

「1ヶ月後はホワイトデーか。日本って国はどうしても桃色のイベントが多いのかね」

3月14日にある3倍返しなんていう不条理な常識に。ビターチョコのよくなほろ苦こ気分になるのだった。

## スケート 滑つたのは氷の瞳

布団の中とこいつねくもり空間に包まれながら惰眠をむかぼつていると怒声のような電子音が乾燥した空気でピロピロと鳴り響いた。けたたましく喚く携帯電話をひったくるように掴み適当にボタンを押す。

購入時まま何の変更もされていない”メール音<sup>2</sup>”が鳴り止んだ。暦の上では春になつているとはいえまだまだ冬真っ盛り。亀のようには布団から出していた手を引っ込めぬくもり空間の中で携帯を開く。する時間帯だ。

液晶に表示されたデジタル時計を見るとまだ八時。平日ならすでに学校へと歩いている時間が休日の朝ならば一の句もつけず一度寝起きを感じながらメールを開いた。

差出人は美柑からで内容はなんともあつたり、

「今日スケート行くから1時にスケート場に集合ね」

とだけ書かれている。普通こういう遊びのお誘いは「起きてる?」「今日暇?」「スケートに行くんだけど一緒に来ない?」「じゃあ1時にスケート場に集合ね。」

といふ段階を踏むのが正解のはず。その工程を省きまくつてさながら業務連絡のような通知に恐れすら抱ぐ。文句の付け入る隙が見当たらない。

とはいえた今日は昼から久しぶりにのんびりと読書でもしようと思つていたオレの休日計画もある。そして夜にはチョコレート作りだ。その顔を遺憾の意で味付けしつつ返信しようと思つたところで送られたメールの件名を見てみた。

件名・来ないとバラす

これは一体どういうことだらう。知らないうちに美柑に弱みを握られていたのか……それとも行かないとバラバラにされてしまうのか。もしオレがやましい事など一切せず清廉潔白な人物だつたらこんな脅し文句屁でもなかつただらう。つまりオレには効果観面ということな訳だ。

先ほどまで頭の中で組み立てていた不平不満の文章を消去し一言「了解」とだけ打つて返信をする。小学生にしてこの人身掌握術、末恐ろしい…。

そしてまたぬくもり空間の中で猫のように丸くなつて惰眠を再開しようとする。がどうにも田が冴えてしまつて眠れない。

このまま布団の中でじろじろしているのもそれはそれで至福の一時だが、先ほどから微かに漂つてくる食パンの焼けた香ばしい匂いが食欲を搔き立ててくる。食欲が睡眠欲を上回つたので仕方なく起きることにした。

潔く布団を跳ね除ける。Tシャツ一枚では肌寒かつたので近くに脱ぎ捨ててあつたパークーを着込む。洗面所にのそのそと歩いていつて冷水のまま顔を洗う。突き刺すような冷たさでやつと頭が覚めた。歯も磨いてちよつとカツコいい感じで立つてしまつている寝癖を適当に直す。普段髪をセットするときにはあんまり立つてくれないのに、寝癖のときばかり頑固に形状記憶しようとする髪の毛につんざりしつづ、結果ただ髪の毛を濡らしただけで寝癖状態のままリビングへ行く。

扉を開いてまず田に入ったのはオレの席に座つて朝食を取つているヤミの姿だった。

「なんでヤミがこるの？」

「私がここで朝食をとるのがおかしいですか？」

「いや、別におかしくは無いナビ」

「あら早いのね。おはよう」

「おはよー、オレのせ?」

「キッチンにあるわ

言われたとおりキッチンを見てみるとトレイにパンと田玉焼きにソーセージ、サラダにオレンジジュースと洋風の朝食。まるでホテルで朝出されるようなメニューだ。

この家の決まりで平日は食事当番は交代で、休日は先に起きた方がもしくは食べたい方が作るということになつてゐる。

夕食なんかはお互い和洋中色々作るが、朝食に限つてはオレは和食・御門が洋食。となぜか決まつてゐる。

本当に理由なんか無くてただ何となく。気付けばそれが習慣化していた。

「なんでヤミがオレの席に座つてんの?」

「私に床で這いつぶつぱつて食べべるとこいつですか。また猫扱いですか?」

「そんなこと無いじゃないけど」

ヤミが氷のような瞳でこちらを見ながら自分の朝食をのせたトレイを持つて席から立つ。申し訳なさと屈心地の悪さを感じながら自分の席に座るとともに当然のようにヤミがオレの膝の上に座った。

「あの、ヤミさん？」

「なんですか、私に床で這い蹲つて食べるとこいつのですか」

「そんなこと思つてもごめんけど」

有無を言わせぬ勢いで飲まれヤミを膝に乗せたまま朝食をとる。これは経験した人しか解らないだろうが、膝に人を乗せたままの食事といつのはすゞく難しい。食べかすを落とさないようにならうとお皿を取るにも四苦八苦だ。

「あの、どうしてくれない？」

「静かにしてくださいテレビをつけたから言えよ」

「やつこつ口説はテレビをつけたから言えよ」

「有里、朝食の時は静かにしていてこつてやつじょ。テレビの音が聞こえないわ」

「やつこつ口説はテレビを買つてから言えよ」

このリビングにはテレビは置いていない。御門の「食事の時は会話を楽しみましょう」という言葉に関心してしまったからだが実際の

「今日昼から美柑達とスケート行つて来るから」と

「せう。ちゅうど私も他の星へ薬草を探りに行くつもりだったから」

「じゃあいじる留守になるのか。鍵忘れなによつにしなきゃな

「うわ

「うわ

御門の呑みのある返答に若干の不安を感じながらもその場は流した。朝食も終わり昼まで結構な時間があつたので自室のベットに寝転がりながら綾おすすめの恋愛小説を読む。

またどこであるよくな恋人が病気になつてあーだーだとかそういうものかと思いきや口常的な情景で展開されるほん苦い青春劇に読みふけってしまった。

2巻を読み終え3巻を手に取るとこいつの間にか横で座つて1巻を読むヤリに気付いた。とはいお互い小説に集中しきつていたので特に会話も無く、壁時計の針の音だけが静かな部屋に響いていた。

・・・・・

・・・・・

・・・・・

「いや～面白かった。まさか恋愛小説で泣いてしまつとせ

全12巻を読み終わり疲れた目に指を当てながら田尻に浮かんだ涙を拭う。心地よい虚脱感が心臓の周りにしぐめいでいる感覚がある。

最後のシーンを思い出すとまた田頭が熱くなつてくるのが解つた。やっぱり青春つていいな・・・・・若いつてのはいいよな・・・オレも高校に通つてるんだからああい出合いやイベントがしてみたいな。とさつきまで読んでいた小説の登場人物に自分を当てはめ妄想する。

「いかん、こんなことじゅまた御門に笑われる」

以前推理ものの小説にはまつていた時「オレの靴下が無くなつた、犯人はこの中に居る」なんて影響されて言つていた時期があつた。時代劇ものを読めば刀を欲しがつたり、マフィアものを読めば葉巻を吸つたがつたり、医療ものを読めば御門のメスを持ち出したり。

そんなオレをうざがつた御門に「有里つてすぐ影響されるわよね」と鼻で笑われてその晩は枕を悔し恥ずかし涙で濡らしたのだ。

あの時の御門の嘲笑は今でも鮮明に思い出せる。

「にしてもすっかり読み込んじゅつたな…今何時だ?」

時間を携帯で確認しようと枕元を探してみるが見つからない。仕方なく部屋に掛けてある壁時計を見やる。

「は? や……三時?」

見るからに古臭い、よく言えばアンティークのような壁時計の短針は数字の3を。そして長針は1と2の間を指し示していた。  
デジタル時計で言えば15:06分といったところだろうか。

オレは跳ねるようにベットから飛び起き携帯を探す。記憶が確かな待ち合わせの時間は一時。この壁時計の時間が狂つていなければ

もしくはオレの視力が活字の読みやすさで低下していなければ時刻は三時。

遅刻なんでものじゃない。これはもう無断欠勤だ。

「やまこやまこやまこやまこ。 携帯！携帯ビームだ！？」

枕や布団を投げ飛ばしながら携帯を探すも出てこない。おれらく美柑やリト達から電話かメールが来ているはずだ。そしておれはまだ壁時計の電池切れの可能性を捨てきつたわけではない。

「あのうなにやつですか。 それなら折つて『』箱に入れておきました」

「わあああああホントにへし折つてあるーなんですよ……」

ベットに座つて7巻を読み始めていたヤミが言つとおり『』箱を覗いてみるとそこには見事に液晶とボタン部分が分裂しているマイ携帯電話があった。電源ボタンを押してみるが当然付くはずも無く、真っ暗な液晶画面に映つた自分的情けない面が物悲しかった。

「どうしよう……やうかつ腕時計！」

ヤミから小説を取り上げて一小一時間説教してやろうかと思ったがそんな余裕はない。むしろオレも美柑の説教を待つ身なのでそんな権利もない。

なんとか時刻を確認せねばと思考を巡らせたところ、愛用の腕時計の存在を思い出した。

オレはすぐさまベットの横にある棚を開けてみるといつも大事に置かれているはずの時計の姿が見当たらない。

あれ？確かに昨日ここに置いたはずなのになのに他の引き出しもあけ

て調べてみると、

「ナリにあつた時計ならドクター御門がつけていましたよ」と視線は小説の文字を追いながらヤミが言つ。つまりオレの時計は今宇宙のどいかにあるということか・・・。

「なんなんだよ、お前らなんなんだよ……」

「ちなみに時刻は15時27分です」

「お前……ホントなんなんだよ……」

携帯は壊されるし時計は勝手に持つてかれるしあつさり現時刻を教えられるし案の定大遅刻つていうか無断欠席だし。

「へらへら他の人と遊ぼうとしているからです」

「ん? 何か言ったか?」

「私はあなたを許していないと言いました」

いつもの無表情な面にほんの少し不機嫌を浮かべたまままた小説を読み続けるヤミ。さつきからページが進んでいないようだがそれを言つとまた怒られそうだ。機嫌の悪い理由もどうやらオレにあるらしい。

「今から行つても間に合わないよなあ……ちょうど明日はホワイトデーだしチョコ持つて謝りに行くか

連絡手段も無いし一晩経てば美柑様の怒りも収まるだらう。そして  
今日の夜からやうつと思っていたチヨコ作りを今からやれば、より  
美柑様を喜ばせられるよつた対策もとい大作が出来上がるに違ひな  
い。

そつ自分に言い聞かせながら台所へと向かうのだった。

## オレンジ色のホワイトデー

オレがバレンタインの時に貰ったチョコレートは全部で25個。猿山に羽交い絞めにされて嫌々白状させられた拳句、お前なんかとは絶好だ!と言われたのがまだ記憶に新しい。次の日には一緒に昼ごはんを食べてたけど。

猿山やリトが言うには貰いすぎにあたる量らしい。とはいっても貰つたものの殆どが、田じろの感謝のチョコだったり、あの時の騒動のお詫びのチョコだ。

とこうようなことを御門にも言つたら注射器が飛んできた。どうやらムカつかせてしまつたらしい。曰く、

「お詫びのチョコレートが名前入りでハート型なわけないじゃない」とのこと。よく解らないけど、バレンタインに上げるチョコは普通ハート型なんじゃないのか? テレビで流れてるCMとかでも全部ハートの形だし。と思つたがまた注射器が飛んできそつたので黙つていた。

その御門からはすこし不恰好なハートのホワイトチョコレートを貰つた。料理は割りと上手にできるがお菓子作りはそうはいかなかつたらしい。渡す時に照れくさそうにそっぽを向いていたのを、少し可愛いなんて思つてしまつたのが悔しい。

案の定食べてみたら体が痺れるし動けなくなるし意識は遠のくし気付いたらベットで寝てたし。これだから女つて怖い。悔しい。

……改めて、貰つたチョコは25個。つまりお返しも25個用意しなくてはならない。

全員同じものを用意してもいいが、今日のこともあるし美柑のものは気合を入れなくてはならないだろ。御門やヤミは昔馴染みだし手を抜いたら怒られそうだ。沙姫からはでっかいのを貰つたし綾のチョコはオレの名前も入つていてとても丁寧に作られて嬉しかった。となると凛だけ簡単に…といつのも可哀想だ。里紗・未央はクラスで仲良くしてもらつてるし日向の感謝も込めなくては…。

「とはいえこれはちょっと頑張りすぎちゃったかな……」

オレの目の前に並んでいるのは、どこかの洋菓子専門店で売られていてもおかしくないような立派なケーキ達と、山のように作られたハート型のクッキーだった。

時刻はもう夜の八時。大体四時間ぐらいかかったんだろうか。大量に買い込んでおいた薄力粉や卵や砂糖が全部空になってしまった。特売だったからと余分に買はずぎてしまつたがまさか使い切ることになろうとは……。

本当は全員分のケーキを作りたが材料も時間も足りずクラスマイトの女子達にはクッキーを、ということにした。差を付けるみたいで少し抵抗があつたがその分可愛いラッピングをほどこすつもりだし一言そえたメッセージカードも準備済みだ。

「いやそれにしても……我ながら素晴らしい出来だ」

再度、並べられたケーキ達を眺める。御門・ヤミ用のザッハトルテ。スポンジにチョコレートが被せてあり一見するとバカでかいチョコの塊のようだ。しかし中はしっとり系のスポンジとチョコチップが散りばめられている。そしてなにより名前が良い。ザッハ・トルテ。必殺技か都市の名前みたいだ。

紗姫・綾・凜のは普通の苺のケーキ。チョコじゃねーじゃんとも思

つたがホワイトデーなので白いケーキでも有りか。というか自分が食べたくて作つただけだけだ。

里沙と未央のはチーズケーキ。以前美柑と一緒にいたケーキ屋さんのチーズケーキが美味しかったことを思い出して自分で作りたくなってしまった。味見したところお店のものには及ばないがそれなりに美味しいものができて満足。

そして美柑の蜜柑タルト。これもケーキ屋さんで食べて感動してしまい思わずレシピを聞いてあつたものをこの機会に作つてみた。クリームチーズが入っているのがポイントでこれが蜜柑の酸味と抜群にあつてたまらなく美味しい。

これならきっと喜んでもらえるはずだ。そして許してもらえるはずだ。

形が崩れないように注意しながら一つ一つを箱にしまつていぐ。それをさらに包装紙で包みハートのシールで止めて完成。

うちの冷蔵庫は宇宙製の特別製でどんなものでも一萬年は保存できるという謳い文句から万年冷蔵庫と呼ばれている。これに入れておけば明日渡しても味に遜色はないはずだ。

同じようにクッキー達も小箱につめて冷蔵庫へ。そして残つたのは割れてしまったクッキー達。大量に作れば不恰好に出来てしまふものや脆いものが出てきてしまうのは仕方がない。細かく碎いてチーズケーキの下に引けばよかつたと今になつて思いついたがもう遅い。

「食べるしかないか……コーヒー ire よ」

「す、じい甘い匂いですね」

クッキーを食べつくす覚悟を決め、コーヒーを入れていると、小説を片手に持つたヤミがやってきた。

どうやら今読み終わったらしい。疲れたのか田を口シロシと擦つて  
いる。

「ちゅうじ良かった。はいヤミ、あーん

「ん、なんですかぐつ」

何か言おうとしていたヤミの口へクッキーを放り込む。一瞬むつと  
した顔をしたがもぐもぐするとすぐ笑顔に変わった。とは言つても  
傍から見れば普段通りのぶっちょ面だけど。

「はい、次……ほい、次……もいっちょ」

ヤミが飲み込むや否や次のクッキーを食べさせる。ヤミがもぐもぐ  
と噛んでいる間にもう一人分のコーヒーを用意して自分もクッキー  
を食べる。

二人してもくもくと食べ進め、御門が帰ってきた頃には山積みにな  
つていたクッキーはオレとヤミのお腹の中へ収まっていたのだった。

・・・・・。

・・・・・。

翌日。

田がまだ昇りきつておらず、肌にあたる風が少し冷たい。散歩して  
いるコーティングを横目で眺めつつ春服のポケットに両手を突っ込んだ。  
道端に咲く梅が春の訪れを教えてくれている。

右のポケットに物を入れていたことに気付き取り出してみる。それ  
はライターほどの小さな機械で赤いボタンがついている。これは小

型転送機といつて万年冷蔵庫に入っているものを一瞬で手元に持つてくことが出来るらしい。おかげで大量のケーキを保冷剤と共に背負って歩かずに済んでいる。こんな便利なものがあると知ったのはつい1時間前のことだった。

・・・・・。

「一人ともire、バレンタインのお返し」

いつもどおりの朝食の席。倉庫から引っ張り出してきた椅子に座つて一緒に朝食をとるヤミはすっかりこの家の子。といった感じだつた。

朝食が終わり片付けも済ませた後ののんびりとした一服の時間に、少々早いかもと思ったが一人にケーキを手渡した。一人とも

「ケーキ一個なんて食べきれないわ」

「お返しは鰯焼きだと思ってました」

なんて言いながら抱えるように大事に受け取ってくれた。口に出しては言わなかつたがその表情から嬉しさが伝わってきて、渡した本人としても非常に嬉しい。

二人ともすぐに箱を持ったままどこかへ行つてしまつたがもしかしたら今から食べるのかもしない。朝食をとつたばかりだというのに、これが世に聞く甘いものは別腹といつやつだらうか。女の子つてすゞい。

初めてのホワイトデーの出だしのが好調で終つたことに満足し、鼻唄

まじりで食後のコーヒーをすすめてると袖を引つ張られてくる」とに気が付いた。

振り返つてみるとヤミは驅の悪わいじ縮くヤミの姿。

「なに、どうしたの」

「これね」

やつこつてヤミが差し出したのは小さな機械。ライターに赤いボタンをくつつけたようなそれをオレが差し出した手の上に落とす。

「なにこれ?」

「転送機です。これがあればどこにいても冷蔵庫の者をすぐ手元に持つてくることができます」

「そいつは便利。どうしてこれをオレに?」

「ドクターから携帯電話の重要性を聞きました」

なるほど、どうやらこれは携帯を壊してしまったお詫びと云うことらしい。ヤミなりに申し訳ないと思つていたということか。それにしてもこんなもの冷蔵庫のオプションについてたかな?御門が持つてたか……もしかすると自分で作つたか。

「それでは失礼します」

用件は済んだといつよいに小さく頭を下げてヤミが走り去る。一人残されたオレは試しに転送機のボタンを押してみる。するとポンッと空気の抜けた音がして昨日作ったケーキが手の上に手品のよ

うに出現した。

「想像したものがでてくるのか。こんな便利なものがあつたとは知らなかつた……いやそれにしても便利だ」

これがあればピクニックに大きなバスケットを持つていいくことも、運動会に大きな弁当箱を持つていいくことも無くなるという事か。便利。

よし、善は急げだ。さっそくみんなに渡しにいりや。

・・・・・。

なんて意気込んで出てきたものの理沙・未央や紗姫達の家なんていつたことが無いしドコにあるかも知らない。

携帯番号とメールアドレスは知っていたのだが肝心の携帯が無い。解るのは美柑のいる結城家だけ。

ということでお今は結城家を田指して歩いている。休日の朝とあって人通りが少なく時折車がいくつか通るだけだ。

何度も通りなれた道を一人ほのぼの歩いていると少し先の方に黒塗りの車が止まっているのが見える。

近づいてみるとどうやらタイヤが路肩にはまつてしまつたらしい。この辺りの道は狭く慣れていない運転手だと壁に突撃したり、こうして路肩に落ちてしまうことがよくあるのだ。

一度見てしまつたら知らぬ存ぜぬで通り過ぎるのも味氣ない。車の

横に立ち困っている人に声を掛けてみると、

「タイヤがはまつてしまいまして…………あり? 有里ではあつませんか

「なんだ紗姫か。こんなとこで会うなんてね」

そこに居たのは天条院紗姫その人だつた。道理でこの辺りでは珍しい高級車だと思つた。

「よし、ここはオレに任せろ。紗姫と運転手さんは下がつていいくださ」

「な…なにをなさる返事?」

腕まくりをするオレをいぶかしながら紗姫と運転手さんは車から離れてくる。

「おんだりやー！」

掛け声と共に車を持ち上げた。意外と軽かつたことに驚く。高級車つて軽くて丈夫な素材とかでできているんだろうか。

どこへ降ろそうか聞こうと紗姫達を見ると運転手さんは口を開けてポカんとしているし紗姫はほんのり頬を染めてこちらをじっと見つめている。

「……」J降ろしますね

どうすればいいか解らなかつたがとりあえず道路の真ん中へそつと車を降ろす。

そこでやつと我に返つた運転手さんが車に乗り込みエンジンをかけた。どうやら無事動くらしい。窓ガラスを開けて帽子の鍔を掴んでペコリと小さく会釈をしてくれた。寡黙な人なのかな。

「おおそうだ忘れるところだつた。紗姫紗姫、これバレンタインの時のお返し。綾と凜の分もあるから悪いけど渡しておいて欲しいな。量はあれだつたけど美味しかつたよ、綾たちにもそう伝えておいて。それじゃオレ急ぐから、またな！」

周りにちらほらと野次馬が集まつてしまいあまり目立ちたくないでの、転送機からポポポンとケーキを取り出すとそれを今だ惚けている紗姫に渡した。一瞬チラと手渡された三つの箱を見た紗姫が再度オレの方を向いて熱い視線を送つてくる。その瞳が御門が絡んでくる時のそれを見たオレは挨拶もそこそこにその場を後にした。

・・・・・

「おはよーみかーん、リトー。いるかー？」

数分ほど歩いて結城家へ着くと、いつもなら連絡をしてるので勝手に玄関から入るのだが今日はそれが無い。当然玄関も鍵が閉めてありこゝうして外から声を掛けているのだが一向に反応が返つてこない。

どうしたものかと悩んでいると玄関の扉から鍵の開く音がする。そして小さく開いた扉からリトが顔を覗かせた。

「有里か？」

「リト！美柑に謝りたくて、あと渡したいものがあつて来たんだけど」

「お前なんでスケート来なかつたんだよ！昨日から美柑のやつすぐ一機嫌悪いんだぞ！オレに当たるわ飯はまづくなるわで……」

玄関から飛び出すように出てきたリトが凄まじい迫力でそう捲くし立てる。明日バレンタインのお返しを持つて謝りに行けばいいや、なんていい訳のせいで美柑を悲しませ、リトにも迷惑をかけてしまつたらしい。自分のダメっぷりに自己嫌悪する。

「「！」あん、リトにも迷惑かけたな。美柑は部屋？」

「多分部屋、起きてると思うぞ。……それと、オレは……お前が女だつたとしても友達だからなー！」

「は……？何言つてんだリト」

「え？ だつて美柑が、実は有里つて女の子だったんだよって教えてくれたんだけど……」

「一緒に風呂入つた」とあるお前がそんなの信じてさじやねーよ！」

メールで言つていた「バラす」というのはこの事だったのか。さしずめ女顔を氣にしているオレに対する美柑の仕返しといった感じだろうか。それにしても裸の付き合いを何度もしているくせにリトの奴はこんな簡単に騙されて…… 親友として将来が心配になるよ。

小首を傾げて「セーいえばそつか」なんてあつけらかんと呟くコトを尻日に結城家へと入る。

いつもなら美柑がアイスを舐めつづこらしゃこと出迎えてくれるのだが、今日はそれが無い。台所をチラと覗いてみれば昨日の夕食と今日の朝食の食器が積まっていた。まな板や包丁すら放り出されているのを見るところかなりイラついていたことが解る。

パンチやビンタの一いや一つは覚悟しながら静かに階段を昇り、みかんと書かれた可愛らしさのフレートがぶらさがっている扉を一回ノックした。

「どうぞ」

小学生とは思えないような重みのある声が扉の向こう側から響く。冷たい汗が背筋を通るのを感じ睡を小さく飲み込みながらドアノブをひねる。

そこには少女が一人座っていた。

「座つて」

「うは……！」尊顔を拝謁承れて感激至極に「やせこます」

「その喋り方むかつく」

「「」あんなさい」

「……どうしてスケーターに来なかつたの」

「「」めんなさい」

「……どうして携帯の電源切つてたの」

「「」めんなさい」

「いい訳は？」

「「」めんなさい」

「むかつく」

「「」めんなさい」

ベットの上、ぬいぐるみを抱え顔をうずめながら、覗く瞳がこすりを射抜く。オレンジ色のカーペットに額を擦りつけ謝りながらケーキの入った箱を差し出す。

「…なにこれ？」

「美柑のために作った蜜柑タルト。良かつたら食べて」

「……今食べる」

「ん、ちょっと待つてて」

すぐさま一階へ降りケーキを切り分け小皿とフォークを片手にまた美柑の部屋へと戻る。

ベットの上にいた美柑がいつの間にかテーブルの前に移動していた。それにならってオレもテーブルの横へ座りケーキを取り分け美柑に

渡そうとするとい、

「食べさせない」

さつきよりかは朗らかになつた顔で言われた。けよつと席を離した数分の間に何か良いことでもあったのだろうか。オレのよつた唐変木には知るすべはない。

「えつと……じゃあこれ、あーん」

「あー、んぐ……ねいひに

「それはよかつた」

フォークに刺したタルトを美柑の小さな口へ放り込むと、これまた小さな顔をもくもく動かしてタルトを咀嚼する。すっかり機嫌も良くなつたようだし、|ロ田、ニロ田を頬張る表情は笑顔そのものだ。

「改めてごめんな。代わりに今度ビードも連れてってあげるよ」

「……じゃあ有里さんの家行つて見たい」

「遊園地とかじゃなくて? こよ、今度だけ招待してあげる」

「じゃあ許してあげる」

やつと許しをもらえたがいつ来られてもいいよつて娘屋を綺麗にしておかなくてはいけなくなつた。

普段じろじろしている分にはそれほど汚くは無いが、なんせ来客と

いえばヤミぐらしが来ないので細かい所に埃が溜まっていたりして汚れている。もうすぐ新学期だし心機一転大掃除するのもいいかもしない。

その後、すっかり仲直りした美柑と一人でタルトを食べ紅茶を飲みまつたりとした時間を過ごした。  
携帯が壊れた話をすると美柑もちょうど最新のものに変えようとしていたらしく、一人で携帯ショップに行きお揃いの携帯電話を手に入れた。オレは色違いにしようと思っていたのだけど、美柑の強い希望で一緒にオレンジ色にすることになった。オレは黒色が良かつたのに…。

次の日、学校に行ってケーキを配ると、

「ちよ、ゆりつちなにこれ気合入りすぎ。私への愛情のせいとか?」

「ダイエット中なのに……ゆりつちがくれた物だから食べるけど、今週はお菓子控えなきゃ」

と里沙と未央にも喜んでもらえた。クラスの女子達もクッキーを受け取ってくれたしバレンタインのお返しは大成功と言えそうだ。

・・・・・

「なあ、リトから聞いたんだけど……有里って……その……女なのか?」

「んなわけねーだろ、ぶつとばすぞH口猿」

「言われてみれば中性的な顔だし……『クリ

例えオレ＝女説が男子の間で流行っていたとしても。大成功のはずだ。きっと。

3円ともなると授業は自習とか消化試合のよつなものばかりで、大  
多数の生徒達にとつて授業は友達とお話しをするためのものとなつ  
ていた。その授業も午前中で終つてしまつ、卒業生にとつてはちょ  
つぱり寂しい期間。そして在校生にとつては小躍りしたくなるよつ  
な期間。

その例に漏れずオレもリトと一緒に廊下を歩きながら談笑に勤し  
んでいた。

「図書室で何借りんの？」

「動物図鑑。親父が漫画でマントヒビ描くからその資料用に  
「親父さんの漫画は日に日にまたちやけてくなあ。それでも面白い  
んだからす」」  
「

リトの親父は何百万単位でコミックを売る人気漫画家で、クラスメ  
イトの中にも熱狂的なファンが居る。

時々リトに頼まれてトーン貼りを手伝つたりするが一心不乱に筆を  
動かす親父さんの姿は、鬼気迫るものがありながらも漢といった感  
じだつた。

当然資料研究にも余念が無く、自分が原稿で席を離れられないとき  
はリトや美柑に頼んで図書館や本屋に参考資料をおつかいに行つて  
もらつたりもしている。今日もその一環といつてだ。

「じゃ、図鑑借りて来るわ」

「ん、オレやの辺道にひびきたりしてゐる

図書室へ着くとコトが図鑑コーナーの方へ歩いていく。オレも折角だし何か借りるか、と小説コーナーへ足を進める。愛読本の続刊も出ていないし、じつは小さな機会に新しい本との出会いを模索するのも悪くない。図書室ならタダだし。

人気の無い小説コーナーを歩きながら惹かれる本は無いかと物色する。漫画とは違い表紙の絵とかで選べないので探すのが難しい。立ち読みをしようと立ちよつと読んだだけでは解らないし長く読むには足腰がつらい。結局前評判や好きな作者に偏ってしまふのだが、じつやつて題名だけで読む本を決めるのも醍醐味の一つだろ。面白いものに当たるのも自分に合わないものに当たるのも運と感性しだいだ。

読んだことのない古いものでもこつてみようかな、と本棚の前をうろつりしていると

「雪ヶ岡君？」

と後ろから声を掛けられた。てっきりオレとコトと図書委嘱さん以外は誰もいないと思ったがどうやらまだいたらしい。振り返つてみるとそこには一冊の本を抱きかかえるようにして持っている綾が居た。

「なんだ綾もいたんだ。本借りにきたの？」

「うん、読みたい本があつて……」

「ほほーう。沙姫と凜は？一緒にないんだ

「沙姫様は……体調が優れないといつことでお休みしていて凛はその付き添いです。私は、その……凛が一人で大丈夫だから学校へ行つていいと言つたので……」

どこのへいくにも何をするにも三人一緒にいうイメージがあるので綾一人といつのは結構珍しい。

「体調が優れないって、風邪？お見舞いに行つたほうがいいかな」

「あ……病気ではないので……その……雪ヶ岡君が来ると……その」

綾が何か言いにくそうに言葉を選んでいる。理由は解らないがオレに見舞いに来て欲しくないらしい。やっぱり風邪なのか？

「まあ凛がいるんだし、女の子の家に男が一人で上がるつてのもあれだしね。お大事について言つとこで」

「はい……すみません……えっと、あの、本をお探しですか？」

話を切り替えようと、というよりは気分を害してしまったのでは、といった感じで綾が問いかけてくる。オレとしては無遠慮なこと言つてしまつて、「ちから」を謝りたかつたぐらいなんだけど。

「ちよつと衝動借りしてみよつと思つて。でもこれだけあるとどうつにも……ね」

無駄に品揃えの良い我が彩南高校の図書室は、一部の読書家の生徒達に楽園と称されるほどレパートリーが豊富だ。

恋愛小説、というジャンルだけで本棚を三つを上回るほどどの書物

があるし、各語辞典類や六法全書すら完備されている。当然田代の本を探すだけでも一苦労だし、適当に気に入った本でも借りようなんて気軽に考えていろどりから手をつけでいいか解らない。

「あの…この本、前に読んで…とっても面白かったから……その、おすすめで…」

そう言って綾が抱きかかえていた本を差し出してくれる。どうやら悩んでいたオレを見かねておすすめを持ってくれたようだ。彼女が以前教えてくれた恋愛小説は面白かったし、その選定眼は疑うべくも無い。綾が言うんだ、きっと名作なのだろう。

「ありがと、それじゃこれ借りて読んでみるよ」

「あ、いえ…お役に立てたら…それでは失礼…します。…あ…あと、ケーキ美味しかったです」

本を受け取ると少し照れくさそうに綾が図書室から出て行ってしまった。どうやらケーキも食べてくれたみたいだ。お口にあったようで何より。

受け取った本はファンタジー物で少々古のものらしく表紙がよれよれになっていたが、ぱらぱらと読んでみるとほんのことは確かに面白そうだ。

早速家に帰つて読みふけると受付へ持つてこいつとするとき血相を変えたりトがこちらへ走つてきた。……どうやらまたトラブルらしい。

「おー有里！あの、金色で真っ黒で女の子が本で倒れて熱くて殺されそうになつて熱くて具合悪そつなんだ」

「ど、どりあえず落ち着いて。んでヤミがどうしたって？…え？ヤミ学校来てんの？」

「セツセツのヤミが…いいからひかり来いー。」

説明するのがめんどくなつたのかリトに引つ張られてるまま図書室の奥へ向うと、そこにはばら撒かれた本の真ん中で虚ろに座り込むヤミが居た。

「あなたも…居たのですか」

オレに気付いたヤミがどこを見ているかわからない瞳をこちらへ向けて、おぼつかない足取りで立ち上がる。が、力が入らないのか前のめりに倒れそうになつた。すかさずオレが近づいて抱きとめるが、触れたヤミの体が燃えるように熱く震えるような呼吸も浅く、そして速い。

「風邪…って感じじゃなさそうだ。あのバカ、こんなときには学校さぼりやがって。リト…医者のところへ行くぞ！」

「い…医者つて病院か？それだと車とかが無いと…」

「知り合いで腕だけはいい医者がいるんだ。リトも一緒にいくぞ。…ヤミ、おんぶと抱っこどうがいい？」

「自分で…歩けます…あなたの力は、借りたくありません」

「やうかおんぶがいいか。…よし、リトは教室行ってオレの鞄も取ってきてくれ」

「お、お、任せる」

ヤミの小さな体を背中に背負い図書室を飛び出す。当然他の生徒達の注目を集めることになり、初めは体をよじらせ嫌がっていたヤミだが、靴箱へたどり着いた時には背中に顔をうずめ、呼吸も荒くなつていた。

「抱持つてきたぞ！」

「ゆりつちー！ヤミちゃんが大変なんだって！？」

おたおたしながら二つの鞄を持ってこちらに向つてくるリトの後ろにはララの姿があった。話しかけてきたらしい。

「有里の家？外観だけ見たことがあるけど、そこに医者なんているのか？」

「話は後。行くぞつ

「アーヴィングコートー。叫べしがことヤハウドさんが大変なじとこになつたやうだよコートー。」

「つて待てよ！俺まだ靴履いて……おい！置いてくなよ！」

鞄箱で慌てているリトを尻目にララは空を飛び、オレはヤニを抱えたまま、通いなれた家路を駆け出した。

・・・・・。

「エリが、ゆりうちの家？なんかオバケやしきみたいだね～」

「ヒヤ、ハヒヤ…お前ら…早すぎ…」

「急ぐつて言つただり。ほら入るぞ。道以外の所に入ると碌なことにならんからオレの後ろを歩くんだぞ」

「どんな……家、だよつ」

息も絶え絶えなリトの突っ込みもそこそこに門を抜け玄関へ行き、ララにオレのポケットに入つていた鍵を取り出して開けて貰い中に入る。

「お　い！御門！急患だ、起きるつー！」

「へ？御門つて……」

「ん……何よ、昨日は深夜までオペして学校は行かないつて言つたでしょ」

ヤミを起こさないようにかつ大声で御門を呼ぶと、奥の扉から目を擦りつつ下着に白衣というマニア向けなんだかよくわからん格好で登場した。

「有里と御門先生が一緒に住んでたつていうか何てカッコしてんだ先生　つー！」

当然女性の下着姿なんかに免疫のないリドがさつきまでの息切れが嘘のような大声を出す。

色々と説明したいことはあつたが今はヤミのほうが大事なので、御門に服を着てくるよひ言つた後診療室へヤミを運び込んだ。

・・・・・。

・・・・・。

「先生、ヤミちゃん大丈夫?」

「ええ、風邪や病気ではないこのコ特有の症状よ。大丈夫、死人以外ならどんな患者だつて治しちゃうわ」

診察台に寝かされたヤミの前で心配そうなララが呟いた。御門はヤミのことをよく知っているので簡単な診察で終つた。どうやら大変な症状ではないらしい。というと疲れからくる体調不良とかそんなところだろう、つまりトランス能力の過度な使用によつ身体機能の低下。地球に来た時に結構トランスしていたみたいだしそれに……。

「はい、じゃあ早速脱がすわよ。有里、手伝つて」

「あいよ」

「つておoiーふふふ服を脱がすつて!?」

「ここの子を直すのにはヒーリング・カプセルに入れるのが手つとり早いわ。それには衣服が邪魔なの」

「だからおこひなつと有里ーー？」

「リリ、コトを連れてヤミに見舞いでも買つて来てくれる？」

「オッケーーーほらコト行こーー。」

騒ぎまくるコトをララに連れて行つてもいい。純情ボーイのはいいが診療所でやかましいのはいただけない。それに女の子が服を脱げつてんなら男は席を外すのが常識だ。

「よし、パパッと脱がせるか」

「……何となく解つてたけど、恥ずかしがらないのね」

オレがヤミの服を脱がせていると後ろで見ていた御門が呆れたような声を出す。

「これがベットでヤミが元気ならオレだって恥ずかしいけど、今は診察台でヤミは病人だ、恥ずかしがつてちやヤミに失礼だろ」

オレにだつて人並みの恥ずかしさはある。でも御門の診察を手伝つたことも少なくないし言つたとおりここは診療所だ。恥ずかしがつたり照れていたら手術が間に合わなくなることだつてある。……と言い聞かせて我慢しているだけです。本当は結構恥ずかしい。だってヤミのやつちょっと見ない間に結構育つてるし。まだまだ子供だけど。

「それもそうね。それじゃカプセルへ運んで頂戴」

それで納得したのか御門はわざとカプセルの調整へ行つてしまつ

た。オレは出来るだけヤミの体を直視しないようにながら、優しく抱きかかえるとカプセルの元へ慎重に運ぶのだった。

・・・・・。

・・・・・。

・・・・・。

『ドクター＝カド…？』

「ん…～ヤミ、起きたか。具合はどう？」

『有里……つて見ないでください！え、えっちいのは嫌いです』

「見てないけど…」

ヒーリング・カプセルの前で椅子に座りながら御門の淹ってくれた緑茶に舌鼓をうつているとヤミが目を覚ました。

一瞬反射的に目線を上げそうになつたが、何とかこらえ手に持つた湯飲みに視線を落としながら話しかける。

ヤミも見られたくなかったのか自分の髪と手で局部を隠す。

『…』

「御門の診察室だよ。お前が図書室で倒れたんで運んできたんだ」

『そうですか』

「御門が言つにはトランプ能力の使用負荷による身体機能の低下、

「うう。最近トランス能力を使ったか？」

『…………』

「言い方を変えると、トランス能力を使って何かを作ったか？」

『…………はい』

思つた通りだつた。そう、ホワイトデーの時にヤミがくれた転送機だ。トランス能力は自分の体をあらゆるものに変化させることができ。だが当然大きなものを、精巧なものを作ろうとすれば負担も大きくなる。そしてトランス能力は変身能力であつて物を作る能力ではない。無理をすればできなくもないがそのさいにかかる負担は凄まじいものだつただろう。

そして考えてみればそんなに便利なものを御門が使っていないはずが無い。それをいきなりこんなオプションがありますよって渡されたら誰だっておかしいと思うに決まってる。

「お前がくれた転送機は確かに便利なものだつたけど、お前が倒れるようなことをしてまでオレがして欲しいことなんて何一つ無い。前にも言つたはずだぞ。その力は、お前のためだけに使えて。わかつたな」

『…………はい』

「…………んじゃ、オレヤ!!」の分のお茶でも淹れてくるよ。多分リトたちは鰯焼き買つてくると思つ。あとよひじへ

「こつてうりしゃい」

反省したのかしょんぼりするヤミと、クッククとこらえ笑いをする御門に、何だか居心地が悪くなつてオレは診察所を後にした。説教なんてらしくない、それに資格も無い。オレはヤミを捨てた屑なんだ。それをあんなに偉そうにバカみたいに……。

「はあ……結局小説も借りてくるの忘れかけたし……はあ

自己嫌悪に陥りつつ湯飲みに残つたお茶をちびりと飲む。すっかり冷めてしまつたお茶は味氣ない苦味を残して喉に流れしていく。

その後、予想通り鯛焼きを買ってきてヤミの着替え中に診察所に入つてしまつたリトがボロボロにされ、怒つたヤミが出て行くまで、ため息と自己嫌悪が終ることはなかつた。

「ん？ あれ、リトビニーった？」

「もう先帰つたぞ。さつき廊下にいたし」

HRを机につつぶしてやり過ごし放課後の賑わいでやつと皿を覚ます。口端に少し零れたよだれを袖で拭きつつ一緒に帰るうとリトを探すがその姿はない。

ちょうど近くに帰り支度をしていた猿山が居たので声をかけてみると、どうやら先に帰つてしまつたらしい。

起き抜けのぼーっとする頭を振りつつオレも帰り支度をすすめていると何やら廊下から視線を感じる。

「猿山？……はもう帰つたか……」

以前助けた不良に絡まれて困っていた少女が実は同じ学校でしかも一日惚れでラブレターを渡したいけど恥ずかしくて渡せなくて廊下から顔を覗いてるだけでも幸せきやーかつこいい！

なんて猿山の妄想みたいなことが起こるはずもなく……あつと氣のせいだろう。学校なんだから人の目なんていくつもあるしね。にしても暇になつちやつたな。ちょっと小腹も減つたしリトとコンビニでも寄つて買い食いしようと思つてたんだけど、一人で行つてもなんだか味気ない。

そうだ、この前なんやかんやで借りられなかつたし、綾おすすめの小説でも借りに行くか。そうと決まればこうしてはおれん、早くいかないと。

元々教科書は全部学校におきっぱなしだし持ち帰る荷物といつたら筆箱に携帯に体操服くらい。財布はポケットだし体育のない日なら鞄だつていらないくらいの荷物なので帰り支度はすぐ整つた。

よしこぞ図書室へ、と席を立つと同時に、

「有里様　！」

「おぼつ」

何者かが名前を呼びながらアメフト部もたじたじのタックルを腰にかましてきやがつた。

もし授業中にテロリストが来て学校を占拠したら、なんて想像はするが、もし学校でタックルされそうになつたらなんて場面はシミュレーションしたことがない。

回避・防御には定評のあるオレだがいとも容易く隣の男子生徒Ｙ君の机もろとも吹き飛び、おそらく掃除を急けたのであるう少し埃っぽい床に背中と後頭部をしこたまぶつけた。

「有里様っ！ちょっと聞いてくださいなつ！」

「いきなりなんだ！つて沙姫か！？」

後頭部をさすりながら制服越しに感じる高校生にしては些か豊満な果実の感触と眼前に揺れる金髪の立て巻きカールを確認する。そしてこのいかにもといったお嬢様口調。そこに居たのは学校一の変人、天条院沙姫その人だつた。

「わたくし、操を汚されてしましましたわ！どうか慰めてくださいまし！」

「意味が解らないから。抱きつくな息を吹きかけるなそれを押し付けるなシャツを脱がそつとするな誰か助けてっ！」

「沙……沙姫様、あの……雪ヶ岡君がその、嫌がつてます」

「貴様、沙姫様の寵愛を無下にしようつてこいつのか」

いきなり訪れた貞操の危機に助けを呼ぶも、廊下から現れたのはオロオロする綾とイラライラMAXな「」様子の凜。

わつあまでちらほら居たクラスメイト達は君子に危うきにうんたらよろしく居なくなつたいた。さすがみなさんとらびる慣れしていらっしゃる。

「これ、どうこう」とへ。

「その……先週辺りからずっとそんな感じで……」

この場の唯一の良心、綾に訪ねるがよくわからん。先週？……先週つていつたら、ホワイトティーの時道端で会つた以外特に接点は無かつたけど……。

「さあ有里様、挙式はどこにいたしましょう。スウェーデンでもデンマークでもノルウェーでもどこでも準備できますわよ」

「なんで北欧限定なんだよ。とつあえず退いてくれない？」

「それでさつき結城リトの弟といつものに体をまわべられたのです！どうか有里様の御手で清めを……」

会話ができるな……リトの弟？……あいつには美柑しかいなかつたしあ袋

さんは海外において弟ができるつてこともないはず。あの親父さんなら隠しきつてことはありえないし……また何かに巻き込まれているのか？

普段の高飛車な態度からは想像もつかない甘えつぶりで鎖骨に頬を擦り付ける沙姫と、困ったような何か思い悩むようにオロオロする綾、竹刀を強く握りすぎて爪が食い込みぎしがしと音を立てている凛。

さつきまで授業が行われていたことが嘘のように、一瞬で教室に展開される力オス空間。訳がわからないがしばらく好きにさせてあげようと、大の字になつて沙姫の熱烈な抱擁に為すがままになつていると、

「オオオオン！…ヒテースコートの方から隕石でも落ちたような爆音が鳴り響いた。

「な、なんですかー？」

突然の大音量に飛び退いて驚く沙姫。その隙に沙姫の下からスルリと抜け出し瞬時に衣服を整えながら立ち上がる。

「ああ…有里様、どこへ行つてしまつの？」

「あの音が気になる。ボクは君との学び舎を守るために行かなくてはならない。わらばつ！」

「有里様　つ！」

イメージ的には姫を守る騎士といつより上京する男とそれを見送る女、といったイメージ。

意外とノリがいい沙姫達を尻目に教室を飛び出す。廊下の窓から見渡してみるとテニスコートに人だかりが出来ていた。その中心には呆然と立ちすくむ差清先生と直径2～3mほどのクレーターが。

「何なんだあれ……つとリト？それに西連寺…」

うちの高校には分身したり跳ねない球を撃つたり恐竜を召還したり骨を折るようなフォアショットを放つ奴なんて居ない。というかあんなクレーターを作るようなビックサーバーなんて地球中探したつていやしないだろう。つまりはそういうことだ。

事態の重大さに気付きはじめたオレの視界の端に西連寺の手を引きながら階段を駆け上るリトの姿が映った。

案の定巻き込まれていたらしい、しかも西連寺まで。こうしちゃいられない、いつの間にか半分降りていたファスナーを閉めつつ二人の後を追いかけた。

・・・・・。

「あれ……リ……たの？」

一人の足音を頼りについてきて見るとどうやら屋上に行つたらしい。鉄製の少し錆びのついた扉の向こう側からはラララしき声が聞こえてきていた。

それなら邪魔しない方がいいか、と掴んだドアノブの手を緩めようとした時この広い宇宙で一番聞きたくない名前が聞こえてた。

「オレがデビルーク王、ギド・ルシオン・デビルーグだ」

デビルーキ王。宇宙を力で支配した男。ララの親父でありオレラン  
キング最もぶん殴りたい右頬10年連続BEST1位の偉業を持つ  
野郎。

ざわざわと騒ぎ出す感覚を唾を飲み込みこらえる。この向こうには  
リトも西連寺もいる。西連寺に関してはオレが宇宙人と知らないは  
ずだし隠したい訳じゃないけど知られたい訳でもない。

「ララ… オレが何のために地球へ来たか、ザスティンから聞いてる  
な？ オレの後継者…… つまりお前の結婚相手が正式に決まった。

相手はこいつ…… 結城リトだ」

な…… なんだと。あの野郎黙つて聞いてりや… リトはただの地球人  
の学生だ、そんなお前なんかの後継者になれるわけが無いというか  
させない。リトにはリトの人生があるしあいつは西連寺のことが好  
きだ。ララのことばくう思つてるかは解らないけど。

いやいかんイライラするな。オレが出て行つたらややこしくなるぞ。  
このまま立ち去るんだオレ… あこぞれ図書室もしくはコンビニへ…

「お… まさかイヤだとか言つんじゃねーだろうな。前に言つた  
よな？ オレの期待を裏切つたら、地球」とシブすつむ」

「ああ～やつてみろよ～」

「 ゆ…………有里ー…？」

「 雪ヶ岡君？」

「あ、ゆつづちだ

思わず飛び出してしまった。リトのためとか地球のためとかじやない、ただ単純にこいつがむかつくんだ。

「てめえゴリ……いるとは聞いてたが、まさかしゃしゃり出してくるとはな

「ああ？ いいから帰れクソちび野郎」

「はあ？ 誰に口聞いてんだ？ バカ野郎」

「お… おこ有里？ 何でこきなりでてきて喧嘩になつてんだ」

「ギド王？ いや… いかがなされ

リトとザスティンが何か言つてこる様だが、いつなつてしまつたらもう聞こえやしない。すっかりチンピラの睨み合ひのように血走つた目で眼をつけ合ひ。ただチンピラのそれと違うのは屋上のタイルがミシミシ音を立てて剥がれ始めているところだ。そういうば何だか大氣も「ロロロロ」と鳴り響いてる気もある。

「おこリト、こんな奴の言つこと聞かなくていい。安心しろ、オレがこる」「

「何勝手に決めてやがんだ、いいだろ？ こんな星潰してやるよ…」

「やつてみる？ てんだら…その空氣の抜けた風船みたいな体で

「舐めてんだらへ、おい舐めてんだらへ、殴つてやるよ、ソラが来こよ

「はつーてめのハエが止まる様なパンチで誰を殴るつて、笑えるぜ、おい笑えよー」

「ふつ潰してやるあ……」

「ふつ飛ばしてやるあ……」

「かかって！」「やああああああ……」

「おー、有里ー、どうしたんだよ、キャラ達、じょんかー落ち着けつてー！」

「ギ……ギド王ー、どうか」血重くだれこー」

オレもギドも完全にキレてしまつて今にも殴り合おうと拳を振り上げると、リトとザスティンが飛びついてオレ達を引き剥がした。

羽交い絞めにされながらもまだ暴れようとするオレ達を見かねたのか、

「やめやめー……」

初めてみる真剣な表情をしたララが間に入りそう叫ぶ。その勢いにオレもギドも押し黙つた。

「私……ソトとは結婚しないー……」

「なー、結婚しないつてビーーー！」

「パパは本当は王位を渡して遊びたいだけでしょ！」

ギドが図星を指されギクッといつた表情を浮かべる。

「リトの気持ちを無視してまで…一方的に結婚しても嬉しくないの！……私ね、何となく気付いてたんだ。私がいくら好きって言つても…リトの本当の気持ちは私に向いていないつて事…それでもリトは優しいし地球の生活は楽しいからこのままでもいいやつて思つてた……でもやっぱりダメだよね、それじゃ……私はリトを振り向かせたい！振り向いてもらえるように努力したい。だからパパ、結婚の事はもう少し待つて」

ララもちゃんと考えていたらしい。リトのこと、地球のこと、結婚のこと。お姫様の我が仮だと思つてたが違つたんだ、ララも一人の女の子としてリトとのことを想つていたんだ。

リトが好きなのは西連寺だしオレもそれを応援するつもりでいた。だがララの真剣な告白を聞いてしまつた今では……。この子にだつて幸せになつてほしい。

よし決めた。一人とも応援しよう。リトがどちらを選んでもいいように、どちらを選んでも幸せになれるように。

「やつと、これを使う決心ができたから……”ぱいぱいメモリーくん”」これで地球のみんなから私の記憶を消す

え、消しちゃうの？決心したそばから？ひどくない？

「“じめん…リト、プリンセスとか婚約者候補とかそういうのナシでもう一度…ゼロからの私で頑張つてみたいの。私の最後の我が仮…聞いて」

「おれこれそういう流れだ。オレも、ギドもザスティンもすっかり置いてかれてポカんと立ち廻りしている。

「春菜…友達になつてくれてありがと…楽しかったよ。また仲良くしてくれるとうれしいな…」

「ハラさん…」

「あ…待てよハラーそんな事しなくとも…」

「オレ的にもやめて欲しいな…」

「わよなう…」

ああ無常、ぱいぱいメモリーくんのボタンが押され街を包み込むほどの光が溢れ出す。

目を開けていられないようなそれを体全体で受けながら、なるほどこれなら記憶くらい奪えそうだと胸中納得する。

そういえばあのバカ殴つてなかつたなとか、キレたとこまたリトに見られてしまつた…恥ずかしい、とかそんなことを考えながら薄れゆく意識を手放した。

・・・・・。

・・・・・。

・・・・・。

結果としてみんなの記憶は消されなかつた。なんでもハラの作った

ものでまともに機能するものはないらしい。ザスティンなんかは効いていたらしいけど。

この日はリトにとつても、ララにとつても、西蓮寺にとつても、オレにとつても一つの分岐路として大切な一日となつた。

## 史上最悪のクラス

季節はすっかり春。道端に咲くうすら赤みを帯びた桜の花びらを、春一番が空へ舞い散らせ通いなれた通学路を彩らせている。

そんな春一色の道を欠伸をしつつ歩く。それにつられてかは知らないが壙の上で寝転がっていた黒猫も口を大きく開けて欠伸をしていた。暖かい心地に眠たくなるのは猫も一緒といふことか。

「今日から新学期かあ……」

誰にともなく呟く。

そう、今日は春の一大イベント始業式なのだ。クラス発表が掲示板に張り出されるというのでリトや猿山と学校で待ち合わせてある。うちの高校は元々クラス替えで大々的に生徒を変えることはせず、ましてや養護教諭のくせに職員会議で大きな発言力をもつあいつに頼んでるのでリト・ララ・西連寺・猿山・里紗・未央あたりはオレと同じクラスになるはずだ。

リトの恋を応援するならやつぱり同じクラスにいてもらつたほうが良いに決まっている。勝手に裏から操作してしまつたので若干の負い目もあるがこれも親友の恋路のため、あとオレの楽しい学園ライフのためだ。

いつもより少し早めの時間に学校に着くと、すでにゲタ箱前に設置された掲示板の前に沢山の人だからが出来ていた。

遠巻きに眺めてみたがリトと猿山の姿は見えない。自分だけ先に見てしまうのもつまらないのじばしこで待つていようと校門にもたれかかると、背後から甘つたるい人工的に作られたような香りがブンと匂つてくる。

何事かと振り返つてみるとその匂いの出所は、オレの姿を見つけ片

手を上げながら近づいてくる猿山だった。

「よつ、早いな有里」

「おはよつ。つてお前…もしかして香水付けてんのか?」

「やつぱり解つちやう?ほりやつぱり今日初めて会つ女の子に良い第一印象持つてもらおうと思つてやー。取つて置きの香水かけて来ちまつた」

そう言つて笑う猿山の首から手から、今も鼻を突き刺すほど匂いが漂つてきている。なまじ地球人より嗅覚が優れている分そのダメージも凄まじいものだつた。なんだか段々気分が悪くなってきた…。

「こしたつてちょっと付けすぎだら…オレがファーリーズ持つてたら一本空にしてるレベルだぞ」

「そんなに付けたわけじゃないけどなあ…」

「わつこやリトのやつ遅いな」

「なんか遅れそつだから先に一人で見ておいてつてさ。わつきメルが来たぜ、お前のところには来てねえの?」

言われてポケットの携帯を取り出し開いてみると、確かにリトからの着信メールが一件あつた。学校へ行く時はいつもマナーモードにするのでバイブに気付かなかつたらしい。

「んじや先見でおきますか」

「おう、にしてもすげえ人だな、あれじゃあクラス発表の紙見えねえぜ」

さつきまで10人程度だった人ばかりがいつのまにやら2~30人の大人數になつていて。あれでは後ろからは見えないし搔き分けて前に行くのもしんどそうだ。

こうしてゐる間にも次々と他の生徒がやつてきてゲタ箱の前は軽い渋滞が出来上がつてゐる。

「くわあ、こんなことならもう少し早めに家出でれば良かつたぜ……そりだ、有里ちょっとしゃがめ」

「肩車したいとか言つくなよ」

「その通りだ！お前の名前も見てやるからさー」

渋々腰をかがめると、ひょいと足を持ち上げて猿山が肩に乗つかつた。後頭部に当たるほのかに柔らかい感触が心を蝕んでいくのがわかる。あとすげえ香水くさい。こいつどこにも付けてんだよ。

「よし！立ち上がり有里！」

「はあ、お前名前見たらとつとと降りろよ」

よいしょと一声かけて腰を持ち上げると上に乗つていった猿山が、たけー！すげー！と朝だというのに大声を出す。当然周りの生徒達の注目を集めてしまい今すぐにでも猿山を地面に落としたい衝動に駆られるが、首に4の字固めでも極められかねないのでしばし耐えることにする。

「有里、前進だ！」

「あんまり大きな声だすなよ恥ずかしいんだから」

上で騒ぐ猿山にふらふらしながら掲示板のまづく近づいていく。自分の名前を探していた他の生徒達がこちらに気付くとぎょっとした顔をして距離をとってくれるので思いのほか掲示板近くまで来るところができた。

「んー……もっちょこ右。 あつた！俺△組だ！おー有里も同じクラスだぜー！」

「そいつは良かった、また一年ぶりしくな

「ひやつせラリちゃんも西連寺も同じだ！ついでにリトもー嬉しいけどあんまり新しい顔ぶれはねえなあ」

リトがついでつて……オレも他の生徒の後頭部が作り出す壁の隙間を狙つて覗いてみるが確かに半分くらい同じクラスメイトみたいだ。

「よし、確認もできたしこのまま教室までいくか

「バカ言え、降ろすぞ」

さすがに首と肩が疲れてきてたので、猿山の足を掴んでいた手を思い切り持ち上げる。バランスを崩した猿山は地球の重力に引っ張られるまま背中から地面に落っこちた。「ぐへえ」なんてやる気のない蛙みたいな声を上げている。

背中を押されて痛がる猿山を無視してオレは校門へと視線を向ける。

登校してくる生徒はもうまばらになつていて、校門の外では走つている姿もちらほら覗える。コトのやつ、そろそろ来ないと遅刻になるなあ……メールがあつたから寝てるって訳でもないし第一そんなこと美柑が許さないはず。とするとララか？いやいくらトラブル体质とトラブルメーカーといったつてそんな毎日のよつてイベント起こしたりはしないだろ…うん、多分。道が混んでるとかそんな理由だよな。

「有里、なに突つ立つてんだよ。教室行くんだろ？」

「ん、そうだな。行くか？」

すつかり回復してけろっとしている猿山と掲示板眺める生徒達の後ろを通りながらゲタ箱へ向う。

2年生になつたので新しし靴箱を使つことになるのたかオレも猿山も場所が解らない。一人でどこだとキヨロキヨロしていると、

絹を裂くような女子生徒の悲鳴が校舎に響き渡った。

「な、なんだあ！？」

「あつちか

突然の大音量に飛び跳ねてびびる猿山を置いて音のした方へと駆けつけてみると、そこには走り去る西連寺の後姿と、なぜか全裸ではしゃぐララ、そしてなぜか全裸で頬に季節外れのもみじを咲かせているリトの姿があった。と…冷静ぶつてる場合じゃない。

「な、なにやつてんだ！」

「有里い、聞いてくれよ…オレ春菜ちゃんに嫌われちまつたよ…」

「あ、ゆつちだーおはよー」

「おはよーララもリトもオレと同じクラスだつたぞじゃねえよー…とりあえずララはペケで肌隠せ、リトは…とりあえずオレのブレザーと代えの体操着ズボンあるからそれ履け」

「おつけー、ペケー学校の服お願ひね」

「新学期だつてのに…どうじよつ有里」

「いいから服着ろつひとつ有里バカ！」

何があつたかは解らないが、春菜ちゃんがあ春菜ちゃんがあと言つて服を着ないリトにオレが無理矢理ズボンを履かせる。オレの学生服のスペアが保健室に置いてあるから今日はそれで何とかなるだろ。パンツの代えはさすがに無いから…いや御門なら持つてるかもしない。

「つてうわー服着ないと…！」

「そう言つてんだろ、ほら保健室にオレの学生服あるから取りに行くぞ。早くしないとH.R始まつちまつ」

やつと現状を把握して顔を茹蛸のようになに真つ赤にするリトの手を取つて立たせ、出来るだけ人目を避けながら保健室へと向つた。

「…あのが彩南高校の風紀を乱す一人…結城リトヒラ。あ…朝から全裸で登校なんて…そして彼が…」

・・・・。

・・・・。

「よ、リト。なに汚えない顔してんだよ。西連寺と同じクラスになれただぞ」

「有里か…制服サンキューな。洗つて返すよ」

「いやいいよ、何かあつた時用に保健室に置いてあるだけだし、下着も新品だったからあげるよ」

あの後保健室へ行くとすでに制服と新品の下着が御門によつて用意されていた。こいつ盗聴器でもしかけてんのか?と思つが今は問い合わせてる時間はない。

ぱぱつと着替えて教室へ急ぎなんとかHRには間に合つた。それからすぐに体育館で始業式を終え、今は教室で担任教師の到着を待つ間の雑談タイムだ。

「ああ、ありがとうな…」

そう言いいながらリトは西連寺に視線を向けるが、向こうもひきちらを見ていたらしく目が合つと顔を背けられてしまつていた。

なんでもララの作った”ぴょんぴょんワープ君・改”で学校まで来たら、着いた先が西連寺のスカートで、しかも自分は全裸。それに驚いた西連寺が叫び声を上げてテニス部のスナップの効いたビンタをお見舞いされたらしい。嫌われてしまつた、と始業式の間もずつ

と落ち込んでいた。

「気にするなって。西連寺も恥ずかしかったのと、ちょっとびっくりしただけだろきっと。謝れば大丈夫だつて

「あ、そりだよな。わざとじゃないし真剣に謝つたら許してくれるよな」

オレの励ましが功を奏したのかちょっとだけリトが元気になつた。その後いくら待つても先生が来ないので猿山を職員室へ送らせるとどうやら話し合いやら会議とかで遅れているらしい。待つている間に教室の掃除でもしておけと言わされたので、みんなで掃除を開始する。

春休みの間あまり使われていなかつた廊下でも結構隅っこのはうはうがたまつてゐる。それをオレはリトと雑談しつつ適当に箒で掃いていると、

「ちよつとあなたたち一話があるんだけど

「？」

「どなた？」

綺麗な長い黒髪のちよつとツリ田な女の子が仁王立ちでこちらを睨んでいた。そういうばこの子、さつき教室にいた気がする。

「私は古手川唯…元1-Bのクラス委員よ。1年の時はA組のクラス委員の西連寺さんが甘いせいであなたちも好き勝手やつていたようだけど、私が同じクラスになつた以上そうはいかないわ

「え？ 好き勝手つて… 何？」

「主にリリカのことだろ」

去年はアニマル喫茶をやつたり教室の屋上半壊させたり何かつつたら爆発せたりさせてたもんな。他のクラスからすれば確かに好き勝手やつてたかも。

「それに私、見たんだから。いきなりゲタ箱でその…裸になつたり…」

「げ…」

「見られてたのか… オレと西連寺しかいないと思つてたのに。『めんフォロー』できないわ」

そういうえば微かに視線を感じてたけど御門かと思つたらこの子だったのか… クラスマイトに全裸を見られるとかオレだったら登校拒否もののトラウマだけど、リトはオレの横であつけらかんとしてるのどうやら平気らしい。さすが鈍感BOY。

「関係ない顔をしてるけどあなただつてそりやー雪ヶ岡有里ー」

「は？ オレは別に… つていうかなんで名前知つて」

「あなたがこの前教室で上級生と抱き合つているのを見たんだからね！ 校内であんな…ハレンチな！」

教室で上級生？…… そうか、沙姫が抱きついてきた時の。思い出し

たあの時も廊下から視線を感じたけどあれもこの子だつたんだな。  
ということは大分前からマークされてた？そんなに風紀を乱したり  
暴れたりはしてないはずだけど…。

「お前…硬派な顔してそんなこと…」

「ちひげえよ、こいつの前じゃなり沙姫に押し倒されたんだよ」

「ああ天条院先輩な。最近やたらと言ふ寄られてるもんなお前」  
「ちよつとー無視しないでよね。理由はどいつも教室で抱き合つて  
いたことは事実。今後このよつた風紀を乱す行為は控えてもらいま  
す」

そんなこと言われても…男子トイレにまで入つてきて抱きついてく  
るような非常識な人にオレがどう対処しろっていうんだ。  
その度に凛の怒りはエスカレートしてくし仲良かつた綾が最近話し  
かけてくれなくなつたし、むしろ困つてるくらいだつてば。

「どうしたのー？」

教室の方まで聞こえていたのが篠を持ったララが扉を開けて様子を  
見に来た。

「出たわね学校一の問題児ララ・サタリンデビルーク！そのシッポ  
！学校にそんな玩具持つてきていいくと思つてるの？」

「いやこれは玩具じゃなくて本物のシッポなんだ」

「そりだよーほら動くでしょ？だってわたし宇宙人だもん」

そんな簡単に宇宙人つじぱりしきやつんだ。まあワラは元々隠してたわけじゃないけどね。

「宇宙人…だなんてそんな…非常識なー。」

「まあとうあえず先生も来たし教室戻ろつぜ」

ピーパピコと動くララのシッポを見ながら動搖している古手川唯の背中を押しつつ教室へ戻る。すでに掃除は終っていてほとんどの生徒が自分の席に着いていた。オレ達も急いで席に座る。

「え～～今日は新学期なのでこのクラスのクラス委員を決めたいと思いまふ。誰か立候補者はいまふか?」

教室が静まり返ったのを見て老年の担任教師が口を開く。

「はいー。」

と古手川唯が凛々しい声と共に左手をピンと伸ばして上がる。どうやら立候補するつもりらしい。風紀がどうこうと言っていた彼女ならぴったりかもしれない。他のクラスメイト達は自分じゃなきゃ誰でもいいやみみたいな顔をしている。

立候補者一人ということでクラス委員が古手川に決まりそうな空気になりかけた時、何を思ったかララが立ち上がった。

「はい！私は春菜がいいと思こますー。」

「へ？」

まさか自分が推薦されると思つてもいなかつた西連寺が驚いた声をあげる。どういふこと？といった顔でララの方を見ているが当の推薦者は自信満々の素敵な笑顔を浮かべている。

「立候補者一人に推薦者一人ですか…それでは多数決で決めましょう、紙を配るのでみなさんクラス委員をして欲しいほうの名前を書いてください」

他に手を上げる人もいなさうなので担任教師が教卓の引き出しから人数分の紙を取り出し全員に配る。

どうしようかな…あの唯つて子はクラス委員やりたそ�にしてたしね。いや待てよ、ここで西連寺をクラス委員にして男子のクラス委員をリトにすれば…完璧じやないか。そうと決まれば西連寺に一票だ！

全員分の投票用紙が先生の下へ集められ統計がとられる。オレはワクワクしながら結果発表を待つた。

「ええー古手川くん、13票。西連寺くん20票。といつワケでクラス委員は西連寺くんにお願いします」

おおーやつぱりA組のクラスメイトが多いだけに西連寺が勝つたか。古手川のやつかなり悔しそうにしてる…でも多数決だししようがないよな。まだ風紀委員もあるわけだし。…ん？ そういうえばクラスメイトは全員で34人なのに票は33しかなかつたぞ？ 無投票でもいたのかな？

「ええーそれでは次に男子のクラス委員を決めたいのですが、1票だけ何故か雪ヶ岡有里くんの票が入っていたので雪ヶ岡くんにお願いします」

「 「 「 意義なーし」 」 」

「 はあ？え、 なんで？」

「 一人のうちどちらかを、 しかも女子のクラス委員を決めるつていつてんのになんでオレの名前が投票されるんだよ？あれか、 オレが女顔で実は男装キャラだと思われるからか？ちくしょう…こんなことするやつは猿山しかいねえ！」

と思って猿山の方を見てみるが、 すでに興味を失ったのか机に突っ伏して寝ていやがる。 もしあいつが犯人ならこっちを向いてニーマーマを笑っているはずだ… とすれば誰だ？

「 雪ヶ岡くんお願いできますね？」

「 え…いや、あの…やらせていただきます」

今さらリトを推薦なんてできないし、 したとしてもクラスでのリトの心象を悪くしてしまう。 しかもこの空気…断る選択肢が与えられていない。 オレに出来るのはクラスメイト達がパチパチ鳴らす拍手の中で力なく肩を落とすことだけだった。

幸先悪い新学期だよ。

## クラス委員で暮らす日々

「せつーつ、れい」

オレの氣の抜けた号令で我がA組は休み時間を迎える。

初めのうちは声が裏返つたり小さかったりしてまともな号令などできなかつたが、4月も後半になつた今はそれなりに様になつてきたと自分では思う。

それにオレの号令で大勢の人が動くのは何か得も知れない優越感がある。まあ誰がやっても変わらないんだろうけどさ。

「よつ委員長。毎日大変だな」

「ほんとだよ」の野郎。何度も聞くけどオレに票入れたのお前じやないんだな?」

椅子に座つて一息ついていると猿山が背中をポンと叩きつつ話しかけてきた。

「何度も言つけど俺じゃねーって。ちゃんと西連寺に入れたぞ」

この質問をしたのは何度目だろ?。まだオレがクラス委員なんて慣れない大役に四苦八苦しているとき、猿山の奴休み時間の度に笑いにきやがつた。だからてつきりこいつの悪戯と思つていたがどうも違つらしき。ふざけたりバカ言つたりするがいつまでも嘘をつけるほど賢くも意地悪くもないし。

「じゃあ一体誰なんだよ…リトもララも西連寺に入れたっていうし

「もしかするとアレじゃね？あの古手川って子がお前と一緒にクラス委員したくて入れたとか」

「はあ？お前妄想は自分のことだけにしろよな

あの子がオレと？2年生になつて初めて会つた子が一日惚れして一緒にクラス委員をしたがるってか？

ないないない、あり得ない。だつてあんなにクラス委員をやりたがつていた子が自分に入れないはずがない。それに、

「ちょっと雪ヶ岡君？授業が終つた後の黒板を消すのはクラス委員の仕事よ」

「雪ヶ岡君、号令はもっと大きな声で」

「クラス委員が学校でお菓子を食べない！」

なんて隙あらば小姑のようにしかつてくるような子がオレのことをどうこう思つているはずが無い。しいていうなら棚からぼた餅的な感じでクラス委員になつたといい加減なオレにむかついているぐらいだろう。

そのおかげでちよつとはクラス委員らしくなれたわけだけど……つていうかここのはポジションはリトがこるべきだろ。一緒にクラス委員をして会議に出たり放課後までプリントの整理をしたりして気付けば教室には一人きり。近づく体、触れ合つ手、惹かれあう瞳、真つ赤な夕日の差し込む光に照らされて学び舎の中一つの想いと一つの体が溶け合つように一つに……。

「雪ヶ岡君！ぶつぶつ言つてないでクラス委員は次の授業の準備のために先生の所へ行かなきゃでしょ！」

「い…古手川…。」めんなさい忘れてました、すぐ行つて来ます」

気付けば妄想の世界に漫つてしまつていた頭を振るつて正氣に戻す。これじやあ猿山のことを笑えないな…なんて言つてる間もなく、腕を組んでこちらを睨む古手川から逃げるように教室を飛び出した。

・・・・・。

これじゃアリトに告白をせるなんて、遠い道のりだな。元々恋愛に関して奥手だし、タイプの違う一人の美少女のどちらかを選べだなんてなあ……。

ん? そういうればララはリトのことが好きつて言つてるけど西連寺つてリトのことどう思つてるんだろ。というか付き合つてる人つていのかいないのか、それさえも知らないぞ。里紗・未央とはよく話すけど西連寺とは挨拶交わすぐらいだし。見た感じ彼氏がいるつてようには見えないけど…。よし、ここはいっちょ本人に聞いてみますか。

とはいひます自分の仕事をしなくては。次の地理の授業は黒板から下げるバカでかい地図が必要だつたりする授業なので、使うかどうかを職員室までいつて先生に聞かなくてはならない。

少し緊張しながら職員室の扉を開ける。学校の中でも特に異質な空気を放つこの場所はやつぱりどうしても好きにはなれない。この場所だけ社会の匂いがするせいか、それとも屋上を壊した時に教師3人がかりで説教されたからか。オレには解らない。多分後者だろうけど…校舎だけに。

「雪ヶ岡君?」

「お…おおっ、西連寺か」

そんなくだらないことを考えていたオレの意表をつくよつて西連寺が話しかけてくる。どうやら先に先生の所に行つていったようだ。さすがオレなんかよりも仕事が早い。

「今日は小テストをするから地図はいらぬって」

「そつか。小テストか…じゃあ教室戻りますか」

一夜漬けが効かない抜き打ちの小テストに滅法弱い自分としてはさつさと教室に戻つて悪あがきをしなくてはならない。あとここにいると屋上の修理代などをぐちぐち言われたりするので尙更早く出なければならぬ。全く、オレだけが悪いわけじゃないのにね。

職員室の方へ頭を下げつつ退室する。意図せず西連寺と一緒にになつてしまつたが、これは先ほどの疑問を聞くチャンス。  
ちようどひと氣も無くなつて来たのでと話しかけようとしたが、  
……どうやって話しかけよう。

「友達から頼まれたんだけど、西連寺って好きな人いる?」

とか?いやダメだ。友達が少ないと定評のあるオレがこんな聞き方したらリトか猿山どつちかしかいない。

「知り合いからたの」

いや言い方変えただけか。何かいい聞き方は無いものか…。  
と西連寺と二人きりなんていうリトが羨ましがるシチュエーションで歩いていると、前方から体操服をきた沙姫・綾・凜の3人がこち

「歩いてくるのが見えた。

「あ、有里様ではありますか！」

「」たちは。今から体育？」

「今日はバレーですわ。そんなことより有里様、私の体操着姿どうがしら？」

「あー…可愛いよ。普段の制服姿もいいけど体操着つても健康的でいいね」

「んふふ…ふふ、そうですか。では失礼しますわ！」

オレの言葉で上機嫌になつた沙姫がニヤニヤ顔で立ち去る。最近こうやつて何かにつけて褒めて貰いたがるのだ。やらないと沙姫の奴目に見えてがっかりするし凛に竹刀で叩かれる。この前なんか「いつもと違う」とか、有里様なら勿論わかりますわよね」なんて言つてきたけど正直全くわからなかつた。凛にしこたま殴られだし沙姫は口を聞いてくれなくなるし綾はあるあるするしでつらかつたなあ…。リップ変えたのなんて誰がわかるんだよ。

「今のつで、天條院先輩？」

「や、何か気に入られたらしくてね」

「その、付き合つてるの？」

……オレは驚愕したそしてびっくりした。眞面目で清楚な西連寺はそんなことを聞いてくることも、自分が聞こつとしていたことを逆

に質問されたことにでもだ。

「ど…どど、どりしてそんなこと聞くの？」

「私の友達がね、知りたいって言つてたから」

良かつた。知らないうちに高感度でも上げたのかと思つた。西連寺の友達つていうと…いや待てこれはセカンドチャンス。

「付き合つてはいなによ。仲良くはしてもらつてるけどね。…付き合つてる人も今はいないな。好きな人は…広い意味では沢山いるよ」

リトに蜜柑に御門にヤミ、里紗に未央に沙姫・綾・凜。ララや西連寺や猿山だつてみんな好きだ。でもそれはきっとライクであつてラブじゃない。その境目がオレにはまだよく解らないのだ。そりや、抱きつかれれば心地いいし手をつなげば嬉しくなる。でもその先をとなると、

……やっぱりオレには解らない。これじゃリトをヘタレだなんだつて言えないな。

「そういう西連寺はどうなの？付き合つてる人とか好きな人つていの？」

「わわっ私はそんな…付き合つてる人なんて…。す…好きな人は…い、いるけど」

やつぱり付き合つてる人はいないらしい。放課後といえれば部活のテニスに打ち込んでいるし、部活が無い日は直帰。時々里紗や未央と

遊んで帰つたりするらしいけど…付き合つていなければ予想通り。でも好きな人がいるとは…。ここで「好きな人って誰?」って聞くのは簡単だけど、それがリトじゃなかつた時のダメージがでか過ぎる。付き合いは長いらしいし嫌つてる素振りはないから、リトが好きって可能性は高い。どうする、聞くか?

「好きな」

「ちょっと雪ヶ岡君! チョークの補充はクラス委員の仕事でしょ!」

せっかく思い切つて聞いてみようと思ったのに、教室の前で待ち構えていた古手川に遮られてしまつた。さすがにチョークは先生の仕事だと思うんだけど、ここで逆らつて機嫌を損なうとクラス委員とはなんぞやという有り難い説教を頂くことになつてしまつ。

「あー、うんそうだ。忘れてた。今からやるよ、教えてくれてありがとね」

「わ、解つてくれればいいのよ。」

「それじゃ、私行くね」

邪魔しちゃ悪いとでも思ったのか西連寺が行つてしまつた。今さら追いかけて聞いた다는のもおかしいしすっかりタイミングを見失つてしまつた。まあ付き合つてる人がいないと解つただけでも収穫<sup>獲。</sup>

「チョークチョークつと…白いのが短くなつてるだけか」

黒板の下に付いているチョーク入れを開けてみると最も消費される白いチョークが小指の先ほどの大きさになつていた。不精な先生な

らこれでも普通に授業をするだろうが、なるほど確かに書き難そうだ。教卓の中にある予備チヨークから白色を出してチヨークに入れ补充する。」「うう細やかなところに気付くあたりさすがは元クラス委員ということか。口づるさにだけってわけでもないんだな。

クラス委員の仕事も終わり時計を見れば休み時間は後2分。用を足す用事もないし教科書でも開いて小テストの悪あがきでもするか、と朝買つておいたペットボトルのお茶を口に含みつつ椅子に座る。

「あの古手川の態度、オレの説がより濃厚になつてきたな……」

「それだけはねえから」

何でも恋愛<sup>1</sup>ことにしたがる猿山の妄言をあしらいながら地図帳の上で踊る複雑怪奇な国名地名を頭の中に詰め込むのだった。

・・・・・。

・・・。

放課後

「よつ、リト！一緒に帰ろうぜ」

「そうだな、どつか寄つてくれ？」

「んー、小腹減つたしコンビニでも寄つてくれか」

学年が変わつてもいつも通りリトと一緒に下校する。最近ララと3人で帰ることも増えてきたし時々西連寺や猿山、里紗・未央と大所帯で帰つたりすることもあるが基本的には一人きりだ。

すっかり見飽きた結城家への帰り道を一人肩を並べて歩く。

「そりいえば今日西連寺と話したよ」

「へー、どんなこと?」

「付き合つてる人はいないってさ」

「ま、まあまあマジで!...?...?」

のんびりと歩いていたリトが食いついてくる。

「それと、今好きな人がいるらしいぞ」

「好きな人!/?そ… そ… とか好きな人か… 誰なんだろう?」

西連寺の好きな人、というのが自分だという発想など全くないらしく告白もしていらないのに振られた様な落ち込みようを見せるリト。ここはそれでもオレに振り向かせてやるーくらいの男気を見せて欲しいところだけど、そんなものがあるならこいつやつて恼んでいいだろうな。

「その好きな人つてリトのことだつたりしてな」

「えー?いやいやいやそんな……春菜ちゃんがオレのこと…いやいや、でも…」

オレの言葉でさつきまでの落ち込みようが嘘のようにもじもじしますリト。さつと頭の中では西連寺とカップルになつてこちやこちや

する妄想でもしていいんだね。『テレーツとだれきった顔がそれを物語っている。

高校生男子つていうのは妄想する力が高いのかな？オレの周りだけかもしれないけど。

「やついえばコンビニ行くんだったな、あそこ寄つてくれ

「あ、ああやうだつたな」

どんな妄想に発展したか解らないがリトが頭を抱えてぶんぶん振り回し始めたのでさすがにやばいと思い、ちょいと見つけたコンビニで話を変えさせた。

自動ドアをぐぐると真っ先に惣菜パンのコーナーへ。そのせいで肉まんのどれがいくつあるかもチェックしておく。

焼きそばパンを二つ手に取つてから他に何を買おうか選ぶ。今日はコロッケパンかツナパンの一択だな……。

「なあリト、どつづかがいいと思つ?」

「焼きそばパンとの三択じゃないんだな……最近あまり食べてなさそうなツナパンでいいんじゃないかな」

最近こつてり系のパンに嵌まっていたからな……ツナパンは久しぶりかもしれない。よし今日は焼きそば2ツナ1肉まん1だ！

「それでよく太らないよな」

「その分消費してるしな」

ほくほく顔で店員さんからパンを受け取つているオレを苦々しい表

情で見つめるリト。

これを食べてなお夕食もぱちりとひとをしつて、コトからすればそりや太らないのが不思議だらう。ただ御門が言つこは、沸血族というのは食べても食べても太りにくいといつ世のぱちり系女子垂涎のような体質をもつてゐるらしい。むしろ食べないとどんどん痩せててしまうのだ。なので、焼きそばパンというカロリーの化け物みたいな食べ物を体が自然と欲するというわけである。別にこんな体質じゃなくても食べてたと思うけどね。

「よし、今日はリトん家寄つてこようかな」

「今日も、だる」

「ちよつと雪ヶ岡君……」

結城家のふかふかソファで美柑のいれてくれた緑茶をすすりつつ焼きそばパンを頬張れる幸せを夢想しながらコンビニの感度の悪い自動ドアを出でみると、まばゆい黒髪をたなびかせこちりを睨む古手川唯がいた。

「なんだここに?」

「なんでじやないわ、クラス委員ともあるう人が下校中に買ひ食いなんて良いと思つてるのー」

「えーっと、長くなつそつだから俺先に行くな。また明日ー・有里、頑張れよ」

「おこりト見捨てるのかよ助けてくれよ」

「自分で立候補していないとはいっても票を淹れてくれた人がいたんだからその人のために努力するのが筋つてものじゃないの。雪ヶ岡君はまず自覚が足りていないわ、クラス委員というのはそのクラスの代表になるわけでその人がこうやってだらしないことをしているとクラスメイト全員がだらしないんじゃないかって思われてしまうの。そんなクラス委員が教室で上級生と抱き合っているなんて：私の目が黒いうちは一度とそんなことさせないんだから。ちょっと聞いてるの？」

コンビニの前で正座をさせられ延々と矢のように飛んでくる古手川の言葉に耳を傾けながら、店員さんとコンビニに入していくお客さんと心配になつて様子を見に返ってきたリトの視線に晒されて、もしかしたらオレって幸薄いのかなとかお祓いでもしてもらつたほうがいいのかな？と諦めの境地の中であつ思つのだつた。

クラス替えがあつたとはいえ学校生活も2年目ともなれば「ゴールデンウィークを過ぎた教室に若干の冷めた空気が流れてしまつのは仕方の無いことだと思つ。

日常が習慣化され退屈な授業と狭い運動場を教師の決めたノルマの通りに走り回るだけの日々。ある生徒はまあ現実つてこんなもんだよな、と達観したつもりになつてそれを受け入れる。ある生徒はそんな平坦な日常の中に刺激を求めて積極的に行動を起こす。

「ねーねー！旧校舎で幽霊がでるんだって！見に行こうよ！」

そういうて教室の隅っこで騒ぐ里紗と未央はどうやら後者の部類に入るらしい。

「幽霊つてオバケのこと？」

「まー似たようなもんね。最近噂になつてゐるのよ！」

自分の机に腰掛け、買い換えたばかりの携帯を開き液晶画面の端っこに表示される興味のないトップニュースを眺めながら、里紗達の会話に耳を傾ける。幽霊がどうのこうのという話はオレも猿山から聞いた覚えがある。その話を出した時点で好きなアイドルの話に変えてやつたが…。そのせいで具体的な話は聞いていないのだ。

里紗・未央の話にララが興味を持つたらしく、3人でガヤガヤと盛り上がっている。女の子というのは総じて噂話が好きな生き物だが、おの面子はあまりよくない気がする。

「はつ、幽靈なんてただの噂だろ？ありえねーよ」

その話をリトも聞いていたのか若干焚き付けるように会話に参加する。実は初めから会話に参加していた西連寺が怯えていたから、だつうが正直その言葉は迂闊だと思つ。

「じゃあセーホントかどつかみんなで確かめに行こうよー」

当然行動力の塊であるララがこんな提案をするに決まってるし、若さに溢れる里紗・未央は当然それに乗る。幽靈の類が苦手そうな西連寺もその3人に押されでは断りようがないだつう。そんでもってララと西連寺が行くならリトも行くことになる。やつなれば自然と、

「ゆりつちも放課後旧校舎前集合ね」

「いやオレ行くとも行つてないんだけど……」

「ゆりつち来なきや楽しくないじゃーん。いいから来るの」

オレの参加も義務付けられる訳だ。幽靈なんて居るわけないし怖くもないし何とも思つていなが、正直行きたくない。別に怖くないけど。

かといつてこんなに目をキラキラさせている女の子2人のお誘いを断れるほどオレは弁も立たなければイケメン力もない。

「放課後に旧校舎の前ね……行かせて頂きます」

残された選択肢を選ぶことしかできなかつた。

・・・・・。

•  
•  
•

彩南高校には敷地の隅のほうに追いやられるよひの一つの建物がある。そう、旧校舎だ。

柱や床の老朽化や耐震性の問題により数十年ほど前に新校舎が建てるうことになり今では危険とうことで立ち入り禁止になっている。今は倉庫的な役割として細々と活躍していたらしいが、今回は幽靈騒ぎの舞台に指名されたというわけだ。

「せつぱんせめない?」

「いいまで来ておいてそんなつまらないこと聞こひになしないよー。ほら行くよー。」

言われたとおり旧校舎にオレ・リト・ララ・西連寺・里紗・未央の6人が揃った。おかげ様で今日一日憂鬱な気分で過ごしたオレが最後の悪あがきに撤退を提案してみるがあつさりと却下されてしまう。校舎はやはり老朽化がひどく所々窓ガラスは割れ外壁は剥がれ落ちサッシは赤錆でボロボロになっている。幽霊うんぬんよりまず危なくて入りたくない。

よしここはクラス委員としてみんなをなんとしてでも説得するぞと意気込んでみるがすでにオレ以外の全員が旧校舎へと入っていた。まだ夕方だというのに、木々に囲まれた旧校舎付近はひどく薄暗い。こんな場所に一人置いていかれるのはごめんなので、オレはこちらを向いて手招きをしている里紗達の所へ小走りで駆け寄るのだった。

先頭にララ。その後ろに里紗・西連寺・未央。そしてなぜかフライパンを持っているリトに最後尾のオレ。といった布陣で、ギシギシと

音を立てる旧校舎の床板を歩いていく。

人の出入りの無くなつた建物独特の凜とした空気に、

「おーい、幽靈さんいますかー？」

とフフの間の抜けた声だけが響いている。

「ハラさん……別に呼ばなくとも……」

入つてまだ10分も経つていないのですでに涙目の中連寺。その震える手はずつと里紗の袖を掴んでいる。…その役目はリトだろ、なにやつてんだ。と思うがオレもリトの裾をすつと掴んでるので人の事言えない。別に怖くは無いけどほら、暗いし足場も悪いしリトが転ぶとみんな転ぶ」とになるからね。

「キヤ ッ！」

「ギヤ ッ！」

すると突然西連寺が叫び声をあげる。ビツヤリ足元をねずみが通つたのに驚いたらしい。

「ビ、ビーした西連寺ー！」

「落ち着いて春菜」「ネズミが走つただけだよ、モー」

「大丈夫春菜？」

「ひ……うん」

「ねえ今春菜以外にも誰か大声出さなかつた?」

「そんなことより、あんまたいした事起きないな。幽霊なんてやつぱり噂なのかな」

一度は雰囲気に飲まれた一行だが、出合つたものがただのねずみ一匹とこいつですっかり緊張感が溶け始めていたとき、

「ゴトッ

と何か重たいものが落ちる、鈍い音が聞こえてきた。すっかり氣を緩めていたオレ達に再度緊張が走る。

「聞こえた?」

「うん…」の中から聞こえたよくな…」

12の視線が注がれるのは一つの教室の扉。静寂が辺りを支配する。微かに聞こえてくるのは誰かが息を飲む音と、

ミシッ…ミシッ…ミシッ…とこいつ不気味な足音だけ。

「ちょっと…誰か扉に近づいてきてるよ」

「やだ…まさか本当に…?」

動搖は動搖を誘い容易く人をパニックに陥れる。こんな時できる男は常に冷静沈着でいることを要求される。

(ももももしかしたら潜伏してる殺人鬼なんて事もありうるぞ…!)

どうする有里！？

(いやオレほりちよつと風邪気味つていうかそんな感じだから)

(さ)き腹から叫び声だしてたやつか風邪な訳ねーだろ!!)

生憎オレもリトもできる男からほど遠いらしい。男らしさが一番問われる場面だというのに扉からもつとも離れた位置で、パ一くり揉める野郎2人の滑稽さといつたら筆舌にしがたいものがある。そのまま碌な打開策も考え付く暇も無く、立て付けの悪い扉がガラツと開けられる。

「何事ですか？」

「アーラーん! こんなところで何してやるの?」

そこから出てきたのはいつも通りの黒い服を見にまとつたヤミだつた。

「プリンセス…それに有里。私はただここに古い本がたくさんあるので読んでいただけです」

ヤミが出てきた扉の上を見てみると確かに図書室の表札があった。御門に聞いたことがある、現図書室で読まれなくなつたり古くなつた本は旧校舎の図書室へ保管されている。書物の面白さは古くても新しくても変わらないし、人が滅多に来ないことも考えるとヤミにとってピッタシな場所といえるのかもしれない。

「ねーねーララちい」

「その「…たまに校内で見かけるけど…友達?」

「ヤー・ヤミ!! やんつてゆーのー・カワイイでしょー!」

「へー」「ホントかわいー」

それから今まで幽靈を怖がっていたのはどうへやら。里紗も未央もヤミに抱きついてほお擦りをしたり髪を撫でたりいじくっている。どうしたら良いのか解らないヤミは少し戸惑い気味にそれを受け入れていた。

「ん? 音がした」

「ええ…何かいます」

そんな姦しい光景をぼんやり眺めていた時、向こうの廊下の曲がり角で小さな音が聞こえた。ヤミも気付いたらしく里紗と未央を振りほどき1歩前に出た。オレもその横に並ぶように立つ。二人して身構えながら意識を前方に集中させた時、曲がり角から勢いよく飛び出してきたのは

「あなた達!..」

鬼の風紀委員古手川唯その人だった。

「そういうもんそうつてどこの消えたかと思つたらこんな所へ入り込むなんてー!」これは校則で立ち入り禁止のはずでしょ!

「なーんだ、ユイかー」

「なんだとは何よー。気安く呼ばないでー。」

伸び緊張を強いられたオレ達は見知った顔を見てまた息を漏らす。どうやら教室での話しがつそり聞いていたらしい。正義感の強い古手川のことだからきっと放つて置けなくなつたのだらう。こんな所まで女子一人で来れるなんてす、こと思ひ。いやホント。

「西連寺さんも雪ヶ丘君もどうこうもつークラス委員ともありながら一緒になつて、こんなとこひらくーーー。」

「「J...」「めぐなさー」」

「申し訳ないです」

早速お叱りを受けるオレと西連寺。あんなになりたがつていたクラス委員がこんな所で遊んでいるとあつては古手川の怒りも当然だろう。これからみんなで長い長い説教を受けるのか…まあここから出られるならなんでもいいや、と安堵した時、

『出て行け…』

機械のような、何の感情も何の生氣も籠つていない、地の底から湧き出でくるような声が辺りに響き渡つた。

『出て行け…』『出て行け…』『出て行け…』

その声はオレ達を囲むようにして、壁から屋根から窓から床から、いたるところから聞こえてきた。

すっかり和み談笑していた里紗達も、主にオレを説教していた古手川も、押し黙り辺りを見渡し困惑している。

「ちよつ……氣味の悪い声出すのやめてよリリセヒーーーー！」

「わ……私じゃないよー」

ララをいたづら者の非常識と認識している古手川が、ララのいたづらではないかと当たりをつけるが、どうやら違つらじこ。オレとしてもララの悪ふざけオチを期待したが、現実はそんなに甘くは無いようだ。

「困まれてるな……それもすごい数……」

「やうですね、しかしこの氣配……地球人のものとは……どうして私の手を掴むのですか？……あと手汗がすごいですよ？」

「いや、ヤハリが怖くないじつこと思つて」

「幽靈嫌いはまだ治つてないじつですね」

別に幽靈なんて怖くない。自分の才能の方がよっぽど怖い。それに自分よりか弱い人間がいたら手を差し伸べてあげる。それが紳士であり男つてもんだろうがー。あと手汗だけじゃなく、脇とか背中もすっつい冷や汗かいてるからね。手だけじゃないから。

そんな負け惜しみを胸中吐いていたとき、突然

「ゴバアツ！ーー！」

と爆音をかき鳴らしオレ達を支えていた床板が抜け落ちた。

・・・・・。

「「ついいたた…」『ララ様大丈夫ですか?』

「「へーん…」『ん…西連寺ちゃん!…大丈夫か…』

「「…一体何なのよ…」

「まさか床が抜けるとは…ヤハリ…里紗未央は上に残つたらしいね」

「びつやら下に落ちたのはオレヒコト、ララ・西連寺に古手川の5人。落ちる時咄嗟に手を離したのでヤハリ落しきにすんだようだ。里紗達は良い位置にいたのかな。

それにしても凄い埃だ。ただでさえ地面に積もっていたのが2階のそれと巻き上げられた1階のものが合わせつて軽い霧みたいになつている。これじや気管支をやられてしまつかもしれない。

「ねえ、早くみんなと命流して出ようよ…」「おかしくよ、それきの声…出て行けつて…きっと幽靈が」

「いや、ないないない。幽靈なんていないから。…………ないから。うん」

「そうよー幽靈なんて非科学的だわ!絶対信じないんだから……なんで雪ヶ丘君は私の腕を掴んでるの?あとすごい手汗…」

「いやいや、クラス委員たるもの他の生徒が怖くないようこそして歩きやすこよしこですね、そんなことよつこから出るのほ贊成!早く行こうぜ」

氣を取り直して話を誤魔化してオレ達は先へ進むことにする。すっかり恐怖に打ちのめされた西連寺はララの腕にしがみつき、オレは古手川の手を握り一見手を引つ張つてもらっているようにも見える形で一緒に歩いている。余つたりトは一人先頭を歩く形になつている。

一  
?  
：  
二  
た  
！  
」

ん？…うわっ！」

するといきなり古手川が特に障害物も見当たらないところでスカートを翻しながら転んだ。当然手を掴んでいたオレも一緒になつて転ぶ。

「ちゅうと雪ヶ丘君！足ひりかけたでしょ！」

「ひつかけてねーよーもしひつかけたなり一緒に転ぶはずないだろ、やめろよ驚かせるの」

「他に誰がいるってゆーの！」

「おいやめる、オレ達以外に誰かいるわけ無いじゃないか、やめろ」

オレと古手川が口論になりかけそうになると、西連寺がまたもや空氣を震わせるような叫び声を上げてリトの腕にしがみつく。さつきの声も怖かつたけど女の子の叫び声つてのもまた違った怖さがある。正直結構びびってしまった。いや違う、別に怖くなんか無い。ないぞ。

「今...ピアノの音が...」

「ピアノの音...?」

それもそのはず、オレ達の前にあるのは音楽室だからだ。当然ピアノが置いてあるはずだしなんなら問題はない。

ポロン... ポロン...

ヒカルにもはつきつ聞こえた。確かにあれはピアノの音で、音楽室の中から鳴っている。

「幽靈なんて... いないんだよな、古手三」

「あ、あたりまえでしょー...」

「じゃあ、確かめて来たらっ...」

「なんで私が... 一いつこのせ駄子の仕事でしょー...」

「おこおこ来たたち音楽室からピアノの音がして何がおかしいっていふんだ? それじゃ前のことだらば、わざわざ先にすすもうじや」

「誰ですか？」

(ちゅうひきなく開けた つー?)

「おこおこせやつにいた所調お約束。といったものが解らないから、

興味の赴くまま音楽室の扉を開ける。するとこれもお約束とこりべ  
きか、当然そこにピアノはあるが演奏している人などいない。

「あれ？ 誰もいないよ？」

ララ以外の全員の頭の中で（これは間違いなく幽霊の仕業…）いるつ  
！ 確実につ！）という確信が得られる。

いやしかしこのピアノが全自动演奏機能つきグランドピアノだつた  
という可能性も捨てきれない。確認なんかしないけど。こんな部屋  
死んでも入りたくないしね。衛生面的にな。

「と…とにかく、そんなにおびえる必要なんじゃないわ。幽霊なん  
て空想の産物、怖いと思つから変な音や変な物が見えるのよ」

「じゃあ唯も怖いと思つてたつてこと？」

「そ、そんなわけないじゃない！」

と氣丈に振舞つてはいるが、さつきから古手川の手は小刻みに震え  
ていることをオレは知つてゐる。だがそれ以上にオレの手が震えて  
いるので古手川自身そのことに気付いていないのだろう。

「ねえあつちに何かくるよ？」

すぐには他に興味が移るララが廊下の向こう側を指さす。本当はさつ  
きからガチャ…ガチャ…という奇妙な音が聞こえていて、それであ  
えて無視していたのだけど…。悪い予感はよく当たるというが、こ  
れはもはや確信だ。10対0で振り返れば碌なことにならない。そ  
う解つてもオレは振り返らなくてはならない。男の子だからじ  
やない、クラス委員だからじやない。得体の知れないものに後ろか

ら襲われたら恐らく心臓が止まつてしまつからだ。

覚悟を決めオレはゆっくりと後ろを振り返つてみると、

やはりそこには人体模型と骨格標本がぼんやりと闇の中で立ちぬく  
していた。

「で、出た　　つ！」

「あ…ありえない…幽霊なんて空想の…」

「…………」

「や、西連寺！？」

まず西連寺があまりのショックに耐え切れなかつたのか氣を失つて  
しまう。

『出て行け…』『出て行け…』『出て行け…』

先ほどと同じ声を呴きながら人体模型と骨格標本がゆっくりとこちらへ近づいてくる。

リトは倒れそうな西連寺を支えているし、古手川は腰が抜けてしまつたのか地面にへたり込んで呆然としている。オレだってできるものなら氣を失いたい。

そんな中、

「これどこから声だしてるんだろ　？」

と相変わらず緊張感の欠片もない声を出しながらララが骨格標本の頭をひょいと取り上げて後ろや口の中を覗き込んでいる。

「なななにしてんだ！」

「幽霊に失礼でしょ！はやく返しなさいっ」

「?...リストがそういうなり...よつと、わたたづ」

何で?といった顔をしながら骨の頭の首に取り付けようとしたララ  
だったが、落ちていた消火器に躓いてしまい模型と標本ともども一  
緒に倒れこんでしまう。

「ラララ大丈夫か！！」

すかさずリトが駆け寄る。オレも行こうかと思ったが古手川がまだ腰が抜けているようなのでここから動けない。バラバラになつた人体模型と骨格標本の不気味さに足が動かないでいるような腰抜けではないのだオレは。

۱۰۷

「なんだこいつらー？」

バラバラになつた模型と標本から野球ボールほどの丸つこい毛の生えたふさふさの生き物がいくつも顔を出した。

『やべつばれた！逃げろ！！』

その生き物達はリトと田が合ひや否や素早い動きで建物の隙間に逃

げ込んでいく。あの生き物……。

この幽靈騒ぎの原因が解り掛けってきたオレはさつきの小さな生き物が逃げ込んだ隙間へ近づいていたとき、

「バアッ！…とまたも轟音を響かせ1階の天井が抜け落ちてくる。旧校舎は相当老朽化していたらしい。立ち入り禁止にするのも頷ける。

『ぐはははは…思い知らせてやる…』

飛び散る天井の板と舞い散る埃と共に落ちてきたのは、一つ田のタコのような化け物だった。触手の一につにはヤミが、もう一つには里紗と未央が捕まっている。

これで確信した。ここにいる宇宙生物だ。あのちつこ生き物もここいつもどこかで見たことがある。なるほど、ここはここにいるの住処つてわけか。幽靈騒ぎは生徒を近寄らせないためってことか。正体が解ればこいつのものだ。

「化け物だ　　つ…」

「成敗…」

『むつーなんだこいつつーはやー…つぱれー…』

「わつやられた　　つ…」

すぐさまタコ型宇宙人に走り寄る。何本か触手を飛ばしていくがヤミの髪の応酬に比べたら止まつて見えるレベルだ。容易く回避しその頭に踵落としを決めると一撃で仕留めた。

『へへへ、俺達の縄張りにはいったこと後悔させてやるわ』

「なんか向こうからこっぽい来た　　つ……」

『ちよつーなんだこいつー?』『おいやつちいつたぞーぐはあー!』

『ちつどこにきやがつた!上か?おぼあー!』

「みんなやられた　　つ……」

待ち伏せでもしていたのかオレ達の来た道から宇宙人の集団が湧いてきたが、オレの照れ隠し兼ハツ当たりの前に一瞬で全員地面に倒れ伏すことになった。宇宙人恐るに足らず。

・・・・・。

・・・・・。

「さつきまで怯えていた人と同じ人とは思えないわ……」

「さすが衰えてはいませんね有里」

「すつづーこゆりつち幽霊みんな倒しちゃった!」

「なんかやりすぎ感すごはあるんだけど……まあいいか」

倒れたタコの触手から3人を救出しあと一息をつけた。異形の生き物達が積み重ねられて倒れている光景は圧巻だが、まあ怖がらされた仕返しがらいはしなきやということで。別にオレは怖くは無かつたけど。

「オバケ沢山いたんだね」

「いえ、彼らはオバケではありません」

「その説明は私がしますよ」

そういうて絶妙のタイミングで出てきたのはまさかの御門養護教諭その人だつた。白衣を着ると説明したくなるのは職業病の一種かな。

『〃...ミカドー』『あの有名なドクター・ミカドー』

その名前を聞いた宇宙生物達に動搖が走る。こんな辺境の星まで診察に訪れるものがいるぐらい御門の名前は宇宙では有名だし、

『デビルークの姫と...殺し屋”金色の闇”！？』

『ひいい～殺さないでっ！』

御門がララとヤミのことを紹介すると宇宙生物達は全員抱き合つてガタガタと震えだす。ギドの娘といえばそれだけで有名だし、賞金稼ぎをやっていたヤミも同じ程度には有名なのだろう。オレの名前は御門に目配せをして出さないで貰つた。オレはこの星では地球人のしがない高校生雪ヶ丘有里でいたい。

「それでなんでこの人達はここに住んでたの？」

「彼らはそれぞれ自分の星を追い出されたり家出したりした……そうね、野良宇宙人とも言ふのかしら。そんな彼らがこの星へたど

り着いて宿の無いもの同士集まつてここへ隠れ住むよつになつたと  
いうわけ

「なるほど」

「でもここですつと住んでいるのはまずいわね……仕方ない”私が”  
あなた達に仕事紹介してあげよっか！」

『え！？』

「”知り合い”に遊園地の経営者をやつてる宇宙人がいるの。あなた  
達オバケ屋敷とかピッタリじゃない？」

御門のいう”私”というのはオレのことであり”知り合い”という  
のもオレのことだ。そしてオレは遊園地を経営もしてなければそん  
な知り合いもいない。……そう、彼女は「さつきあなたの事を隠し  
てあげたのだから、彼らのこと何とかしてあげてね」と言つてている  
のだ。オレだけに。

そりやオレだつて同じ宇宙人として不憫に思つけど……ん？…そい  
えば天條院の家で遊園地を経営していたような……なるほど、そこま  
で折込済みつてことか。またしても手のひらで踊れつてことか。と  
はいえ、

「結局お化けの仕業じゃなかつたんだね」

「ホント、ホント。何度もビビつて損しちゃつた！あの入達も宇宙  
人つて解るとそんなに怖くないもんねー」

これにて一件落着。幽靈騒ぎはもう無くなるだろうし、幽靈がやつ  
ぱりこの世にいないつことが証明されたといつて言い。うん、言

つて言ふ。

「あれこじてもゆつつかって幽霊とか苦手だったんだねー、意外かもー。」

「別に苦手じゃないし怖がつてもいなかつたわ。ただちょっと体調が優れなかつただけだし」

「ずっと私の手を握つてたのも、手汗が凄かつたのも体調が悪いからつけてとなのかな?」

「せつぜーつ、古川さんの手をねえ…びつ悪いますか末央さん」

「いれはいれはなにやら匂こますなあ里紗さん

『IJのよつな暗い場所ですし多少怖がつてしまつのは仕方の無いことだと思つますよ』

「だひ?なんていうか雰囲気とかつてあるじやん。そういうの影響われやすいくつてだけだから…」

「の鄙にせ一番初めに叫び声上げてたけどな」

「おいりトそれは裏切り行為だぞー。」

『フフ…あの声には私もびくつしてしまつました』

「あの春菜がねずみで驚いた時のね」

「あれゆつづちだつたんだ はずかし つ

「あれは西蓮寺の声に驚いただけで別に幽霊とかそんななんじやつていうかさつきから誰の声…」

『……？あ、申し送れました。私は400年前この地で死んだお静と申します』

「ギヤ~~~~~ホント出た~~~~~.-.-.-」

幽靈なんていないさ。寝ぼけた人が見間違えたのさ。でも白装束を着て薄ぼんやりと透けて足の無い浮遊体に対し、理屈付けが出来るほどオレは生憎賢くは無い。ヤミに抱きつき大声を上げ、後ろで御門の含み笑いを聞きつつ、ほんの少しだけ泣いた。

## 「ファンショントサイナーリットママ

幽靈騒ぎも一段落し、A組にまた平穏な日々が戻った。

あの宇宙生物達の処遇だが、天条院に電話をしてみると

「あら、有里様の頼みなら何でもお引き受けいたしますわ」

と簡単に承諾され、すぐに天条院ランドのお化け屋敷へと迎え入れられることになった。

まるで本物のような迫力とこづいでお客様さん達に好評らしく連日大行列ができるほどらしい。

宇宙生物達からすぐにお礼のはがきが届いた。お礼に今度皆さんで遊びに来てくださいと言つが正直行きたくない。怖いとかじやなくて。ほら生憎忙しいし。

「なんか最近暇だな」

「って言われてもなあ…特に予定もイベントもないし。かといってまた幽靈騒ぎみたいなのが起されても嫌だ」

うららかな陽気に重たくなる瞼を擦りながら、オレの前の席を借りてだらーっと机に突つ伏すリトが零す。6月というカレンダーに赤色が少ない月は、それに伴い自然とイベントごとも少なくなってくる。さらに頻繁に降る雨は必ずと心にまで染み込んできて、より鬱々とした空気を濃くしていた。

その例に漏れず、リトもだらけ気味らしい。旧校舎探検のときにも少し西連寺と接近していたが、それ以来これといった接触は無い。

時々ララとオレと4人で昼食を取つたりするが、喋つてるのはオレとララだけで2人は押し黙るか片言と喋るだけだ。これでは良くない。

「ララは一緒に住んでいるというハンデがある分なんだか最近リトとの距離が近くなっている気がする。いや元から近かつたんだけど、なんかこう…心理的に？」

「なんにせよ良くない。ハンデは良くない。」

「そうだ…一度西連寺もリトの家に行つて見ればいいんだ。これはかなりのステップアップだぞ。少なくとも友達以上な関係になるはずだ、ナイス名案。」

「となればどうその話へ持つていくか…。そういうえばララって自分専用のラボってのを作つてそこで暮らしているんだよな…。うん、よし。」

「なあなあ、ララ」

「ん? なに一ゆつたり」

「オレはちゅうじ西連寺と話してこたララに、とことこと近寄つていつて話しかける。」

「リトん家でララの部屋を見かけたことがないんだけど、どこに住んでんの?」

「えーっとね、リトのクローゼットを空閻湾曲でお部屋にしてるの!」

これも美柑から聞いて知っている。中はかなり広いらしく見たことのない機械で埋まっているらしい。デビルークの科学力、それもうラの発明の凄さは宇宙中でも抜きん出でているほどの才能なのでこのくらいのことは造作もないことだね!」  
オレは今一そりこいつの詳しく述べからなあ……。つと今はそんなことより、

「く~せうなんだ。じゃあれ今田見に行つてもいい?」

「ここよー見て欲しい機械とかいっぽいあるんだ!」

「」  
までは順調。

「やつた……でもオレ一人だけじゃなんか味氣ないな。他にも誰か誘えるといいんだけど……」

「んー、あつーじゃあ春菜も来なよー春菜にも私の部屋見て欲しいし」

「え? ……うん、じゃあお邪魔してもいいかな?」

「 もうちろんだよー!」

ナイスクワ。しかしの思惑どおり、横にいた西連寺を誘ってくれた。これで自然に西連寺を結城家に入れることが出来る。しかも一度はリトの部屋へ入るわけだ。これはかなりの進展になるはず。というかさせちゃる。

「じゃあ放課後にな」

「ララが西連寺に自分の作った機械の説明をしだしたのを見て、オレは2人から離れ自分の席に戻る。

ガラツと音を立ててマイ座布団の敷いてある椅子を引き、それに座るや否やコトトが食らいつく勢いでこちらに乗り出してきた。

「おい、何だ今の一?」

「聞いてだら、今日西連寺がお前ん家行くつてや」

リトからすれば中学からの夢の一つがこんなにもあつやり咲おうとしているのだ、興奮するなとこつのが無理な話だらう。わつきの感じを見るに普通に誘つても遊びに来てくれると思つんだけどなあ西連寺は。もしかしたら結構リトのこと良く思つているのかもしけない。

「お前……そんないきなり……」

「オレだけのほづが良かつた?」

「……こや、グッジョブ親友」

「氣にするなよ、オレ焼きそばパンとか大好きだからね」

「…………4個で勘弁してください」

「あの商店街のパン屋さんにあるDX焼きそばパンがいいな、2個でいいからや」

「DX焼きそばパンって1個400円もあるじゃねえか!……んー1個だけな」

「グッジョブ親友」

友情は見返りを求めるない。でもお礼と感謝の気持ちを齎るという行動にして返すのはまた別の話。またそれを遠まわしに催促するのもまた別の話。あのでつかくてソースのたっぷりついた、あいつがオレを狂わせるのさ。

こうして突発的に訪れた西連寺結城家訪問イベントによつて、リトは放課後までの授業をずっとそわそわしながら過げりすいになつた。

・・・・。

「私のラボに行つたら一緒にゲームしよーよー。」

「私ゲームとかあんまりやつたことないけど…」

オレ達の少し前を歩きながらキャイキャイと会話をするリトと西連寺。女子高生2人が和気藹々と談笑する姿は目にも心にも優しい。それが2人ともタイプは違えども美少女ともなればその愛らしさはひとおじだ。それに比べて、

「どうしよう部屋ちゃんと綺麗だったかななんかパンツとか出てないかな匂いとか大丈夫かなお茶菓子とかあつたかなどうしよう有里！」

うろたえる男の惨めさとこつたら形容し難いものがある。そりや筋金入りの純情ピュアピュアボーイであるリトに冷静な対応を求める

「どうのは少し酷な話。かといってこのままおろおろしたままではただ家の場所を案内しただけで終りそうだ。それではこのイベントを仕組んだオレとしては納得がいかない。いきなり告白しろとか付き合えとか言うわけじゃなくて、なんかこう切っ掛けというか何か起きれば…」

「どうあえず落ち着いたら? 西蓮寺の田のはララの部屋に遊びに行くことなんだからさ。もつと氣楽にね」

「そ、そそそうだよな。うん、氣楽に氣楽にな」

一応の落ち着きは取り戻せたようだが、まだ髪の毛を触ったり無意味にポケットに手を突っ込んだり小さな石に躊躇そうになつたりと忙しない。もうちゅうとしつかりしてもらわないと…。

ともあれ、遠くは無い結城家への道のりはあつという間に終わり、今4人の目の前には見慣れた家屋の姿と屋根より高く雄雄しくそびえたつセリーヌの姿がある。セリーヌとは「ララ」がリトの誕生日に上げたお花のことで命名したのは美柑。10cmはあらうかという体長と発達した薦に何故かある口が特徴的で、その薦をつかい自分で水を撒いたり他の植物にも撒いてあげる。見た目は結構怖そうにも見えるが中々に優しい植物なのだ。

「えつと…あの木は…」

「大丈夫! セリーヌっていうてすつごにいい子なんだよ!」

「セリーヌ? … そなんだ」

「まあまあこんな所で立ち話もなんだし中へ入るうよ

「お前ん家じやないだろ……」

自分の家まで来たせいか随分落ち着きを取り戻したリトを押すようにして玄関の扉を開けさせる。

「たつだいまー！」

「お…お邪魔します…」

「ただいまー」

「だからお前の家じやないって…ん？」

4人だと些か手狭な、でも掃除の行き届いている見慣れた玄関に入つてみると見知らぬ靴が置いてあるのにリトが気付いた。

白のハイヒール？サンダルって言うのかな。踵が高くてなんかこうよく女の子が履いてるやつ。御門もこれと似た黒い色の靴を持つていたつ。というか強請られて買ったんだっけ。たかが靴とバカにしていたらその値段に驚かされた、まさか諭吉が3人も出て行つてしまふことになるなんて。それでいて滅多に履かずに時々一緒に出かける時だけ履くなんてどうかと思つよね。口には出さないけどさ。

つてどうでもいいこと考えてしまつていたけど、つまり文物の知らない靴が置いてあった。

お客様でも來てるのかな？と中を覗き込んでみると、

「ちよ、ちよっとコート…」

「美柑！？」

珍しく慌てた様子の美柑が血相を変えて部屋から飛び出してきた。

「あ、有里さんも来てたんだ。」こんにちは」

「1週間ぶり、こんちは」

「家に招待してくれるとか言いながら全然してくれないじゃん、嘘つき。つていまはそういう訳なくて、大変だよリト！早く来て！…」

「は？何だなんだよ！？」

ポカんとしているリトの手を引き美柑が部屋へと連れて行く。それに釣られるようにオレ達3人も顔を見合させて玄関に上がる。美柑の後ろから部屋を覗き込んでみると、居間に置いてあるソファの上に一人の女性が座っていた。

「か、母さん！？」いつ帰ってきたの！？」

「あらリトおかえり。ついさっきよーちょっと日本で仕事があつてねー、あまりゆっくりしてられないけど」

母さん？そいついえばあの人気が写った写真をリトの親父さんの仕事場で見たことがある。その時は好きな芸能人かモデルさんかと思ったが、なるほど奥さんの写真を飾ってたのか。よく見てみれば日元とかリトや美柑にそっくりだ、2人は母親似らしい。

「それよりリト、何だか素敵な宇宙人の女の子が居候してるんでしょ？」

「リトママ初めまして！ララです」

「まあ…その子…？…むつ…！」

呼ばれたララがリトの後ろから元気に登場する。それをみたリトママがパアッと花の咲いたような笑顔になるも一瞬でプロの顔に変わり、ムームーとララの体をまさぐりはじめた。

「B 8 9 W 5 7 H 8 7ってとこね…胸の大きさ、お尻の引き締まり具合といい絶妙のバランスね。すごいっ！身边にこんなすばらしいボディがあつたなんて…！」

人が変わったかのようにララの胸やお尻を一心不乱に触り続ける。さすがのララもくすぐったそうに体を捩っていた。もしかしたらリトママはあっち系の人なのかもしない？なんて下卑た妄想をしてしまう自分が情けない。

「あらららめんなさい！私ったら仕事モードになっちゃって…」

「仕事モード？」

「母さんはファッショングループデザイナーなんだけど、モデルさんのプロデュースもやってるんだよ」

と美柑が説明してくれる。大分前に美柑から、母親は海外を飛び回つていると聞いていたがファッショングループデザイナーだったとは。

美柑がファッショングループデザイナーだったとは興味のある年頃つてだけじゃなく、母親のデザインしている服が乗っているからだったのか。

父親が売れっ子漫画家で母親が売れっ子ファッショントレザイナーなんてなんかちょっととかつこいいな。

「へへすい」こんだねリトママ

「な、すいにんだな」

「いえいえそんな大したことないのよオホホ。…あら? そっちの男の子は?」

「あ、(?)紹介に遅れまして。リトと同じクラスの雪ヶ丘有里と申します。リトや美柑とは仲良くしてもらつて…」

「あら! あなたが有里ちゃん? 美柑から色々聞いているわよ。…ふむ、君もなかなか良い体つきを…」

「いやいやそんな褒められるよつな…ちょっと感じ触つて! やめ、いやつ脱がしてません? だれかー! 美柑ー! 助けて!」

ファッショントレザイナーの洗練された手練手管によつていつも容易くブレザーを脱がされ、ボタンを外され、Yシャツをはだけさせられ、ベルトにまで手が及びあわや貞操の危機となつた時、

「あの、私お邪魔みたいだつたのでこれで…」

先ほどまで話に置いてかれて所在無さげに立つていた西連寺が帰ろうとしたのを見て、慌ててララとリトが止めにかかる。

そうだ本来の目的は西連寺を案内することだった。オレも初めて見るリト達の母親にすっかり忘れていた。

リトママもそこでやつと西連寺の存在に気付いたらしく、オレの衣服を掴んだまま玄関へと向う西連寺を見つめていたが、一瞬その瞳がきらりと光り、

「待ってあなた！」

「な、なんですか…？」

オレへの興味など失ったのか瞬時に西連寺の所まで駆け寄り肩を掴みじりじりとその体を吟味している。

「…小ぶりながらバランスのとれたボディライン…スリムな体系を望む子達が注目するいい体型だわ。これは…ちょっとよく見せて！」

「キャッ…」

何かぶつぶつと小声で呟いていたかと思うとオレにしたように勢いよく西連寺の服を脱がしにかかる。当然驚いた西連寺は可愛らしい叫び声をあげた。

それと同時にオレは顔を背けてその柔肌から目を逸らす。気恥ずかしかったとか氣を使つたとかじやなくて、オレの後ろにいる美柑から肌を突き刺すような殺氣が飛ばされてきたからだ。その殺氣からは『テレテレするな、』といふ意思がひしひしと伝わってきている。

「いいかげんにしろよ母さん…」

「え？あ、やだ私ったら『めんなさい』かわいかつたものだから夢中になっちゃって……えっとあなたは…」

「あ……西連寺春菜です。結城君とはその……同じクラスで……」

はだけた服を直しながらそう答える西連寺。その頬は恥ずかしかったのかほのかに赤く染まっている。

が、恐ろしいのは女の勘。その表情から何か気付いたらしくコトマが西連寺に「いや」と耳打ちをすると、

「私さう、急用を思って出したので帰ります!」

「わ、西連寺!？」

「いめんなさい!」

急に踵を返し有無を言わせず玄関の扉を開き出て行ってしまった。

「ああ……せっかく来ててくれたのに……」

「そんな遠慮しなくてもいいのにね~」

無常にも悲しげな音を立てて閉まる扉へ涙目になりながらため息を漏らすリトと残念そうなララ。

そしてオレの後ろには

「なんだか面白がつないことになつてゐるじゃない

「でしょ?」

「ヤニヤと笑うコトマと美柑。やつとの何気ないやり取りで2人とも何か解つたのだろうか…女人つてすげだな。

「そういう美柑だって何だか大変そうじゃない？」

「え？ 別になに…ちつ、違うから。そんなんじゃないから」

今度はリトママがオレのほうを見てニヤニヤしだし、美柑が何だか  
ちよつと怒り氣味でリトママの腕をポコポコと叩いていた。  
よく解らないけど微笑ましい家族のやり取りに見えて、ちょっぴり  
羨ましかった。

## ある日みかんがいる日

カラツとした晴れ間模様の空の下、それでもなお明け方のように薄暗い洋館の一室でオレは不慣れな掃除に勤しんでいた。

「掃除機って一見吸えているようで全然吸えて無いんだよな…結局口口口の出番なのか」

「それは口口口ではなくて粘着クリーナーでは?」

「商標登録は口口口だから口口口でいいの」

いつも通りオレのベットの上に座りながら本を読むヤミと話しながら、粘着クリーナーもとい口口口でカーペットの髪の毛や埃を取つていぐ。

普段生活している分にはそれほど汚れているようでは見えないが、しゃがんでみると予想以上に抜け毛や食べかすがそこら中に落ちている。

始めは掃除機でブイーブイー吸っていたがどうにもモコモコしたカーペットに髪の毛がしがみ付いて離れず結局部屋中口口口を転がすことになっていた。

しばらくしてカーペットも綺麗になり、立ち上がって部屋を見渡してみる。それなりに綺麗だとと思う、多分。

いつもそこら辺に放り出してあった制服はちゃんとハンガーに掛けたし、漫画や小説たちも順番に本棚に納まっている。布団も枕もシーツを洗つて日干ししてふかふかだ。うむ、よし完璧。

ふと時計を見やれば13時22分。約束の時間は30分だから結構ギリギリだったかもしれない。

何故こんな慣れない掃除を朝っぱらからやっているかと聞かれれば  
… うう、今日は美柑が遊びに来るのだ。

前々から約束はしていたけどお互いの都合が合わなかつたが、昨日  
メールしている時にその話になつて急遽来ることになつた。本当は  
朝からとこりとだつたが、こちにも準備があると押し切つてお  
昼からの予定にしてもらつた。男の部屋には異性に見られたくない  
ものが一杯あるのだ。何かは言わないけど。

「誰か来るのですか？」

「や、もうすぐ美柑…リトの妹なんだけど、前から遊びに来たいつ  
て言つてたからね」

「やつですか…では私は自分の部屋に戻っています」

「気を遣わせちゃつたみたいで悪いね」

そういうと読んでいた小説をパタンと閉じヤリ!が出て行つてしまつ  
た。……部屋? 家じゃなくて? 言い間違えたんだろ? か…。やうい  
えばヤリの奴どこに住んでるんだろ? 宇宙船かな。

と、そういうと聞いていた内に時刻は24分。30分に近くのコンビニ  
で待ち合わせなのでそろそろ出ないとまずい。さつきハンガーに掛けたばかりのジャケットを羽織り部屋を出る。その時、もう一度振  
り返つて部屋を見渡してみる。一流ホテルの一室としてテレビや雑  
誌で紹介されてもなんら遜色の無い部屋がそこにはあつた。うむ、  
完璧だ。

ひとしきり眺め満足感を得たところで、なるべく埃が立たないように

静かに扉を閉めた。

・・・・・。

右手に付けた腕時計を1分に一度見つつ小走りでコンビニに着いたときには時刻は33分。学校生活で5分前行動を習慣づけられてる学生としてはだらしなさが目立つ。もしこれが軍隊なら腕立て100回の罰が待つていいだろう。

「ごめん! 遅れた」

「アイス」

「ん? 聞いたことのない挨拶だなあ 美柑さん。さあオレの家はこっちだよ」

「アイス」

「そうだね、1個300円のバニラね。すぐ買つてきます」

コンビニの前に仁王立ちで立つ女教官はとても優しくて、財布の中の硬貨3枚で許してくれた。1分100円計算だろう……30分とか遅れてたら何買わされていただろうか。

ともあれコンビニ限定発売のバニラアイスの効果は絶大で、コンビニから我が家までの短い道のりですっかり機嫌も良くなつたようだ。硬貨をはたいただけの効果はあった、なんちやつて。

「何にやにやしてんの？」

「いや、なんでもない。ほんとなんでもない」

「ふーん、で、これが有里さん家？何ていうか……変わってるね」

門の前に立つて我が家の大観を眺める美柑は若干引き気味。それもそうだし、初夏だつていうのに薄暗くてカラスがぎやわぎやわ屋根の上で騒いでいるような家なんてお化け屋敷以外の何ものでも無い。しかもそれがオレを怖がらせるだけなんていう幼稚な理由だから始末が悪い。居候の身なので強くは言えないけど…。

「まあ見た目はあれだけど中は豪華だからさ。入つて入つて」

「んー、おじゃまします」

御門がどこからか拾つてきた変な銅像や変な宇宙製のトーテムポールをおつかなびっくりに睨む美柑を引率しながらすっかり見慣れた趣味の悪い玄関の扉を開いた。

「へー、中は結構いい感じかも」

「でしょ。中の改装はオレの案が入つてるからね」

外見をお化け屋敷にされてしまったオレは内装を全てオレが決めることで抵抗を示した。ちょうどその時テレビでやっていた外国の洋館に影響されて内装は中世のヨーロッパみたいな感じになつていて。これが意外と住んでみると不便なことが多い。無駄に広いので掃除は大変だし、御門のせいで窓が少なくて結局薄暗くて長い廊下が逆に怖くなつてしまつたり、かつこよくなるかなと思つて敷いてみた

赤絨毯は頻繁に干さないとすぐカビ臭くなっちゃうじ。

ホテルみたいに時々住むなら最高かもしれないけど、自宅として住むことは少々息苦しい。やっぱり和風な感じにすればよかつたな。

「お茶淹れてくるわ。オレの部屋は2階上がつてすぐ右手の部屋だから。入って待つて」

「2階の右手ね、わかつた」

キヨロキヨロと家中を見渡し歳相応の可愛らしさを醸し出しながら階段を昇る美柑を尻目にオレは台所へ行き紅茶を準備する。

適したお湯の温度とか、葉の開くまでの時間とか紅茶にも入れ方つものがあつて、飲み物なんて体が潤えばなんだつていいんだ！なんて言っていたオレも御門や美柑の厳しい指導があればお嬢様に仕える執事のように淹れられるようにだつてなる。

適當な淹れ方をした所でどうせ味の違いなんて解らないんじやないの？と心の中でほんのりと魔がさすが、実際やってみたつてどうせすぐにバレて怒られて正座をせられるだけだ。

自分の小ささに辟易しつつ、結局丁寧に淹れてしまつた紅茶をトレイに乗せて階段を昇る。

落ちそうになるトレイを何とか支えつつ浴室の扉を開けた。

「お待たせ……ってなにしてんの？」

「えつ……いや、別になんでもないけど」

部屋の中では美柑がベットの下に片手を突っ込んでいる。オレと田が合つと一瞬ギクッとした顔をしたが、何事もなかつたように立ち上がり田の前を横切つたと思うと、ソファの上にちょこんと座った。

「今ベットの下…」

「IJの部屋が有里さんの部屋なんだね。掃除したの?」

「え、あ…あうん。それなりに汚れてたから朝から掃除機かけたりね。結構綺麗でしょ」

言いながらソファの前の机にトレイを置き紅茶を注ぐ。ホワッとした特の香りが立つた。

「掃除機を掛けたのは解るけど、窓を開けてないから空中に舞った埃が落ちてきて結局汚れてるし、本棚の埃を払って無いし、部屋の四隅もクズとかが溜まってるよ。頑張ったみたいだけどまだまだよね」

紅茶を一口飲み、滑りのよくなつた美柑の口から飛び出ってきたのは紅茶への評価ではなく掃除へのダメ出しだった。完璧に掃除したつもりだったのに、小学校低学年の頃から家事を手伝っていた美柑からすれば鼻で笑ってしまうレベルだったらしい。空気中の埃にも気を配らないとなのか…よく考えたら常識だよね。

「精進します」

「うむ。それはそれとして、なかなかいいお部屋だよね。小金持ちはつて感じ」

ベットと机と本棚とテレビとクローゼットしか無い部屋だけじね。その分それらは少々値の張るものを使ってるけど。何年も使うものにお金を出し渋っちゃいけないもんね。

「何にもない殺風景な部屋だけね。ゲームはひとつだけあるけど……」

「何があるの？」

「えっとね……リトから貰ったスリーファミコンと猿山から貰ったワダースワンがある」

「もうそれ化石じやん」

「失敬な！失敬だぞ！面白いゲームに新しいも古いも無いんだ」

映像や音楽に凝るのもいけないわけじゃないと思うけど、ゲームであって映画では無いんだからやつぱりコーダーザーとしてはゲーム性を重視して欲しいよね、って猿山の受け売りだけ。ゲームなんてあんまりしないし、暇な時はほとんど本を読んでるからね。

「じゃあ対戦しようよ」

「その挑戦受け立つ！何にする？爆弾？レース？パズルもあるけど」

「じゃあ爆弾で」

ククク、愚かなり美柑。「この爆弾男というゲーム……オレの最も得意なゲームの一つなのさ。数多い敵を爆発し灰燼と化してきたオレの手腕でギャフンと言わせてやるぜ。レトロゲームの洗礼を受けるのだ。

テキパキとゲーム機を用意しカセットに2度息を吹きかけてからセットする。電源を入れると古さの中に味わい深さを含んだ電子音が似つかわしくない最新TVから流れてきた。

「タイムنجャあれだしへも入れようか」

「セレーラ辺は有里さん任せせるよ」

最大5人で対戦が可能なこのゲーム。CPUの行動パターンを全て見切っているオレからすればもはや美柑は4対1の状況に追い込んだとしても過言ではない。ふはは、さあゲーム開始だ！

「ひやつほー！ハンドゲットだぜ！ふはは！爆弾魔のお通りだ！…  
げ、自爆した」

「まず一勝だね」

・・・・・。

「ちょっと…美柑、もうキック持ってるんだから取らなくて良いじゃん…おい、CPUに向かへんな道連れになるだろ…つづつ」

「はい8勝目」

・・・・・。

「畜生、なんの希望もねえ…火力1個でどう勝てっていうんだ…お、  
爆弾だラッキー…罷だとおおおお！」

「15勝目」

•  
•  
•  
•  
•  
○

「あの…協力アレイしません?」

「23連勝目だね。いいよ、じゃあこのレースゲームやろつか」

「そ、そそそれなら負けないぜ！バナナの錬金術師と呼ばれたオレのドライビングテクを魅せてやる！」

•  
•  
•  
•  
•

•

「う…うう…そ、それじゃこのパズルゲームで勝負だー！」

「んー、それじゃハンマーとして5連鎖までにしてあげる」

• • • • •

「つていうかこれリトから貰つた奴でしょ？それに私リトよりゲー  
ム強いしね」

3時間のまつたりゲーム遊びでオレのプライドはずたずたに傷つけられた。……そんな御門相手には楽勝の常勝だったのに、こんなことになるなんて……まさか一勝もできないなんて。……もしかして御

門の奴わざと負けていた？罰ゲームを設けたときだけやたら強かつたし…畜生、手のひらの上で踊つてたつて言つのか。

「いやーでも楽しかったよ。有里さんのうわたえ方とかね」

「ほんとうめんなさい、でかい口叩いて」「めんなさい」

「たくさん笑つたなあ…あ、もう5時か。夕飯作らなきゃだし帰らないと」

「もうそんな時間か。結構遊んでたんだな…家まで送るよ」

「…………有里さんのがこう切り替えつて卑怯だよね」

「なんじゅそりゅ」

オレをゲームでぼっこにして上機嫌だった美柑が今度は照れくさそうに頬を少し膨らませた。一緒に夕飯でもと思つたが、それだと結城家のディナーがお湯を注ぐだけの質素な食事になつてしまふだろつ。今日はオレの当番だしちょっと凝つたものをと思つていたけど仕方ない。

すっかり飲み干した紅茶を乗せたトレイを片手で持ち、美柑と一緒に部屋を出て階段を下りる。

すると階段の一番下の段にヤミが座つて小説を読んでいた。

「あの人…だれ？」

当然進行方向にいるヤミに美柑が気付かないわけが無く、オレにそう聞いてくる。

「えっと… オレの知り合いで金色の闇つていつんだ。ヤミツて呼んであげて」

「へー… 初めまして、ヤミさん」

「初めまして… 有里、こちらの方は」

「リトの妹で結城美柑。今日遊びに来てたんだ」

「そうですか…」

何だかちょっと空気が重たくなった気がするが氣のせいだよね。2人とも同じくらいの年齢（見た目）なんだから仲良くなれそうだと思つんだけど。

「それでは私は自室に戻りますので」

いやだから自室つてどこのだよ、と突っ込む間もなくヤミは階段を昇つて2階へ消えてしまった。

「それじゃ、帰るか」

「そうだね」

そんなこんなで初めての美柑来訪はこうして幕を閉じた。これで我が家の場所を覚えた美柑は学校帰りや祝日・日曜日など月1で遊びに来ることになる。その度にオレは心を折られることになる訳だがそれはまた別の話。

・・・・・。

・・・・・。

その日の夜。

「あらそ、結城君の妹がね…」

「や、紹介したことなかつたつけ？」

「話ではね。起してくれたらよかつたのに

「昨日は夜遅くまで手術だつたんだる。それに起したつて起きない  
くせに」

「有里、醤油を取つてください」

いつもの様に3人での夕食。今日は魚中心のメニューで赤だしの味噌汁に初挑戦してみた。なんだか朝食っぽいメニューになってしまつたけど、小鉢に豚の角煮があるからまあいいか。きゅうりの浅漬けは失敗だった。浸かりが浅すぎてただのきゅうりになってしまっている。だからって堂々と田の前で醤油をかけられるとそれはそれでつらいものがあるみ。

「ところで、ヤミナカとかつて言つてたけど…どに住んでるの  
？」

「こ家のですが」

「…やっぱりか…どーいうことだ

「あひ、2ヶ月前から住んでるわよ。」

「ビースト」とだーー?」

「正式には『宇宙船』一室と部屋の入り口とを繋げてあります」

「知らないかった……ビーストの部屋よ」

「有里の隣の部屋です」

「知らなかつた!」

隣の部屋は使ってなかつたし特に物音もしなかつたし。頻繁に屋敷内で見かけるのに玄関から入つてくるのは一度も見たことないなあとは思つたけど。

「まあ……家主の御門が認めたんないいのか」

「…………」の家の正式な家主は…………あなたよ

「は?」

「あなたの宇宙金庫の貯金を地球のお金に換金してそのお金で買つたお屋敷よ。だからあなたが家主ってわけ」

「え?……は?じゃあ何か?居候は……」

「私ど」

「わたしとこいのりで」

驚いた、本当に驚いた。いやどうこうことだ？そりや賞金稼ぎまがいのことをして貯金もしてた。御門のことは信頼してるし勝手に換金したこともこの屋敷を買ったことも別にかまわないんだけど……なんだこの釈然としない感じは。んー……。

「まあいいか。別に何が変わるわけでも無いし」

「あなたのそういうところが好きよ」

「醤油を取つてください」

解らないことを考えたって仕方ない。少し辛かつた赤だしの味噌汁を啜りながら思考停止する頭で、そう思った。

「ヤレ! 行くんだっけ? オレトイレットペーパー買つて帰りたいんだけど」

「聞いて無いのに付いてきたのかよ。糲岡達がなんか服を見たいんだと」

「なるほど、それに西連寺が連れてこられてで、リトも付いていたいけど恥ずかしいからオレを無理矢理誘つたと」

「う…だって男一人だけで混ざるのうんかおかしいじゃん?」

「言えば普通に付いて来たのに」

今日はみんなで学校帰りに駅前へ。前を歩く糲岡・沢田・ララ・西連寺の後ろをリトとオレで付いて歩く。大抵みんなで一緒のときはこの隊列になってしまつ。もつとリトが前に行けば良いのに…。

「あれ、ヤミつちじやない?」

「ホントだーヤミちやーん!」

駅の近くまでやつてくるとララが手を振りながら駆け出す。その前方を見てみると、駅のベンチに座り人目を集めているヤミの姿があった。

横に3~4冊の雑誌のような本を置きつつ手に持った本に視線を落としていた。身内巣廻に見ても可愛らしい外国っぽい美少女が本を読む姿はやはり注目を集めるらしい。特に男性の。

にしてもこんな所で読書とは… 最近は一緒に家に住んでることを力ミングアウトしたせいか、我が物顔で家中を歩き回り、勝手にオレの部屋に入つてきてしまベットの上を散々「ゴロゴロ」したり寝転んでテレビを見るオレの背中に乗つたりと自由気ままだ。よく考えたら前からそんな感じだつたけどね。

「コリ…それにプリンセス。学校帰りですか？」

読んでいた本を置みつつオレ達の制服姿をみたヤミが言つ。

「そ、ちょっとみんなで買い物をつてね。ヤミは……ファッション誌？」

「地球の衣服は多彩なものが多いので」

確かに。機能性重視な風潮が強い宇宙文化圏の人々にとって、地球人の衣服の種類の多さは驚愕に値する。学生の服つてだけで学ランだのセーラー服だのブレザーだの…スカートの色だつて多種多様だし。

「へー…あ、これ母さんがデザインした服だ」

「おー…コトマヤさんの?見たい見たい」

「ほらこの表紙の服。海外じゃ割りと有名らしいからね」

そう言つてリトが渡してくれた雑誌の表紙には外国の美人なお姉さんがパリコレで出てきそうな衣装を着こなして決め顔をしている。元から整つた顔立ちをしているんだろうし、プロの人が化粧をしているんだろうけど、この人のために作られた!と言えるほど似合つ

ている衣装がヨリコの外国人さんを美しく仕上げていた。  
これなら有名になるのも頷ける。

「でもヤミーハチこいつもその格好だよねー」

「ねーもつと色んな格好すればいいのにね」

そんなことをヤミに抱きついている里沙と未央が言う。抱き付かれているヤミはどうすればいいか解らない困ったような顔をしていた。  
2人の押しの強さはすごいからなあ…。

「じゃあさーヤミちゃんの服をみんなで選んであげよー！」

話を聞いていたララがいつものように名案を思いついた！といつた  
顔で手を上げる。そりや元々の目的も服を買いにいくことだったら  
しいし丁度いいんだろうけど。

「ハラハラそれナイス！」

「よーしーそれじゃ早速行こー！」

「あの…人には人の似合つている服があるし、お気に入りとか思い入れとかもあるんだろうから自分の好きな服をきて」

「ゆりつちつるさいーほら行くよー！」

「……はい」

畑岡とララがヤミを、沢田がオレの背中を押し、苦笑いのリトと西連寺を連れてオレ達は歩き始める。

ヤミが着ている服は黒い皮のような服で膝上20cmのスカートが  
目に眩しい。袖は肩が出ていて長袖になつていて通気性と保温性

を兼ね備えているので夏涼しく冬暖かい。背中の部分がマントのように長くなつており地面に擦れてボロボロになつていて。そして胸元に開いた十字の穴が可愛らしい。

……なぜこそこそにもヤミの服に詳しいか。

そして面白い理由なんて無い。オレが作った服だからだ。

研究所から連れ出したとき、ヤミは病院で渡されるような薄っぺらい服しか着ていなかつた。それを見かねた御門が自分の持つていてる服を渡そうとしていたが当時のヤミはまったく人を寄せ付けようとなかつた。

そこでオレは何とかしようと服を作つてみたというわけだ。

とは言つても地球の方法みたいに、布を切つて縫つて色を染めてなんて難しいことがオレに出来るわけもなく。

宇宙の科学技術によつて「デザイン」画をスキヤンするだけで完成品が出てくるという簡単な方法だつた。その変わり「デザイン」にはかなりの自信があるし、ヤミが足に巻いているベルトは余つた布で作ったオレの手作りだ。意外にも上手にできてしまつたのが嬉しくしていくつも作つてしまつた。

ヤミも気に入つてくれたらしく、無言で受け取つた割には複製をいくつも作つていまだに着てているという物持ちの良さ。

当然製作者であるオレも気に入つてている服である。それをちょっとの思いつきで違う服も着てみよつなんて言われたら一の足を踏んでしまうのもやむを得ないといえよつ。

「とはいえこの場の流れに逆らつてまで主張しようなんて思つまど  
オレは男らしくも空気が読めなくもないのだ」

「なにゅつつか一人で」ヒョウとしているの?」

「いやなんでもないよ。」ヒジが里紗とか未央のよく来る店なんだ」

「そつー春菜とかもヒジで買つたりしてるし、結構他の女の子もよく見るよ」

「下着とかも売つてんだね」

やつてきたのは女性服専門店。

店の前の看板には変な筆記体のアルファベットが並んでいてよく読み取れない。きっと小じやれた単語が書かれているんだろう。

店内は白とピンクを基調とした装飾がなされており、ただそれだけで男性を強烈に拒む空気を醸し出している。10~20代の女性店員と女性のお客さんによつてもはや鉄壁の守りだ。たとえカツプルでも男性は非常に入りづらいだろう。

当然奥手なりトは店の前まで来た時点で顔を真っ赤にし、店に入った時点で茹で上がったタコのように頭から湯気を上げて拳動不審になつてゐる。

そりやだつて、今オレ達のいるのはなんと下着のコーナー。正直オレだつて何となく恥ずかしい。

「ヒジの下着は可愛いの多いのよ。私も未央も愛用してるからね」

「へー、あんまり詳しくないからあれだけど、確かに可愛いデザインのが多いね」

そう隣にいた里紗に返す。置いてある下着達は多彩な色もさることながら小さなリボンが着いていたりレースが着いていたり可愛い絵

が描いてあつたりと目に楽しい。普段人に見せない場所なんだから何だつていいんぢやないの?といつのはきっと男の感覺なんだろう。

「でしょー?今も私が着けてるの!」お店のだしね。……わあ、一体どれでしょー?」

「んー…意外と、」の…ピンクの奴とか?」

「え、あ…えーっと…あつ!未央!これなんかヤミツけに似合つやうじやない!?」

「おい、図星か?当たつたんだな?」のピンクの意外に可愛らしいのを履いてるんだな?」

流行のものを常にチェックし、ファッショング雑誌に乗つているような小物を見に付け一部の男子から”遊んでいる”と言われてしまつている里紗も下着は可愛らしいものを着けているらしく。

なんて言い当てられて動搖している里紗に不覚にもときめいてしまつたが、今はヤミの服を見に来ているんだ。若干だだをこねてもみたが、オレの作った服よりもヤミに似合つ服があるならそちらの方がいいに決まつていて。

ならば元・製作者としてこの店舗に置いてある全ての服に目を通し、最も似合つものを選別する」といそが今すべきことなんぢやないのか。

「こしても肝心のヤミばかりこるの?」

「なんかもういくつか服を見繕つて試着室で着替えてるひしごぞ」

「ああそりなんだ……リトはもつ慣れた?」

「いや正直早くこの店を出たいんだけど、リカも…西蓮寺ちゃんも楽しそうだから」

「女の子つていつもなんだもんなんだもんなあ……おつ？」

試着室の前でキャツキヤと騒ぐ女子達から少し離れたところにコトと話してみると、シャーツとカーテンが開けられて

「…………どうですか？」

「おおーーー可愛いーーー！」

「ヤミ!!ちこいねーーー！」

「本当だ、似合つてゐる」

賛美の声の中、ボーアイシューな服に着替えたヤミが所在無さげに現れた。

タンクトップに黒いズボン。それにあわせた黒い少し大きめの帽子を被つており、健康的な可憐さに仕上がっている。

スケボーとかダンスとか踊つているような子が着ていてる様な服装といつた感じだった。元が良いだけに似合つているように見えるが…

オレはなんか違う気がした。可愛いのは可愛いんだけど。

「やつぱぱつヤミの綺麗な肌を活かすためにはスカートのまづがいいと思つんだ！」

「だよね！私もそう思つ」

「えー、ズボンも似合つと思うのになーーー」

「じゃあこれなんていいんじゃないかな？」

・・・・・。

。 。 。

「 .....」

「うひょ～似合つー。」

「やつぱりヤミには黒色だよな！」

「でももつとフツーのもいいんじやない？」

「髪の毛とかいじつたらいーんじやないかな！」

「このスカートなんて…どうかな」

1時間後：

「これでいいんですか？」

「かわいー！」

「すつごい似合つてるよー。」

「ヤミつちかわいー！かわいいよー。」

「うん、すごくいいと思う」

すっかりゴーディネートが楽しくなつてしまい、気付けば一時間が過ぎてしまつていた。

結果としてヤミの格好は、下がすぐ短い淡い色のひらひらしたスカートで上が白いタンクトップ？ノースリーブ？になつた。オレ一押しの白いワンピースはどうも女子達の賛同を得られなかつたので採用はされなかつた。避暑地に遊びに来た大富豪の一人娘的な感じで可愛らしかつたんだけど、どうも違つたらしい。

「 .....」

「なに?」

「…………」

「あ、ああ…可愛いよ」

「そうですか」

「でも個人的には前のほうが似合つてたかな」

「…そうですか」

うむ、やっぱり譲れないからな!

その服の代金も案の定オレが出すことになったこととかとは別に自分で作った服のほうが良いに決まってるもん。見慣れてるつてもの大きいけどね。

ヤミ自身も始めて切る地球の女の子らしい服に少し戸惑い気味だ。普段の服もスカートが短めだけど、いま履いているものはそれよりも短い。ちょっと屈めば下着が見えてしまうかもしれない。オレが見たいとかではなくて、保護者の観点からね。見たいとかじゃなくて。

そんなこんなでヤミの新しい服を買うというイベントが終わり、それじゃあ次はどこいこつか?なんて話をしていると不審な男が3人向い側から近づいてきた。

「おっ!なに、かわいい子がいっぱいいるじゃん!」

「うつひょー!みんな俺好み!」

「へつへつへ、俺らとあそぼーゼえ」

見るからに軽薄そうな格好をしている3人の男。見た目で判断するわけじゃないが言動からも頭の悪さが滲み出ている。

「つか、何よこの時代遅れのナンパヤローは」「ううとおしいなあ…」

「…こわい…」

「変なカツコーの人たちー」

好戦的な里紗未央は別としてすっかり怯えてしまっている西連寺、そして不良3人を遊園地のマスコットか何かだと思つているようなララ。

そして女子達、特に西連寺とララの前に庇うようにして立つリト。こうじうことをサラッとできる所がリトのいいところだと思つ。とはいえ何の鍛えもしていない只の男子高校生。ヤーに蝕まれて体力の無さそうなチンピラでも3人に囮まれてしまえばボコボコにされてしまうだろう。

「おい、お前らやめる。つていうかどつか行け」

となればやはりオレが行かざるを得ない。強いからとか格好付けたいからとかじやなくて、リトが女子達が殴られるのを見たくなかつたから。そして嫌な予感がしていたから。

「あア！？んだてめえケンカ売つてんの力？」

「そーいうのいいから、ゲーセンでもパチンコでも行つて来いよ。場所わからねーならついていってやるからぞ」

「バカにしやがって！ぶつ飛ばしてやルあ！？」

とりあえずの挑発はすぐに完了した。現実に失望し日々鬱憤を溜め込んでいる若者は笑っちゃうほどに怒りの沸点が低い。すぐに顔を真っ赤にし鼻息を荒くしながらこの首根っこを掘もうとしてくる。

それを右手ではじきつつ、みんなから離れるためにじりじりと移動し始める…が、

(や、やばい！？)

オレの瞳に飛び込んできたのは、後ろの不良がポケットからナイフを取り出している光景だった。

しかもその不良、こちらにそのナイフを投げつけてきたのだ。眼前には回転しながら迫るナイフ。が、ただ一直線にこちらに飛んでくるだけの物なんて避けるのは容易い。

しかしオレの後ろには沢田と初岡が立っている。かわしたナイフが2人に当たってしまうかもしれない。

ならばどうすればいいか。簡単だ、ナイフを取ってしまえばいい。その程度のこと田をつぶつたってできる。言われれば歯で咥えてキヤッチすることもできるかもしれない。

でもそれもダメだ。

パキィイイン！…と目の前でナイフが音を立てて砕け散るのを見て自らの失策を確信した。

オレのすべきことはナイフが投げられる前に不良たちを全員ノしてしまうことだったのだ。

オレの前へ颶爽と躍り出たヤミを見てそう思った。粉々になつたナイフだったものが空中でキラキラと光りなんとも幻想的な光景になっている。

が、その向こう側では3人の不良達が金色の拳の嵐に曝されており、人が出すとは思えないような声を出している。

あ……空中に浮かされた。すげえ……あいつらずっと空中にいる。ナイフを投げた奴が重点的に狙われているらしく、すでに意識は刈り取られ人形のように拳の上で跳ねていた。むしろ気絶もできないでいる後の2人のほうが地獄だろう。

自業自得と呼ぶには凄惨なソレは、不良のしている高価そうな腕時計の秒針が3周するまで終ることはなかつた。

・・・・・・・。

結局その後は不良たちが全員氣絶してしまい、人も段々集まつてしまつたので救急車を呼んでその場は解散することになった。リトは西連寺とララを連れて、里紗と末央はそれと逆方向に。オレは不良たちにトドメを刺そうとしているヤミを抱きかかえ駆け足でその場を離れた。

その夜。

「つてなことがあつてさあ

「それがトイレットペーパーを買い忘れた理由といつわけね」

今日は御門と2人で夕食。ここ最近はヤミも混せて3人での食卓に慣れてしまつたので、横の空席がどことなく寂しい。

「予備が余つてたんだから良かつたじゃん。それにしてもヤミの奴降りてこないな……」

「……やつを少し話してきただけ」

「オレが行くと鍵閉めるのに……でどうだつた？」

「買つてもうつたスカートが少し破れていたそつよ」

「あーあの暴れた時にか……なるほどそれがショックで降りてこら  
れないんだな。よし、オレが同じのをまた買つてやるつ

「バカね……ほんつとバカね」

「え、いやだつてさあ」

「いいからあなたは持つておリジナルの型紙でもつ一度あのヤミ  
ちゃんの服を作つて渡せばいいのよ」

「はあ？ だつてあいつあの服いっぽい持つてるじゅんか

「だから…あなたからまた貰つのが嬉しいんでしょ」

「なるほど、わからん。まあでもさつとおつににしてみる。お礼じゃ  
ないけど御門にも服買つてくれるよ」

「……期待せずに待つてるわ」

そう言つてクールにたまごスープをする御門は嬉しさを隠しきれ  
なかつたのか口元が小さく動いていた。夏物の服が欲しいと言つて  
たし里沙・未央達に聞いていい感じのものを見繕つてこよ。

とはいはずはヤミのほうだ。食事が終わらじだいに保管してあつ

た型紙を取り出し機械へ通して待つこと6分。見慣れた黒色の服が出来上がった。出来立てホコホコのそれを抱えて自室隣の部屋に行つて見ると、そこにヤミの姿は無かつた。

一緒に帰ってきたしそれから出かけた様子は無いので屋敷のどこかにいるはずだ。とすると風呂かトイレだらうか、あるいは書斎といふ名の倉庫にいるのかもしない。

探しに行くか、と足を一步進めるがいやいや待て服を持ったまま歩き回るのはどうだろう。何かの拍子に汚れたり切れたり解れたりするかもしれない。そうだ、とりあえず自室に置いておこう。

とすっかりオレの手の形に塗装が禿げてしまっている扉の取っ手をガチャリと開き部屋に入る。電気も付けず真っ暗な中机の方へ歩いていき服を置いた。そしてポケットに携帯電話を入れっぱなしだったことに気付き、それをベットの方へ投げると、コツンと小さな音がして携帯が跳ね返り足元へと転がつた。

おや?と思いつつ凝視してみると、そこには猫のようごく小さく丸くなつているヤミの姿があつた。

「び、びっくりした……なんだヤミか。びついたんだよ、電気も点けないで」

「.....」

ヤミからの返事は返つてこない。一いちにつけじを向けたままだだじつと座つているだけだ。

いつも着ている黒い服ではなく、今日買った洋服に身を包んでいる。よく見ればスカートの横の部分が破れて糸が解れてしまつていて、御門が言つていたことほんぢや本当らしい。

どう切り出していいか解らずとあえずヤミの横に座る。怒られるとも思ったのか、肩がビクッと動いたのがわかつた。

「それ、やつぱり破けちゃったんだ」

「…………」

相変わらず返事は無い。自分の部屋ではなくオレの部屋にいたということは、謝るために来たんだと思つけど……。

そもそも服を破つたことに關して全然怒つてはいないし、個人的にはやつぱり普段の黒い服のほうが似合つてると思つからね。

「これ新しくまた作つたんだ。予備はいつぱり持つてゐるだらうナビ、やつぱりまだの方が似合つてると思つからね」

そう言つて持つていた服をヤミに手渡した。しかし未だに返事は無い。  
しばらく反応が返つてくるのを待つていたら、突然ヤミが立ち上がり部屋から出て行つた。競歩とも呼べるような歩みの速さに声を掛けられ間すらなかつた。

一呼吸置いて部屋から飛び出しても、隣の扉からガチャッと鍵を閉める音がしてくる。あの部屋に鍵なんてついてただろうか……。この日は朝になるまでヤミは部屋から出てこなかつた。最終的なフローは御門のやつがしてくれたらう。

次の日。

「やつぱりヤミがまだの服だよなあ

「やうね、ヤミちゃんといつたらうれよね

「やうですか」

朝の食卓。いつものように3人で座り机を囲む。

ヤミからは昨日の落ち込んでいた様子は感じられず、すっかり持ち直したらしい。御門とどんな話をしたんだろうか……まあいいか。

「よし、今日は休みだしどうか遊び行くか

「さうね、ちょうど薬も切れてたし惑星ホコタテなんとかしぃかしら？」

「なんで惑星間レベルで戻りの話になってるんだよ。普通に考えてそこいら辺プログラマに決まってんだろ」

「だつて最近この星から出る」と少ないじやない

「（）に来た意味考えろよ。元は隠居と療養だ。それを遊び倒してたら本末転倒じゃんか。まあ今度ね、その時はヤミも一緒に行こうな」

「……そうですか」

そつ言つて黙々と箸を動かすヤミの顔はいつも通りの無表情だったが、オレにはそれが初夏の朝露に濡れるアジサイのような笑顔に見えた。

うん、見えた。

立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花

私は教室の椅子に座り、いつもどおり静かに授業を受けている。意識の半分を教師の言葉に向けて、もう半分を違う方向に向けながら。

意識を向けている方向には一人の女子生徒がいる。その生徒は窓際の席に座って頬杖をつき、憂いを帯びた瞳を青々とした空へ向け物思いに耽っている。彼女は……いやお嬢様はここ最近、2～3ヶ月ほど前からか。こうしてボーッと考え事をすることが多くなつた。以前の、思い立つたらすぐ行動。というのが嘘のように。

理由は解つてゐる。それは同時に私の懸念でもあつたからだ。

•  
•  
•  
•  
•  
○

「ふふふ……いいか、オレはチヨキを出す」

「し、心理戦だと！？ぐつ……いぐぞー。」

「最初はグー！じゃんけんつ！」

「つしまー勝ったー！」

「勝ちは勝ちだろ。じゃあ今日は……焼きそばパンと『ロッケパン

に飲み物「コーヒー」で、はこ350円、お釣りはやるよ

「釣りなんて10円しかでねーじゃねーかくつそお……んじゃ行って来るわ」

「お早めにー」

いつものように猿山とお皿ジャンケン。

基本的に猿山は最初にグーかチョキ、あいこになると自分が出したものに勝つものを出す癖がある。

つまり始めて適当に搖さぶりをかけた後、グーを出しておけば確率は50%以上。それであいこなら再びグーでお終いだ。

しかしこの方法ばかりしているとさすがの猿山もおかしいと気付いてしまう。なので時々は負けておいて互いの勝率を6対4くらいに調節しておく必要がある。

友達相手にひどいと思われるかもしれないが、まあ学生のちょっとしたお昼のお遊びだし、猿山が気付くまでは楽しませてもらうといふ。

ともあれこの遊びには大きな難点がある。

猿山のやつパンを買つてくるのがとてもなく遅いのだ。自分の分を選ぶのにも時間が掛かるし、そのくせ食べながら帰つてくるので下手をすると昼休みが終る頃になるまで来ないときもある。

買つてきて貰つているわけだからそういう文句ばかり言えないけどね。

猿山が廊下に出て行くのを見送つた後、鞄から焼きそばパンを一つ取り出し頬張る。

これは非常用焼きそばパンで小腹が減つた時や帰り道、道の端っこでダンボールに入り小刻みに震えている猫に千切つて『えるためのものだ。

基本的に鞄の中に2本常備されていて、大概1本はこうして昼に消費される。そうしないと夕方あたりにお腹が減つて動けなくなってしまうからだ。

一人で食べていても味気無い。リトのところでも行こうかな、と教室を見渡してみたが見当たらない。

そうめんの中に時々混ざっている赤い麺のよつに目立つラーメンク麺も見えない。きっと屋上かどこかで美柑特製弁当でも食べているんだろう。

そういうしている内に焼きそばパンを食べ終わってしまった。やっぱり1本だけでは腹の足しにもならない。

それに何だか今日はいつもよりもお腹が減つている気がする。今月の点滴をまだしてもらっていないせいだろうか……こここのところ夜中の急患が多いせいで御門が疲れきつてすぐに寝てしまい検診が遅れてしまっているのだ。

あんまり遅れてしまうとまた貧血を起したり、下手すると倒れてしまふかもしれない。今週末辺りにでもしてくれると嬉しいんだけど。

「雪ヶ丘君、一人でいるなんて珍しいわね」

食べ終わった焼きそばパンの袋を小さく折りたたんで遊んでいると、後ろから声を掛けられた。

振り返つてみるとそこには両手でお弁当を持つ我がクラスの委員長、古手川唯がそこに立っていた。

「いじんな日もあるんだよ。古手川だって一人じゃんか」

「私は……ちょっと職員室に用事があったから。ってことは、お昼ごはんまだなの？」

「猿山が買つてくれるのはずだけど、この分だと後10分は帰つ

「こなじんじゃないかな。お腹減つてねつてこのひの……」

「あ、あい。それじゃあ……私のお弁当、半分食べね~。」

「いいのー~。いや、悪によ。じつは見てオレ結構食べね~、古手川の分が無くなつちやうよ」

「半分ついてまつてね。なんでも全部食べようとしているよ」

そう言つながら古手川はオレの前の席をむかいで座つ机に弁当を広げた。

お弁当の中身は、玉子焼きにアスパラのベーコン巻き。タコさん型に切られたウインナーにブロッコリー やトマトといつかにもお弁当といった内容だつた。栄養バランスとか詳しことはせ解らなければ、見た目はとても美味しそうだ。

「へー、これ古手川が作ったの?」

「そんな訳無いでしょ、お母さんよ。まつておくけど、上げるのは半分だからね」

「わーかつてゐるつて。それじゃ玉子焼きからいただきまーすと」

「ちよ、ちよヒー。手で取らないでよ、汚いでしょー。」

「おひおひ、じめど。でもオレ箸なんつ持つてないよ~。じつはつて取れば……」

「え……」

2人の視線が古手川の持っている水色の箸に注がれる。昼休みの賑やかな喧騒の中でこの机の上だけが時間が止まつたかのように動かなくなる。

古手川の箸を借りて食べた場合、必然的にその後古手川も使うことになる。これは地球文化的に言つところの間接キスというやつだ。一昨日読んだ恋愛小説でも高校生カップルがそんなことで喜んでいた氣がする。が、何故だよくわからんが恥ずかしいぞ。

じゃあ古手川に食べさせてもらうか？これは地球文化的に言つところの”アーン”というやつだ。よく御門にやらされて、それを真似したがるヤミにも何度かしてあげたことがある。が、してもらつたことはない。よくわからんが恥ずかしいぞ。

時間にして何分経つただろうか、もしかしたら数秒のことかもしれないし、数日が経つていたかもしない。

そのぐらい長い時間にオレは感じた。古手川も同じことを考えているらしく、頬を真っ赤にしながら固まっている。

この沈黙はまずい。何かしらのアクションを起してこの空氣を払拭しなくてはいけないが、一度止まつてしまつた話の流れを再建するような話術は生憎持ち合わせていない。

どうする……大きな声をだして誤魔化してみようか。でも頭おかしいと思われちゃうな、適当なこと言つて逃げちゃおうか。それも心象を悪くするし……畜生猿山のやつまだ帰つてこないのか。

額につつすらと汗を搔き、パニックに陥つた頭で必死に思考をめぐらせていると、

「ん？」

不意に廊下側から妙な感覚がした。  
嫌な予感は当たる。といつのは宇宙でも地球でも同じ。横目でチラ

りと確認してみると廊下の窓の向こう側にある木の上にキラリと光るもののが見えた。

狙撃銃のスコープか投げナイフの類か……いやいやここのは平和の星の平和の国日本。そんな野蛮人がおいそれと学校まで入ってくるわけが無い。

思い直し何となく座りの悪くなつた椅子を少し自分の方へ引こうとすると、

### チュインツ

と机の端で何かが弾けた。無駄に鋭い動体視力がそれを機敏に捉えていた。あれは地球製の銃の弾丸だった。

「え？ 今の音なに？」

突然の不信音にさつきまで呆けていた古手川もキヨロキヨロ辺りを見渡している。

まずい、さつきの銃は恐らくオレを狙つた物の筈だ。それも……宇宙賞金稼ぎの可能性が高い。

真に遺憾ながらオレの首にはそれなりの賞金が掛けられてしまっている。これはギドの野郎との銀河統一戦の時に掛けられてしまったものだがこの話はまた今度。

ともあれまずはここから離れなくては。このままではクラスメイトや古手川に被害が及んでしまう。

「えつと……親方！ 空から女の子が！」

「は？ ちょ、ちょっと雪ヶ岡君ー？」

言い訳が思いつかなかつたので適当に喚き散らした後窓から教室の

窓から飛び降りる。うちのクラスは3階にあったが、これくらいの高さなら特に支障はない。腰のバネを使って軽く着地、すぐに校舎の物陰に隠れた。教室の方からは古手川の声が聞こえている気もあるが叫び声とかでは無いところを見るとやっぱり狙いはオレで間違いないらしい。

どこかで隠れてやり過ごすか、それとも迎え撃つか。着ていた制服の袖を捲り上げた時、お腹がくーと鳴った。

隠れてやり過ごすで決定だな。なんせ焼きそばパン1個しか食べていないし。

この時間帯に人が居ないところは……体育館はバスケとかしている奴がいるし運動場もサッカーとかしてるしなぁ……屋上は多分リト達がいるしいざという時逃げ場が無い。とすれば……そうか柔道場だ。この時間は練習もしていないし裏口も窓もあるので逃げるのも最適だ。

そうと決まれば即移動。物陰をかさかさとカメレオンのように走りながら柔道場へとたどり着く。

慎重に中を確認してから開きつ放しにしてある扉から転がり込んだ。思つたとおり生徒の姿は無く、放課後は柔道部たちの野太い声が響く道場は静まり返りながら莊厳な空気さえただよわせていた。

とりあえず放課後くらいまでここに寝ているか、と携帯を取り出し御門に「なんか狙われてるから一応手当てと検診の準備しておいてね」とメールを打つておく。

送信完了の画面を確認した後携帯をポケットにしまった。

と、その時後ろで誰かが着地する音が聞こえてくる。  
どうやらうまく逃げ切れなかつたらしい。避けられない接敵に多少のため息を胸中漏らしながらも振り返つてみれば、そこには意外な人物が立っていた。

「り……凜？」

そう、九条凜その人だ。

右手に木刀、左肩にはライフル銃のよつたものを担いでいる。先ほどの狙撃はあれでやつたらしい。

「あなたがここに来たことも、それを予想できてしまつたことも私は気に入らない」

普段からチクチクとこちらに敵意を向けていた彼女だが、今日の様子は何だかおかしい。敵意というよりは殺意だし目なんか血走つている気がする。なんかもう持つてる木刀から天下取つたる！みたいな感じもかもし出していた。

なんだ知り合いか……と一瞬緩んだ氣をすぐにまた引き締める。宇宙賞金稼ぎの中には擬態タイプや寄生タイプといった対象物やその周りの人物に成りますまして暗殺を試みる者達がいる。知り合いだからって気を許していると首筋をスパートといわけだ。  
そして何より恐ろしいのが、対象の周りの者に成ります場合その者を真っ先に殺すのだ。寄生タイプの場合も宿主は息絶えることになる。

つまり……今日の前にいる凜が成り代わりだった場合……。

「おい、り……凜だよ、な？」

恐る恐る発したオレの問いかけの答えは鋭く踏み込んで放たれた木刀だった。

すぐさま体をずらし避ける。が、それも覚悟の上だったのか返す刀でこちらの眼球を狙う突きが飛んでくる。

以前のクリスマス、そしてそれ以降ちょくちょくと襲われた時よりも踏み込みは深く刀の振りも素早くなっていた。

が、やはり地球人の少女レベル。かわすのは容易い。

刀の横振りからの一連蹴り、そこからさらに刀での追撃。凜の得意とするコンボ技だ。普通の暴漢なんかだつたら四発貰つて悶絶しているだろうが、オレからすれば……つてちょっと偉そうな言い方になっちゃつた。まあでも凜は攻撃する時にまず当てようとすると見る癖があるのでどこに打つか、何をするかは丸解りなのだが。やっぱりこれは凜本人か？いやいや待て待て。まだ寄生されている可能性が残つている。確認する方法は……。

「貴様さえつ貴様さえ居なければ！…沙姫様は、綾は、私は…！」

「よく解らないけど、『めんつ』

喉仮田指して一直線に出された突きを避け、伸び切つた腕を掴み1本背負いの要領で凜を投げる。

負けじと凜も空中で体を捻り見事両足で着地するが、すかさずその足を払つてあげると簡単に地面へと倒れた。

そのまま凜の上になりながら押し倒したかのような体勢になる。

「くつー！」

当然身をよじつて抵抗する凜の瞳を覗き込む。寄生された生き物は大抵首から上に変化が生じる。最もそれが出やすいのが目だ。色が変わったり黒目が増えたりとすぐにその症状が出る。後は耳とか鼻とか口の中とか。

どうやら凜にその症状は見られない。寄生されてもいないらしい、これでホツと一安心。

している場合ではない。今の状況、客観的に見てひと氣の無い道場で女子生徒を押し倒す変態男子の図に他ならない。

そしてオレに馬乗りにされているいつも常にクールな表情を決めている凛が何だか涙目だ。きつく食いしばった唇がその屈辱を如実に表している。

これはまずい。退いた途端にぶん殴られそうだ。凛が襲い掛かつてくる理由はよく解らないが、原因はオレにあるらしい。それは間違いないだろう、が覚えが無い。そりや下着をチラシと見てしまったこともあつたけど、その前から凛はオレのことを睨んでいたし……。とりあえずこの体勢だけでも何とかしなくては。こんなところを人に見られたら社会的な死がオレを出迎えてくれることになってしまう。療養しにきて警察の厄介になるなんて笑い話にもなりやしない。押し倒してしまったことは事実だ。1発殴られるくらいむしろ当たり前じゃないか。覚悟を決めろオレ、手当ての準備はすでに出来てるじゃないか。

と、何気なく顔を上げてみると、

「有里く……、凛……」

柔道場の扉の前には丸眼鏡が特徴的な女の子。

そう、綾が立っていた。

比喩ではなく、全身の血が凍りついた。血液全てがカキ氷にでもなつたのかと錯覚したほどだつた。

まずいまざいまざい。が、ちょっと待て。これはもしかしたらチャンスではないのか。

オレと同じように凛も

「綾……」「、これは……ちがつ」

と明らかに動搖している。綾の性格から言つてこの気まずい空気に耐え切れずどこぞへ走り去るに違いない。

それをオレが追いかける。動搖してゐる凜からはお仕置きをされることもなくかつこの場から離れることができ、綾の誤解を解いた後はある程度怒りが収まつた凜から説明をしてもらいこれまた誤解？を解けば事件解決じゃないか！

窮地をチャンスに変える男雪ヶ丘有里つ、その才能まさにナイヤガラ！

さあ綾！今すぐにでもこの場から走り去るのだ！

だから道場の中へ歩いてくるんじやなくて外へ出るんだ綾！なんでこっちに来るんだ！最悪のパターンだよ！

オレの完璧な作戦とは裏腹に、ゆっくりとこちらへ歩みを進めてくる綾。俯き、眼鏡が光と反射していて表情は読み取れない。オレ達のそばまで来た綾は、静かに横へと座る。

道場に横になる凜とそこに馬乗りになるオレ、そしてその横に座る綾。尋常じやないシユールさがそこにあるが当事者達にそれは解らない。

時間にしておよそ一〇秒のほどの静寂の後、綾が口を開く。

「私ね、知つてたよ。凜が有里君をどう思つてるのかも…………凜が本当は有里君をどう思つてるのかも」

なんで2回言つたんだ？

「ち、ちがう……綾、私は……沙姫様の気持ちも、綾の気持ちも解るからつーそれで……そんなことになるなら、こんな男なんて！」

「やめて、いくら凛でも……有里君は悪くない、何もして無いよ。幸せになるのは沙姫様、それでいいじゃない」

「綾はずつと前から想っていたんじゃないのか？それをそんな簡単には諦められるのか？」

「仕方が無いんだよ、私は……地味だし暗いし眼鏡だし、沙姫様なら有里君も沙姫様も凛も幸せになれるよ」

「それじゃあ綾が幸せになれない。それに、こんな男沙姫様にはふさわしくない！」

「私知ってるんだよ、凛がいつも見ていたこと。教室を出て行くときに嬉しそうだったこと。凛の本当の気持ち」

「ち、違う！私は……沙姫様の付き人で、綾の友達だ！自分の私情など……ない」

「え、あの……オレ席外しましょ」

「話は聞かせてもらいましたわっ……」

すっかり置いてけぼりにされてもはや柔道場の置物みたいな扱いになり、居づらさから席を外そうとしたとき天井から突如沙姫が飛び降りてきて、

オレの顔へ思い切りキックをかまってきた。

馬乗りの体勢から飛ばされて「ゴロ、ゴロ」と少しかび臭い畳の上を転がる。

どうやつて昇ったとかいったとか言いたいことは山ほど頭の

中で浮かんで来るが、若干外れてしまつたアゴが言葉を吐き出すことを拒んでいた。歯は抜けていないようだけどほんのり血の味がある。つていうかオレを蹴る必要はあつたのか！？……ああ凛の上に乗つてたから怒つたのか。

「凛！綾！」

「は、はい！」「はつ！」

「確かに私は天条院家の娘、そして凛は付き人、綾は大事な友達。でもそれと誰かを想う気持ちは関係ないのでなくて？むしろ恋争いに手を抜かれたとあつては天条院沙姫の名が泣きますわっ！」

「沙姫さま！」「沙姫様……」

「これから私達は恋敵、手加減無用！この想い誰が成就させるか競争ですわ！」

「いえ私は別にこんな男など……」

「凛はどうでもいい人のことをあんなに毎日付きまとつたりできるの？尾行するのに写真を取つたり勝負しにいくのに身だしなみを整えるの？」

「み、見てたのか！？つじやなくて、人として当然のことだらう」「おしゃべりはもうお終い。凛・綾、昼食を取りに行きますわよ」

痛む類をさすりながら3人の話をおぼろげに聞く。すぐに話がまとまるところ、沙姫にはカリスマ性があるのかもしれない。ただのわがままお嬢様に見えるがちゃんと良いところもあるし、2人もそれをちゃんと知っている。素敵な友好関係だなあ……。

そんなことを、わいわいと道場を後にする3人の背中を見ながら考えたりしていた。オレ置いてけぼりかよ。結構その話の重要な地点にオレ居なかつた？気のせいかな？

もう今日は学校をぼりつ。そして明日猿山泣かす。だから今日はオレが泣くんだ。

オレを愛してくれるのはクロネコちゃんしかいない！

## 集まれ夏祭り！

日は沈んでそれなりに時間がたっているとここのまだ空氣は生暖かい。このモワツととした独特の空氣を夏と呼ぶのだろうか。日本という国は湿度が高くただ歩いているだけでもじんわりと汗をかいてしまう。

ぐんぐん上がる不快指数に普段のオレなら即回れ右してエアコンを入れた部屋で優雅な読書としゃれ込む所、だらうが今日は違う。

そうー夏祭りなんだ！

祭りという文化はどんな星にもあり、星を挙げて大陸を挙げて国を挙げて町を挙げてと様々な規模と方法がある。健康を祈つたり豊作を祝つたり神に感謝したり何かを奉つたり、違いはあるども共通しているものはある。

祭りは楽しい！

美味しい食べ物や飲み物にその場所ごとの変わった風習や踊りに音楽、様々な文化との交流をすることができる。

地球みたいに国があちこちに点在しているタイプの星だと、その種類が多いので調べているだけでも楽しい。ドラマや漫画、小説の中だけでしか知らなかつた。

「へつへつへーいいか美柑。お祭りには屋台ひ出店があるんだぜー」

「知ってるから

「しかもそこには林檎飴やフランクフルト、からあげやお好み焼き

そして焼きそばが一売ってるんだぞー

「知ってるか」「

「何だその態度はー誰がその浴衣を着付けてあげたと思つてるんだー！」

「自分で着付けたし。有里さーんと踊つてただけじゃん」

「あれは嬉しさを表現しただけだよ」

「嬉しいのは解るけど俺の甚平奪つてまで着ることないだろ」

「普段着とで悩んでたじゃん、その選択肢を簡単にしてあげたんだよ」

「わったしも浴衣だよーーねえねえリト似合つてる?」

夏祭り会場への道をリトと美柑とララと歩く。御門とヤミを先に誘つてみたのだが一人で二三かの星へ出かけるらしく断られてしまった。そこへちょうど美柑から電話が来て喜び勇んで一緒に行くことになつたのだ。

昼頃から行く気満々で結城家へと赴いたのだがどうやら祭りというのは日が落ちてから開催するらしい。なので夕方までの数時間を使柑とのレトロゲーリベンジマッチに費やし、少々早めとも言われたが人が混む前にと二人を説得し会場へと出発した。

お祭りの会場である神社までは結城家から徒歩でもそう遠く無い場所にある。しばらく歩くと立派なケヤキの木の向こうにこれまた立派な神社の屋根が見えてきた。

逸る気持ちを抑えて鳥居のほうへと周る。早めに出てきたつもりだつたがすでにちらほらと人が居る。一番乗りというわけにはいかなかつた……が、

夏祭りの始まりだ！！

「まず焼きそばだ！んでもつてたこ焼き軽く経由しつつカキ氷で温度調節して林檎飴で小休止わたがしから調子を上げてお好み焼きそば焼きそばからあげ焼きそばだ！」

「ちょっと有里さんそんな大声出さないでよ」

「お前お金大丈夫なのか？」

「これが地球のお祭りかー！」

「っしゃーーーララーー行きますか！」

「がつてんゆりっちー！」

鳥居を抜けるとそこには楽園でした。

ソースの焦げる匂いにチョコバナナやりんご飴の甘ったるい香り。どことなく不気味に見えるずらつと並んだお面たち。薄暗くなり始めた神社の中で提灯が道を明るく照らしてくれている。宇宙人なのにわくわくしてしまい何故か懐かしく感じてしまうのは、オレが地球人に染まっているからだろうか。そんなことはどうでもいいーこの場は楽しまなくては！

オレと同じくお祭り初体験のララを連れてまず一番近い焼きそばの屋台へ突撃する。人がまばらだったこともありすぐに入数分の焼き

そばを購入する」とが出来た。

「買つてきたー」

「きたよーー。」

「お前ら一人して行動が早すぎるんだよ…… ゃんきゅ、 お金払つよ

「私の分も?」

「財布開かせる時間も惜しいー。ララ、 次はたこ焼き行くぞーー。」

「おーーあ、 でもあのわたがしも食べてみたいー。」

「うしゃーー。今日は全部奢つてやるわー。美柑も行くぞーー。」

のんびりしている結城家をリリとオレで無理矢理引っ張り屋台へと連れ出す。

気の良さやうなおばちゃんのたこ焼き屋でみんなで並びたこ焼きを買いその横のわたがしをララ・美柑の分を買つ。歩き回つてほんのり暑くなつてきたのでカキ氷をと思ったが、屋台の前には若干列が出来上がつていた。

まあこいつの風物詩か、と並びながら焼きそばを頬張つていた時、軍師美柑から提案が

「……沢山買いたいなら一手に別れて買えば?」

なるほど。これでオレ・美柑とリト・ララで別れればリトとララを近づけることが出来る少し遠くに店を出しているから揚げの屋台をスムーズに処理することができる。またに一石二鳥!さすが美柑

だ。

「じゃあオレと美柑で向こうに来て来るよ」

「そうだな、じゃあオレとリラックであっちに行つて神社の境内で合流つてことで」

リラックと美柑もそれで賛成だつたらしくすぐに一一手に別れた。さつき買ったかき氷のブルーハワイ味を食べながら美柑と一緒に歩く。唯一想像できなかつたこのブルーハワイ味。何味?と聞かれたらブルーハワイ味としか言いようが無い。なんだ青いハワイって、カクテルかよ。

ちなみに美柑はメロン味。一口食べさせてもらつたけど、メロン味というよりはメロン飴味といった感じ。でも氷がさらさらしていて冷たく美味しかつた。

続いて狙つたのはチョコバナナ。これは美柑が

「ねえ私チョコバナナ」

と言つたからだ。

これは美柑がチョコバナナが食べたい、と実は私チョコバナナ星人だったのというカミングアウトの一いつの線があつたが恐らく前者で正解だろう。

チョコバナナ屋さんは女子人気が強く買いに行く人も多いがそれに合わせて屋台も多いらしくすぐに買つことが出来た。

「うん、美味しい」

「チョコとバナナの組み合わせを考え付いた人は偉大だなあ」

バナナの甘さをチョコのほろ苦さがうまく包み込んでいて美味しい。夏祭り効果つてのもあるんだうりけれど……。

「次なに行く？」

「なんか有里さん落ち着いたね」

「カキ氷食べたら冷めだし覚めた。美柑他に何か欲しいものある?」

「ん……別に」

そう言つて美柑がチラツと、ある屋台を見たのをオレは見逃さなかつた。普段から結城家の家事を一身に担う美柑はどこか大人びた嗜好もとい思考を持とうとしている。そのせいかこういつた時得慮しがちになつてしまふのだ。

しかし子どもは子どもらしくといつのがオレの持論であり、美柑にはもつと素直な性格になつて欲しい。

しからばつ

「じゃあオレあの店見たいんだけど付き合つてよ」

「ん、いいよ。しょうがないなあ」

女の子達で賑わっている屋台へと近付く。机の上に敷かれた紫のシーツには、ブレスレットやネックレスなどのアクセサリーが値札とともに陳列されていた。なるほど、アクセサリー屋さんというわけか。夏祭りの屋台にはそんなものも出るなんて驚き。食べ物枠娯楽枠みたいな感じなのかな。

「へー色んなあるな」

「そうだね」

一見素つ氣無をそつた返事だが、美柑の目は他のお客さん達と同様にキラキラと輝いている。女の子つてどうしてこう光り物が好きなのか。そしてなぜハート型とピンク色が好きなのか。この真理へは幾千の星を旅しても辿りつけない。

そんな女の子の壁に押されつつも美柑と一緒にアクセサリーを眺める。

沢山ある中である物が田に入つた。銀色のリングに小さなオレンジ色の宝石が付いている可愛らしい指輪だ。オレにはそれが小さな蜜柑に見えて、なるほど美柑にぴつたしだと思った。値札を見てみると……2500円か。指輪の相場とか夏祭りの屋台の相場が解らなければ、この指輪にならそのぐらい出してもいいと思つ。

「すみません、これひとつください」

接客する気なんてさらさら無い、といつよつに椅子に座りタバコを吹かしている店主に声を掛けお金渡す。チラッと一度こちらを覗つただけで手を出しお金を受け取つた。なんか無愛想だなあと思ったが、オレンジの指輪を袋に入れて渡す時にその横に置いてあつた水色の宝石が付いている指輪も一緒に入れてくれた。これはおまけということだろうか。

無愛想かと思つたら案外氣立てのいい人だったのかもしれない。

「有里さん何買つたの？」

商品を受け取つてすぐ美柑が聞いてくる。さつきから横田でチラチラ見ていたし気になつていたんだね。

店の前は次々にお客さんがやって来て込み合っていたので、屋台と屋台の間にある樹齢数百年の大木のところまで移動した。

「これ、美柑にプレゼント

「さつき買つてたの……指輪だつたんだ。なんでいきなり？」

「似合つと思つたから。付けて上げる」

袋から取り出した指輪を美柑の左手薬指に付けてあげた。こうこうときは右手に付けて上げるべきだつけ？薬指は合つてるよな……。そういう細かい文化はまだよく解らないんだよな。

でも歳相応な笑顔を見せて喜ぶ美柑を見ると正解だつたと思える。

「ありがと、有里さん。……ねえそつちの指輪は？」

「なんかお店の人があまけでくれたんだよね」

「そうなんだ……じゃあ私が付けて上げる」

そう言って美柑がオレの手から指輪を取り上げ、オレがしたときと同じように左手の薬指にはめてくれた。

朝露のような小さな宝石が指の上で朗らかに光つている。これがおまけだなんて素敵なお店だ。

「えへへ、お揃いだね」

「そ……そだね、お揃いだ」

美柑の掲げた手と手を合わせる。互いの薬指に光る宝石を見てどちら

「うともなく笑いあつた。

・・・・・。

・・・・・。

それから美柑と一人で焼きそばやフランクフルトやらお好み焼きやらたこ焼きやらを買い込んでから神社でリト達と合流した。向こうが買ったものと一緒にみんなで食べ、オレが買ってきたジュースで一息入れる。もう随分人も混み合つて来ている。そんな中を歩いていたのでリトは疲れたみたいだ。サッカーやめてから体力落ちてるもんな。

とはいえたれもちょっと食べすぎてしまつた。まだ射的や金魚くいをやっていないがララ達と騒ぐのはちょっと厳しいかもしけない。

「お祭りって楽しいなー！」

「やうだね、ララさんには新鮮かもね」

「うひー、もうべトベトだぜ……」

「オヤジくせによコト」

「オレもくすとゆくつしたいかも」

「じゃあコト達はここで休んでよー私も少しあそんでくるからー行こう美柑」

「私射的やりたかったんだ。景品につけに取つやあつよ

まだまだ元気が有り余っているラリと指輪を貰つてからやたら上機嫌な美柑が屋台の方へ走つていく。

「あいつら元気だな……」

「『れが女子力ってやつかな？オレもちょっと腹』なしに散歩してくるよ」

リトと一緒に座っていたベンチから立ち上がり背中越しにリトに言ひ。そのまま座つて休憩していても良かつたがさつきからオレにだけ蚊が寄つてきている気がして止まつてゐるのは避けたかった。

とはいえるみの中を目的もなくうろうろするのは疲れてしまつ。なので屋台達から離れた散歩道をブランブランしていると、

「雪ヶ丘君？」

と声を掛けられた。この鈴を鳴らしたような声は聞き覚えがある。そう、それも毎日。

「古手川か、こんばんは」

「ええ、こんばんは」

古手川はいつもの制服姿ではなく浴衣に身を包み普段は流している長い黒髪を上げて頭の上で止めていた。

学校とは違う古手川の姿にほんのりときめいてしまつた。

「祭りに来てたんだ……一人で」

「ひ！一人で悪かったわね！雪ヶ岡君だつて一人じゃない！私は学校の生徒が不埒なことをしないよつて見張りに来たのよー。」

一人で、と言つたのが癪に障つたらしく頬を赤くして古手川が怒っている。当たりの強い性格のせいで敵が多いからなあ……良い子なんだけど。

「じゃ、じゃあさ、良かつたらオレと一緒にまわるっリト達と一緒に来てるんだけど今ちよつと別行動中なんだ」

「わ、わたしと？」

「ほら、オレも一応学級委員だし、その見張りつての手伝つ必要があるでしょ？」

「そそそうね、うん、そづ。そづよー雪ヶ岡君は学級委員だから手伝わないとよー！」

「よし、じゃあ屋台の方に行くか

古手川と一緒にまた屋台群の中へと戻り入ごみを歩く。ちょっと離れて歩くだけですぐ逸れてしまつのでどうしたつて肩が触れ合つ距離で歩くことになつてしまつ。

こんな時

「あはは肩当たつちやつてるね、『めん』とかそんな感じで軽く流せれば良いのに

「……」

お互い完全に意識しあって無言状態。気まずい事この上ない。何とか空氣を変えなくては……。

「あ、古手川、金魚すくいあるよ。ちょっとやつてかない?」

「そ、そうね、金魚すくいね。いいわよー。」

5分振りぐらいで発した古手川の声は若干上ずっていた。オレ以上に緊張してたらしく。誘つておこしてこれはいけない。

ここは金魚すくいでカツ「い」とこでも見せて株をあげなくては。

「おじしゃく、これ一回ね」

「あいよ、彼女にいとこ見せてやんな」

「あはは。それ笑えない」

店主のめんどくさいノリをかわしつつ受け取った網に全神経を集中させる。金魚すくい専用の水槽には赤色の金魚に当たり田の出田金達が優雅に泳いでいる。

狙うのはすばり赤い金魚。出田金はなんか強そうだし重たそうだ。そして金魚の中でも泳ぎの鈍いものを探す。

しめたー!ちょうど壁際に帰宅途中のサラリーマンみたいに氣だるげに泳ぐ奴がいる!これは掬つて救つてあげなくては!

右手に持つた網を頭上高く構える。入射角は水面に対し45度!魚の尻尾の部分から着水し水面と平行移動しながら下へ滑り込みその勢いのまま掬いあげフィニッシュ!完璧だ!

ショミレーションは完璧、あとは実行に移すのみ。見てろ古手川オ

レの顎姿一

「いやーと勢いよく振り下ろされた右腕は

水槽のふちへとぶちあたつた。

当然網は勢いよく水の中へと着水し、 いつも容易く破れてしまつ。

「……」  
「……」  
「……」

穴があつたら入りたいってのはこういう時に使ひ薙葉だつたんだな。オレも古手川も、 店主ですら固まつている。  
どうする? セツキよりも氣まずいこの状況。 やる事なすこと裏田に出てしまつてこる今、 もう正直何やってもダメな氣がする。

そんな凍つた空気を払拭してくれる救世主がオレにはいた。

「あれー? ゆりつち?」

「それに古手川さんじゅーん!」

まかさの登場リサ・ミオコンビだ。二人とも可愛らしい浴衣を着ている。西蓮寺はいなこらしきけど一緒に来なかつたのか? 何にせよこれは勝機。

「いやーおじさんありがとうございました。 里紗たちもお祭り来てたんだ」

「春菜と三人でねー。 でも逸れちゃつて今探してたんだ」

「ゆうひりまみ古手川さんと？」

「さつめいじで会つてね。あとコト達も一緒になんだけど今は別行動なんだ」

どうやら西連寺も来ているらしい。もしかしたらコトのところにいるかもしぬないな。そろそろ花火も始まるらしくして今流しなこと。

「へー、あやしいなあ」

「実は一人でテートしてたんじやないのー？」

「ちちちち違うからー私は不埒な生徒がいかどうか見張りに來ただけで……っ」

「そんなにおめかししてー？」

「ゆうひりまみと一緒にー？」

「「あやしいなあ……」

「まあまあ、話はその辺にしてコト達と春菜のところに行きますか

「もうだね！」

「うん」「飴でも食べながらねー！」

「はいはい奢りますよ。でもそれだけな、今日もさすからかんだわ

「さつめいじさつめいじー！」

「話がわかるうー！」

パパッといりんご飴の屋台まで行き3本購入し里紗達に渡す。これで財布の中身はアルミ製の硬貨のみになつた。

でも美味しそうにいりんご飴を頬張る三人を見たらそんなことどうだつてよくなる。

それからオレ達四人はリト達を探しながらぶらぶら歩く。途中未央が買つたたこ焼きを一個だけ貰つた。

「いないなあリト達」

「春菜は勝手に帰つたりしないからどこかで迷つてるかも」

「携帯も繋がらないわ……」

「古手川って西連寺の電話番号知つてるんだ」

「い、いけない？ 私だつてメールしたりするわよー。」

「そんなん怒らなくて……じゃあオレとも番号交換してよ」

「え？…… そうね、どうしていつも言つならっこわよー？」

「だからなんでちよつと怒つてるの…… これオレの電話番号ね」

生憎赤外線通信なんてハイカラな機能オレには使いこなせない。ポケットに入つていたレシートにせりあいつと番号とアドレスを書いて古手川に渡す。

「え、あ、あの」

「ねーねーゆりつち」

「何だか花火上がるみたいよ」

「え、本当か？あ、あれリト達じや」

視線の先にリトらしき人物と、その前に立つ西蓮寺を見つけた時、

ドーン！！

と1発目の花火が空高く打ちあがった。それを皮切りに小さくものが次々に上がっていく。

「あ、いたいた春菜ー！探したよー。ナレで古手川さんとゆりつちと一緒になつてセー！」

「わ、私は……別に」

「あれ？結城もいるよ」

「ホントだ。もしかして春菜、結城に告白してたとかア？」

な、なんだって！？

「な、何言ってるのよー。そんなワケな、ないじやないーー！」

おお……そりゃそうか。夏祭りパワーでひょっとしたらとか思ったんだけど。

「みてみてー沢山囁呴もひつたよー。」

西連寺に強く否定了されへこんでいるコトを尻目に声のした方へ振り返つてみると、フララが運動会で使う大玉転がしの玉みたいになつた景品の塊を抱いで「ひらひら走ってきて」と。

「そんなに貰ひてどうすんだよー?」

「えへへーす!」こでしょー?」

「ゆりつち私力キ氷食べたい」

「あ、私も私もーレモン味で」

「あの、これ私の電話番号とアドレス……」

「結城君さつき何て言つたんだろう?」

「Uのぬごぐるみ有里さんと似てるんだよ」

「いいからお前ら花火見ろよ」

みんな集まつて何だか騒がしくなつたが、その後はちゃんと座つて空に咲く花火を堪能した。

もちろん力キ氷は奢らなかつたよ。奢れなかつたんだよ。

そんなこんなで、人生初めての夏祭りは素敵な思い出として、水色の指輪とともに引き出しに大事にしまわれている。

また来年もみんなで来れたらいいな。

## サボつて貧血

世界中の絵の具を集めても、恐らく再現のしようがない。

そんな晴天の空に最も近い場所、屋上のせらに上、貯水タンクに座つて口から漏れるのは欠伸が一つ。

夏の陽気というのははどうしても青空の下に行きたくさせるのか。恐らく教室の蒸し暑さとも大きく関係しているんだろう。今が授業中だとこりとは無関係だ。

人はこれをサボリというだらうし、古手川に見つかれば一時間ほど の説教は免れられない。

それでもオレがこりして空を仰ぐのは、きっと自由を愛しているからだ。

決して数学が嫌いだからじゃない。

昼休みのついで買っておいたコーヒーを一口飲み持ってきておいた小説を開く。3章まで読んだから教室に行くかな。  
と目次をつらつらと読んでいる時、

ガチャ

つと屋上の扉が開いた。

オレ以外にもサボるような生徒が他にいたなんて……なんとなく興味が湧いて給水タンクから顔を出して覗き込む。

「はあ……」

その生徒、ズボンを履いていたからおそらく男子、がフェンスに手を置いてため息を一つつく。

開かれたままになつている扉が邪魔で顔を見ることは出来ない。

「全く……僕は何のためにこの星に来たんだ……」

その生徒は誰にとも無くそう呟く。星……？

「ララちゃんは相変わらず自由奔放だし結城リトに夢中だし……そもそもなんであんな男がいいのか」

「リトにはリトの良さがあつてレンにはレンの良さがある。んでララはリトの良さが気に入つたってだけ。そんな人を悪く言つようなよな……」

「！？驚いた……まさか人が居たなんて。じゃなくて、僕より結城リトの方が優れているつてことか！？」

聞き覚えのある声と親友の名前が出たこともあり、思わず貯水タンクから飛び降りて声を掛けてしまった。

フェンスで黄昏ていた生徒はそう、宇宙人転校生ことレンだった。

2年生になつた時にクラスが変わつてしまつたため交流が無くなつてしまつていた。以前はそれでも結構話しかけたり無視されたり一緒に帰ろうとして振られたりしていくお互い宇宙人ということもあって、オレの中ではそれなりに親しい友人だと思つていた。

「いやだからそういうのじゃなくて、いつも十人十色というか」

「それより君は誰だ！？」

思つていた。が、どうもレンこといつてはもうではなかつたらしく。

「いやオレは雪ヶ丘有里つていつて1年生の時クラスメイトだつたけど2年になつてクラスがかわつてつて今そんなことどうでもいいだろー。いやどうでもよくはねーよ！結構話したことあるだろ？」

「僕はララちゃん関係のこと意外は覚える気がないからね」

薄々感ずいていた部分はあつたが、どうやらレンは少々頭が可愛らしい、らしい。視野が狭いというか思考が一直線になつてしまふ。とにかく昔ギドの所でも会つた事あつたのになあ……まだレンが小さかつたころの話だから覚えてないのも仕方ないだろうけど。にしたつてこれはかなり心に来る。

「まあいいや。それより、今授業中だぞ？何で屋上なんかに上つてきたの？」

「決まつているだらうー。ララちゃんのことじやー。いつもいつも結城リトの話ばかりして……ずっと一緒にいたのは僕だというのに！」

急に捲くし立てるように話し始めるレンに押されながら考える。確かに、ギドから聞いた話では色んな所へ二人で遊びに行つたりして大人を困らせたりしていたらしい。いつも一緒にいたというのは間違いないだろうけど。

が、レンがララに相手にされない最大の理由がある。

しかしそれを本人に言つてしまつのはさすがに気が引ける……。それにオレはリト達の恋愛を応援していくと決めてしまつたし。どうしたものかと腕を組むと、砂っぽい屋上に爽やかな風が一つ吹

き込んでくる。

と同時に

「くつくしょーい」  
ボウン！…

くしゃみと小さな爆発のような音が聞こえてきた。

「お？」

「もうっ、レンったら最近愚痴ばっかなんだから」

その小さな爆発は砂煙をもくもくと巻き上げ一瞬レンの姿を隠した  
かと思うとそこから女の子が現れた。

髪の色はそのままだが肩より下まで伸びているし胸も膨らんでいる。

「ヘーメタモル星人の変身前の前で見たの初めてだよ」

「わっ！人がいた」

「ごめん、驚かせて。確か記憶は共有なんだよ…ね？でも一応自己  
紹介、雪ヶ丘有里です」

「知ってる知ってる。リト君といつも一緒にいる人じょー？」

「そ。えーっと名前は……」

「ルンって言つの。勿論女の子だよ。そっちも宇宙人なんだよね？」

「やうだよ。とは言つても少星人系だけね」

「へーそつなんだあ……ん?名前ゆり君だっけ?」

「有る里と書いて有里だよ」

「もしかして……宇宙名がわ、フリティ・ラリアとかだつたりする?」

「あ……えーっと、うん」

「えええええええ!?!?」

「そんないきなり大声出さなくとも」

「だ、だつてだつてフリティ・ラリアって言つたら伝説の賞金稼ぎだもん!ララのお父さんと戦つて唯一生き残つている人だし銀河統一戦争の時の大立ち回りなんてお話になつてるんだよ!?!?宇宙ファンクラブだつてあるし私だつて実は会員だもん!」

「オレの知らないオレのことを今知つた。なにそのお話聞いてみたい」

「ああああの、サインください!?!?」

そう言つてルンが取り出したのは一枚のサイン色紙。オレが本当に宇宙的に有名なそして伝説的な人物であつたのなら、ポケットからマジックを取り出しあらさうとサインをこしらえるのだろうが、

「あの、ボールペンでいい?……ああインク乾いちやつてるわ。そ

うだ、もう一本持つてたんだ……雪ヶ丘、ゆーりっど。これでいいの、かな？」

「横にフリティ・ラリア様とルンへってのも書いて欲しいな」

「様て……はいこれでいい？」

自分としてはしがない宇宙賞金稼ぎのチンピラだと思つてるので、有名人的な実感とか相応の振る舞いなんてできないしわからない。サインなんてテスト用紙に書くみたいな感じにカタカナで書いてちゃつたからね。地球に慣れすぎだ。

「やつたー！まさかこんな辺境の星でフリティ様に会えるなんて」

「その様つてのやめてくれないかなー。オレは地球に隠居しているだけのただのしがない宇宙人な訳だし」

「でもフリティ様はフリティ様だし」

「そんな”だし”とか言いきられたらもう返答のしようがないし」

「このサイン大事に取つておこー」

すっかり上機嫌になつたルンは色紙を丁寧に抱きしめながらオレの横をすり抜け屋上から出て行つてしまつた。

なるほどあれがメタモル星人なんだな。くしゃみで入れ替わるなんてなんか冗談みたいだ、つとこれは悪口だ失敬。

レンは結構真面目な感じだけど、ルンは何か軽めというか親しみやすい性格をしている気がする。

何にせよ自己紹介も互いに済ませたのでこれでお友達同士という訳

だ。

再び貯水タンクへよじ登り小説の本を開く。聞こえてくるのは授業終了を告げるチャイムの音。

それから少しして校舎の中がざわつき始める、きっと掃除が始まつたんだろう。

しかし心が強いオレは決して貯水タンクから降りることは無い。それは自らの罪悪感との戦争だ。

そしてそれこそが「サボリ」という背徳的行為を休息といつ精錬された行為へと昇華させるための儀式に他ならない。

自然とページをめぐる指に力が入る。それは何故か、

そう、こちらに近付いてくる階段を昇る音が聞こえてきたからだ。屋上を掃除する分担はこの学校に存在しない。ゆえに放課後の掃除時に屋上へ来る生徒などいるはずが無いのだ。

心臓の音が大きく響く。緊張した血管に火照った血液が流れしていくのが解つた。

ガチャ……

と重苦しくそして鏗びくさい音を立て扉が開かれた。

生睡を一つ飲み込む。小説のページなどさつきから少しも進んでいない。まだ諦めるな。何となく青春を感じたかつた男子生徒が夏の陽気に釣られて何となくきただけかもしれないじゃないか。だから諦めるな、例え相手が貯水タンクへと昇ってきていても、決して最後まで希望を捨てるな。

最早ホラーゲームの主人公の心持で貯水タンクに繋がる鉄はしごの方をゆっくりと振り向いた。

真つ黒な長い黒髪に包まれた、真つ黒な瞳が一つこちらを覗いていた。

血が、呼吸が、学校が、国が、空気が、世界が凍つた。

はじめを上りきった少女が口を開く。

「ちょっと雪ヶ丘君！こんなところでサボって！掃除始まってるんだよ、降りなさい！」

さあ、ロックンロールの始まりだ！

・・・・・。

・・・・・。

教室掃除は大まかに4つの工程に分けられる。まずは机運び。

クラスメイトたちが日々ノートや教科書を広げ勉学に勤しんでいる机を教室の端っこへ全て寄せせる。一気に1列全ての机を押ししたい衝動に駆られるが机の中身がバラけてしまつたときのリスクを考えると、実行に移すのは難しい。

この工程は主に6～8人によって行われる。

そして掃き掃除。箒によつて大きな埃たちを一箇所へ集めちりとりで取つていく。この工程は後の作業をよりやり易くするためのものである。が、だからといって手を抜いていい訳ではない。

次は吹き掃除。

濡れ雑巾と乾拭きとのフォーメーションに寄つて目に見えない埃達を一網打尽に捕らえていく。茶色く汚れていく濡れ雑巾だけがやりがい。

最後はまた机を元の場所に戻す。一番簡単な工程にも思えるが、机の置き場所には難しい基準がある。

それは例えば、窓側の生徒は丁度窓が開く場所を望んでいるし、教室の扉付近の人は出来るだけ扉から離れたいという心理がある。運悪く隣同士になつてしまつた上辺だけ仲がいいが決してお互い話しかけたりしないなんだか剣呑な空気を醸し出す二人組みなんかは、それとなく机を離さなくてはならない。

そういう細やかな機微がこの工程には必要になってくる。

これらの他に、花瓶の水を替えたり黒板のチョーク充填黒板消しの掃除など細かい部分をしたりもするがそれは担当の生徒達に好みによる。

「ちよつと雪ヶ岡君、サッシの所もちゃんと掃除しなさい」

「労働過多だ」

そんな6～8人が30分かけてする掃除を、オレはたつた一人でやつていた。

怖い監視者、古手川の元。

しかもその監視者の好みは教室の細部に溜まっている埃を見逃そうとしない。

そしてちよつとでもサボつるとするとお叱りの言葉が飛んでくるのだ。

先ほどちよつと机を運び戻し今は窓を掃除をせりれている。

掃除はすでに1時間もかかってしまった。

他の生徒達はとっくに掃除を終えており、みんな帰宅したり部活で汗を流したりしている。

「なんで雪ヶ岡君はすぐサボりたさうの？」

「空が呼んでこむのや……」

「やうこつ」とを聞いてるんじやなくして、どうして遅刻したりサボつたりするの？』

「いの……慣化しか日常にちょっとした刺激どこかのアクセントをと思こめして……『めんなさこ』

御門が点滴してくれなくて朝体調が悪く仕方なく遅刻する」ともあらが、8割は寝坊やめんどくさくてのサボリだ。

その怠惰の出所は自分でもよく解らない。地球での隠居生活が合つて無いのか？主觀的にも客觀的にもバリバリ馴染んでると思つんだけど。

最近ひやんと運動して無いから何か溜まってるのかなあ。

「ふーー、よしこれで終わつ

「まだ掃除してない場所はあるけど……一応は終わりに近づいたわ

「なんかお腹減つひやつたな

「や、そそれじゃあ……私と帰つてどうか

ド「オオオオオオオオ！……

「な、なんだ！？」

「あやあああ……」

古手川が何かを言いかけたとき、玄関のほうから物凄い爆音とそれに続いて校舎の崩れる音が聞こえてきた。

嫌な予感がピリピリとしてくる。先ほど叫び声を上げた古手川がオレの袖を掴んでいた事に気付いた。

平和天国日本においてこんな爆音が響き渡ることなど有り得ない。とすれば、原因が宇宙的なものである可能性が高い。

宇宙的なものということは……大概ララが原因だろ？ オレや御門、ヤミの線もあるがあのお転婆娘のトラブル率を考えると……。

「悪い、古手川。ちょっとオレ見てくるよ」

「え？ つちゅ……また窓からなの！？」

いつものように湧いてくる悪い予感の出所を確認するために、そつと優しく古手川の手を払い、先ほど綺麗にした窓枠に飛び乗り一息に外へと飛び出した。

恐らく10㍍はあるだろう地面へと腰と膝のバネで見事に着地し、玄関のほうへと走る。

見慣れた靴箱のところまで来ると、そこは今日の朝みた玄関とは違っていた。

入り口横の壁が見事に崩れていたのだ。

そしてなんと、その崩れた壁のすぐ横にリトが倒れていた。

「リト！リト！大丈夫か！？」

悪い予感が現実味を帯びていく。すぐさま駆け寄り抱きかかえると  
どうやら田を回して気絶しているだけらしい。

ほつと胸を撫で下ろすと同時に仄かな怒りの炎が心に沸き起る。  
一体誰が、何のために。

屋上の方から聞こえてくる殴打の音も気に掛かるが、まずオレには  
することがある。

花壇に隠れてこちらを見ているルン・沙姫に話を聞くことだ。

「なんでリトは倒れてるの？っていつか何事？っていうかお前ら原  
因だろ、なにした」

「フ、フリティ様！」

「あああああ有里様ではありますんか」

オレが声を掛けると、一人は明らかな動揺を持つて応えてくれた。  
とりあえず犯人は一人ということで間違いないらしい。それさえ解  
れば今はいい。後で綾にでも何をしたかを聞いておけば事態のあら  
ましはわかるだろう。

「とりあえず一人の話は後で聞くから。解ったな！」

そうだけ言い残し近くにあつた木へと飛び移る。そしてすぐ校舎  
のほうへと飛び、出っ張りとたまたま開いていた窓を乗り継いで屋  
上へと昇った。

小さな破片の転がる屋上の床へと両足を着地させたオレの見たもの

は、CGがふんだんに使われた映画のアクションシーンのよつて戦いの「アリヤミ」とヤミだった。

「アリヤミの強靭なパワーをヤミが防ぎ捌いてる。むしろめ力のアリヤミ・技のヤミといったところか。

なんて解説者気取りで考えている間にも屋上のタイルは、一人の拳の衝撃で剥がれ砕けている。

ついこの前直したばかりなのに！…壊したのはオレだけだ……いや7：2でギドが悪いけど。

「あの、お一人さん。何があつたかは知らないけど、ケンカするなら他所でやつてくれません？」

「ゆりつち？そつかゆりつちも参戦か！負けないぞーー！」

「やうですね、この辺りで一つ借りを返しておくれのもいいかもしけませんね」

仲裁をと思い声を掛けてみると、一つの矛先がこちらへ向いた。  
戦闘で頭に血が上つてしまつてこいる一人にまともな説得が通じるわけがない。

ならば、残る手段は肉体言語。田には田を、歯には歯を。むしろやられる前にやつてやるー。

まず最初にしかけてきたのはララだった。

デビルーク星人、それも王族となるとまず身体能力がすば抜けている。避けた拳の拳圧だけで骨が折られることだつてあり、パワーだけで言えば宇宙の中でもトップクラスだ。

そして地球にある漫画みたいに尻尾から訳のわからないビームを出したりも出来る。

オレとの距離、8mほどの距離をおよそ2歩で駆けてきたララがそのままの勢いを全て乗せた拳を振りかぶってくる。並大抵の奴ならその速さにかわし切れず顔面にくらい意識を刈り取られただろうがそうはいかない。

接近に合わせ1歩下がり拳に右手を合わせ軌道を逸らせる。隙だらけになつた足を払い完全に中に体が浮くと、合わせていた右手を掴み引っ張るようにして体を投げた。

クルッと一回転したララはそのまま地面へと落ちる。まさかやられるとは思つていなかつたのかララはキョトンとしている。同時にほぼ勘だけで首を動かす。一瞬あとにオレの後頭部のあつたところを金色の拳が通つた。

背筋に寒いものが走る。背中にヤリのトランクスをする時に発する音を聞きながらオレは前へと跳んだ。

前転を繰り返しながら跳ぶ。その時コンクリートの破片を二つ手に拾つておく。

屋上の端まで来て両足で着地すると、闇の追撃、金色の槍が向つてくるがそれもからつじで避ける。ヤリのやつ本氣でかかってきてないか？

その槍は屋上の柵にぐるぐると結びついた。

伸び切つたそれを引き戻しその勢いに乗つてヤリが接近してくる。そして繰り出された拳。多分回避は難しいだつ。右手にぐつと力を込め、その拳を受け止める。バチィイイイン……といづ音とともに手首や腕に衝撃が走つた。

ヤリが得意なのは近・中距離戦だ。そしてオレが得意なのは超接近戦。

超接近戦とは伸び切った腕の内側で行われる戦闘のことである。オレ命名である。

それを知っているであろうヤミは自分で接近しておこしてもオレを懷へは入れさせてくれない。

ちゅうどいい距離感を保ちながら髪を刃物や拳や鈍器へトランスさせじゅうらの動きを封じてくる。

対戦経験だけで言えばヤミはよしゅうちゅうケンカしていたギドよりも多い。まだヤミと出合つたばかりの頃、そしてトランス能力の特訓、賞金稼ぎのノウハウ鍛錬。100や200ではすまないかもしない。つまりお互いの手札を知りぬくしているということだ。

だから「」が出来ることがある。

ヤミの剣を屈んで避けたときに持っていたコンクリートを靴の上に置く。

すかさずアゴを狙つて跳んでくる拳を回避した後右足を蹴り上げる。当然半歩下がりヤミはそれを避けようとする。

が、乗つけておいた破片はヤミの顔面へと跳ぶ。一瞬大きく口を開き驚いたヤミだったが首を動かし見事に避けた。

しかしそれも狙い通り。もう一つ隠し持つていた破片を同じように投げつける。

タイミングはばっちしだったが、そこもさすが金色の闇。咄嗟に左手を出し破片を掴む。

そう、ヤミは回避よりも防御を重視する傾向がある。しかし、この場面ではそれは失策だ。

顔の前に左手を出したことにより視界が遮られたヤミへ、一瞬で接近する。そう、超接近戦だ。

完全に懐へ入ったヤミのお腹に手を沿える。

まず力を入れるのは足。地面との反発力をそのまま膝へ腰へと流し力を大きくしながらその全てを右手に集め、

「鉄拳制裁！」

「んっ」

「うー、いたた……キヤッ！…」

思い切り吹き飛ばす。そしてやっと起き上がろうとしていたララにぶつかった。

何故こんなに起きるだけで時間がかかっていたのか。それは、オレが足を払った時に足首の力が抜けるように蹴つておいたからだ。これは御門に教わった技で、上手い所に当てれば一時的に間接を痺痺させることができるらしい。当然後遺症やあざが残ったりはしない。

そんな足が不安定な状態のララにぶつ飛んで来たヤミが当たれば、屋上の柵を越えて飛んでしまうのは必然といった。

・・・・・

・・・・・

「それで、一人は何をしたの？」

学校のベンチに腰掛け、オレの田の前にしゃんぽりと座っている沙姫とルンに問いかける。

屋上から飛んでいったワラとヤマはあらかじめ呼んであった御門にキャッチしてもらい、手当もしてもらっている。

オレの攻撃をもろにくらつてしまつたヤマはまだ起きないらしくオレの膝を枕にして眠つている。

ワラは先ほどむくつと起きて迎えに来たリトと一緒に結城家へと帰つていた。

「……」

「えーっとそれは……」

「綾、何があったの？」

「あの、レンちゃんと沙姫様でヤマちゃんと依頼を出したんです。その、ワラちゃんと戦つよう」。そうしたのヤマさんも乗り気で……」

「それで暴れまわったと。んー、校舎の修理はワラの機械で何とかなるかなあ、ヤマには後でオレから言つておくよ。一人は自慢にて反省。終わり！」

そう捲くし立てたといひで激しい眠気に襲われた。抗うことすら許されないそれは貧血と言つてもいいかもしない。というか多分貧血だ。

意識を完全に失う寸前に聞いたのは御門のついた小さなため息だった。

**最初の口元普通の田（前書き）**

書き直しました

## 最初の日は普通の日

オレ達は海にいた。

「　　海だ　　つーー」「

類に当たる潮風、昨日見たタヒチ特集のような透き通った海。キレイな海はむしろ緑色に見えるらしい。これは珊瑚礁のせいなのかな?

まあそんなことじりだつていい。

オレ達は海にいた。

・・・・・。

・・・・・。

事の発端は猿山の言葉だった。

「海に行きたい」

9月の残暑で頭がおかしくなった。きっとそうだ、そうでなければお盆を過ぎたクラゲだらけの海で泳ぐつ何て誰が言い出す。まったく……

「オレも行きたい」

オレも暑さで頭がおかしくなってなければ毗っていたところだぞ。思い立つたらすぐ行動。

まず移動手段、これは最近通販に嵌まつてしまい金欠に陥っているのでかなり難しい問題だった。

海に行くためには電車に乗らなくては、電車に乗るためにバスに乗らなくては、バス・電車に乗るなら駅弁・飲み物は必需品。そうやって交通費がどんどん膨らんでいくのを黙つて入られない。思考をお金に変えるんだ。

知り合いの車に乗せてもらうか？いや、そんな知り合いはないし御門とオレの宇宙船ならどこへだって行けるけど、そのために宇宙人だつてばらすのはいやだし。

歩いていくか？……どこへ？徒步圏内で行ける海水浴場なんてない。よくてプールが精一杯だ。プールなんていつだつて行けるだろう。そりや海だつていつでもいけるけど、泳げるのは今だけだ。今でギリギリだ。

ん……そういえばあの玄関つてララが直してくれたんだよなあ。小さな傷とかまで無駄に再現されて完璧に直してあつたつけ。

ん？ララなら惑星間跳躍機くらい持つてるんじゃないのか？なくても作ってくれるんじゃないだろうか。そうか、それなら地球のあらゆるリゾート地が海水浴の候補になるじゃないか。無人島なんていいな……誰もいない場所でのんびりと。でも海の家も捨てがたい……、いやもう無いか。無人島で決定。

この考えをまず猿山に相談してみたところ

「いーんじゃね？」

と鼻をほじりながら返事をくれた。すでに彼の興味は呼んでいるフ

アッシュジョン雑誌に移つてゐる。一瞬の狭間に生きるもの猿山。とりあえず1発殴つておいた。こつちは焼きそばパンの供給量が減つていてほんのりイライラしてゐるんだ、まったく。

まあでも賛同を得たのであとは許可だけだ。  
すぐさまララのところへと向つて立つてゐる。

「わらは自分の席のところへ西連寺と立ち話をしていた。ちゅうどいい、西連寺も誘おうと思つていた所だった。

「ねえララ、今ちょっとこい？」

「いーよ、なになに？」

「えーっとさ、オレと猿山で海行きたいなーって話してたんだけど、ララも良かつたら一緒に行かない？」

「海！いいねー、行きたい！」

「おおー、それでさ、一つ頼み」とがあるんだけど、ララってワープ装置とかつて持つてる？

「携帯用のがあるけど……大きくもできるよ~。」

「さつすがララさん。交通費とか結構お財布に痛いからさ、そのワープ装置でどこかの無人島へつて考えてるんだけど……お願いしても、いい？」

「まつかせてー明日には作っちゃうからー。」

「いや行くのは……（決めてなかつたな）……土曜日だから。西連寺も良かつたら一緒にどう？」

「えっ？ わ、私は……」

リトは当然メンバーに入っている。何か用事があつたとしても無理矢理連れて行くつもりだ。そしてララも来るなら西連寺にはどうしても来て欲しい。そして何らかのイベントでも起して欲しい。でも反応を見る限りあまり乗り気でない様子。やつぱりちょっと時期が外れているからか？ それとも水着が嫌だとか……。

しかし西連寺にはなんとしてでも来て貰わなくてはいけない。そして魅力的な水着を着て貰わなくてはいけない。

「ハラも来てくれるって言つてるし勿論リトも来るかい？」

いやこの言い方は失敗だったか？ どちらかと言えば奥手な西連寺に男が沢山いることをアピールすることになってしまつ。

「あ……じゃあ、えーっと行かせて貰つても、いい？」

あれ？ ……まあいいか。これでメンバーはオレ・リト・猿山・ララ・西連寺の最強布陣の完成だ。

ん……未央達にも行けるか聞いてみよつ。こいつらのことは大勢のほうが楽しいし。

西連寺に聞いてみると、一人は飲み物を買いに購買へ行つたとのこと。ちょうど喉も渴いていたしオレも何か買……水道水でいいが。でも一応、念のため、随分軽い財布を鞄から取りポケットにねじ込んで廊下へ出る。

と同時に一人の生徒に進路を阻まれた。

「古手川と、レン?」

「せつもの話

「聞かせてもらひたわー。」

めんどくさこのに絡まれた。

「何か用?」

「僕達も」

「海に連れて行つてもらひわー。」

「とつあえずその話し方やめてほしー」

「土曜日」

「結城君の家に集合だ」

ヘックシュン「いいんだよね! フリティ様!」

「もう訳がわからん。あとフリティ様つてのやめて」

いや別に一人が来るのには大賛成なんだけれどね。なんかこう……怖い。

まあそんなこんなで日にちも通行手段もメンバーも決まった。

後は当田までこのウキウキを保つだけだ。

そういうば、里紗・未央達は予定があるといって一緒に行くことはできなかつた。行けないことを悔しがつてくれただけで、誘つた甲斐がある。そう思えた。

・・・・・。

・・・・・。

「「」が「」さん部屋……」

「すっげーーホントにクローゼットの中かよー?」

「こんな……信じない、信じないわ」

「さつすがララちゃん、最新の機材ばかりだね!」

「なアリト、美柑は?」

「なんか今日用事あるらしくて断られちゃつた」

結城家に集合したオレ達は早速リトの部屋のクローゼットの中に入った。

オレはもう何度か入つたことがあるので新鮮さや驚きは無い。それよりも結城家に美柑が居なかつた事のほうが気にかかつた。まあ当日にいきなり誘われても大変だろうし、用事なら仕方が無いか。

「んじゃ、早速こーーーーの装置みんな入つてね」

しばし部屋中をキョロキョロしたララによるへんてこ機械の説明会が開かれてから、ララの指差したこれまたへんてこ機械のところへ集まる。

ララが用意したワープ装置、通称ワープくんは子供用ビニールブルボンの大きさで輪つか型だ。うさぎみたいな形のパネルが付いて

いて、そこに座標を設定してワープするらしい。

そんな説明をされたがみんなキヨトンとしているので、割愛してもらいララがスイッチを入れる。

場所は沖縄の無人島。リト達とも話しあつたが、いくら無人島とはいえいきなり海外はちょっと怖いといふ意見を採用し国内限定ということにした。

幾何学的な、ブンツという音とともに景色が一瞬ゆがむ。

光のような、モザイクのような、およそ形容のしようがないものに視界が遮られ、目を開けたときには、

「　　海だ　　っ……」

オレ達は海にいた。

・・・・・。

・・・・・。

みんなよりも一足先に着替えたオレは真っ先に海へと入る。着替えたというか下に着込んでいたので上を脱ぐだけだった。

海は思っていたより冷たいこともなく、見渡した感じクラゲのような生き物も見当たらない。

これなら諦めかけていた遠泳もできるかもしれない。レン辺りを誘つて競争でもしてみよう。

寄せては返す小波にしばし足を預け瞳を閉じる。地球人では無いのにこれを懐かしいと思つてしまつるのは、何か哲学的な、生物学的な理由だろうか。

「 しょっぱいなあ……」

「何が？」

帰つてくるとは思わなかつた返答に振り返つてみると、そこには水着に着替えたリトと猿山がいた。

リトはオレと同じトランクスタイルのもので、猿山は「字がまぶしいブーメランパンツだ。あいつなりのファッショソ何だらうが、何かこう……言葉に出来ない違和感があるのに不思議と似合つて見えた。

「女子達は？」

「まだ着替えてるんじやねーの、女ってのは着替えに時間をかけるからな……覗くか？」「

「一人で帰りたいならしきりよ」

「なんだよー冗談だろー」

「ふんつ、例え覗こしても僕がさせないけど」

「レン居たのか」

「覚えのない荷物が多くて着替えが手間取つたけどね

ちなみにレンもトランクス型の水着を履いていた。この年頃でブーメランパンツを履きこなす勇気は中々出でこない。

「レン、後でオレと遠泳勝負しよ」

「風撫だから挑戦か……ララちゃん遊びたいといつもあるけど、これを断る手はないね、勝負だ！」

「おー！泳ぎの勝負ならオレもやるぜ、この夏編み出したモンキー スイムを魅せてやるよー。」

「すでにバカ丸出しだけどな。リトもやりつけ？』

「…………」

ここにもバカ丸出しが一人。むしろむつりスケベだらうか。真っ赤な顔で鼻の下を伸ばしこれに向つてくる水着姿のララと西連寺を見ている親友にオレはその言葉を送る。でも見とれてしまつのも解る。

ララの母親譲りであるまさにボンッキュッボンッなスタイルの良さと、西連寺のスレンダーながらも消して細すぎない女性らしさにかさを保つていて良さ。どちらかを選べと言わればこれはまさに究極の選択といってもいいかもしない。それほどの美しさを、彼女達は保有していたつてオレなに言つてんだ。

「ララちゃん！水着も似合つててるよー。」

「うひょーこれだけで海に来た甲斐があるぜー。」

「……あう」

「鼻血押さえてないでリトも何かないのかよ」

純情ピュアピュアボーイ継続中のリトにこの刺激はちょっと強すぎるので、そろそろ慣れて欲しいところではあるんだけど。

「それじゃみんなーあつそぼーー！」

「 「 「 わ つ ！」 」

海を前にして議論は不要。サンダルを脱ぎ捨てる、パークーなんて羽織っているな、向かい風に向って走れ。

オレの夏はこれからだ！

・・・・・。

・・・・・。

「あははは

「そつちいっ たぞー」

「え？ キヤツ」

「はるひ …… 西連寺ちゃん大丈夫？」

「今だ！ 結城リト、覚悟！」

浅瀬から聞こえてくるのはみんなの楽しそうな声。それをオレはシートの横にさしたパラソルの下、聞いていた。

その後すぐ男子全員参加で行つた遠泳大会にて、少々羽田を外しうぎ貧血をしてしまったのだ。そういえば昨日準備をしていて御門の検診を受けていなかつた。一日くらじ何とかなるかと思つたけど

……。

「高校生の癖にはしゃぎすぎなのよ、一応クラス委員なんだからみんなを監督する立場として……」

そんなオレの横で説教をするのは鬼の風紀委員古手川その人。パンに膨らませた浮き輪を片手にオレの横で座つている。

てつくり具合の悪いオレの様子を心配してくれてるのかとほっこりしたが、何だがそれだけではないっぽい。

そうだ、古手川は多分、海に来てからまだ一度も泳いでいないんだ。遠泳大会が行われているときにちょっとぴり浅瀬に足だけ入れたらしげど。

何故泳がないのか。

海に来て泳がないのなら、もうそれは海に来る必要がない。だがそれでも古手川は、盗み聞きをしてまで参加した。しかし、今はこうしてシートの上に座っている。

んー……、

「ねえ」

「なに? もう良くなつたの?」

「ああうん、もう大丈夫、ありがと。それでさ、ちょっと質問なんだけど」

「?」

「もしてかして古手川って……泳げないの?」

「……」

「泳げるわよ」

「嘘だろ」

「……………ひん」

やつぱり。持つてゐる浮き輪は通常企画よりも一回り大きな気がする。臨海学校のときとかどうしたんだり。まあ泳がなかつた生徒達も沢山いたしその中に居たのかな。

それじゃあ……なんで今日海に来たんだ? ビーチバレーがしたかつたら? 違う、だつたら今すぐにでもリト達のところへ参加するはず。じやあやつぱりオレを心配して……え?、嘘マジで?えへへ……照れるなあ。

まあそんなわけが無いんだけど。

つまり古手川は泳いで見たいんだ。この澄み渡る海を。でも踏ん切りが付かない。誰かに背中を押して欲しい、何なら泳ぎを教えて欲しい。

その名誉の役に選ばれたのがオレといふことか。隣に座っていたのは催促だつたんだ。

そうと解れば話は早い。

「じゃあさ、オレと一緒に泳がない?」

「えつ?」

「まだもつと泳ぎたいんだけど、一人じゃつまんないからさ。古手川が一緒に遊んでくれるなら嬉しいんだけど」

「や、そういうことなら仕方ないわねー風紀委員として私が面倒みてあげるんだから！」

解りやすいといふか何というか、可愛らしい。オレは立ち上がり古手川の手を取る。一緒に立ち上がりシートから足を踏み出した。背中を押すようにして吹く潮風にふと振り返つてみる。

そこには、少し意地つ張りな少女の、太陽にも負けない笑顔があつた。

・・・・・。

・・・・・。

「いやー遊んだなー」

「ねー」

「そろそろ帰るかー」

「えー！フリティ様！もつと遊びましょうよー！」

「もう砂のお城も作つたしスイカ割りもしたじやん。あと様つてのやめて、つていつ変身したのルン？」

もうすっかり時刻は夕方。日はまだそれなりに高いけど、みんなの体は良い感じの倦怠感に包まれていた。

海水で髪も肌もべたべただし、ベットに入つて目を瞑りたい衝動に駆られるがまづお風呂にも入らなくては。

海から上がり猿山とタオルで体を拭いていた。ルンがまだ遊ぼうもつと遊ぼうと誘つてくるがもう正直へとへと。ルンとは砂遊びしかできなかつたから心残りはあるけど、貧血で倒れてしまつたのがま

だ尾を引いている。頭には未だ鈍痛があった。

そんな時だった。

「え? どうこいつだよラバ!」

「えーっと……」

聞こえてくるのは珍しげ、リトとラバが揉める声。漂つてくる不穏な空気。奥歯にしみるような緊張感が背筋をサーッと走つていった。

「んー~どうしたんだよリト、ラバちゃん?」

そんな緊張など露そ知らず、あっけらかんと話に参加する猿山。オレはある一つの推測に行き着いた。周りを見渡してみる。求めた物体は視界の中には認められない。予感は確信へと変わる。そうだ、きっとオレ達は、

「いやあ……実は、ワープくんは据え置き型だから……」

「は? ……つ、つまり?」

「帰れ……ない」

この無人島に孤立した。

思い返してみれば、バカらしくて、笑い話にしかならない。そんなオレ達のサバイバル生活は、こんな簡単な幕開けと一緒に始まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3531p/>

---

TOLOVEりんぐ

2011年10月9日13時38分発行